中河與一著

偶然と文學

東京 第一書房 刊行

自序

最も危險の少ない云ひ方がしたければ、人生とは必然と偶然との二つによつて成立してゐると云へばいいにきまつてゐる。

更らに最も流行的な云ひ方がしたければ、人生とは必然の法則以外には無いと云つて嘯いてゐればよからう。然もその爲めには巨匠ホッブスから今日橫行の唯物家の文章に至るまで、例證にはこと缺かぬものがあるだらう。

それにも拘はらず、一人吾々の徒が偶然といひ、飛びゆく現實として現實を複雜に體驗しようとするのは、今日の思想の習慣に、敢て大膽の冒險を願ふからに他ならぬ。

本居宣長は彼の一册の中で云つてゐる。「大かたよのつねにことなる新らしき説をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたり世の中の學者にはにくまれ、そしらるるものなり。」

だが吾々の覺悟は孤峭にある。それは集團による運動でもなければ政策でもなく、一片眞實を追究する哀切さにあればこと足りるからである。

また吾々は世間好事の贊同者を必要としない。人生に對する最も深奥なる驚きによつて出發したからである。德孤ならず必ず隣りあり。理論は理論として獨行し、交響するにちがひない。

私は今日いよいよ多くの批判がこの問題に向つて集中されてゐるのを見る。私は謙虛にこれらの批判によつていちいち反省し、敎訓を感じ、且つこの問題がかくの如く論じられなければならぬ理由を痛感するのである。

思へば今日ほど永遠の思想に缺乏し、しなやかなる思考に枯渇して、無味と乾燥との中にゐる時代はない。私はこの事を思つて寂寥に堪へず、文學者としての思ひあがつた馬鹿馬鹿しい責任に驅られ、前途の風車に向つて進撃するのである。

私は嘗て千九百三十年、この問題に就いて小冊子の中で觸れ、以來今日にこの問題を沈潜させた。私の考への如きは恐らく一文藝家の放言にすぎず、百尺竿頭尙ほ微塵も附け加へるものではないかもしれない。だが私は一個の偶然論者として、この一冊を思想の冒險を愛する人々に不思議の交通を以つて獻じようと思ひ、又この問題に就いて常に多くの便宜を與へられた石原純、成瀨無極兩氏の机下に感謝を以つて捧げる者である。

十一月三日

著　者

目次

小說禮讃　一三
眞實とは　二一
偶然の毛毬　二九
三連符　三八
船　三八
歌　三九
病氣　四〇
新らしき頌歌　四二
偶然文學論　四九
つれづれ人間學　七二
ジイドの左傾　七二

ベルグソンへの興味……七四
ピカソの言葉……七八
方法論に關聯して……八〇
通俗小說と偶然……八〇
小說の構造……八三
思ひつきの缺乏……八六
文學を蘇生せしめよ……九〇
偶然論への反擊……九九
人間的牽引力……一〇八
讀書餘錄……一一四
モツアルトとサリエーリ……一一四
偶然論とモラル……一一七
『ユーレカ』……一二〇
小說に於ける偶然と人生に於ける偶然……一二四
朱鞘老人に物申す……一三六
確率概念の訂正を中心に……一三八

戲曲の繪　一三八
確率概念の訂正　一四〇
政治形態と文學　一四四
ロマン心情と偶然論　一四八
爐邊書談　一五五
秋のアルルカン　一六〇
萬覺帳　一六七
　『春琴抄』私見　一六七
　年齡　一七一
　時計　一七四
　氷島　一七七
指導性といふこと　一八一
雄略天皇と後光明天皇　一八八
弱い家族　一九一
ラウル・ジュッフィの繪　二〇〇
一九三二年の帝展　二〇七

日光結構　二一三
川奈紀行　二二四
小岩井紀行　二二九
海山のころ　二四〇
『左手神聖』の序　二四三
ドストイエフスキイ　二四五
直木三十五の死　二四九
偶然論と意志說　二五七
神祕主義に就いて　二五七
ヴアレリイの飜譯　二五八
新らしい意志說　二五八
戀愛小說　二六〇
眞似　二六〇
小說の定義　二六一
偶然の皆無　二六二
科學の休戰　二六二

つれづれ形態學　二六五
山に就いて　二六五
腰に就いて　二六七
小説に就いて　二七〇
美哉好少男、美哉好少女　二七四
韻律論その他　二七六
本に就いて　二八〇
野鳥の聲　二八三
文藝時評（一）　二八六
新人の二佳作　二八六
秋聲氏の傑作「一つの好み」　二八八
リアリズムを破壞せよ　二九一
石坂・丹羽の作品　二九四
志賀氏の名作「日記帖」　二九六
「月あかり」など　二九九
文藝時評（二）　三〇二

日常性と歴史性 三〇二
子供を描いた二佳作 三〇四
『コナン大尉』の梗概 三〇七
「脱出」推稱 三一〇
寫眞リアリズム 三一三
小說に於ける發想 三一七
偶然とリアリズム 三二四
文藝雜感 三三〇
『二十世紀英文學の新運動』 三三〇
文學者の交遊 三三二
年齡の不思議 三三四
新しい世界 三三八
「アジアの嵐」後日譚 三四一
時代の風景 三四三
＊
偶然論文獻目錄 三四九

偶然と文學

小説禮讃

一

偶然の必要から雜誌に現れたこの頃の小說を全部通讀し、何とつまらぬ事をしてゐることかと痛憤し、然し、同時に小說ほどよいものはないといふ感想を新らしくした。

と、いふのは、小說を讀んだあとで論文を讀み、雜文を讀み、讀物を散讀すると、これらの全部が全部、血肉のない文章に思はれ、頭腦を通過したカスに思はれ、とりわけ眞實に對する追究の極めて乏しいといふ點で、面白いことはあつても、いくら讀んでみたところで、こんなものが何になるかといふ氣がした。

自分がかういふことを書くと我田引水のやうに思はれるが、誰が何といつても、これほど正直な感想はない。自分は如是に信じ、如是に語るお目出度さを敢て誇りとする。

お目出度さといへば、小說ほど嘘の如くにして最も眞實なものはない。頭かくして常にお尻を出せるもの小說に如くはない。作者は小說の中で、どんなに巧みな嘘をつかうとしても、常にそ

れに失敗する。こんなに眞劍で滑稽極まる世界といふものは滅多にあるものではない。嘘がいへないのみか、嘘をつからうとした心理さへが、ありありとして文章の行間から見えてくるのが、小說の場合の必定である。

だから小說を讀むと、常に我々はそこに人間の全體を見る。かくて人間といふものをもつとも深く、適切に、ぢかに、我々に知らせるものは小說以外には何もない。

だがこれが小說の美點かといへばさうではない。これは小說の持つてゐる一つの特徴である。人間を計る機械のやうなものでこの機械はなかなか正直だといへる。卽ちこれは小說といふものの中に內在する嚴格なる眞實である。だが我々が試みようとするものは、この機械を通して、更に我々が小說の中でもう一つの眞實を追究しようとしてゐるところに、二重の眞實への努力が現はれて、その小說が拙からうが巧みであらうが、兎に角、小說といふものを素晴らしいと考へしめる理由が生れてくる。

つまらぬといふのは、そこに抽象がないからで、道が遠いといふことである。だがそのことのためにもつとも具體的に、恐らくこれほど懸命に全力を以て眞實を追つかけてゐるものはないといふことがわかつてくる。

小說の中で嘘をいへないといふことのために、作者は常に生活を一層眞摯に追究する。それは科學者が顯微鏡を見るよりも、政治家が農村を視察するよりも、もつと複雜に、身體全體を以て、

或ひは死にもの狂ひに、時には冗談を以て、もう一つの眞實を嗅ぎ廻してゐる。

又、彼はどうしても嘘がいへないといふことのために、何とかして自分の嘘を完全にしようとして最も恐るべき力をふるひ起す事がある。嘘とは人間にとつて必要だからである。然し、彼は常に嘘に失敗する。然し、その爭鬪のために反つて彼は嘘への努力をさへ見事な記録として殘す。ここでは何よりも最も眞實が大切であり、然も虛構までが役立ち、惡德までが輝き、病的な妄想までが立像を作るのである。わなゝく破倫さへが破倫であればあるほど、人生の眞實をのぞかすのである。アランはいつてゐる。「小說を支配する感情はあらゆるもの――情熱も犯罪も不幸さへ――進んで欲求された、さういふ人生のそれである。これによつて眞の小說は宥恕と希望と友情とを常に喚び覺し、苦惱に打勝つ事になるのである。」

僕は小說といつた。だがここで大衆小說までを意味していいかどうかは知らない。自分は讀んだこともないし、それを批判する資格も持つてゐない。然し現代の滔々たる大衆小說の汎濫といふものが、或ひは小說といふものを、寧ろ低俗に考へしめる役目を果してゐはしないかといふ杞憂を正直に感ずる。實際眞實の小說の世界といふものは、もつと高く、もつと進み、その精神と方法の中には何者よりも優れた世界が存在するのではあるまいか。我々は再び純粹な小說の世界に眼を向け、小說といふものを考へなほさなければならない時代に來てゐる。ここにこそ文化のもつとも高度な生活の表現があると考へる。

二

小說といふものは常に創造の世界であるといふ事のために長い間尊敬された。人々は小說を讀んで

「本當に自分達の氣持ちを云ひあてられたやうな氣がする。」

と云つて主人公の動きに同感を示す。又或る時は

「私達の世界はこんなに荒唐無稽なものかしら。」

と云つて、時に恐怖して反撥を示す。又

「よくこんな事が書けたもんだわ。」

と云つてその表現の力に驚く。

これは小說の傳統である。ロマンといふことである。小說が常に何かの形式を持つてゐるといふことである。創造の逞しさに就いて驚かすのである。

だが、こんなことは作者の個性の問題であつて、どんな作者にもこれを求めることは出來ない。或る作者はかういふ才能を持ち、又或る作者はかういふ才能を甚だ少ししか持つてゐない。

だがかういふ創造の世界がたとへ少くとも、小說といふものは常に素晴らしいのである。それは下手くそな小說でも、巧みな小說でも同じである。といふのは、小說といふものが常に人生と

いふものを、犯罪も不幸も進んで欲求しながら、最も眞劍に觀察し考へようとしてゐるところに、小說といふものの烈しい魅力があるからである。下手は下手なりに、ボンヤリはボンヤリなりに、この宗派に這入つたほどの者は、この宗旨の熱烈さを以つて、人生の醜惡と美貌とに向はなければならなくなるといふ宿命を負はされる。僕が雜誌小說の多くを通讀して感じたものもこれであり、このことこそ現代の小說を最も高い文化の頂點と考へしめる理由である。

人はこぞつて小說の世界といふものをもう一度見なほさなければならない。

少くとも雜誌に現れる限りの論文といふものは、それが經濟理論であつても、科學上の理論であつても、皆一つの實驗のカスである。熱情ある實驗は既に實驗室で果され、吾々が活字を通して知るものは紹介か、興味か、抽象かにすぎない。讀んでしまへばそれで卒業するところのものである。多く第二義のものになるのは、その性質上仕方がない。だが小說のみは小說それ自身が目的であり、小說の世界に全部の世界が鑄込められてゐる。ワイルドが云ふやうに生活と藝術とが逆になるほど彼は小說に全力的である。これは理窟ではない。讀後感である。これほど正直に眞實を全體的に追つかけてゐるものは見あたらない。例へば德田秋聲氏の「一つの好み」を讀み、志賀直哉氏の「日記帳」をよみ、それから某々の駄作を讀んでも、尙ほ彼の眼が人間そのものに對する追究を試みてゐる限りでは、小說といふものが美しく、壯麗に見えてくるのである。

麻雀賭博とか何とか云つて小說書きが、社會の好奇心のために、不當に誇張せられ傷められて

ゐるのを見るが、然し彼等ほど自己の生活を正直に吐きだし、生活の虚飾をすてて、眞實の生活に觸れようとしてゐるものが何處にあるだらうか。彼等の中に嘗てどんな犯罪者があり、然もその犯罪をどんな方法で果したか。

恐らく眞にあらゆる生活の表裏を、高潔さとズルさとをくぐつて、尙ほ人生の師表とすべき人格を求むるならば、何處の世界よりも藝術界に於て探すより他ないだらうといふ氣持さへする。

三

總てのものが眞實を追つかけてゐる。科學者も、宗敎家も、商人でさへも。その追究の仕方は違つてゐるとしても、だが小說家ほど自己を食ひ破つてまでも眞實に到達しようとしてゐるものがあるとは思はれない。眞實を追究することの烈しさのために彼等の數人が發狂したとしても、それに何の不思議があるだらうか。

私は今日の多くの學生が平俗な讀書に興味を持つてゐるといふことを聞いて、彼等はもう一度漱石時代のやうに高尙な文藝趣味といふものに引き返すべきだといふことを考へる。恐らく特殊な人々のみは今日の淺薄な趣味を輕蔑してゐる。だがこの信念はもつと擴がらなければならない。

さて私のこの文章の主題は眞實を追究するといふことであつた。これのみが小說の全部でないことは云ふまでもない。然しなほこの槪念に就いてはハッキリさせておきたいといふのは、眞實

といふものの概念が從來よりは變化し、殆ど逆になつたからである。然らば、その新らしい眞實とは一體何か。それを如何にして表現するか。第三者がなほそれを眞實として受取るかどうか。

私は文學上の眞實とは「正確に見ることによつてものの不思議にまで到達する」ことであると嘗て書いた。これは從來の單純な眞實を否定して、匿された眞實を見ようとする文學上の新精神である。卽ち作者は常に眞實といふものを眞實につかまへなければならない。眞實の不思議を捕へなければ、それは文藝上の發見とはいへない。

だがここでいふ不思議とは神祕主義ではない。眞實の眞實である。宇宙の本質を偶然とみる事によつて起るところの新らしい驚きの立場である。この立場に於てのみ吾々は眞實といふものの持つてゐる不思議に到達する。そこでは正確が一つの藝術に到達し、二つが一つになる。何よりも從來のリアリズムが破壞せられる。もし從來のやうに洗ひ立てて何の不思議もなくなるものが眞實なら、今日まで文學も藝術も生れやうが無かつた筈である。

吾々が常に心懸けるものは眞實といふものの持つてゐる不思議な相貌である。吾々は常に一見平凡の中から輝く眞實を見つけなければならない。これ藝術が永遠になり得る理由であつて、この中にこそ流行と時代とを越えたものが常に横たはつてゐる。

眞實といふ事に對しては無數の解答がある。だがこれを一つの偶然論の上に於て見なければならぬといふのが今日の問題である。

だが第二の表現の方法といふことになると、それは驚くべき多岐に分裂する。方法上のリアリズムといふことは實に複雜である。卽ち、眞實を眞實によつて語る場合と、眞實を噓によつて語る場合と、噓を噓によつて語る場合と。ある作者は構造によつて、ある作者は素材によつて、又ジョイスのやうに心理學的に、又プルーストのやうに回顧的方法によつて。

それはアランがいつてゐるやうに、大體「記述が事物に迫るなどといふことは到底出來ない」からである。かくて小說の噓といふことは、小說の眞實といふことと何時も同時に成立してゐる。だがこの問題は短い紙面では到底論じつくされない。ただそれら表現せられた眞實が、なほ作者以外のものにとつても眞實に感じられるかどうか、といふ問題が殘る。

然し、その事を知つてゐるのは神だけである。神とは批評である。批評がこれをきめればいい。然しこの批評とは世の聰明な批評家の事ではない。かくの如くにして小說の追究する眞實といふものは社會に放散する。

これこそ讀みがひのあるものである。人間の生死の喜びを報告する唯一のものであり、肉體を以て永遠につながらうとする唯一の手段である。

吾々はこの事を自覺し、小說といふものに對する關心をもう一度人々の心に呼び起したい。

（『東京朝日新聞』昭和九年六月八日）

眞實とは

一

蒸し暑い夏の夜、男が家の外で、その妻君の歸りを待つてゐると、子供が眠さうな聲で

「お父さん、なぜ蚊は血を吸ふんでせう」

といふ質問をするところがあつた。

その父親が何と答へたか、恐らくうるささうにあしらつたやうに覺えてゐる。若しかしたら親切にわけのわからぬ返事をしたかも知れない。

これは小說の中の一つのシーンで、確かチエホフの小說であつたと思ふが、どんな主題のものであつたか忘れた。勿論、題など覺えてゐよう筈がない。何か吸血鬼のやうな妻君が出てくる小說であつたかも知れない。

ただこの一行だけが不思議に頭に殘つてゐる。よほどこの一行が氣に入つたからに違ひない。

勿論この一行が子供の素朴な懷疑。動物としての爭闘心。きつかけのない父親に對する同情。

賑い時の馬鹿馬鹿しい思ひつき—そんなもの全體を適確に押へてその場景に生彩を與へてゐることが私を喜ばしたからに違ひない。

ところが、その後、新聞の婦人欄か何かで、蚊は産卵する前に動物の血を吸はなければならないのだ、といふ記事をよんだ。

それで子供の質問が私に於て初めて解答が與へられた。私が一行を記憶してゐるのには、この解答も亦多少の關係があつたかも知れない。

何れにしても子供の質問には驚くべき科學上の祕密が匿されてゐたのである。不用意の間に、實に結構な疑問がかくされてゐたのである。チエホフがこれを知つて書いたか、知らずに書いたかはわからない。恐らく知つて書いたのかと思ふが、併し問題はその一行の含蓄ある實に生彩に富んだ描寫の點にある。

吾々は今、リアリズムといふ言葉を屢々使つてゐる。併し吾々が從來使用して來たこの言葉には「ありのまま」といふ意味が多分に含まれてゐた。それはリアリズムといふ思想が、十九世紀の物理學と平行した思想、必然論によつて組みたてられた不思議のない眞實といふものに立脚してゐたからである。

だから或る人は、文學で「ありのまま」などは描けないと云つて、リアリズムを否定し、又ある人は最も常套的な描寫を見れば見るほど、それをリアリズムだと思つて喜んだ。

併しさういふ懷疑、或ひはさういふ考へ方といふものは否定せられなければならぬ。なぜならば、吾々の時代のリアリズムといふものは今では全然別のものにならうとしてゐるから。

吾々に於ける文學の描寫は何時も―科學と云はずとも、哲學と云はずとも、社會學と云はずとも、常に文學それ自身に於て、何かの發見の上に立つてゐなければならぬといふところまで來てゐる。これは餘りにあたりまへであるために、澤山の解說が必要である。

だが、兎に角、チエホフの描寫が意識的であつたか、なかつたか、そんなことはどうだつていいとして、ただこの描寫の中に、生といふものへの深い驚きと疑問とが含まれ、文學としての發見に溢れてゐることを考へなほしてみる必要がある。

二

三木淸氏は『改造』九月號で「シエストフ的不安」を巧妙に解說して、不安とリアリズムとを密接にして「不安の文學、不安の哲學は、その本質に於て、非日常的なリアリティを探求する文學、哲學である。それ故に若しも斯樣な文學や哲學の批判がなさるべきものであるとすれば、批判は何よりもリアリティの問題の根幹に觸れなければならない」と云つてゐられる。

そして文學、哲學に於けるリアリティといふものを「日常的なものへの憤怒、抗議」とし、「科學や理性の現實に對する抗議が合理性の非合理性に對する抗議であるとすれば、悲劇の哲學

のそれは、反對に、非合理性の合理性に對する抗議である。非合理性は合理性への剩餘といふ如きものではない」と說明してゐられる。

但しここで云はれてゐる科學の合理性といふ言葉は、今日では單に三木氏說の如く、單純に呼んですまされないかも知れないと私は考へるが、それにしても近頃最も見ごたへのする眞實といふものへの解釋で、こんな優れた所說をなし得る人はそんなにあるものではないと思つた。然も、僕の偶然論によるリアリズム論と或る點でふれあひ、とりわけたのしかつた。

僕は新らしいリアリズムといふものは、最近の物理學が說明するところの偶然論と同じ方向にあらねばならないとかねがね主張して來た。卽ち物の眞實といふものは、偶然の上に立脚して、決して從來の不思議を剝脫された必然的眞實の上にあるものではない。

眞實それ自身といふものは、寧ろ不思議にみちみちたものであり、吾々はそれに向つて突進することによつて、文學上のリアリティといふものを捉へなければならない。

實は吾々はリアリティといふものを、長い間、誤解してゐた。それ故に文學上のリアリズムといふものを否定し、又は安價な日常的描寫を歡迎したりした。併しそれは決して眞實ではない。眞實といふものはもつと深く、面白く、その偶然論的意味を新らしく發見すればするほど、吾々は吾々の世界が深く、無限の變化を以つて現はれてくるのに氣付く。

果して三木氏は又說明して、

「偶然的なもの、或る「氣紛れ」である」とも云ひ、又「人間をその日常性から彼の本來の存在可能性たる地下室の人間に連れて歸らうとする」ことであると繰返して主張してゐられる。然し唯だ一つ、この優れた論文への疑問は、吾々の文學上の眞實が、悲劇からばかり到達せられなければならないといふことはないのではないかといふことである。

それは人間論的に悲劇といふものの持つてゐる性質の深切さには一應驚き、それをくぐつてくることの痛切さはわかるとしても、尙ほ吾々は喜劇によつても文學上の眞實に到達出來ないといふことはないからである。

たまたまシエストフが、ニイチエ、パスカル、ドストイエフスキイ、チエホフ、トルストイに一貫したものを拾ひあげたとしても、それは彼の哲學の性格であつて、吾々は又別の作家を持つて來て羅列することも出來るのである。

ゲーテの信仰と、バルザツクの人間性と、フローベールの審美とを。又ロバート・ヘリツクのおどけた詩。ホイツトマンの中にさへ眞實が捉へられてないといふことは出來ない。

三木氏が「一種の流行」であるところの現代の不安といふことを中心として論じ、そこから「日常的」なものへの否定を試みられた意圖は十分わかるが、現代の持つてゐる希望といふものもある筈である。

吾々は悲劇と云はず、喜劇と云はず、偶然性、可能性の上に立脚するところの眞實を追究する

ことによつて、吾々の文學を新らしくしなければならない。

三

「チエホフは壊れた瓶のかけらのことを書いて、月光の描寫をする」――と。

これは誰れやらの本で讀んだ。恐らくロシアの文藝批評家か、それとも別の作家の誰れかが云つたのに違ひない。

チエホフといふ作家やロシアの文藝批評家をそんなに好きで取りあげるのではないが、どうしたのか描寫といふことになると、つい出てくる。

何も月の光を描くのに他のもので描寫しなければならぬといふわけではないが、これも誰れやらが、比喩と象徴とを區別して「比喩は類似によつて描寫するが、象徴は全然別のものによつて、その眞實を捉へようとする」と云つてゐたのを、思ひだしたからである。

チエホフは大抵象徴的な手法を用ひたのであらう。然し新リアリズムの方法といふものは、別のものではなく、恐らく月自身をもつと見ることによつて、もつと不思議な月の世界といふものを發見することから始まるのではないかと考へてゐる。「非合理性の合理性への抗議」によつて行はれ、更にそれがもう一つ奥で合理であることに氣付くところまでゆかなければならないのだと思つてゐる。

私はこの頃『ユリシーズ』の下卷を讀んで、この中には驚くべき描寫があると思つた。何も私のいふリアリズムは描寫にだけ限つていふわけではないが、例へば第十五の會話の中にあるブルームの心理描寫の如きは、實に不可解の美しさにまで到達してゐる。

ああいふものが何處から出てくるかといふことは到底わかるものではない。然しそれは比喩によつて接近しようとするものでも、又象徵によつて肉迫しようとするものでもなく、寧ろ現實をよく見ることによつて初めて至り得る全然逆の世界ではないかと思つてゐる。見る事とは觸れる事であり、感じる事である。

それは幾ら見ても見えないといふことはあるに違ひない。然しそれは發見の翼を折られてゐるからで、吾々は限で見、皮膚で見、形而上で見なければならない。それは對照を無限に愛慕し、時にまた拷問する痛烈さを覺悟して見なければならない。齋藤茂吉氏はこの作用を説明して「實相に觀入して自然、自己一元の生を寫す」とその寫生論で云つてゐられる。

かくの如くにして吾々は神韻渺々とした世界を探しあてるに違ひないといふところに、自然の可能性が無限に横たはつてゐる。古來多くの優れた藝術が、常に一つの不可思議境に到達してゐるといふことは、眞實といふものが常に平凡でも「ありのまま」のものでもない證據で、ここに藝術といふものの計りつくせぬ魅力が匿されてゐる。

三木氏は「無からの創造」を解説して次ぎのやうに説明してゐられる。

「無が單なる必然性であるならば、創造といふこともあり得ないであらう。地下室の人間が突きあたつた無はしばしば「運命」と云はれてゐる、そして運命は普通に、必然性の別名の如く考へられてゐる。けれども必然性と考へられるべきは却つて世界、人間がそのうちに投げだされてゐる世界である。世界は固より運命と見られ得るがそれは外的運命であり、そのやうな「必然性」に對して本來の運命、無は却つて「可能性」であり自由である」

それは外的と內的とを問はず、私は總てが偶然によつて進行してゐるといふところに、人間の悲痛と歡喜とが、自由と可能性の中に現出してくるのではないかと思つてゐる。

かくて吾々は吾々の周圍、吾々自身を見る眼を、一新することが出來、吾々は吾々のすぐ近くに深刻な悲劇と喜劇とが裏返しになつて存在することを知るのである。

そこで私は突然にいふが、吾々の文學の持つべきモラルとは、自然主義が「ありのまま」の眞實によつて總てを理解し行動したやうに、「可能性と偶然性」の眞實によつて總てを理解し、行動するところにあるのではないかと考へてゐる。ここに文學の新らしい理想が出發する。これこそ吾々の時代のモラルであり、純粹小說の問題はこのモラルの實驗にかかつてゐる。吾々は新らしいモラルを自覺し、その中に小說を開花せしめなければならないと考へる。

ふとすると、「とてつもない」といふことが吾々にとつての最上の美にならぬとも限らない。

（『讀賣新聞』昭和九年九月十四日）

偶然の毛毬

一

數年前、形式主義といふ一つの諷刺小說を發表した。あれが正しかつたか間違つてゐたかについては、多數の批評家が出沒して完膚なきまでに食ひちらしてくれた。然し今も尙ほ當時に提出した宿題が一つ殘つてゐるのに氣付いた。氣付いたといふよりは、私は今日にそれを殘したのである。

私は當時、マルクス主義者の必然論に對して、吾々の思考の根據を偶然說に置かなければ、吾吾の文學は枯死するだらうといつた。ところが當時、小林秀雄氏の如きでさへが、まるで見當違ひの論法を以て、形式主義を批評しながら唯物辯證法に隨喜したのである。誠にあはれむべきことには、この無方向の批評家までが當時の流行思想に憑かれてゐたのである。

滔々として、以來吾々の思想が必然論の上に安心しきつて進行して來たことは事實である。或る男は唯物辯證法的創作方法といふやうなことをいつたり、歷史的必然小說といふやうな言葉さ

へ案出した。
それは單にマルクス主義作家のみならず、ひとしく藝術派と稱する作家までが、必然論といふものに何の疑ひもさしはさまなかつたのである。かくて吾々の文學は明らかに不思議といふものを喪失してしまつた。日常微温の小說に專念し、觀念の絕望に耽溺し、創造的氣力を見失つてしまつた。もともと必然思想といふものの中に不思議といふものの存在のしやうがないからである。
だが改めて現實の世界を見なほす時、吾々はそこには不思議がみちみちてゐることに氣付くのである。吾々は何處を探しても決して同一なる二つの個性を見出すことは出來ない。また上と思つてゐるものが下であり、東と思つてゐるものが東を追究することによつて西に到達することに氣付き、直線を無遠慮に引けば還線になることを知り、そしてアインシュタインが云ふやうに「直線は假說である」ことに思ひ至るのである。
それかあらぬか、ジイドを中心とするフランス文壇の諸氏も、又ベルグソン哲學に新らしい注目を拂つてゐるのである。
『行動』正月號の小松淸君の論文にもあるやうに、フェルナンデスやクルチュウスの文學論の根據をなすものが、常にベルグソンであるといふことは、誠に當然すぎるほど當然の傾向といはなければならない。
これは明らかにベルグソンの偶然說に對する歸依であつて、必然論と對立するところの彼の流

動哲學と創造的進化說とに重點があるのである。
ところで彼等は疑ひもなく左翼思想に接近を示してゐる。人々はこれを稱してジイドの左傾と批評した。然し彼等は何も左翼思想を金科玉條としてゐるのではない。恐らく彼等はマルクシズムの必然論では安心出來ないに違ひない。もつとも根本的な點において彼等がマルキストと異る點は、彼等がベルグソンの偶然性に立脚してゐるといふ一事であつて、この大事を忘れて彼等の左傾を論ずることは無意味である。
吾々は、もう一度吾々の世界に對する思考の形態を改めなければならない。人生の瑣末を克明することも吾々の任務である。だが批評家を以て任ずる人々までが、その思考の根柢をすら自覺しないことほど、もの悲しいことはない。
吾々人生の神籤は常に告げてゐる。
――待ち人あり――
それは美貌の女であるか。むくつけき男であるか。限りない希望であるか。金剛石の爪であるか。不幸であるか。屈辱であるか。だが常に吾々の人生には不可解な待ち人が立つてゐる。
「人と魔法使」の毛毬を一日も早くときほぐしたいのは、吾々の性格の中にある偶然に對する渇仰に他ならぬ。

二

吾々は嘗て十七世紀以來、科學の勃興に對して、科學が主張するところの必然論におぞけをふるつて恐怖した人々を見た。

わけても當時の宗教家は、悉く科學の必然論に反對し、神を冒瀆するものとして一齊に攻撃した。その攻撃の根本は、科學といふものは決定論であつて、そこには何等の發展がない、必然論には、何等の不思議も希望もないといふことであつた。彼等はあらゆる比喩と、神罰とを用意して科學を威嚇した。そして自分達の偶然論の中にのみ、生命と豐富さと自由とがあることを力說した。

かくの如くにして、もともと吾々は長い間偶然論の中で生活してゐたのである。ところが今日では嘗て攻撃したところの必然論者に文藝家までが改宗してしまつたのである。必然といふことを恰も永久の眞理のやうに考へて、それを何よりも大切にしだした。

ところが翻つて今日では、科學の方が反つて偶然論に進歩して、その深切複雜な構造を披瀝してゐるのである。

即ちハイゼンベルク、ボルン、ヨルダン等は、その量子力學において、「不確定性原理」といふものを發表して吾人の眼を聳動させた。

彼等はいふ「電子の有様は位置と速度とによつて與へられる。しかも位置と速度とは同時に確定しない。」彼等は物理的世界を奥深く追究すればするほど、偶然性によつて構造せられる世界を發見するばかりであると說明してゐる。

不確定――偶然とは確かに吾々にとつて一種の苦悶であるに違ひない。だが「不確定を自然の眞相として寧ろこれを受け入れるところに現代がある」とエディントンは批評してゐる。又「不確定性原理は、相對性原理を更に越えるところの二十世紀の科學上における一大創見である」とも說明してゐる。

即ち今日では科學の方に不思議が論じられ、文學宗敎の方に不思議が無くなつたのである。だから吾々は吾々の周圍に何時も舊態依然たるリアリズム論の繰返しを見るのである。眞實といふものの概念に何等の發展がないからである。

だが吾々は考へなほす必要がある。眞實とはハイゼンベルクなどがいふやうに、宇宙の根本を不確定の不可思議に置くものでなければならない。眞實それ自身の性質の中に不思議があるといふことを理解するものでなければならない。不思議のない眞實などといふものは空疎な僞りでしかない。即ち今日のリアリズムとは偶然論に立脚するところの眞實の不思議、不思議の眞實を追つかけるものでなければならぬといふところまで來た。

それにしても何故にかくの如き事を吾々は論じなければならぬのであるか。理論的に云へば從

來の必然論と、それに立脚する非科學的な唯物辯證法といふ機械論を全部否定しつくさなければならぬといふことである。だがそれよりももつと大切なことは吾々の文學が必然論的眞實を追究するばかりに、創造的氣力を失つてゐるといふ一事である。これは毎日のやうに目擊することであつて、吾々の小說はしばしば吾々の日常性から高くも深くもならぬといふことである。今日ほど創造といふことが忘却せられてゐる時代はないといふことである。

吾々の哲學者ベルグソンは、「創造的進化」をいひ、「純粹な意識は一つの不斷の流動である」といつてゐる。進化といふ言葉は暫く措くとして創造と流動とを吾々にもたらすものは偶然の思想に他ならぬ。

ボードレールはいつた。「美とは驚かすことである」と。吾々の文學は今、何よりもそれを失つてゐる。吾々は創造といふことに何よりももつと注意を傾ける必要がある。そのためには吾々の思想を偶然論に置きかへなければならない。それは碁石のやうにたやすく布局出來るものではない。だが最早吾々は偶然論に何等の不安を持つ必要がなくなつた。なぜならば過去の世紀において吾々はその中に安住してゐたのであり、今また今日の科學と優れた哲學とがそれを證明し出してゐるからである。而も信念として吾々の持續するものは、それ自身として昻揚し獨行する。

三

「近代の科學はカントよりもバークレーに近づいてゐる」とエルンスト・マッハは批評してゐるさうである。

卽ち「主觀の價値は如何に廣汎なる容觀を持つ主觀であるかである。人智において眞實なる純容觀が成立しないとすれば人は到底、物の實體を知る時はないであらう。」

これに對して野崎眞一氏は次ぎのやうな解說を加へてゐる。

——現代の物理學は數理に基礎を置いてゐる。そして「描かれたる自然は結局單なる數字に化してしまふ。」然しその數字の根元が「確率」と「偶然」とにありとすれば、數は數としての本質がなくなるわけではないだらうか。ディラックは數の本質をQ數と名づけ、Q數は實數でないとしてゐる。《神は整數を造り、その他は人が造つたものだ》(クローネカー)。物理は畢竟心理である——。

ここまでいふと、それは明らかに混同である。だが今や吾々の世界では客觀といふものが主觀に接近し、偶然論において烈しく密接しようとしてゐることに氣付くのである。

私は曾て「現代のリアリズムとは眞實の持つ不思議を追究することである」といつた。

だがこの言葉は同時にロマンチシズムの主張にも變化するものである。

なぜならば、この命題は、不思議を强調すればロマンチシズムになり、眞實を强調すればリアリズムになるからである。だがもつと適切にいへば、今日ではこの二つのイズムが偶然論におい

て强力に結びつけられなければならなかつたのである。

保田與重郎、龜井勝一郎の諸君が日本浪曼派といふものを宣言し、又舟橋聖一、小松清の諸君が行動主義といふものを主張してゐるのも、畢竟このロマンチシズムとリアリズムとを結びつけようとするところの最初の運動に他ならぬ。

保田君はいつてゐる。「過去日本の文學界において、俗調の流行極まり、先代の糟粕を食ひて嫌はざること、今日の事情に過ぎるものを知らない。しかも省みて藝術する自覺の切迫の極點に形成されしこと、今日の青年文藝人に勝るものあるを見ぬ。觀じくれば、日本に於て未だ嚴密なる浪曼運動の發生を見ないのである。今にして次代は一つの萌芽に己を蔵めつつ、現代は混沌として分明でない。僕らわが世代の歌を唱へねばならぬ。」

又小松君等は行動主義の背後にベルグソン哲學が横たはつてゐることをハツキリと告げてゐる。ベルグソンはその高邁な一冊の中でいつてゐる。「思惟が捕捉するものは實在そのものではない。思想は具體的事實を抽象して固定的にする。對象を捕捉するものは主觀客觀の別を超越せる直觀によつてのみ可能である。」

だが、吾々は必ずしもベルグソンや、或は科學說にのみよる必要はない。眞實といふものの方向は何時もきまつてゐるからである。

かくて今や文學は一つの改變期に到達してゐるのではあるまいか。それは政治的關心と、修辭

的關心と、人間的關心との如何を問はず、靜止の中に沈沒して、偶然の毛毬をほどかうとする意慾を持たぬ限り無意味のやうに思はれる。

純粹必然とは一切の具體的內容を失へる單なる論理的公理であつて、これを外界に適用することも出來なければ、又これによつて何物を說明することも出來ない。吾々の歷史も又一生も、一度も嘗て豫想を實行したことはない。吾々の生活が必然の法則によつて動いてゐると考へるなどは大それた僭越でしかない。

人生の賭博を知らぬ必然論は人間生活の中にある本能力を無視しようとする敵でしかない。偶然論とは可能性を信ずるところの哲學であり、人生それ自身のもつ不可知、無限の幸福と不幸とに驚くところの思想である。

吾々は吾々の文學をもう一度偶然事の多寡によつて判斷し、偶然の眞實によつてその素材を選擇し、人間生活の中にある空想力をもう一度羽ばたきさせなければならない。私は今日の文學を蘇生させるものは、この根本的思考の改變にのみかかつてゐると固く信じてゐる。

（文中、物理學に關する部分は誤りなきを期し石原純博士の校閲を得た）（『東京朝日新聞』二月二十八日）

三連符

船

船の旅行といふものは、吾々の日常のわづらはしさを忘却させてくれるといふ點で最も好ましいものである。とりわけ私は船が好きだから、この頃の季節が來ると何時も船に乘つて何處かへ出かけたいと思ふ。

船にのることの樂しみは——吾々の生活をそこでは一變出來るといふことで、總ての習慣が地上とは變化してしまふ。そのことが何よりである。

あの上衣を吹き取らうとする海風、ふとい汽笛の音、船員のゆきとどいた服裝、生命を脅威する暴風、喫煙室の小さい社交、何よりも船が持つてゐる淸潔といふ精神。いつも動き流れてゐる波。總て吾々を吾々の日常から開放してくれる。

私は十數年來、船に就いては知られる機會があれば何時も觸れ、その種類と形態と、能力についてしらべて來た。

私はどうやら船に就いてなら、どんな質問にも應じられさうである。それはカヌーやモデル・シップのやうなものにも興味を持つた、私のやうな人間があるかどうかは知らない。然し、私は吾々の生活を開放してくれるものとして、何時も旅を思ひ、そして船を思ふことが多い。

歌

私は昔、歌を作つたことがある。それでといふわけではないが、歌を見ると何時もなつかしさを覺える。

今の歌人達の歌には感心することが少ないが、萬葉集を讀むと、何時も心が切なくなり、こんな素晴らしいものは何處にもないと思ふ。日本文學中最も傑出したものが萬葉集だといふことは誰れしも異論のある筈はないと思ふ。

紫式部の仕事にも、西鶴の仕事にも、近松の仕事にもまして人麿の仕事は獨歩である。あの切迫した愛情、壯大な氣宇、高調した情緒。全く無類と思ふ。

別れて來た人を思つて「妹が門見む、靡け、この山」と歌つた人麿の心を思ふと、彼の如きは世界に冠絕した詩人だと思ふ。こんな千古を貫く壯烈な表現を何處の誰れがしただらうか。私は彼の歌を讀むたびに驚かされ、悲しくされ、日本民族といふものの深遠さに打たれる。

それにつけても今日の歌人といふものが、小說や詩にのみ憧れ、自分達の持つてゐる歌のよさ

を忘れてゐるのを見ると氣の毒でたまらない。今日の歌人は何故にもつと自分達の世界を見、その世界を愛さないのかと思ふ。
今日の歌がゆきつまつてゐる理由は、何よりも歌に對する愛情が缺乏してゐるといふことに他ならぬ。

病氣

數年來、私は醫藥に親しんでゐる。胃潰瘍のあとを胃腸の惡魔に惱まされつづけてゐる。人は逢ふと、僕のために溫泉をすすめてくれ、散歩の德を說明してくれ、注射をいつてくれ、漢法藥を講義してくれ、灸やマッサージを敎へてくれる。そしてもう殆ど何もかにも試みた。だが、どんなにしてみても僕の病氣は少しも變らない。そして僕の精神の方が徐々に昔とは變つてしまつた。僕は人間といふものが苦しみを背負つて生れて來たことを考へ、精神の事を思ふ日が多くなつた。病氣の意地惡さにほとほと屈服しさうになりながら、それでも癒りたい氣持ちはやめず、さういふ境涯にゐて常に旅を思ひ藝術を思ふ自分を考へる。
胃が苦しくなると、私は今にもそこの管を切り捨てたいと願ひ、切開したい希望に馳られる、そこには惡魔がゐるとより實感として思へない。
だがどんなに願つてみても、醫者といふものは、さういふことは輕率にはしてくれない。そし

て私の苦痛はそれに對する反動の心理と一緒に益々深化する。私は十五六年前、强度の精神障害から數年に亙つて狂氣の生活をしたことがある。今この胃の苦痛を思つて、これも又昔の精神の障害から來てゐるのではないかと考へたりする。明らかにそれは精神の惡魔と一緒にゐるのである。明らかに發狂してゐることに氣付くのである。私はその中にあつて、寧ろこの人生に平和と安らかさをのみ求めてゐる。

私は務めて冷靜でゐる。然し私の精神は餘りにも憧憬し餘りにも苦惱してゐる。大體私は醫者の家に生れたので、科學的でないものにはどうしても信賴が持てず、信仰はすすめられてもそれに何かカトリックのやうな美の形式でもなければ這入つてゆけず、どんな苦痛があつても宗敎よりは醫學に期待するのである。これも一つの性格悲劇かもしれないが、その中にゐて私はやつと私の日常を想つて自分の孤獨を高め精神を高めようとしてゐることに氣付くことがある。私がラウル・ジュッフイに自分の本の裝幀を求めたのも、病氣の最も烈しかつた時で、私は人間が最惡の時にゐて最高のものを求める哀しさを思ひ、生き方といふものは無數にあるのだと思ふことが多い。

人は如何なる境涯にゐても常に自己を莊嚴にしたい狂氣を捨てないものと見える。私は一度精神科の醫者にみてもらはうと、この頃、それのみをたのしみに考へてゐる。

新らしき頌歌

岡邦雄氏の批評に答へる

一

「偶然論」に關する私の小論に對して岡邦雄氏が、誠に辛辣なる批評を『大朝』紙上に試みてゐられるのをこのごろになつて拜見した。同氏は私のエッセイを批評して——支離滅裂な童話のやうな（童話なら童話としての藝術味があるのであるが）藝術ぬきの偶然論を主張してござるが、それもどうぞお好きなやうに——といふのである、お好きなやうにといひながら、岡氏は私の「偶然論」が氣にかかると見えて、長々しい前置きを書き、更に二日に亘つて小論に對して精一杯の嫌がらせをつづけてゐるのである。だがお互ひの所説は嫌がらせくらゐで屏息するやうなものではあるまい。

私は私達の所說が如何に岡氏などの「必然論」的世界觀を逆上させ、狼狽させるものであるかといふことは初めから十分に承知してゐた。私は岡氏がどんなに岡氏の立場を死守し、僕らを攻

擊してみたところで、攻擊すれば攻擊するほど、僕らの立場が炳として、今にいよいよ分明しだすことを信じてゐるものである。

私は今日の人々が如何に必然思想に憑かれてゐるかといふことについてはここでは說明することを避ける。だが人は何かといふと、すぐ「必然性がない」とか、「必然的だから」といふのである。だが吾々の世界が必然によつて動いてゐると考へることの危險を何よりも先づ私は警告しておきたい。吾々の歷史が、吾々の科學が、吾々の藝術が、それよりもつと平易に吾々の日常生活が、嘗て一度でも必然的に動いたことがあるだらうか。吾々は常に不可思議なる偶然によつて吾々の生命を躍動させてゐるといふのが眞實である。しかしこれは卑近なる一例である。私はかういふことを說明するためにかういふ主題を選んだのではない。

私はとりわけ今日の藝術が創造力を失つてゐるといふことをいひたかつたのである。何故に創造力を失つたか。吾々を支配するものが餘りにも誤られた必然思想に憑かれてゐたからに他ならぬ。必然思想といふものの中に創造といふ作用のありやうがないからである。

モンテエニュは繪畫を論じていつてゐる。「偶然なくしてはいかなる高貴なことも成就され得ぬ。」

私は古來藝術の世界を貫く一つの不思議——それは眞實の深さといつてもよく、詩の塊りといつてもよく不可知といつてもよく——人智によつて說明しがたい壯烈さによつて常に支配せられ

て來たことを知つてゐる。それは偶然を待つたのではない。偶然を自覺し偶然の力に參與することを努力するものである。今日の如く滔々としてせばめられた必然と合理とに安心してゐる時代はないのである。人間それ自身、宇宙それ自身は、もつと本能的で恐怖すべき業火の壯麗さの中に常にさらされてゐるのである。

われわれは今やこの一事を何よりも先に痛感しなければならない。

二

さて岡氏は私の物理學に關する引用文の誤謬について、專門的な揚げ足を取つてゐられた。このことについては既に私はその直後出典を明らかにし、たまたま私の參考した一冊について『東京朝日新聞』で說明した。その故にここでは重複をさけるが、私の引用文における輕率を正直に認めるとしても、それより大切なことは、論旨の主要點を何處に置くべきかといふことではないだらうか。岡氏は私の偶然論を「人生を偶然とし、おみくじと見るやうな人及び作家に用はない」ときめつけてゐられた。ところが純粹に科學的立場を守つてゐられる石原純博士は、反つて私の偶然論（『日本歌人』昭和十年一月號參照）に興味をよせ、その主宰せられる雜誌『立像』において今年の二月號以來、毎月のやうに偶然論への感想を述べられ、「中河氏の引用せる如く、新らしい科學理論は、自然がその根本において偶然に支配されるものであること（少くとも我々の可能

の觀測手段に對して自然はさうであるとしか現はれないこと）を敎へる」と批評せられ、三月二十一日また更らに『東京朝日新聞』において、私のハイゼンベルクの不確定性原理との平行を批評して「人間の心理がいはゆる偶然の不思議を甚だ含むことは我々自身のよく體驗するところである。この點でそれが量子力學的偶然性に對比されてもよいであらう。ただ我々はこの第三のものを科學的には全く取り扱ふことが出來ないのに反し、人間に對しては我々はこれをこそ文學の主題とするのである」といつてゐられる。

岡氏は私の一文を批評して藝術味ぬきの童話とののしり、出鱈目の曲歪と斷定せられる。しかるにかくの如くもつと深奥の科學的立場において小文を適當に批評せられる人もあるのである。

失禮ながら私は藝術に關しては岡氏よりは苦勞して來た。藝術的操作が決して必然論によつて説明のつき難いことはあまりにも明白なことである。私は岡氏が藝術と必然論との關係を如何やうにして説明せられるか、切にそれを拜聽したいものである。

もともと岡氏の立場がマルクス主義的必然論に立脚してゐることは私の夙に傳聞してゐたところである。

私はもともと唯物史觀といふものには大體論としては贊成してきたのであるが、それが必然論によつて又唯物辯證法によつて説明せられるとき、何時もそこに不可解な虚構を感じ、不安を感

じるのが常であつた。岡氏は自分の立場は「機械的必然論ではなく歴史的必然論である」といはれる。しかし機械的必然論も歴史的必然論も、共に十九世紀の科學思想に立脚する思想であつて、吾々にとつては最早や五十歩百歩としてしか取扱ひがたい。

吾々は旣に吾々の思考の根據を「偶然」の謙讓と眞實に置くより他には生き方がなくなつたことを自覺するのである。

三

岡氏は「リアルな世界と生活とを、よりリアルに描かうとする作家の現代の自然科學理論の正しい把握を期待せずにはをられない」と最後にいつてゐられる。

だが一體岡氏の自然科學理論とは何であらうか。恐らく物質のみを契機とする唯物論であり、唯物史觀であるに違ひない。これは皮肉ではないが、寧ろ「現代の自然科學理論」などといふ言葉を使用するよりは、さう書きなほされる率直を私はすすめたい。だがさうなるとこれが科學理論といへないことは先刻十分に承知してゐられることと思ふ。

では岡氏などの主張と違ふ新らしいリアルとは一體何であらうか。これは幾度も說明した故、ここでは云はない。然し不思議のないリアルなどは誠しやかな噓でしかない。必然論に立脚するリアルなどは吾々にとつてはリアルといふにはあまりにも貧困しすぎてゐる。

エミール・メールソンは嘗て必然論を批評して云つてゐる。

I　實在を法則の集積と同一視せんとする試みは人間の思惟の產物に過ぎないものに實在を與へんとする觀念的な試みである。眞の實在が新らしい質を露呈する時、かかる見解は何時も裏切られる。又如何に觀念論的な學者でも彼の日常の實驗に於て素朴なる實在が忍び込むのを防ぐことは難かしい。卽ち實在とは無限の擴がりを持つ不可知である。故に彼は仕事をしようとする限り自己の意識から獨立する實在の新らしい出現を常に承認せざるを得ない。

II　實在を法則の集積と同一視せんとする試みは本質（essence）と存在（existence）の問題を混同して居るのである。然もこれは無邊際の實在を容易に否定する論者に對して口實を與へるものである。

III　自然が一定の法則に從つて居ると考へることは、自然を硏究する際に於ける重要な假說である。必然論者はこの假說を實在自身の性質であると考へる點に於て說いてゐる。

かくてメールソンの立場は明らかに人間の意識から獨立した實在の存在を承認し、その無限の實在が自然科學の絕えざる源泉であることを說明するのである。且つこの科學の方法を「同一の原則」に於て論じようとするものである。

この立場は、宛もカントの「物自體の世界」と「範疇概念」に相當するもので、彼が一種のカント主義者であることを暗示するものである。卽ち、彼はその立場に於て今日の必然論を攻擊し

てゐると云へるのである。

いひかへると、實在とは必然論によつて計り知られるほど微小なものではない。法則の集積の微細さは實在の神祕の大きさに較べれば、恐らく芥子粒の大きさにも及ばないといふのである。吾々が若し、岡氏のやうに世界を見んとして微小なる必然論だけに限られた世界しか見ないとしたら、これほど不眞實な態度があるであらうか。必然論によつてのみすべてが解釋出來ると考へるとしたら、これほど不遜な態度があるであらうか。

偶然論的方法とは、すべての思考の方法を拒否し、運命に賴るといふことではない。むしろ最も廣大なる宇宙の眞實にふれようとする最も大膽にして勇氣ある態度である。偶然であるが故に、吾々の世界に希望と計り知れない恐怖と、未知への探求とが追及せられるのである。

吾々の所期するものは、絕えざる實驗的計算によつて到達しようとするところの深切の不思議である。私は今日の如く人々が不思議の氣魂を忘却して、常識と卑屈なる計算とによつて日常を乾燥させてゐる日々あるを知らない。吾々の藝術とはそこにこそ新らしい出發點を見付けて、吾吾の生活に新らしい側面を賚さなければならぬことに、今日痛切の義務を感じてゐるのである。

（「大阪朝日新聞」五月三日）

偶然文學論

三月十七日、私は大阪からの歸りの汽車に乘つてゐた。

前方にある山々が曇つてゐるので、恐らく雨にでもなるのだらうと思つて眺めてゐると、それはやがて窓ガラスを白々と美しい雪片に變へて亂れながら襲つて來た。汽車は多少氣候の變化する彥根あたりの山野の中に這入つたのに違ひなかつた。と、私の眼前を黑い魔物が、雪を吹き消して、更に烈しい音響と一緖に、暴風のやうに擦過してゆくのに氣付いた。

私は何かもの凄いあふりのやうなもので、顏をひつ込めながら、擦れちがつてゆく汽車を見つめた。汽車は豫定通りに邂逅したのに違ひない。だが、その中には私の親しい友人が、私を常に敵視してゐる人物が、それとも私を探し求めてゐる人間が、私とは全然反對の方向に私を追つかけて西下してゐるかも知れなかつた。

然しそれは餘りに速度が速い爲めに、私は乘客どころか、最早、白い雪片も變化する風景も、

眼界から匿され、ただ黑い魔物の通過として、それを眺めるばかりであつた。
私は自然の應接と運命の偶然とに搖られながら、ふとこれらの汽車の速度がお互ひにもつと早ければ、自分は更にその黑い魔物さへも透明なものとして以上には見ることが出來なかつたに違ひないと思つた。魔物だけではない。吾々は吾々の周圍を「エーテルのやうな一形體をなした無數の天使の群に圍繞されてゐる」ことを氣付かずにゐるかもしれないと思つた。
大體、こんなことはどうだつていいことである。だが私はふとして餘りに速力が早いために吾吾の眼界から匿される無數の物と、エーテルのやうな天使や惡魔に、吾々自身とりかこまれてゐるといふことも、一つの客觀として取扱へないこともないと思つた。
そして私は今更のやうに、吾々の世界を構造してゐるものが、二重にも三重にも匿された無限の不可知によつて吾々を包み、偶然の作用によつて、吾々の世界を逆流させたり、平和にさせてゐるのに氣付いた。
汽車は一つの法則の中で走つてゐるとしても、そこに乘りあはしてゐる人々は、みな不可見の偶然の中で、人事の冒險と天使の囁きとを經驗しつづけてゐるのである。
だが事實といふものはもつと平易である。もつと泥のやうに、埃にまみれた日常生活の中で、吾々はもつと複雜で、もつとあたりまへな調子で、計り知れぬ偶然といふものを、もつと痛烈に經驗しつづけてゐるのである。否、吾々の生活全部が客觀と主觀とを通じて、不可見の偶然でし

かないことを知るのである。吾々は嘗て吾々の生活が一度でも必然的に動いた例をしらぬ。
吾々は常に希望を持つて生きてゐる。聰明なあきらめよりは、より多く不聰明の希望によつて生きてゐる。時間といふ不思議な流れの中にゐる。常に飛翔する現實にあつて、何かの未來を常に憧憬することを止めない。時には絶望それ自身をさへ憧憬する。それは不聰明といふよりは、もつと矛盾にみち、合理を越えた本能的な宇宙の偶然力、豫期によつて生かされてゐるからに違ひなからう。
エピクロスは快樂といふ。だが、それが美であらうと、醜であらうと、吾等眞率の不思議に驚く者にとつては、最早それが何であらうとかまはない。
ニイチエはダーウイン流の必然から起る進化主義を否定して、眞理の標準は「ただ力の感情を切迫せしめるところに存す」と云つてゐる。

私は今にして、今日の文學が、何よりも這般の驚きを失つて、全部の人が全部、安心しきつて必然思想にのみ憑かれてゐることに、何よりも危險を感じる者である。彼等は必然とさへ云へば全部が解決し、全部が明瞭すると考へてゐる。だが刻々にして變貌し、生きつづけてゆく壯大な自然の姿を果して必然思想によつて吾々は說明することが出來るであらうか。あの不可解に近い總ての小說的な人間の悲痛と喜びとを、龍の繪や解體の烈しい近代の繪畫を、必然論によつて說

明することが出來るだらうか。人が今日小說を愛讀するのは、小說よりも總て奇怪なる自分自身を、小說の形式によつて認識しようとすることに他ならぬ。
だが、吾々は先づ冷靜に吾々の知つてゐる法則、必然とは一體どんなものであらうかと、考へてみる必要がある。それは數學的法則であらうか。辯證法的法則であらうか。遺傳の法則であらうか。それともカントのいふ先驗の世界ででもあらうか。
實は私は數ケ月前、「偶然の毛毬」といふ一文を、文學上の思考に於ける多少の革命的改變として提出した。私はこの問題に就いては既に數年前にも一度論じ、以來この考へを持續して來たのである。
そして今度の小論に對しても、既に西村眞琴、石原純、岡邦雄、森山啓、三波利夫、吉村貞司、正木雅二郞、望月欣一郞の諸氏が、贊否樣々の意見を呈示せられるのを見た。これらに就いては次第に應接する積りであるが、その前に私は法則の問題を通過しなければなるまい。
因果律とか法則とかいふものに對しては、古來無數の解釋がある。否定と肯定との中で幾度も裏がへされた。
ところでヨルダンは、ヒユームの驚くべき洞察と、偉大な功績を、物理學的實驗の立場から推稱しながら云つてゐる。
「因果律は物理的科學の可能性に對する必要な假定であるといふカントの說明は疑ひもなく烱

限な且つ正當な注意を含んでゐるが、併し決定的な因果律の存在を結論するといふことは全く度を越えた敷衍である」

實際吾々はどんな數學的法則にも一定の始源と、用意せられた環境條件とが常に必要なことを知つてゐる。必ずしも三角形の内角の和は二直角とはきまらないのである。ましてそれ以外の法則に至つては「如何なる法則も例外なくしては成立しない」といふ言葉がある如く、それは決して必然的なものではない筈である。

これは法則を否定しようとするのではなく、如何なる法則と雖もそれが常に「確率」としてのみしか現はれないといふのである。それは決して必然といふやうなものではないといふのである。人々は「確率」と云へばやや滿足するであらうか。

だが實際數理と秩序の世界と雖も、その紛糾せる點に於て、暗憺たる點に於て、決して他の世界と變りはないのである。恐らくもつと吾々の思考を微細にすれば、吾々が原因結果の理論を完全に飛び越え、確率をさへ無視しなければならなくなることは寧ろ當然に違ひなからう。

エミール・メールソンは、一九〇七年その名著『同一性と實在』に於て、今日の法則を批評して誠に適切の言をなしてゐる。このことに就いては既に前掲の論文（四十七頁參照）に於て觸れたが、彼によれば、實在とは必然論によつて計り知られるほど微小なものではないといふのである。法則の集積の微細さは、實在の無邊際に較べれば、大海の泡沫、芥子粒の大きさにも及ばない。

然もその法則たるや、その時代に於ける確率にしかすぎないといふのである。
吾々は泡沫の法則、芥子粒の確率を以つて無邊際の生活と自然とを曲歪する輕薄を何よりもやめなければならない。見ようとすることはいい。だがそれで全部が解決せられると考へる單純と不遜とはやめなければならない。然もそれを必然と考へて、それによつて吾々を倭小に押しつけようとすること今日の必然論者の如く甚だしきはない。
信仰を持つ社會改良家には誤謬も亦一つの崇高さを持つかもしれない。だが吾々文藝の徒は、全體としての自然と、生活の大きさ、豐富さに、何よりもその眞實さに、率直に驚かなければならない。
ポール・ヴアレリーは云つてゐる。
「僕はただあらゆる精神の根柢をなすあの偶然を頼るのみだ。」
又彼は詩を説明して云つてゐる。
「詩は言語の運（シャンス）の純粹な體系である。」
吾々の藝術の對照する世界が、又それの言語配列の形式作用さへが、偶然によつてゐるといふことは、餘りにも明白な吾々日常の經驗である。私はこのことを寧ろ云ひたいのである。
三木淸氏は文體に就いて云つてゐる。
「スタイルは諸ゝの偶然を性格に運命に轉化する時に生れるのである。」

今日小說といふものが無味な倦怠と退屈とに流れた理由は、一體何であらうかと考へて、私はそれが必然思想によつて來てゐるといふことを先づ感ずるのである。この重壓を押しのけずしては今日の藝術は枯死するに違ひない。この重壓に對して反撥の理論をさへ持たぬといふことは、明らかに今日の文學者の一つの怠惰に違ひない。

必然思想といふものは、常に無邊際の生活を捉へようとして、法則以外のものを四捨五入し、削除することを何時も要求する。横光利一氏は云つてゐる。

「わが國の純文學は一番生活に感動を與へる偶然を取り捨てたり、そこを避けたりして、生活に懷疑と倦怠と疲勞と無力さとを許り與へる日常性をのみ選擇してこそリアリズムだとレッテルをはり廻して來た」(『改造』四月號、「純粹小說論」)

吾々の人生への解釋を倭小に跼蹐するもの、吾々の思想から創造を奪ふもの、今日の必然思想の如きものはない。

あり得ないもの、あり得ざる倭小さを信ずることの正直さに就いては最早述べない。だが必然思想の中に如何にして創造作用があり得るであらうか。

菊池寬氏は最近何かで

「今日の藝術小說が面白くないのは創造といふことが缺乏してゐるからだ」

と指摘してゐられた。吾々は創造といふ言葉を甘やかして使用したくはないが、今日の如く思想の公式化せられた時代に於て、かくの如き非難が小説に起ることは當然と云はなければならない。ひところマルクス主義藝術は公式主義であると云つて非難せられた。そして彼等はそれを率直に改めようとした。然しもつと根本的な問題は彼等が必然思想に踻踏してゐたといふことに問題があつたのである。必然思想の中にゐて藝術といふやうなものの制作せられよう筈がないからである。私は左翼右翼にこだはるのではない。もつと深切の立場に於て今日の必然思想といふものを否定してゐるのである。

古往今來、誰れが藝術を計算の中から割りだした男があるだらうか。俳句の如き短詩形さへも、吾々は如何なる數字の組合せによつても制作し得ないのである。

だがこの必然思想の流行といふものは、この十數年來、唯物論の流行と一緒に殆ど全盛を極めて、藝術派と稱する者までが、それを信じて疑はなかつたのである。

何時かも書いたが、小林秀雄氏の如き批評家さへが得々として必然思想を語つたのである。

何かいふと、すぐ「必然」といふ。人間の狂信のみじめさは思つても戰慄を感じるばかりである。

今日藝術小説が行きつまつたといふのも、亦今日の藝術小説を純粋小説によつて解放しなければならぬといふが如きも、云はば如何に彼等が必然思想の桎梏の中で小説を殺してゐたかを反證

する言葉にしかすぎない。それは藝術だけではない。今日の如く乾燥と無味とを生活し、雄渾の氣魄を失つて、卑屈の計算をのみこととしてゐる時代はなかつたのである。

吾々は吾々の藝術に於て、心臓を、生活を、社會を、再び偶然の事實によつて見なほし、生きとそれを感じ、蘇生せしめなければならぬ時代に到達した。かくの如くにして吾々は始めて吾々の生活に希望と絶望との鼓舞を與へるのである。未來を空想して現實を切實に生きるもの、それは戀人達だけではない。偶然の論理に於て吾々は初めて未來と現實とを豐富に生き、吾々の日常を永遠につなぐのである。

これは文學の中に於ける空語ではない。取つてつけたやうな社會的關心と現象論と文體論にもまして、最も深奥なる文學精神の根本にさかのぼらうとするものである。

今日では科學さへが自然の無限と不可知とに驚いてゐるのである。即ち彼等の量子論に於ける「不確定性原理」はいふ。

「古典論に於ては時間空間とエネルギイ運動量が客觀的に全部精確に知れるから、從つて因果律が成立する。然し量子論に於ては全く事情を異にしてゐる。觀測の客觀化が原則として行はれない結果、獨立した體系といふものが古典論の意味に於て存在しない。例へば時間空間の位置を精確に求めると、觀測の影響によつてエネルギイ、運動量は或る程度迄不明となつてしまふ。即ち此體系は古典論の意味に於て、狀態の明に知れた獨立のものとは云ひ得ない。從つて

古典論の立場から云つても、其運動が確率的には解つても因果的には定め得ないのが當然である。」（仁科芳雄博士）

彼等の意味するところは、物理的世界を奥深く追究すればするほど、偶然性によつて構造せられる世界を發見するばかりだといふ事である。即ちハイゼンベルク、ボルン、ヨルダン等の物理學に至つて、吾々は今日の必然論、從來の因果律による世界が完全に實驗的に破壞せられるのを見るのである。ここに至つて吾々は最早計算の上で、從來の必然論といふものが全く根柢から破壞せられたのを見る。吾々は眞に吾々が謙虚にして自然を丹念に追究すればするほど、不可解の大きさを增すと云ふことを知るばかりである。然もその不可解によつてのみ、吾々は益々前途の深遠と新らしき確率に向つて方向するのである。それは物理學に於ける偶然性、不確定性といふものは、その偶然性、不確定性さへも法則にしようとするところに今日の物理學の性質がある。然し一應それらの法則性を破壞するところに今日の出發が用意せられるのである。

かくの如くにして今日の科學は旣に偶然論に到達して、その不思議の結實に於て吾々を瞠目させるのである。言葉をかへて云へば、今日の科學が全體的になつたといふことであり、又藝術の性質に接近したものとも云へるのである。

それにしてもマルキスト達が常に「科學、科學」と連呼しながら今日の科學を殆ど暴戾の態度で壟斷しそれを蹂躪しようとして、過去の必然的科學を押しつけて來た理不盡の罪科は指摘せら

れねばならない。吾々が嘗て科學と呼んだものはマルキストが常に口にした如く確かに必然論であつた。これは被観測體だけを計算するが故に起るところの必然であつて、それは明らかに觀測體を思考の中から逸脱してゐるものであつた。然しそれは最早今日の科學ではない。

然も彼等は今日の科學を呼んで反動科學と呼ぶ。私は彼等がさう呼ばなければならぬ理由をよく理解するのである。だが問題は無數にある。然らば十九世紀の科學が果してプロレタリアの社會構造から生れたものであるか、どうか。何によつてそれが證明せられるのか、全くわからないのである。

少くとも彼等が十九世紀乃至古典科學に固執する限りに於て、彼等の中から新しい科學が現はれなかつたといふことは動かしがたい事實である。

私は嘗て年少の日マルクス主義に驚喜し、今も唯物史観といふものには大體の興味を持つものであり、今日のやうな彈壓の烈しい時にあたつて落ち目のマルキシズムを上下することは好まない。だが彼等が必然論に於て彼等の過誤を强要する時、依然としてそれに不滿を感ずるのは止むを得ない。

彼等の誰れもがいふ、「一般に社會の機構がその世界を規定し、このものが科學の構造を制約する」と。それは制約するといふ言葉の限りでは正しいとしても今日のロシアに何等新しい科學體系の無いといふことは誰れしも認めるところである。これらの人々に詰問す。新しい科學とは

一體何であらうか。

私の如きは寧ろ科學上の發見が新社會を構造し、經濟生活を變化させるものではないかと考へてゐる。そしてハイデラバッド王國の巨億の富と英國とのことを思ふのである。

私は嘗て科學を連呼した人々が新しい今日の科學に近親し、その新しい眞實の基底であるところの偶然說に觸れることに決して怯懦であつてはならないと考へる。科學にも無數の部門と諸說とが存在する。彼等は彼等の愛する科學に於てのみ寧ろ今後の生き方を摩擦し、旺盛に發見し、吾々と共にあるべきだと考へる。

ここで私は一寸橫道にそれるが、ハイゼンベルクの計算するものが、一種の世界觀には考へられても、彼はそれを物理的世界像にとどめるものであつて、それが數理を超越して自由意志論にまで發展することを主張するものではない。

吾々は彼の一つの主張が吾々の世界觀に一つの强力な賛成を示してゐることを知る。然しそれ以上である必要はないのである。又彼の如き嚴格な存在は、自ら最もその限界をよくわきまへてゐるのである。

三波利夫氏は嘗て私の偶然論をマルクス主義的立場から最も熱心な態度に於て批判しながら、ハイゼンベルクを自然發生的な唯物論者であるとか、マッハ的觀念論者であるとか云つて攻撃し

てゐられた。(『作家群』五月號)然し彼の理論を攻撃するためにはさういふ世界觀的觀點を以つてしては無意味であらう。彼を訂正するためには彼の數學的計算の誤謬を指摘しなければ間違ひであらう。彼が實驗的眞實を披瀝するとき、それを破壞せずして、それが自然發生的唯物論であるといつて否定しても無意味である。彼は純粹に物理的な觀察と、その結實とを報じてゐるのであつて、物理學的革命の世界から必ずしも出ようとするものではない。又吾々がハイゼンベルクを引用し、シユレーディンガーを引用するのは、吾々の世界觀に對する一つの强力なる數學的證明としてであつて、それ以上ではない。

彼を否定するためには最早彼を否定する別の科學的根據によるべきであつて、單なる唯物辯證法の如きものによつて一蹴し去れるものではない。

尙ほ三波氏の評論には、アインシユタインと量子力學とが衝突するとか、マツハがバークレーと同樣であるといふやうなことが書かれてゐたが、それらの言說は說明するまでもなく間違ひである。アインシユタインは同時に量子力學への偉大なる貢獻者であり、ただ法則の世界の保存を小さい部分で希望したのにすぎない。

さてここまで探索して來て、若し吾々を構造するものが總て偶然であるとすれば、吾々の生活を批判する所謂正誤曲直の方圖は何處に置くべきかといふ問題に逢着する。私はそこで、それを

批判するものは前に述べた確率であると考へる。吾々は經驗の抽象によつて確率を得るのである。私は私達の生活を組織するものが「偶然と確率」以外に無いことを斷ずるものである。確率以外に基準のないことを知ること、これ人生の大悟ではないか。然もこれは確率であるが故に人間の哀切な夢をのぞいては又何時の日か破壞されなければならない。ただ殘るものは夢としての美しさだけである。

ところで、私は確率に對する人間の憧憬が、時に必然となつて現はれても、それは不思議とは思はない。それのみか、それはそれとして、一つの偶然への要請として、その意味を新らしく認めるのである。だが今日の吾々を鼓舞するものが遂に偶然でなければならぬといふことは最早疑ひ得ない事實である。

三月二十七日、岡邦雄氏は輝くその公式主義の立場から『大阪朝日新聞』に於て私の偶然論を「おみくじのやうな偶然論」と痛罵し、「藝術味ぬきの童話」ときめつけてゐられた。又三波氏もハイゼンベルクを批評すると同時に私の說を「迷論」と極論してゐられた。然し今日では岡氏や三波氏などのいふ必然論こそおみくじのやうに手頼りない「迷論」であることを「藝術味ぬきの童話」でしかないことを悟らねばならぬ時代になつたのである。私は同氏等の判斷を更に要求したいものと思つてゐる。

眞理といふ言葉は誰れしも口にする、然し今日ではそれが變化するといふことに既に一つの確

率を認めなければならぬ時代に到達してゐる證據であつて、最早今日では從來の必然といふが如きものは「あり得ない夢」「甘やかされた迷信」にしかすぎなからう。吾々は相對性によつて絕對性を得、懷疑の中に新しい確率を發見しようとして吾々の論理を構造するのである。

だが「あり得ない夢」も亦文藝家にとつては「あり得る夢」だといふ意味では、必然思想といふものも亦必要にちがひなからう。ここに至れば最早必然論も偶然論もないのである。それほどに吾々の生活が偶然の中にゐるといふことは、既に論理の必要を俟たないほど明白になつてくるのである。確率の鼓舞が偶然論にとつて必要であることは認めるが、今日の必然論によつて吾々の生活を曲折し、整理しようとする滑稽は既に明らかに終末を告げるべきである。

誰れであつたか、又私の偶然論を批評して思ひつきだといつた男がある。なるほど考へてみれば、その男の敎へてくれたやうに思ひつきかもしれないし、それどころか、もつと下様の氣紛れかもしれないのである。だが、區々たる誹謗のあやなどが一體何であらうか。大體思ひつきといひ、氣紛れといふ冒險がどういふ作用で人間の頭に到來するものか。そんなことはなかなかわかつたものではない。そんな言ひ草で人の作品が批評出來るのは人間一生の仕事を見た上のことで、さうでなければ決して出來るものではない。

ベルグソンは「創造的進化」といひ、ブートルウは「同一なるものは何處にも存在しない」(中井陵二氏紹介、『エスプリ』、創刊號)といひ、ジンメルは「偶然的なもの」といひ、エディントンは

「不確定性の法則が實際上の豫告に對する基礎として、曾て決定性の法則がさうであつたと同様に有用なことを見るであらう」といつてゐる。又ケーレルの心理學も一種の形態に對する直觀によつて說明せられるものではあるまいかと考へられる。

私は何も偶然論といふものを萬能膏にする氣はない。だが今日の行動主義といふものも、浪曼主義といふものも、等しくこの偶然論的立場に於てのみ說明せられ、鞏固なる理論的立場を與へられるものであつて、この基礎に到達せずしては、それらの「主張も水泡に歸する」のではないかと思つてゐる。

既に小松清氏は行動主義が合理主義に對する非理性主義であることを表白し、合理によつて說明出來ない全體であることをいつてゐる。人間の本能的なものを强調し、ベルグソン哲學のいふ直觀と行動とを重んずることを表白してゐる。これは當然偶然論に於て落著するところのものであり、又浪曼主義も同様に偶然論を據所とするものであり、それに純粹な方向を與へるものであることは、保田與重郎氏の哀切なる美學批評「佛國寺と石窟庵」の中でも十分に察しられる。

「それはある日の浪曼主義であり、追ひつめられた青春の歌であり、廢墟に美神を祈る心であつた。廢墟の美を歌ふ心情は不幸な時代の夢かも知れない。だがそれは危險な時代であることを、これは歷史的事實が敎へる。頽廢でなく、切迫の噓である。詩と眞實といふ考へを僕は文字通りに虛構と眞實といひ、一つの噓のために百の噓を創り、一つの噓といふ至高至醇の美しさをかす

かに保たんとする心の眞實を孕んでゐる」

尙ほ引用すれば、それは浪曼主義に於ける「驚異の復活」といふ思想に見られ、フリードリッヒ・シュレーゲルの「各人は全く己れの道を歩んでゆけ、愉快なる希望を以つて、最も個性的な方法で」に於て見られ、それはヒュペリオンに於けるヘルデルリーンの無限に對する狂氣した憧憬の烈しさに於て見られ、又自らエピキュリアンと稱することに誇りを感じたペーターに於て見られ、又執拗に不可知の深淵を追慕したユーゴーに於て見られる。彼はいつてゐる。

「無限も只辛うじて不可知を包み得るに似たり、常に夜！　常に聾！　常に曉！　吾等は步めども未だ僅かに一步だも進み得ず、吾等は依然としてアダムの夢を夢みつつあり。萬象は風のまにまに漂浪流轉す。われ等は闇の中に一個の巨像を識別し、これに向つて「エホバ」と呼ぶなり」

又彼の文學を批評してギュイヨーはいつてゐる。

「ユーゴーが表現せんと欲したるものは卽ちあらゆる形式を以つて現はれたる普通の神祕である。或は無限に大きく、或ひは無限に小さく、或ひは輝く天となり、或ひは曇れる空となり、又或ひは日の中に、或ひは夜の中に現はるる神祕である。要するに彼は「あらゆる事象に潜む深遠なる恐ろしさ」を感じたのである。」

ドウダンはいつてゐる。

「余は小規模の明晰を愛すると同時に、また大規模の混亂を愛する場合がある。詩人は特に明

晰な觀念と偉大なる不可解との分界線上に立つものである」

かくて今日の文壇を支配してゐる思想は、――川端康成氏の「自由主義」にしても、大島豐氏の「自然法則の危機」にしても、春山行夫氏の「誠實の問題」にしても、中島健藏氏の「深淵論」にしても、舟橋聖一氏の「能動主義」にしても、深田久彌氏の「科學的文學論」にしても、豐田三郎氏の「進歩主義」にしても、十返一氏の「文學現實論」にしても、伊藤整氏の「小說的思考の強化」にしても、河上徹太郎氏の「自意識の問題」にしても、何等かの意味で、みな偶然論への流れを豫感してゐるものと解して解せられないことはない。

私はここでリアリズムの問題に這入つてゆく。だがリアリズムとは寫眞でもなく、平凡な疲勞した日常を寫すことでもなく、眞の眞實を寫すことであることは誰れしも知つてゐるところである。だがその時、眞の眞實とは何んであらうか。リアリズムと云へば人はすぐ舊來の所說を徒らにくりかへす。

堂々めぐりと、小悧巧な處世論文が日本文壇の特長になるとしたら、これほどあはれむべきことはない。私は私の小文が處世論文でないとはいはない。だが私は何かを熱情を以つて求めてゐる。この心の眞實は何かに於て果されるに違ひない。

さて私は眞實の問題に歸らう。吾々の求める眞實とは一體何んであらうか。無數の處世學があらゆる理論を待つてゐる。だが私は同じやうに「偶然」といふ。偶然論的眞實に於てのみ、それ

は新らしい解釋を與へられる。このことについては既に一二度觸れたことであるが、私はものの本質を偶然と考へることによつて、そこに本質の持つてゐる不思議を捉へることのみがリアリズムであると考へる。卽ち今日では對象を追究することによつて、物の本質であるところの眞實の不可思議、偶然に突き當ること、これのみがリアリズムでなければならない。眞實を追究することによつて、不思議に到達するものでなければならない。かく解釋することによつてのみ、吾々は歷史に横たはる偉大なる作品の數々を理解することが出來る。彼等の藝術が持つてゐる眞實とは、恐くが眞實の持つてゐる不可思議である。ここに至つてのみ、吾々は初めてリアリズムから這入つても、ロマンチシズムから這入つても、最高の藝術といふものは、常にこの眞實の不可思議、虛實の深奧に至りついて美の姿を開眼するものであることを悟るのである。その意味に於て、今日のロマンチシズムとは中谷孝雄氏がいふやうに、決してリアリズムと衝突するものではないといふことがいへるのである。

卽ち今日ではリアリズムを解釋するためにも、ロマンチシズムを理解するためにも偶然論を必要とするのである。今日ではこの正反對に見える二つが、一つにならうとしてゐるのである。一つが一つである間は、それは決して新らしい文學ではない。

ただここに注意すべきことは、偶然論といふものを單なる神祕主義、主觀主義と考へることの危險である。

成瀬無極博士はウインデルバンドを引用しながら、ショルツの思想を紹介して、「置き忘れられた一本の蝙蝠傘が、その主人を探し求めてゐる」といふやうな考へに興味を以つて、彼ショルツが偶然論的文學論を制作したと『近代戲曲全集』の中で説明し、彼の「偶然——一名、運命の豫備形式、關係者の牽引力」といふエッセイに觸れてゐられた。

私はショルツの該論文を讀まぬので、それがどういふものであるかをよくわきまへないが、偶然論といふものが、時として思考力を否定して、一つの人生を不可解に糊塗しようとすることは警戒しなければならない。吾々は今日の物理學者が不斷の思考力の結果として到達したやうに、偶然論を絶えざる努力、人生への謙虚な參加、力の根源として取扱ひたいと思ふ。人生とは心高く、又へりくだれる者にのみ、その本當の姿を見せるに違ひない。吾々は吾々の周圍に天使を見なくともいい、又雪野を走る汽車の向ふに匿された多くの物を見る必要はない。だが吾々の世界が、未來へ向つて、不斷の偶然によつて飛翔してゐることを知らなければならない。かくの如き自覺に於て、吾々は自らの性格と運命とを創造することが出來、更に社會の性格と運命をさへ創造することが出來るのである。

今日の偶然論は、明らかに舊來の神祕論とは異る。それはリアリズム論のところでも述べた通りに、それが客觀と主觀の兩面から導きだされる不思議でならなければならぬといふことも明らかである。

『芥舟學畫編』にも「假ニ外丹ニ徴ニ内象ニ」とあるさうであるが、ピカソも又同じやうな事を自分の繪について云つてゐたやうに思ふ。彼の繪に於ては不可分に客觀と主觀とが交流して、常に一つの不思議に到達しなければならないのであつた。

さて、私は數年前「形式主義」といふ小論を發表し、そこでは藝術を一つの切り離した客觀としてのみ提出した。だがその中で「飛躍」といふ言葉を無解決に殘した。今あの一文を回顧して、あの時代の「飛躍」を埋める部分こそ、今日の偶然論であることに思ひ至つてゐる。恐らく從來の考へに生きる人はかういふ口調も「思ひつきだ」といつて批難するだらう。ところが吾々にとつてはかういふ思ひつきといふことがなかなか重大な問題となつて起きあがつてくるのである。

さて私の述べたところによつて私のいふ偶然といふものの概念はやや分明したかと思ふ。そこで私は横光氏が純粹小説の要素を偶然性と見、又通俗小説の特徴をも偶然性と見てゐるところの混合を適當に説明しようと思ふ。だいたい偶然性とは横光氏が云ふやうに、決して通俗性の特徴ではなく、いよいよ深く眞實の小説を成立さす最も重大な要素なのである。即ち「純粹小説」といふものに偶然性が要求せられるといふ意味は、それに通俗が要求せられるのでなく、寧ろ本當の小説の要素が要求せられるだけである。その意味に於て横光氏の主張は推理の順序は暫くおいて妥當な卓見であると考へられる。

それは横光氏が數へてゐたやうに「ドストイエフスキー、トルストイ、スタンダール、バルザック、これらの大作家の作品」のどれを見ても、それが如何やうな眞實の不思議から始められてゐるかによつて、吾々はその小説に引き入れられ、豫期し得ざる如何なる偶然の眞實に至りついてゐるかといふことによつて最も烈しい感動に胸をつかれるのである。

フローベールはボヴアリー夫人とレオンとの不思議な邂逅によつて小説を高調させ、愛情といふものの無限の歸結を破産といふ結末によつて報酬した。モウパッサンは『脂肪の塊り』に於て、正義感といふものを食慾と賣笑といふ二つの條件で無殘に回轉させ、ゲーテはヰルヘルムとマリアーネとの戀愛からその敎養小説を始めてゐる。

さて私はこの主題に關して無數の關聯した思想を次ぎ次ぎに想起し、澎湃たる浪曼主義の問題に、文學に於けるモラルの問題に、歷史の問題に、心理の問題に、理知の問題に、神の問題に、思ひ至るのである。だが、それらについては、恐らくもつと適當な人がそれを論じてくれるに違ひない。私はただ古來眞率の藝術といふものが、常に偶然によつてのみ成立して來たことを、この一文に於て痛感したかつたまでである。

恐らくモンテエニユに於て、バルザックに於て、サント・ブウブに於て、アナトール・フランスに於て、人々は何かを見出すだらう。だがそれにも拘はらず、さういふ立場を分明した藝術論のあることを私はまだ知らない。わづかに九鬼周造博士が「日本詩の押韻」に於て文字の配列を

偶然から論じようとしてゐられるのを見て深甚の興味を覺えた。又『セルパン』六月號に於て石原純博士の「神は偶然を愛する」を讀み、この一文が現代の偉大なる頭腦として最も傾聽すべき所論に溢れてゐるのを見たが、既に觸れるべき紙數を使ひ果した。

この問題は世界觀の問題を含んでゐると同時に、微細には文字配列の形式の問題にまで文學に關聯してくるのである。

グウルモンは彼の一冊の中でエピクロスを讃美したがらいつてゐる。

「偶然の連續、いひかへれば次から次へと無限に跳びゆく事實の連續の所產として世界を考へること、これは君達の時代の最も優れた人々さへが歸依しかねる一結論だ。よしそれが彼等を動かしたとしても。」

今日の論理を築くことの困難と得失とは誰れしも知つてゐる。然も私は敢てその無謀をした。今は荒廢したエピクロスの園に這入つて、美を愛する喜びを再興したい。私の論理は粗草に刺され、棘に傷つけられた。然し私の開墾はまだ一日の忍耐にも達してゐない。

（昭和十年五月三十日）

つれづれ人間學

ジイドの左傾

あれほど盛んであつたジイド論が、この頃は一向姿を消してしまつた。それは「ジイドの左傾」と稱するものが現はれて以來のやうに思はれる。してみると、日本では彼の左傾といふものが氣にくはぬのであらうか。

だが僕の想像するところでは必ずしもさうではないのである。若しさうだとすれば無責任といへばこれらの批評家位無責任極まる連中はないといふことになる。あれほどジイド、ジイド、と朝夕に云ひながら、わけてもジイドの一轉機に對して何等の解釋もなし得ないといふことは、誠に卑怯といふか、無能といふか、驚くに堪へた仕儀である。

大體左傾といふことが氣はぬのかといへば、現在のやうに迷つてゐる左翼作家にとつては、何がなジイドのやうな大作家が左傾してくれることはありがたいことに違ひないのである。ところが左傾を報ぜられたジイドの動きには、彼等の參考になるやうなものが一向現はれて來ないので

ある。

明らかに左翼作家にとつては、ジイドがどこまで左傾してくれたのか。その見きはめがつかぬので味方か敵か、いまだに判斷がつかぬといふ有様で、その迷つてゐる樣がありありと感じられる。中には大森義太郎氏のやうに、チヤンと左翼作家としてきめてゐる人もあるが、さう手輕にはきめられないのが事實である。

だがそれよりももつと滑稽に見えるのは、自我意識を中心にしてジイドを論じて來た藝術派作家で、彼等は今までのジイドを見失つてあつけにとられてしまつて、どう挨拶したらいいのか急に默つてしまつた。その間の拔けた顏のをかしさは、有明の月を眺める、あつけら甘公そのままである。

かくて左翼作家は左翼作家で、藝術派作家は藝術派作家で、この一つの怪物の行動についてロをつぐんであつけにとられてゐるのである。

然しこれは今日までのジイドといふ人間を多少とも根本的に理解してゐる者には、それほど唐突でも何でもないのである。恐るべきことでもなければ買ひかぶるべき性質のものでもないのである。彼は嘗てキーツの言葉を引いて「思慮深く動かぬものたらんよりは思慮もなく動くものたれ」といつてゐる。

何よりもジイドの行動を理解するためには、ジイドがベルグソン哲學の上に立つて左翼思想を

理解してゐるといふことを吾々は考へなければならない。だいたいベルグソン哲學といふものは、左翼的であつても、それは寧ろ無政府主義的な傾向に於て理解せられるものである。

それは創造といふことを尊重するところの思想であつて、根本的にマルキシズムとは、その哲學的立脚點が正反對なのである。大まかにいへばベルグソンは偶然論であり、マルキシズムは必然論であるからである。

この二つの相反對する立場にゐて、ジイドが左翼思想を理解してゐるといふことには、もつと文學的な意味があるのである。ジイドを人間學的に研究すれば、決して日本で云はれるやうな左傾とはならないのである。又それは藝術派に訣別したのでもないのである。

もつと冷靜にジイド研究者は、ジイド研究を根本的につづけるべきである。それともジイドに飽いたのなら、格別ジイドの左傾などに驚く必要はないのである。

ベルグソンへの興味

ジイドの文學の背後にあるものがベルグソンであると僕はいつたが、それはベルグソンに限つたことはないのである。偶然といふものを信じることが出來れば彼は足りるのである。「もつと遠くへ行きたいといふ探險」の氣持ちがあればそれでも說明はつくのである。大體ジイドを馳りたてるものは、常に反カソリシズムであつて、それは必ずしも現象に伴はなくても、思惟の結果

からだけでも、彼はベルグソンに到りうるのである。
僕は大體、現在の日本文學が必然論に安心しきつてゐることが不服で、このことは平生からいつて來てゐたのであるが、吾々はもう一度この事を自覺しなければならないと思ふ。
このことを自覺せずしては、恐らくジイドの人間といふものも文學といふものも理解出來ないに違ひない。必ずしもジイドといふ必要はない。今日漸く論じられようとしてゐる文學の本質はこの大悟の態度に於てでなければ、理解出來ないのである。このことはいづれ時間があつたらもつとハッキリ書くつもりであるが、偶然の持つ不思議といふものが缺乏してゐて、藝術といふものが成立する答がないのである。
だがここでいふ不思議とは、陰鬱な神祕趣味や、フラマリオン流の古い科學神祕ではない。明らかな外光の中で見られる、眞實であればあるほど現はれるところの不思議でなければならない。
ベルグソンは不思議といふことはいつてゐない。併し彼は「創造的進化」といつてゐる。計りがたい創造といふことを何よりも莊嚴であるとしてゐるのである。
一昔前のベルグソン哲學を何も持ち出す必要はないかも知れないが、ベルグソンに對する興味といふものは、今世界のどこにも起つてゐるらしく、ナチスを研究して歸朝した男のトランクにも、フランス文學を研究して歸つた男のトランクにも、ちやんと不思議に這入つてゐるのであるから面白い。

なぜならば、彼の「記憶と時間」の思想、「純粋持續」の思想が、現在の行動的思想と非常に連關するところがあるからである。

行動主義といふものは、今日ではかなり左翼的にのみ解釋せられてゐるやうである。しかしそれは必ずしも左翼的ではないのである。ファッショでもあり得るのである。もともと行動といふものが、主體的であると同時に客體的であるからである。從つてその中には、常に本能、不合理が含まれてゐるからである。

だから今日吾々は行動主義といふものを捕へて「右か左か」と質問するのは意味がないのである。右もゐれば左もゐるのである。ただファッショ的暗鬱にそれを走らしめたくないといふのが吾々の希望である。

併し何れにしても、彼等がひとしく偶然といふ一つのロマンチックな思想によつて貫かれ、理智を否定して、本能を重視しようとしてゐることを見逃してはならないのである。

これが現代といふ人間の持つてゐる最も烈しい特徴である。偶然論といふものは天才への要望であるかもしれない。

ピカソの言葉

二十世紀初頭の偶然論者エミール・ブトルウは一八七四年、『自然性の偶然に就いて』の中で

いつてゐる。

「純粹必然は一切の具體的內容を脫却したところの單なる論理的公理に於て求め得るもので、A＝Aなる同一性は絕對にあり得ない。自然は類似を表出するにしても同一を提供するものではない。」

同一といふものを否定するところから出發する偶然論は、同時に絕對に唯だ一つのものの持つてゐるロマンチックな性格を表出するのである。

僕は嘗て今日のリアリズムが行きつまつてゐることを批評して「そこには不思議が無い」といつた。「寫眞のやうに死んだ眞實があるだけだ」といつたことがある。この理由は誰れもその物自身が唯だ一つ持つてゐる眞實といふものを追究しようとしてゐないからである。

私は大體眞實といふものを追究することによつてロマンチックの世界に到達しようとしてゐる人間である。新らしいロマンチシズムとは眞實に到達することによつてのみ可能だと考へてゐるものである。

過去の架空のロマンチックは最早吾々には何の魅力もない。

ベルグソンやブトルウがいふやうに、眞實それ自身の持つてゐる偶然といふ思想に到達しようとするところに新らしいロマンチックがあるのである。

吾々はピカソの繪を見て、ひところは立體派と評し、ひところはアングルの影響の中にある新

古典主義と批評し、又或る時は超現實主義者と批評した。その繪は自然を解體し、變貌し、實に不可解であることが多かつた。
而もピカソは自からいつてゐるのである。
「自分は自然から感じ、自然から發見したものばかりによつて自分の繪をつくつてゐる。」
僕は近頃、この位正直で興味の深い言葉を見たことがない。ピカソといふ人間の面白さが一杯溢れてゐるのである。
日本の洞窟哲學派や、鵜のみジイド論者や、眞似ごとロマンチストに煎じてのましてやりたい位である。あの主觀的にみえる彼の怪奇な繪さへが、十分に客觀を通過してゐる事を證明する言葉である。まさしく彼の如きは客觀と主觀とが交流して眞の不思議に到達してゐるものと云ふべきであらう。
吾々は「不安、不安」と云つて苦い顔をする前に、ものをよく見る事から始めなければならない。
ピカソは決して架空によつて出發しはしないのである。自然を見る事によつて、その藝術を一つのロマンチックな世界にまで進めてゐるのである。
それ故に彼にとつては、それはリアリズムであると同時にロマンチシズムであるのである。現代のリアリズムとは、かくの如き世界に到達するより他に行くところはないのである。

吾々はリアリズムと云つて寫眞の眞似をしたり、ロマンチックと云つて空疎な架空をもてあそぶべきではないのである。

しかも吾々を訪れてゐる今日の偶然論といふものは、この方向に一つの明らかな哲學的根據を提出してゐる。

人間學に及ばうとして、遂に結尾に來た。單に三人の人間を登場させるに終つたが、つれづれの感想故これはこれで仕方がない。

方法論に關聯して

通俗小說と偶然

この頃になつて室生犀星氏の「神か女か」を初めて讀んだ。當時の世評はみな神品といふことで一致してゐたやうに思つた。

私も讀んで感心した一人であるが、然し、私は同時になかなか不服を感じた一人である。大體昔から日本人の作品が俳句的だとか詠嘆に終つてゐるとかいはれるのは、つまり作品に構造がないといふことで、構造といふことはいひなほせば作品における發展といふことである。だからそれが無いといふことは、作品に動き飛翔してゆくものが無いといふことである。作品が一つの世界より別の世界へ飛んでゆかぬといふことである。

私達が今日偶然論を作品の理論に要求するのも、いはばこの發展といふ事を作品に要求するからで、作品といふものは常に最初の一行と最後の一行とは正反對になつてゐなければならない。

私は一つの世界觀の中に常に無數であるところの方法論などといふものをむきになつて論ずるつ

もりはない。私は寧ろ仔細顏した方法論などといふものは無用だと思つてゐる。だいたいが、作品が出發すると同時に人生が出發するのである。吾々はそこで無數の偶然に出逢ふのである。それだけである。

かくて作品はつねに豫想以外のところに到達する。眞實の小說といふものは常にかくの如きでなければならない。

人は通俗小說には何よりも偶然が重んじられるといつてゐる。然しこれほど大きい間違ひはない。寧ろ通俗小說といふものには偶然は皆無だといふのが本當である。それゆゑに吾々にとつては通俗小說はつまらず、俗衆にとつては面白いのである。卽ち通俗小說に於いては常に作品は讀者の豫想通りに發展し、さういふ發展をする事によつて讀者を滿足さすのである。吾々が通俗小說をつまらぬといふのは、そこに一つも世界の眞實であるところの偶然が無いからにほかならぬ。娘が家出して、祕密の家の誘惑に襲はれてゐると、そこへ丁度最後に結婚すべき小說の主人公が現はれて來て助けるといふやうなことは——そんな都合のいい御手盛の運命は虛僞であつて、世界の眞實でもなければ、本當の偶然でもない。かういふことは吾々にとつては通俗の虛構であつて、吾々のいふ偶然とは明らかに區別しなければならない。吾々のいふところのものはもつと痛烈に突きつめた眞實であつて、眞實の持つてゐる偶然でなければならない。

もしそこに何の眞實としての偶然も起らず、一つの感想で一つの作品が終始するならば、われ

われの作品は十七字でこと足り、また一枚で充分なのである。われわれが數枚を費し、時に數百枚を要するのは、そこに人生の偶然、發展があるからにほかならぬ。

日本人の作品が俳句的であるといふのは、つまりかういふ偶然によつて發展する世界が小說の中に缺けてゐるといふことではあるまいか。

人あつて日本人の作品は淡白であるといふ。然し淡白なのはドイツ人やロシヤ人に比べればフランス人だつて同じなのである。むしろこのことは所謂方法論的に說明すれば、淡白といふよりも構造を持つてゐないといふことである。一つの詠歎に終つて作品に發展がないといふことである。われわれにとつて重大なのは淡白なことが惡いのではなく、眞實としての偶然に對する追究の無いことが惡いのである。もつと正確にいへば、どんなに油つこく書いてあつても偶然への追究がないといふことが卽ち淡白なゆゑんになるのである。日本人の作品にある一つの缺點はまさにこれではあるまいか。

偶然論といふものは「眞實の不思議に驚け」といつてゐる。また「何物といへども世界に同一の物は存在しない」といつてゐる。卽ちこれらの命題は、それぞれに作品の方法論を導きだしてくるものであつて、われわれは眞實に至りつくして不思議をあばき出し、又モーパッサンが云ふやうに世界に二つとないたつた一つの物の性格を作品の中で囚へなければならない。その爲めには、常に對照と爭鬪し、對照の中へ熱情を以つて突入し、愛し、反抗し、對照を攪亂しなければ

ならない。すると對照は吾々に向つて反撃するのである。かくの如くにして吾々は眞實の不思議、偶然を捕えようとする。この心情と方法とは今日の物理的實驗を彷彿せしめるものであつて、これ觀測體と被觀測體との間に於ける分ちがたい完全の交合である。然も作品の背後にあるものが常に不可知であるやうでなければならない。原因結果的勸善懲惡を否定する、これらは既に常識であるものの明際なる認識による深化である。

さて私は「神か女か」を忘れてしまつてゐた。

小説の構造

初めに蝶子といふ可憐な女が出てくる。次にしのえといふ心得顔した妾タイプの女が出てくる。それから最も長い關係のある數子が出てくる。彼女は今では男に對して肉體的よりも精神的なものを示してゐる。それから女給あがりみたいなハルエが出てくる。

ところでこれらの女を一人の不思議な男が見事に征服し、またそれらの女達は物質を與へられて皆が皆、その男に戀着してゐるといふのがこの小説の大體である。男の逞しさは一つの暗示としてしか出てゐないが、それよりも女の性格描寫といふものを作者は丹念に試みてゐる。ここにこの作品のよさがあり、女といふものが總じて無智に可憐に描かれてゐるところが面白いのである。だが何よりも悲しいことはこれらの女達の感想が皆同一であるといふことである。それが惡

いとはいはない。しかし私はその事が一つの詠歎であるやうに思はれてならないのである。
と、いふのは、實は數年前、ポール・モーランの「三面鏡」といふ小說を讀んだ事があり、それと室生氏の作品とは勿論性質が違ふのであるが、ひとところ比較出來るところがあるからである。
卽ち、この小說もおなじやうに三人の女が一人の男を愛してゐるのである。ところがここでは三人の女が三人とも悉く違つた見方で一人の男を見てゐるのである。それは悉く衝突する見方であつて、三人三樣の感想の中には何の連絡さへもない。悉くが一人の男を違つた見方で、正反對と思はれる方向から見てゐるのである。それゆゑその男は一人とは思へないのである。しかるにたつた一人の男なのである。
ところが或日、この不思議な男の眉間に、急激な勢で飛んで來る內裏燕が衝突して、彼は額に穴をあけられて死ぬのである。この男は一人であつたが、三人であつたといふのである。
この小說には明らかに一つの偶然があり、從つて構造と、發展がある。又人間の性格といふものに對する作者の多樣なる追究がある。モーランのやうな作家でも、人間の個性といふものに對する一種の否定的な思想なら、ちやんと巧に構造するのである。男や女達の虛僞といふものも、一種の複雜さをもつてあばき出すのである。
但しこれらの作品は、それぞれに主題が異なるが故に比較する事は出來ない。室生氏のよさとモーランのよさとは各〻違ふのである。然し小說的發展、構造をどつちの作品が持つてゐるかと

いふ比較には十分に堪へるのである。

そこで私は室生氏の作品に感心する事は敢て人後に落ちないが、しかもこの作品が益々日本人的欠點を露出した詠歎的作品に終つてゐることを考へるのである。作品の中に流れてゐる思想にも、事件にも殆ど何等の偶然と發展とを見る事が出來ないからである。女の感想は初めの一人の女から最後の一人の女まで同じなのである。その間に何等の抵抗も矛盾もない。そしてこれが日本的なものかと、私は今日の批評家といふ者の明敏さに併せて驚くのである。いはば室生氏の作品は日本的特長を明白に代表するところの佳作であるといへるだらう。しかもそれと同時に新らしい不服は打ち消しがたいのである。

ひと頃「のつぴきならぬ」とか「血みどろ」とか、大げさな言葉が流行したが、人生の對照といふものは、さういふ掛聲ばかりでは囚へられない。さういふ掛聲を幾らかけても、作品が眞實の偶然にふれてゐなければ、それは無意味に終るに違ひない。小說する心情の中に、偶然といふものがなければ、如何に血みどろになつてみたところで、囚へられるものは、定規のやうに停滯した人生でしかあるまい。

小說といふものが創造である以上、そこには常に發展がなければならない。といふのはむしろ常識であらう。然し吾々にとつて、これは民族的にいつて最も困難な問題を含むところの性格かもしれない。

思ひつきの缺乏

石原純氏は『短歌研究』七月號で次のやうに述べてゐられる。

「人々は從來において偶然を餘りに輕侮しすぎてゐた。科學が多くの現象を分析し、それらの間に存する必然の世界を吾々に示してくれて以來、吾々はこれらの必然に賴つてのみ事象を思惟することにのみ慣れてしまつて、あらゆる偶然を偶然として意味づける事よりも寧ろこれに何等かの因果性を歸することの方がより多く價値があるとさへ思考するに至つた。科學に於てこそ、その效果は顯著であり得たであらうが、しかし文學においてもまたさうであるとするのは甚だ早計の至りである。この事を反省する點において偶然論の價値はけだし尠くはないであらう。」

又『翰林』八月號に於て

「中河氏が文學に於ける偶然論を提起されて以來、今日まで人々の間に看過されてゐた偶然なるものの科學及び文學に於ける重要な意味が大いに注目を惹くやうになつたことは事實である。」

なほ石原氏はこの論據に於て現代の文學が現實描寫の弊にのみ陷つて創造的な詩を喪失してゐることを指摘してゐられた。私への批評は溢美であるとしても、吾々は石原氏の科學者らしい、同時に詩人らしい批評に聞くべき多くのものを感じる。少くとも「偶然といふものを輕侮しすぎて來た」一事と起るべき論理が、詩の喪失を取り返すべく起つたといふ證言に就いてだけは、何

人と雖もこれを認めなければなるまい。

私は今日の文學者といふものが異端の思想に缺乏し、新奇の觀念を忘れて、例へば偶然論といふやうなものに對しても、ただ突飛な思ひつきとしてしか、これを見る事が出來ないほど衰弱し、或ひは小つぽけな嫉視によつて默殺しようとしてゐる時、かくの如き大度ある評言をみて、この論理の前途を思ふのである。

恐らくこの論理はやがて快刀亂麻の早さを以つて人々の心を風靡するにちがひない。

だが僕等の作文は、實はその時の得心などは、どうだつていいのである。

それにしてもわれわれの間における「偶然への輕侮」といふものは、われわれの等しく長年月踏したところのものであるが、それがどうして今日の如くであつたかは寧ろ不思議なくらゐである。

そして、そのもつとも卑近な例は、多く今日までの批評家が「思ひつき」といふことを殆ど輕蔑以外の觀念でみなかつたといふことでもハキリわかると思ふ。

それは思ひつきが思ひつきで終ればつまらないのだが、思ひつきの缺乏ほど實は人生にとつてもつとつまらないことはないのである。

菊池寛氏や久米正雄氏の時代にはなかなか思ひつきといふ事が重んじられてゐた。それは當時の新技巧派と稱せられた作品の系列を見れば一目でわかることで、それだけでは困るかも知れな

いが、思ひつきといふものは常に革命であり發明であることを知らなければならない。大げさにいへばモチーフであり、イデーであり、天の啓示であり、靈感である。それが深化せられれば同天の事業をなすところのものである。だが吾々には格別さういふ呼び方をしなくともいい。ただ吾々は今日の批評家が思ひつきといへば、ただそれだけでそれを恐れ、回避するのは、恰も平安姑息を願ふ小吏が、汲々として飛翔なき日々を過ごすやうにあはれだと思つてゐる。

われわれは思ひつきといふ思想の冒險を益々尊敬し、益々深化しなければならない。これは一つの浪曼心情であり、偶然思想であり、創造精神であり、陋巷に美神を見ようとする哀切な願望である。一つの世界から他の世界に出ようとする努力である。

それは思ひつきといふものが淺薄に流れ、輕薄に陷ることは往々にして見るところのものである。しかしさういふことを恐れて新しい作品と思想とはあり得ないのである。寺尾新氏も「自然科學の研究を、ただ物の長さを測つたり、細かな構造を顯微鏡で調べたり、數學式をこね廻はすことと考へて居らるるかも知れませんが、さういふ器械的の仕事は、そもそも末の末で、一番大切なのは、獨創的な思ひつきである」と云つてゐられる。科學に於て既に然り。古來「イロニイと機智」とを最も重んじたものは十八世紀浪曼派の文學であらうか。私の指摘も多少それにつながるにちがひない。

私は今日の文學者が、出來るだけの冒險に――それがたとへ誤つてゐても、間違つてゐても、

さういふ氣風に鋒徹を拂ふ氣持を持つてゐなければならぬと考へてゐる。誰であつたか、自ら「いかもの食ひ」である事を誇稱してゐた作家があつたが、私は批評の正鵠を願ふと同時に、いかもの好きの批評家が今日の如く缺乏してゐることに一抹の寂寥を感じるのである。

私は今日の文學者が、別種の考へ方と、その方法によつて、現象を更新し、世界を見なほすことを何よりも望んでゐる。

（『東京日日新聞』八月十五日）

文學を蘇生せしめよ

『ユリシーズ』の下卷を讀み、この小說の振幅と藝術欲の旺盛さに驚いた。この小說はまぎれもなく一つの藝術至上主義的作品である。

それは冗談を愛しすぎるほど愛しながら、然も作者が全幅の力を以つて藝術の世界の深さと怪奇さとに到達しようとするところのものである。ここでは世俗の正義感が明らかに忘却せられてゐる。心にくいほど縱橫に構造せられた「第十五」のエピソード。ほしいままの幻想と現實とを織りまぜた會話の手法の如きは、嘗てどんな作品にも見なかつたブリリアントなものに滿ちてゐる。

ブルームが狂人になつたり、市長になつたりして、勝手極まる會話を吐き散らすと思つて讀んでゐると、それは何時の間にか大切な契機に來ると、逞ましい力で筋の發展を見事に果してゐる。小說に於ける冒險で、恐らくこれほど巧妙に然も大膽なものはなかつたやうに思ふ。この頃は小說の神樣といふ言葉がよく使はれてゐるが、彼の如きも、確かにこの世紀の大きい神樣の一人に

遊ひない。

彼の行つてゐるものは寫實でも、報告でもない。又所謂リアリズムでもない。規範を越えた今日までの小説に無いものを以つて、あらゆる知識と空想とを積みあげて、新らしい世界を創造しようとするところにかかつてゐる。又最後の女優ブルーム夫人の獨白にしても、それは健康の肉慾のために實に猥褻この上もなく、然も壯麗で、少しの嫌惡すべき感情も這入つて來ないといふところまで到達してゐる。

日本では大體『ユリーシーズ』といふものは、寧ろ飜譯せられる以前に、とやかくと噂話によつて、論じられたり、下手な模倣を見せられたりしたが、どつちかと言へば今日ではもう綺麗に忘れられてゐる。然し私はこの小説こそ讀みなほす必要のある小説だと思つた。

さて私が長々とこの小説に就いて、こんなことを書きだした所以は、小説といふものの持つてゐる正義感といふものは恐らく複雜なもので、ジイドが轉向したからと云つて、それだけでジイド論に困難を來たすといふやうなものではないといふこと。又ヴアレリイやアランの流行のやうに一言一句の傾倒だけによつて紹介せられる文學では仕方がないといふこと。又さういふ文學といふものは日本の文學を老人にするといふこと。吾々の文學はもつと青春をとりかへさなければならないといふこと。その他いろいろ心に來るものがあつたからで、以上の數項に就いて思ふままを書きたいからにすぎない。

*

「政治か文學か」といふことがこの頃又論じられてゐるやうである。然し政治からみれば文學もその中に吸收され、文學からみれば政治もその中に吸收せられるといふのが各〻の立場である。これを對立的に考へることの誤謬は最早今日で論ずる必要がないほどに陳腐である。

文學に這入つてくる政治は如何なる場合にも素材として這入つて來得るのみであつて、それ以外に這入つて來ようはない。してみると問題は素材としての政治が大切かどうかといふ事に問題は縮少されてくる。文學である以上、政治的興奮やイデオロギーによつて製作せられる文學といふものは常に存在しない。

『ユリシーズ』の第十六のエピソードの中に社會觀、正義に對する氣持ちの挿入してある一節があつたが、あれなども、その適度さを私はいいと思つた。又『ユリシーズ』の中で最も論じられてゐるものは道德であるが、それが實に大膽な告白によつて世俗のモラルを破壞してゐるところを痛快に思つた。吾々の政治的關心も、恐らく政治といふものに對する最も辛辣な破壞が、創造的感想によつて成立しなければならないと思ふ。

吾々文學者が政治を論ずる時、それが公式的な政治論になつたり、政治家の糟糠を嚙むのでは、最早それは床屋政談の如く論じるには餘りにつまらなすぎる。吾々は空想すればいい。吾々は現實をみればいい。ジイドの轉向を論じるにしても單にそれを單純な正義感からしてしまへば、誠

につまらない。そして吾々が今周圍に散見する「政治か文學か」の理論は、多く吾々の試みる必要のない無用の長物のやうにさへ思はれるものが多い。

＊

ひところヴアレリイが流行し、アランがすぐ引きあひにだされた。恐らく感心した人達はその難解な片言隻句が氣に入つたらしく、全體的に理解したらしい人は見あたらず、多くの連中は、わかりもしないで、ただ誤解する事許りによつて彼等を語つてゐるやうに思はれた。あの流行ほど日本文學を痩せさせたものはなかつただらう。

ヴアレリイが神秘主義者にせられたり、アランが迷惑な引用に使はれたりしてゐるのを見ると、私は恐ろしい氣がした。少くとも馬鹿馬鹿しい流行といふものの魔力に慄然とした。

恐らくこれらの隨喜者も、紹介者も、その本國に於ける定評といふものだけを中心にして、これらの老大家を紹介したところに間違ひがあつたのではないかと思ふ。

例へば日本では定評のある作家と云へば秋聲であり、藤村であり、白鳥であり、直哉であり、また潤一郎であらう。

然し吾々は吾々の新らしい文學の問題として彼等を紹介せられたならば、顏をしかめるより仕方がない。

私は「一つの好み」を好み、「春琴抄」を非凡の藝術と思ふ事は人後におちるものではない。

だが起つてくる文學の問題としては吾々の時代はこれ等の作品に必ずしも期待しないのである。
だいたいこの頃の文學が後退しすぎてゐるといふことは、最早一般の常識になつてゐるやうである。若い作家まで老人を眞似、その趣味と筆致に至るまで模倣するに至つては、そのたわいなさは寧ろ憐れでさへある。
それにつけても新文學への寄與は、矢張り新作家の紹介に於てなされなければならないと思ふ。その意味で私は堀口大學氏が前にモーランを譯し、今テクジユペリを譯してゐる態度などは、大いに範とすべき態度だと思つてゐる。
云つてみれば吾々の文學は進歩も退歩もしないのである。然しただ進行だけはしなければならない。これは寧ろ萬物の約束である。
吾々は古典を愛し、老大家を尊敬する、その中には不死のものが横たはつてゐる。吾々はその中を徘徊することを最も樂しく思ふ。然し吾々は彼等よりも常に進行しなければならない運命に置かれてゐる。
ポウが「新奇」といふことを文學の最大の條件にあげてゐることは、彼が如何に眞實といふものを見ようとしてゐたかを證據づける一つの手がかりでさへある。
私は今『ユリシーズ』下卷をよんで、その生彩に瞠目し、靑年的氣魂を見失つた現在の文學ほど氣の毒なものはないと思つた。誠實と、冒險と過失と、創意と、どんなに靑くさくつても、新

らしいものは、かくのごとき野心から生れてくるより仕方がない。青年の青年らしからぬほど歎げかはしいものはない。私は病弱の中にあつて、つぶさに老人と青年とを經驗し、青年こそ大切にしなければならないと思つた。

老人が老人を理解するのはもつともである。ただ若い連中がわかりもしないヴアレリイ、アランを論じて得々とする如きは、最も趣味の惡い邪道である。吾々は何よりも吾々の同時代の大いなる文學を要求する。

さて第十五節のエピソードの登場人物ジエイ・ジエイ・オモロイはブルームを辯護する爲めに云つてゐる。

「ここは酒に醉つて過ちを犯した人間を犧牲にしてまで猥らな惡巫山戲に身を委ぬべき場所ではありません。吾々は熊小屋にゐるのでもなければ、オツクスフオードの莫迦騷ぎに列席してゐるのでもなく、またこれは正義の戲芝居でもありませんぞ。私の辯護依賴人は未成年者であり、密航者として何の恩典もなく出獄しましたが、今や正直に生活しようと努めてゐる哀れな外國移民であります。假作されましたかの輕罪行爲は幻覺によつて齎らされたる遺傳性の一時的錯亂作用によるものでありまして、ここに有罪視せられたるが如き無遠慮さは私の辯護依賴人の生地、ファアラオの國に於ては全く許容されてゐるのであります。一見した所そこには肉體的交涉に對す

る何らの企圖もなかつたといふ事を申上げたいのです。關係はこれ以上に進まず、よつて彼女の貞操が危ふくされたといふやうな、ドリスコルによつて訴へられた罪は、繰り返されませんでした。私は特に隔世遺傳について論じたいと思ひます。私の辯護依頼人の家族には癈疾や夢遊病の例が度々ございました。もしも被告をして話さしめますならば、未だかつて如何なる書物にも上せられなかつたやうな奇々怪々な物語を開陳いたす事でありませう。

裁判長閣下よ。彼自身は、靴直しに附物の結核を患つて、肉體的には一箇の癈疾者であります。彼の附託申告は、彼は蒙古族の出であつて、彼の行爲に對して無責任だといふことであります。事實何等問題とすべきものはないのであります。」

ジョイスの語らうとする多岐多端の世界は、實に多くの青年の問題を暗示してゐる。これはなかなか一朝に理解せられるものではない。然し吾々は一つの頁を開いて、その頁だけに含まれてゐる小說的構造に驚いても決して惡いとは云へない。

舟橋聖一氏は『新潮』九月號の時評で「意志と自由」といふ事を新文學の題目としてかかげてゐられたが、これにはそこでもなされてゐる以上に多くの解說がいる。然もこれこそ吾々が老衰の中に見失つてゐた最も大切なものである。吾々は今青年の自覺を呼びもどして潑剌と立ちあがるべき時代に遭遇してゐる。

＊

但し貧乏小說の感傷によつて甚だこの頃の文學が青年的であるといふことは私も知つてゐるが、ああいふことは青年でも老年でも文學のプリンシプルとして禁ずべきもので、何の根據もなく「不安、不安」と連呼してゐるなどは、誠に滑稽といふより挨拶のしやうがない。私などは何も不安などは感じてゐない。不安を感じてもいいが、感じなくても鈍感とは云へない。まして誰やらのいひ草ではないが、ロシア末期の流行の「不安」などは感じたくないものだと思つてゐる。

國際關係にしても、通商問題にしても、或ひは又人間のことに至つても、不安を感じる前に、吾々日本人は、それを處理しようとする意志を持出さなければならない。但し意志を持つても尙ほそれが解決出來ないといふのが現在である。然しそれだからといつて、安易に不安を連呼するよりも、默つてこの狀態に毅然とした屹立の態度を持する者こそ最もたのもしいのである。

三木淸氏は『改造』九月號に於てシエストフを明瞭に理解してゐられたが、それが不安の感傷になつてゐる現在の如きでは、若き女性のセンチメンタルとそれは何等選ばない結果になつてゐる。

神經質といふ素質が優れた素質だといふことは最近醫學の定說であるが、私は今「不安、不安」と競ひ叫んでゐる人間などを見ると、寧ろ最も鈍い連中ではないかと思つてゐる。

＊

私は時にそれらの人々の小説を讀み、たまたまテクジユペリの『夜間飛行』をよみ所謂るヨーロツパ人が著々として新らしい世界といふものをねらつてゐることに一つの納得を感じた。明らかにここにも靑年がゐる。靑年以外によつて描けないものがある。あの小說は『ユリシーズ』ほどに大きくも壯麗でもない。然しその代りに剃刀の刄のやうに時代の面を研ぎだしてゐる。創意に富み、なかなか手ごたへのある未踏の世界を漂出してゐる。趣味によつてものを見ないで「正確に見ることによつて不思議」に到達しようとする意志に燃えてゐる。

河上徹太郎氏はこの間、思想とそれを代表する作家に就いて物語り、現代が思想に對して最も熱心に用意してゐることを指摘してゐられたが、吾々の時代は漸く體系ある新時代の文學論に向つて方向しなければならない。

*

たまたま『ユリシーズ』の下卷をよむ事によつて私は多少の感想を述べた。必ずしもこれは『ユリシーズ』に學べといふのではない。どつちかといふと私はああいふ不分明なものは好まない。ただ私の言はんとしたところは、吾々の文學が常に文學であらねばならぬことと、再び何よりも靑春の時代をとりもどさねばならぬといふことである。これこそ腐つた文學を蘇生せしめる唯一の力である。

偶然論への反撃

森山啓氏に

一

鼻のさきであしらふか、さうでなければ單なる奇矯言としてしか偶然論を取りあげようとしてゐないのが今日の有様である。

或ひは「今更そんなことを論ずる必要が何處にあるか」と、けむたい顏をしながら、すましてゐるのが世間の狀態である。

だが實際吾々は長い間「偶然」といふことには殆ど無關心に、或ひは常に輕蔑すべき概念としてこれを取扱つて來たのである。それを今、吾々は何よりも大切なものとして取りあげようとしてゐる。

誇張した形容詞もいらないし、力みかへつた表現もいらない。一つの文學上の論理として、最も輕蔑せられた概念を最も大切なものとして裏がへしにすれば、それはいいのである。

ところが今、私は偶然論に對して最も臆病な贊成を示した三枝博音氏の文章を讀み、又最も大

膽な反撃を試みた森山啓氏の論文を見た。
これらの論文は兩氏の立場から云つて、誠に良心的なものであり、當然のものと考へられる。だがそれらが如何に誤謬にみちてゐるか。兩氏の立場は勿論、マルクス主義的必然思想に立脚したものであり、その立場から吾々の偶然文學論を攻擊してゐるのであるが、その論理の甚だ生彩に乏しいのを如何んともする事が出來なかつた。
何れ兩氏の立論に對しては精しい批評を試みるつもりであるが、ここではその最も顯著な一二の問題に觸れておきたい。
森山氏は『新潮』八月號に於て、「必然と偶然といふやうな問題は人が人生や宇宙に對する見方に就て根本的にぐらつくたびに、たとへただそのやうな二つの範疇によつては思考してゐないにしても、いつも再吟味せずにはゐられない性質のものである」と云ひ、「誰でも生涯の一轉機をなすやうな自分にとつての事件に際して、總てが分らなくなつたやうに感ずる時が何度かあるやうだ」と書きだしてゐる。
誠に正直な告白である。だがそのあとですぐ、
「それは一見、全然豫期に反し、又說明され得ないかのやうに見えるものも、それが集合され必然性を構成し、またその背後に必然性を貫かせてゐる。」

と安心するあたりになると、吾々はその斷定に甚だ危險を感ずるのである。いろいろな事件の結果を見て理由らしいものを作ることは容易である。然しこれは常に何かを逸脫してゐるのが必定である。

わからないといふ告白には謙虛な眞實を見るが、易々として必然性が一貫してゐるときめてゐる感想には、人生への餘りにも粗末な虛僞を見、餘りにも宇宙人生を簡單に解釋しすぎてゐる公式主義を見るだけである。恐らく森山氏達の宗とする人々も、しかく單純であつたとは思へない。私は吾々の日常生活が如何なる法則を以てしても豫測しがたいほど、無限である事を常に經驗し、又吾々の法則といふものが常に四捨五入によつて成立してゐるものである事を知つてゐるからである。吾々は嘗て千古を貫いた法則を知らぬ。それは常に新現象によつて刻々に變化し、發展してゆくものでしかない。このことに就ては更に深い考察を必要とするが、「一つの必然性によつて貫かれてゐる」といふやうな思想を訂正するために、先づここでは、それを書き加へるだけにしておく。

さて岡田三郎氏は嘗て轉向作家の良心を痛烈に批判してゐられた。私は感情的には寧ろこれらの人々を毫末も責めることが出來ないのである。併し一つの論理としてはマルクス主義と云はず、轉向作家と云はず、その使用し來たつた今日までの論理に對しては、明らかに良心的な釋明を要求せられても仕方がないだらうと思つてゐる。

二

吾々は吾々の「偶然文學論」を吾々の日常の感覺と思考とから築いた。

吾々は飛びゆく現實として宇宙を見、偶然の希望によつて生かされてゐることを常に感ずるのである。

そしてそれを根據づけるために多少の科學說を引用した。これは吾々の所說に對する最も有力な寄與を與へてゐるからである。實際今日の科學ほど偉大なる改革を吾々の思考の世界に持ち來たつてゐるものは無いからである。然るに森山啓氏は私の引用した文章を批評して

「ハイゼンベルク達の結論が全くの獨斷でないとは何によつて保證されよう。それが獨斷でない事を保證する爲めには中河氏は公衆の前に、ハイゼンベルク達による「不確定性原理」や「因果律の否定」がその上に立てられた學的根據みづからを吟味されねばならぬ」と批評してゐられる。全くこれこそ言語に絕した「獨斷」でしかあるまい。私が先きに大膽と批評したのはこのこである。今日ハイゼンベルクを「罪ある獨斷」と云つてのけられるのは恐らく森山啓一人位なものであらう。

これは今日の物理學に於ける一つの「原理」である。實驗と計算によつて到達した結論であつて、これを獨斷と批評するに至つてはその無謀さといふか、偏見といふか、救ひ難いものをすら

感ずる。

平生「科學、科學」と連呼しながら如何に科學的精神に缺如してゐるかといふことはこの一例を見ても充分にわかるのである。

然も私に「みづからその原理を吟味せよ」と云ひ、岡邦雄氏を引きあひにだして、ハイゼンベルクの獨斷を證明しようとするなど、その勇氣には恐れ入つてしまふのである。

今日の物理的世界觀は、多くの實驗的結論であるが故に、その結論を誤りなく引用すればそれでよいのである。吾々はそれによつて多くの便利を感ずるのである。寧ろ今日の深遠なる物理學の歸結を吟味してから文學論を書くなどといふやうなことは決してあり得るものではない。又左樣に簡單なものではないのである。科學の結論は萬人の實驗に訴へる結論であつて、吾々素人が餘計な吟味などして、それが決して適當な筈がないのである。

尙ほ森山氏は私の引用を批評して、

「一方では科學的所產をたよりながら、他方ではそのことによつて科學的探求の前途をさへぎつてゐる」といふのである。

今日の科學の結論を實驗せずして引用する事がいけなければ、森山氏の引用する岡氏の如きも明らかにその一人であるに違ひないのである。

然も岡氏が如何なる研究を試みてゐられるか忖度の限りでないが、岡氏とハイゼンベルクでは

比較のしようがなからう。そんなことをいへばそれが同氏への失禮になることを森山氏は考へぬのであらうか。

私は單なる科學說に對しては素人にすぎない。然も岡氏の所說であるところの「原子內の空間構造」などといふ說に至つては、吾々にさへその混亂ぶりが明瞭に見えるのである。ハイゼンベルクを獨斷と斷ずる爲めに岡邦雄氏を引用するなどナンセンス中のナンセンスではなからうか。若しも「原子內の空間構造」が本當に岡氏說であるならば、吾々は更らにその不思議な狼狽振りに喫驚せざるを得ないのである。

私は森山氏の「偶然論」への否定が、その根本に於てハイゼンベルクを獨斷とするところから始まつてゐる以上、最早それを正當な論理としてはとりあげ難いのである。科學精神の缺乏と、誤謬と、獨斷と、その薄弱な論理的根據は殆ど今日の新らしい論理には堪へないものであると感ずるのである。

吾々は「不確定性原理」だけによつて吾々の文學論理を解決しようとは毛頭考へてゐない。それは一つの引用であつて吾々の主張ではない。吾々は更らに高次の偶然をその奧に見るのである。然し今日のこの論理を易々として獨斷とするが如きは、それこそ必然論者の盲信であり、簡單主義であるといふより仕方がないのである。

三

森山氏は私が今日の文學を殺すものが必然論でしかないといふことを云つたのに對して殆ど答へてゐられない。私は大體必然思想といふものは極めて小さい世界だけに限られた法則であつて、それによつて吾々の世界も文學も解釋し、批判出來るものではない事を云つた。矮小な必然論によつて宇宙を縛ること位今日の世界にとつて不遜なことはない、といふことを云つた。

文學といふものは常に割り切れない宇宙の不思議に向つて追究してゐるのであつて、それは殆ど運命に近い不可解を認識する喜びと苦しみの中にあるのである。

森山氏は「雨も木の葉も地球の中心に向つて落ちるといふことは、最早疑ひ得ない法則である」といつて安心してゐられる。私もそれを一つの物理的結論として認めるのである。然しニュートン以前には誰もそれを法則とは考へなかつたのである。寧ろ人々はその說の誤りを感じたに違ひないのである。それはガリレオが地動說によつて迫害を受けたのと同斷であるに違ひない。即ち吾吾は決して一つの法則の中にあるのではない。無數の法則を持つてゐるのである。萬有引力といふものも地動說といふものも、決して永遠不動のものとは限らないのである。何時これが新らしい理論によつて改革せられるか、それはわからないのである。このことを自覺しなければ本當の科學精神への畏敬と努力とを持つてゐるとはいへないのである。吾々は科學を信用する。森山氏

のやうにそれを獨斷などとは批評しないのである。然し科學は刻々に固定した觀念を破壞して常に進行するといふことを知つてゐる。
このことを自覺しなければ、それは一つの懷疑論、神祕說になるだらう。然しそれが單なる懷疑、神祕と異なる所以は、常に實驗的歸結によつて無限に深い眞實を探求するといふところにあるのである。
大いなる偶然の中の一つの幻影、或ひは說明として、吾々は必然を認めようとする。一つの夢としてのみ必然といふものが確率から抽象せられる事を知つてゐる。偶然への要請としてのみそれを保存する。然し決してそれが客觀的に永遠な眞實でもなければ「現實性ある可能性」とも斷定しがたいのである。
總ての存在が偶然であるが故に必然が存在し、一つの正確さを保存し得るのである。それは戶坂氏がいふやうに、決して必然の中に例外的偶然があるのではなく、偶然の極めて小部分として必然が存在するのでしかない。
森山氏は「偶然性は、石原氏や中河氏の幻想の中に於ては、無源因的なものでしかないが、現實においてはそれは無源因性ではない」といつて石原純氏や私を攻擊してゐるのである。然し多くの無源因の中に生活するが故に吾々は多くの不可解に衝突するのである。寧ろ今日、吾々が經驗するものは全部が全部、從來の法則をはみだしてゐるのである。はみだしてゐるが故に吾々は

文學し、文學の深遠さを思ふのである。寧ろ單一なる原因に歸せられる何物も存在しない。森山氏や三枝氏は必然の中に例外的な偶然があるといふ。然しそれは明らかに反對なのである。

吾々は人生を「丁半」とは考へないが、吾々の生活が常に新らしい希望を持つてゐるのは飛びゆく現實、偶然の連續の中に吾々が生きてゐるからだと考へてゐるのである。

それは九鬼周造博士がいふやうに「偶然といふことを眞に感得するためには、一種の官能を有つことが必要で、この官能を有たない人を說服することはかなり困難であらう」（『翰林』八月號參照）といふ評言に思ひ至るのである。私は何よりも今日の文學精神を更新するために偶然論が必要であると信じてゐる。

今日の文學を縛り、乾燥させてゐるものが、明らかに盲信の中にある矮小なる必然論であることは、最早私には何等の躊躇もなく云ひきれる眞實である。

私は森山氏が勇敢に自己の理論を說明しようとせられたことは稱讃するのであるが、その方法の誤謬については默視することが出來なかつたのである。誠に暑い話であるが、私は今暑氣のために却つて多少の元氣を回復してゐる。

（『讀賣新聞』昭和十年八月一日）

人間的牽引力

一

千八百二十七年、十月七日のところで、エッケルマンはゲーテの談話を次ぎのやうに記してゐる。

――「戀人同士の間では」とゲーテはいつた。「この磁力が特に强いだけでなく、非常に遠くへ働く。私が青年時代に獨りで散歩してゐると、戀しい娘に逢ひたくてたまらなくなり、娘のことを考へてゐると、終に娘が向ふからやつて來たやうなことが度々あつた。「部屋にぢつとしてゐられませんでした」と娘はいつた。「ここへ來ずにはゐられなかつたのです」ともいつた。また隨分逢へなかつた娘と偶然すれちがつた時のことをゲーテがつぎのやうに話した、ことを記してゐる。

――擦れちがつて腕と腕とがふれた。わたしは立ちどまつて振りかへつた。女も振りかへつた。「あなたでしたか」と女がいつた。女のなつかしい聲に氣がついた。「到頭」と私はいつた。淚

が出るほどうれしかつた。互ひに手をとり合つた。「では」と私はいつた。「希望に裏切られなかつた。切ない思ひで探してゐたのです。きつと逢へるといふ氣がしてゐた。」すると女が「何故いらつしやらなかつたの。今日ふともう三日前からお歸りになつてゐると聞いて、もうお忘れになつてゐるんぢやないかと思ひ、午後中泣き通しました。それから一時間前からたまらなく貴方に逢ひたくなつてじつとしてゐられませんでした……」かうして女が眞心こめて話してゐる間中、われわれは絶えず手をとりかはし、抱擁し、別れてゐても心の變らなかつたことを知らせあつた――

ゲーテはさういふ事件に人智の計り知れない不思議、精靈的(デモニッシュ)を見ようとした。だが大體ゲーテの思想といふものは、大變平衡がとれてゐるから吾々に少しの不安も與へない。然しかういふものは、謙虚さなくして、その不思議さだけを强調すると、一種の神祕主義に轉化する恐れがある。キルヘルム・フォン・ショルツはかういふ人間の牽引作用を一冊のエッセイとして「偶然――一名、運命の豫備形式」といふ本を出してゐるさうであるが、かういふ事件といふものは人智の計り難い深遠をのぞかす一例としては適切であるが、かういふ事件だけで人生を解釋しようとすることは明らかに間違ひである。私は私達の偶然論といふものを一種の神祕主義だけとして提出することには非常な危險を感じてゐる。

今日の偶然論といふものは、人智の計りしれない無邊際に、驚くものであると同時に、その無

邊際の驚きによつて、われわれの生活を生き生きと感じ、躍動させるところにある。
共産主義者達が唱へたところの必然論——それは彼等の曲解であつたところの、その押しこめられた窮屈さと、狹小さと、乾燥から脱出するところにある。
人生といふものは明らかに、必然論者が計算するやうな宿命や偏狹さの中にあるものではなく、もつと飛翔し、思ひつき、潑剌として悲痛と歡喜とを同居させるものである。それは今日の熱力學の改變によつて、地球の永生をさへ主張しようとするところの一つの革命的な思想である。——一つの必然として地球の冷却を豫言してゐた科學は寧ろ今日光明を以つて地球の永生を說明しようとさへするのである。

二

共産主義者達に告ぐべき言葉はすでに多くを費した。私は最早彼等にいふ必要を認めない。
彼等は常に「必然」といふ。だがわれわれはかつて明日のことを、たつた一秒さきのことをさへ知つたことがあるだらうか。忽然として何かを感じることはある。然しそれは決して必然から來るものではなくて、巨大な沈默を持つて横たはつてゐる偶然に對する畏敬からに他ならぬ。われわれは明日の未知を思つてわれわれの生活を築くのである。この何よりも强烈な事實に思ひ至れば、必然などといふ小思想に安心してわれわれは決してゐられるものではない。

必然思想といふやうなものは最早今日ではわれわれの古典性格が作つた迷信だといふより仕方がない。

われわれは確かに過去を計算して、その中に多くの原因結果を見つける。然しそれはヒユームがいふやうに、相互の印象を不完全な前後關係に於て連結したり、特殊な歸納を行ふからであつて、その證據にわれわれは依然として、その法則によつて何事をも知り得ないのである。

われわれは依然として筮竹の音に恐怖し、姓名の字格の神祕によつて威脅せられてゐる人々を見る。

われわれは法則によつて生きようとする意志に人間の壯烈な營みを見る。然し法則を必然と考へ、全部であると考へることはやめなければならない。

實際をいへば、未來が不可知であると同じやうに、現在も過去も、事實の記錄は有り得るとしても、不可知であることには變りがない。

これは時間の論理における可逆性であつて、私はかやうに見る事によつて偶然論といふものが歴史的に普遍的になるのだと思つてゐる。これこそ主觀と客觀と通した唯一の眞實であつて、眞實の持つてゐる不思議である。私はひととほり、これらの不可知を「空間としての偶然」と「時間としての偶然」とにわけ、「時間」といふ概念によつて、さらにすべてを整理すべきものと考へてゐる。

われわれは普通、偶然といふものを豫期と關連して未來の時間だけに限りやすい。然し過去も現在も、卽ち空間的な事實も經驗も、すべてが時間の中に出沒するものであつて、それら全體が偶然なのである。卽ちわれわれは過去を解釋したと思つても、それは未來と同じやうに解釋出來るものではなく、ただ一つの確實に接近してゐるにすぎない。かくてすべては「緊張した時の流れ」であり、その「純粹持續」といふことがベルグソンにおいては重要になつてくるのである。ただわれわれにおいては時間を精神とのみ解しないところに彼との隔たりがある。

常に時間の流れの中に於て吾々は緊張した意志が起伏するのを見る。人間的牽引力はかくの如くにして、その緊張した時間の中に出沒する。それは明らかに一つの不可解であるが、高次の偶然に於て吾々はかくの如きものを明らかに感じ、これを否定することが出來ない。

われわれ文藝の徒が日常茶飯を寫し、また高踏の氣魂に立ち、それぞれの小說を構造しようとして思ふことは、常に過去も現在も未來もひとしくこの不思議な偶然で充滿し、この偶然を洞察し、慧感するところになければならない。かくのごとき謙虛さにおいてのみわれわれの小說は常に不可解の發展と、事實とによつてわれわれを魅惑し、驚かすのである。ただその偶然の中で常に人間が自分の幸福を希望し、意志して生きてゐるといふことが、個々の偶然を聯珠のやうに見事につづりあはせるのである。

われわれは何でも不可知だとはいはない。さういふ感傷に陷ることは何よりも危險である。然

しすべての物がその基底において不可知であるがゆゑに小説しようとし、科學しようとするのであることを知らなければならない。恐らく碩學にして初めて學問の渺々たるを知り、練達者にして初めて物事の運命を達觀してゐるに違ひない。何も神の設定を待たなくとも、吾々の心に、一片敬虔の心情があれば、おのづから愛と信實とを精神の奥深くに感ずるのにちがひない。

われわれは過去の必然論、殆ど全部の人々の心を囚へた必然思想といふものを、どうしても一度かなぐり捨てなければならならない。

（『大阪毎日新聞』六月廿七日）

モツアルトとサリエーリ

このごろプーシユキンの詩篇『モツアルトとサリエーリ』を讀んで大變に心うたれた。こんなに見事な敍事詩はそんなにあるものではないと思つた。

二人の音樂家であるサリエーリとモツアルトがどんな經歷を以つて近づきあつたのかは知らない。然しこの二人の藝術に對する死に身の渇仰といふか、切瑳といふか、競爭の心理が實に美しく構造せられてゐるのを見て驚いた。三百行位のこの敍事詩は二人の天才の會話で出來てゐるのだが、先づサリエーリの獨白から始まつてゐる。

人はいふ、この世に眞理はないといふ、

しかも、あの世にも眞理はないものを、

私には何の奇もない音階のやうに、はつきりしてゐる。

生れながらにして、私は藝術に心を寄せてゐた。

いわけない子供でありながら、あの古めかしい教會堂に
高らかにオルガンのひびき渡るとき、
私は耳傾けて、ただうつとりと聽いてゐた、
ゆくりなく、快い涙流して。

初めサリエーリの今日までの經歷が物語られる。その時、突如としてモツアルトが現はれる。今までついぞ人に羨望を感じたことのないサリエーリの心の中に、モツアルトの驚歎すべき天才に對する嫉視の心が湧きあがつてくるのである。然も「たはけ者の、爲すこともない男の中にある」音樂の才能に對して。

ところがその嫉視はモツアルトに對する理解と尊敬とが深まれば深まるほど烈しくなるもので、その意味ではモツアルトにとつてはサリエーリは最も深き友達であり又敵であつたにちがひない。サリエーリはふとモツアルトを毒害しようと考へる。十八年間彼がしまつてゐた毒藥の事を思ひだす。私は彼が十八年間自らの身近くにイゾーラの贈り物、毒物をしまつてゐたといふ偶然に、この詩の深さとサリエーリの性格を見るのである。サリエーリの中にある不思議の性格と作品の構造の深遠さを見るのである。

さてサリエーリは眞實と哲理の中でその實行を迷ふ。ところがモツアルトは既に或る日、神秘の「黑い人」の訪れを受けて、一篇の「哀悼曲」を製作してゐるのである。この邊の呼吸の切迫

と、作者の作品の構造力には誠に頭の下る思ひがした。私も嘗て「毒藥」と「黒い人」とを或る作品の一つの狀態として結びあはしたことがあつた。然しこの詩を見て自分の乏しさを深く恥ぢる思ひがする。

さてモツアルトはサリエーリの爲めに毒の杯を捧げられて飲むのである。その時彼は「哀悼曲」をピアノに向つて彈きつづけてゐる。萬感胸を壓して、その曲を聞いてゐるサリエーリはこの世に於ける最も深刻な鬼氣迫る聽き手であつたに違ひない。

この涙、
初めて流すこの涙、痛ましく、また快よいこの涙、
重苦しい義務を恰も果したやうに、
醫療のメスが、患部を見事に切りとつてくれたかのやうに、
ああモツアルトよ、この涙…
氣はとめるな、この涙、つづけて、さつさと、
この胸を、もつともつと、高い調べに充たしてくれ……
するとモツアルトは心わななかして聞いてゐる彼に
世の人の、誰れも彼もが、諧調(ハーモニイ)の力を
これほどに感じてくれるものならば!

といふのである。それは惡黨でも善人でもないわからない精神の高揚である。藝術の精神の中にある最も高調した音である。私は久しぶりに讀み、心洗はれる思ひがした。譯者は中山省三郎氏で、ブブノフ女史の挿繪がついてゐた。私は數日座右に置いて幾度も眺め、又よみかへした。

偶然論とモラル

『ゲーテとの對話』を讀みかへしながら、ゲーテが一種の善惡を越えた世界に對して、渇仰を持つてゐたことを今更らに感じ、然もその中に更らに一段と高次の、別の秩序の世界を彼が感じてゐたことが察しられ、面白かつた。

當時に於て天下を風靡してゐたカント哲學の中にありながら、その窮屈な世界だけにとどまれず、常に飛翔しようとしてゐた樣は、何か今日の偶然論に大きい示唆を與へるものがある。

彼は云つてゐる。

「おもしろき盜賊をくだくだしき正直者に變へる事は神の心ではない」

又作品の中で、古今の天才者を醉ひどれや氣違ひに比較し、或ひは自殺の勇氣を辯護して、必ずしもそれが弱者の勇氣でないことをいつてゐるところなど、なかなか諷刺的と思つた。彼は善惡をいつてゐるのではない。人間の精神の高調と熱情とを讃美してゐるのである。彼に於ける調和はさういふ美の中にあつたやうに思はれる。

私は今日の日本ほど人が無思想に今日の道徳に反撥してゐる時代はないと思つてゐる。或ひは今日の道徳に無意味に束縛せられてゐる時代はないと思つてゐる。

今日の文學は殆ど今日の道徳に何の批判もなし得ないのである。それどころか、日本では道學者的風貌が最も尊重せられてさへゐるのである。

ただ吾々はアンドレ・ジイドとD・H・ロレンスに於てのみ、今世紀に於けるモラルへの批判を見るのである。古典的な人間觀への反抗としての新らしい人間性の開放を見るのである。ジイドに於てはこれは一つの觀念として、ロレンスに於ては、それは一つの肉慾の問題として。

實際『背徳者』にしても、『チャタレー夫人の戀人』にしても、何か人間性への開放を、彼等は眞實な態度に於て、これらの作品の中で求めてゐるのである。

彼等は決して世渡りなどは考へる暇がないのである、道徳的な假面などはどうでもいいのである、人間の眞實に觸れようとして彼等の作品を構造してゐるのである。結婚制度や、貞操觀念の訂正ではない。通俗モラリズムへの痛擊を身を以つてしてゐるのである。

その意味で吾々は、今日の偶然論といふものが、今日のモラルを、低い秩序、狹い必然論から開放する爲めにも、大きい力を持つてゐることを認識しなければならない。

吾々は人間生活を一度偶然の中に開放し總ての基準を破壞しなければならない。

善を强調するものとしての惡と、惡を誇張するものとしての善の作用を、偶然の中に見なほし

て吾々の道德を破壞し再生しなければならない。

かくの如き立場に於てのみ、吾々はゲーテの片言雙句を理解し、又ジイドやロレンスに親近することが出來るのである。

私は敢て破壞といひ、再生といふ。

然し誰であつたか、偶然論はただ秩序を無視して放恣に流れるものだと批評してゐるのを見た。なるほど今日の偶然論といふものは、小さい必然的道德、低い秩序、これらのものを先づ破壞するのである。だがエディントンが批評してゐるやうに、今日の偶然論といふものが、從來の必然論以上に反つて大きい秩序と高次の豫斷とを吾々の生活に與へるものであることを私は確信してゐる。

偶然とは無思想や無秩序ではなしに、更らに深い思想であり、高い秩序への要求である。人は明敏なる叡智としなやかな感情に於てこのことを理解しなければならない。

私は今日ほど嘘の叫びで文藝が毒されてゐる時代はないと思つてゐる。

吾々にとつて更らに一段と高い思想であり、秩序であるところのものが、その茫漠としてゐる爲めに、反つて現在に對する破壞放恣とのみ僻釋せられてもこれは仕方がない。小さい聰明さと、小さい强記さと、小さい明敏さとを誇つてゐるやうな批評家や作家などは最早、吾々にとつてどうだつてよいのである。

西村孝次氏譯するところのアラン・ポウの『ユーレカ』を一讀した。二度も三度も讀みかへしてみたいの實は讀みながら讀みいそぐことの矛盾をしきりに感じた。然も私は書きいそぐことの矛盾を感である。實は數度の讀後の後にこの文章は書くべきである。じてしまふのである。

宇宙の構造と、天體の運行とを、かくも指呼の間に幻想し、計算し、宇宙の壯大さに比較して人間の小ささを冷酷に嘲笑してゐる哲學書をしらない。これは高きに就かんとする最大の悲劇の書である。

然も彼は自己の所信を實證せんとして、ニュートンとラプラースを引用し、彼の好む幾多の科學說を用意し、冗談と比喩とで武裝して、己の所說に益々熱中するのである。

彼が地上の生活にありながら天上にあこがれ、その壯麗無比の空想にかくも熱情を傾けつくしてゐるところに彼の地上的な悲劇があつたやうに思はれる。

然も天體を考へる時、彼に於て總ては茫然として雲散霧消したにちがひないのである。

『ユーレカ』を讀んでポール・ヴアレリイは、その「神話性」に達したといふことであるが、この混沌茫漠たる空中の案內記にもまして立派な宇宙詩を私は讀んだことがない。

彼の哲理の構造は、先づ天體の間にある輻射力を說明し、引力を說明し、更らにこれらの作用を牽引と反撥といふ二つの觀念に於て見、宇宙をこの二つの觀念によつて整理し、更らに人間を整理し、その中に肉體と靈魂とが手つないつなぎしてゐることを說いてゐるのである。

何よりもこの不思議な一冊をよんで、彼が古今の文學に於ける唯一孤高の哲學者であつたことを吾々は感じるのである。實際彼の思ひあがつた幻想の樂しさぐらゐ、吾々の胸を打つものはない。然もこの書によつて彼は多くの批評家と專門家の嘲笑を買つてゐるのである。これほど痛快な現象なんて滅多にあるものではない。

實際吾々は、引力によつて引きあつてゐるといふ宇宙物質の構造といふものを考へる時、その無邊際の壯麗さに驚くのである。ラプラースを引用しながら倘ほ且つポウが一つの虛無的な思考の中にあつてその狀態を思つてゐる時、彼はふとして吾々の思想が何故に天界に引きつけられるかと考へただらうか。

ニユートンは、物質といふものは、物質の質量と距離の相乘積によつて引きあつてゐるといつてゐる。これは吾々が年少の日に習つた物理學であるが、私は人間が天界に思ひ引かれる時、一人の人間が吾々地球と同じ質量となり、太陽に向つて、月に向つて、宇宙的な牽引を感じてゐる事に思ひ至るのである。

アラン・ポウが述べてゐるものは、確に多くの天體と對立する一人の巨大なる遊星としての彼、

彼自身の神話である。この中にある彼は明らかに一つの超人である。私は私のやうな者さへが、天界への思慕に佇立する時、何時も自分が最も大きいか、最も微小な存在に忽然として變化してゐる事に氣付くのである。

さて私は人間が地上を匍匐することにも一つの美しさを見るのである。これは今日のリアリズムであり、人間生活の現實である。然しこの匍匐だけではどうしてもつまらない。

ポウはこの一冊の中で、「匍匐が様々な歩き方中、誠に以つて素晴らしい奴だつてことを、今更君に云ふにも及ぶまい」とあるところで述べ、地上を這ひ廻つてゐる人間を諷刺してゐるが、今日の文學は彼が諷刺するやうに全く匍匐のみを、素晴らしい奴と考へ、リアリズムと考へ、地上の糞に衝突してよろこんでゐるのである。

私はかくも天上に憧れることをしらぬ文學のあることを知らない。

私はこの書の如きは百の理論よりも千の創作よりも、今日の文學にとつて最も大切であると思つてゐる。然も西村氏の譯文はよく原語の口調をとらへていいと思つた。

最後に譯者の註を引用するが――彼アラン・ポウを文學理論史上品隲しようとするならば、コウルリヂよりもヒユームに流れる主底音の裡に彼を聞くべきこと、又カント哲學の滑稽な食ひ心棒とベルグソン風の直觀哲學者フッサールに質問する若い學生の屹々として唄ふ無染の雅歌との間にポウを置いて考へねばならぬこと、又グンドルフの「無限度な動搖と運動への渇望並びに憧

像」としての形態及び創造への意思としての古典主義者との間にホウを定位すべきこと――といつてゐるのは、誠にポウを知る者の至言と云ふべきである。

吾々は吾々の思考とポウの哲學との間に、一つの交流を感じて更に喜びを感じるのである。

小說に於ける偶然と人生に於ける偶然

三枝博音氏に

偶然論の提出に對して二三の論者がこれを揣摩臆測してゐるのを見た。これらの論者は嘗てついぞ「偶然」といふ事を口にさへしたことがなかつたのである。然も平然として今日「偶然」を認め、「偶然」の大切を理解したといふ顏をして論ずるのである。そして「偶然と小說」といふ。私の怪訝にたえないことは、今日まで輕蔑しきつてゐた偶然を何故にかくも易々として認めることが出來るのか、そのことを實は私は知りたいのである。

然も今日まで偶然の契機といふものを殆ど考慮に入れず、とりわけ悉くの現象を必然によつて說明してゐた人々までが「偶然」といふのである。その最も代表的な一例として『經濟往來』八月號に於ける三枝博音氏の「小說の偶然の分析」は注目に價するものであつた。

三枝氏はこの頃になつて「小說の本質論が端初を見せるやうになつた」と、最近の文學論を列擧しながら、然もその最も顯著な例が「偶然」の問題であると云はれるのである。

そこまではいい、然し次ぎのやうに續けるのである。
「小說が面白いのは一體どうして面白いのか。自然や人事に就いての精密な單なる記述や記錄が小說のやうに面白くないのは、それが始めから人を感動せしめるやうに出來てゐないからである。小說で偶然が問題になるのは、感動せしめることの主因がそこにあるからである」
と說き起し、そして「偶然は創作の中の問題である」と限定するのである。
卽ち三枝氏によると「偶然」といふものは小說を面白くするための單なる手法、小說內のことだといふことになるのである。してみると三枝氏に於ては、小說を面白くするといふことが同時に「小說の本質論」になるのである。誠に恐れ入つた本質論である。
若しも人間生活を貫く眞實が偶然になかつたら、どうして偶然を吾々が小說の中で描いたからといつて、吾々の小說が感動的になるであらうか。吾々の生活自身が不可解の偶然にみち、無限の偶然に滿たされてゐるが故に、小說の中でそれを見て吾々は驚くのである。三枝氏の言ふやうな單なる「偶然」、小說を面白くするものとしての「偶然」などは幾らあつたつて小說を本質的にするものでもなければ深遠にするものでもない。その意味で私は三枝氏の「偶然論」などは小說にとつて有害無益の技巧論にすぎないと思つてゐる。三枝氏のいふやうな「偶然」なら、今日の通俗小說をみれば、實はありすぎて困るのである。そんなものが今更ら小說にとつて新らしい論理などであつてたまつたものではない。

三枝氏は「小說の作品機構については私も偶然を高く買ふ。否最も高く買ふとすらいへるのである」といつてゐられるが、そんな技巧に限られた偶然などいくら高く買つてもらつても仕方がないのである。

三枝氏は横光利一氏のいふ「日常生活に於ける偶然の感動性」といふことをも否定して、偶然といふことをひたすら「作品の內部、作品機構」だけに限り、作品を面白くするものとして取扱かはうとするのである。もつとも横光氏の場合も、それは小說の技術論にとどまつて、人生觀的に發展することを欲しないもののやうである。

然しかういふ技術論としての偶然などといふものが小說を面白くするものでは決してない。「小說よりも奇なり」といふ言葉がある。實際吾々の生活は小說よりも奇怪な事實によつて連續せられてゐるのである。

この事實に驚くところに新らしい小說の復活があるのである。國木田獨歩は「先づ吾々は驚かなければならない」といつてゐる。吾々自身驚かずして人を驚かすことが出來る筈がない。吾々自身人生の深遠に到達せずして小說を深遠にすることが出來るわけがない。人生の中に偶然を見ずして偶然を描ける筈がないのである。小說は模寫ではないが、現實の中で感じないものを表現することは不可能なのである。然も三枝氏はいつてゐるのである。

「今更ら物理學者の說など引きあひにして、現實は偶然に充ちてゐるから從つて偶然が支配す

る面白い小說が大いにこれからもあり得るといふやうな（この頃流行）の小說論は小說は何であるかを理解してゐない以上に吾々の時代の現實を理解してゐない愚論である」

では一體、三枝氏のいふ小說とは何なのか。そして現實とは何なのか。

恐らく三枝氏に於て小說とは「面白さ」といふことであり、現實とは歷史的必然の世界であるといふことに違ひない。現實に於ては必然性であり、小說に於ては面白さの爲めに偶然性が「最も高く買はれる」といふのであるらしい。その矛盾撞着の烈しさは殆ど言語に絕するのである。

大體三枝氏は最も簡單な矛盾を愛する人とみえて、物理學者の說を毛嫌ひしながら、然も「科學の法則的認識によつて偶然の存在は、日々征服せしめられつつあるのである」といふのである。物理學をケナシながら科學の勝利を云々する——誠に珍妙な論法は一奇觀たるを失はないのである。

私は文學的素養と、哲學的素養と、明敏と良識とを三枝氏の文章の行間から拜見するのである。そして如何によく現下のたわいもなき文學評論までに通じてゐられるかに驚くのである。然し悲しいかな、私は小說の「偶然」に就いて何等敎へられるところのなかつたことを告白するより仕方がない。

今日まで科學說を引用したのは、石原純氏や私の偶然論であつて、恐らく三枝氏が愚論としてゐられるものは恐らく、これらの所說に違ひないのである。

然らば今日の物理學は三枝氏が輕蔑するほど單純であり、哲學的に除外されるべきものであらうか。

それどころか、私は今日の量子力學に於ける物理的世界像ほど驚歎すべきものはないと思つてゐる。今日の量子力學は總ての存在の本質を偶然と見、從來の必然的世界像と因果律とを精密なる實驗と計算とによつて否定してゐるのである（『經濟往來』六月號、「不確定性原理」石原純氏）

吾々は過去に於て多くの偶然論者を持つてゐる。古今最大の哲學者ヒュームや、ベルグソンやブトルウのやうな淸新なる哲學者を持つてゐる。然も計算によつて偶然を算出する今日の物理學的歸結ほど吾々を一つの精確さを以つて歸依せしめるものはないのである。かくの如く大膽な所說は今日まであまり澤山みたことがないのである。

然しそれは私だけの感想ではない、石原純氏や大島豐氏は、そのことに就いて既に今日までに幾度となくその紹介を試みてゐられるのである。

吾々は吾々の日常生活に於て、世界の運行に於て、それが偶然であることを、ことごとに知るのである。然もたまたま今日の物理的世界像の精確さを以つて、それを證明するのであるが、それが何故に「愚論」になるのであるか。その理由を私は切に拜聽したいと思ふ。私をして言はしむれば、寧ろ三枝氏の如く何んらの人生觀なき偶然を論ずる所說にこそ低俗さと撞着とを喫驚するのである。

前にも引用したが「科學の法則的認識によつて偶然の存在は、日々征服せしめられつゝある」と三枝氏はいはれるが、事實は反つて今日の科學は必然論から偶然論に向つて發展してゐるといふのが本當である。このことに就いては三枝氏がほんの少しの謙虚さと勉強心を出されればすぐ理解出來ることである。

さて、ここに至つて吾々は三枝氏のいふ必然論への批判に進行したい。三枝氏はいふのである。「いつたい今のやうな時代には世界の全現象は悉く必然的法則のもとにあるものだといふことをハッキリさせるべきである」と。

然し果して世界の全現象は必然的であるだらうか。吾々は嘗て地震を豫測したこともないし、今日の國際情勢を豫斷したこともない。「歴史のエレメントは奇蹟によつて行はれる」といふが、歐洲大戰は、一靑年の單純な行動から發展した。それらは、突如として吾々の前に現出し、吾々を驚かすのである。それは今日の物理學がいふやうに、全然原因結果を超えた世界が存在するからに他ならぬ。又ブトルウが言ふやうに、世界に同一の物が二つ以上存在しないとすれば、そこに必然的法則といふものが成立し得る筈がないのである。

如何やうにして今日の如く總ての出來ごとが法則をはみだしてゐる時代に、「悉く必然的法則のもとにあるものだ」といふ考へをハッキリさせようとしても、それは現代人にとつて寧ろ馬の耳に念佛でしかあり得まい。近い例は、歴史的必然といつてゐた人々の前に何時如何なる歴史的

必然が起つたであらうか。

私は宇宙の現象を偶然と考へ、確率としてしか考へないものである。このことは嘗て精しく「偶然文學論」に於て說明したことがあるからここでは繰り返へさないが、ヒュームがいふやうに吾々に於ける認識の確實さは、觀測體と被觀測體の間にある印象的確實性であつて、それ故に事實は常に法則をはみだすのである。かくて宇宙を支配するものは偶然であり、そしてその中から吾々はわづかに確率を見つけるのである。然しそれは確率であつて必然ではない。必然といふものは確率に對する人間の憧憬が哀切に極まる時、一つの夢の開花として必然世界を現出するのである。吾々はそこに人間感情の美しさをみる餘裕を持つのである。然しそれは決して客觀的性質ではなくて、寧ろ哀切な幻影の概念に接近するものでしかない。即ち必然とは夢としてのみ許され、宿命としてなら拒否されなければならない。然も必然の夢は對象を限定し、局小するところにその特長があるのである。私と雖も決して必然の世界といふものを否定し去らうとは思はないが、客觀としてならそれは確率といふことにとどめるより仕方がないのである。

三枝氏は「現實的社會が偶然に充ちてゐることを理論と創作とを通じて人に向つて說くことは非科學的反動思想となる危險を多分に持つてゐる」といつてゐられる。

然し吾々は益々現實と科學とに於て偶然を實感し、然も「偶然論を絕えざる努力、人生への謙虛な參加、力の根源として取扱かはう」としてゐるのである。可能性の限界を無限にひろげ、そ

の中に吾々の確率を探求するのである。

今日この「偶然」を最もよく理解してゐる人間は、恐らく彩管を持つてゐる畫家達であらうか。彼等は繪畫に於ける努力と、その偶然とが如何やうに組み合されるかを最も適切に毎日のやうに經驗しつづけてゐるのである。

可能性の廣大さは、微温の生活にとつては、明らかに一つの喜びであると同時に大いなる恐怖である。然しこの喜びと恐怖との冒險こそ、今日の吾々にとつて何よりも大切な精神でなければならぬ。

誰れであつたか、私が嘗て總てが偶然であると云つたら、「物には限界がある、鉛から金を製造することは出來ないだらう」といつて反問した。

それに對して私は何とも云へない鬱屈を感じた。私は鉛から金が出來ないとはいへないと信ずるものである。今日の方法では出來ないが既に多くの科學者はかやうな實驗を試みてゐるのである。吾々の空想は決して倭小なる限界によつて縛られるものでも、固定せらるべきものでもない。何事といへども吾々の生活を不可能の限界、宿命によつてしばる必要はないのである。私はかくの如き態度が、何故に「非科學的であり、反動思想になり得る」のか了解に苦しむのである。

私は總てを可能性に於て見、不可知の深遠さに於て見たいのである。そこにこそ新らしい生活の意欲が起り、新らしい文學の上の空想が起り得るのであつて、無限の希望と努力とを偶然の中

に見ることによつてのみ、吾々の生活と藝術とは蘇生するのである。吾々は確率を求めながら、これを破壞し宿命を蹴つて新らしい世界に出ようとする。かかるが故に吾々は鉛から金を得、生活の中からバラの蘇生を可能にするのである。ロマンチシズムといふことを三枝氏はいつてゐられるが、然し技巧としての偶然などからロマンチシズムが起つてたまつたものではない。

さてここにもう一つ別の批判があつた。曰く「横光の小說には横光的なものがあり、中河の小說には中河的なものがある。これは明らかに偶然とはいへない」といふのである。これは春山行夫氏の說であつて、ここには一つの機智を持つた詩的抗議がある。私はそれが詩的であるが故に、なかなか面白く感じたのであるが、然しこの意味は椅子には椅子の性格があり、扇には扇の性格があるといふことと同じ意味で、それは性格といふものの軌範を說明するだけであつて、決して偶然といふものを否定する例にはならないのである。又ボードレールの引用句の如きも、それは機械の運動を必然と考へた時代の考へ方であつて、今日では機械の如きだつて決して必然とはいひきれないのである。但し春山氏說は、これを論理としてでなく、作者の氣質として取扱はうとするものであるが故に、それは反對でも贊成でもなく、それはそれとして見ればいいのである。

次ぎに私が專門以外の科學理論を引用したといつて、そのことをあげつらつた人があつたが、吾々が宇宙や世界に就いて絕えず考へてゐる以上、これを傍證する位のことは、當然のことである。今日の科學的世界家に對して無關心でゐられるが如きは寧ろ、彼等の怠惰か狡猾以外の何者

でもあるまい。

さて吾々は常に偶然の中に生きて確率に到着することを欲するのである。確率によつて生活を整理しようとするのである。そして吾々は確率的結論を大切にするのである。然し同時に常にそれを破壊する事實にも恐れないのである。寧ろそれだけによつて何時までも吾々の生活を基準することには堪へられないのである。

かくて吾々人間生活を生かし、希望づけるところのものは偶然と確率との交互の隆起であつて、その中に吾々の目的と手段と行動とが熱烈に築きあげられるのである。若し吾々の生活がたつた一つの必然の中にあるのであつたら、吾々は宿命の中にあつて何事も希望せず、又何事も努力しないに違ひないのである。

さて三枝氏は「藪から棒の偶然が、小説を藝術たらしめるものではない。必然的な法則的な玲瓏たる認識へもりあがつてゆくための偶然でなければならない」又、「偶然は一層高度の必然を把握せしめるためのものである。若しさうでなかつたら偶然は感傷に奉仕するものとなるのである」といつてゐられる。

これは三枝氏の立場としては尤も至極の言ひ分であるにちがひない。

だが偶然といふものは必然に從屬したものとして考へるべきではないのである。このことは幾度もいつたことであるが、吾々は寧ろ「偶然」といふものに於て人生を見、必然に於て人間の夢

をみるだけである。然も嘗ての夢は既に破れてしまつたのである。

それは宇宙が偶然であるが故に必然の夢をその中に見得るのであつて、偶然があるが故にその中に必然があり得ると考へるのである。かくの如き意味に於てのみ吾々は新らしく必然を認め一つの要請としてのみそれを大切にしようとするのである。だがそれ以上にこれを考へることは出來ないのである。

かくの如くにして吾々は吾々の現實をもつと廣く、自由に、闊達に思想し、希望し、努力することが出來るのである。そこにこそ「偶然文學論」の文學に於ける新らしい意味と目的とが現はれるのである。

田邊元博士は嘗てその深遠の體系の中でいつてゐられる。「論理の無限なる構成の外に尙論理の必然性を脫する自由生產の餘地が無ければならぬ。勿論かかる自由生產も既に生產の事後に對する反省に於ては當然に辯證法の規定によつて必然化せられるものである。併しそれにも拘はらず、更らに新なる自由生產の活動に對し辯證法の論理的概念によつて限定せられざる自由の方向があり、却てこの自由の自己規定に由つて始めて辯證法の論理そのものが必然化せられると考へられなければならぬ。歷史は不動の過去に於て成立するものでなく、常に動く所の現在に於て成立し、各現在に於て豫見せられる主觀の自由可能としての未來との關聯に於て、これと共に常にその意味を變ずるものなのである。」

飛びゆく現實の說明として、又その夢との關係に於て、私はこれほど適切な言葉を見たことがない。

さて吾々は單なる技巧としての偶然論の如きは最早抹殺するに若かないのである。三枝氏が說明する偶然の如きは單なる從來の偶然說であつて、それは輕蔑的な意味を持つた偶然であつて、寧ろ今日の小說を末節に追ひ込まうとする技巧論でしかない。

「今、文壇では多くの人々の關心がこれからの小說はどんなものであるべきかといふことに向けられてゐる。小說の本質の問題は、映畫や美術、更らに又音樂の問題に關係して來よう」と三枝氏はいつてゐられる。

私は三枝氏の偶然論が右樣の如き總ての藝術の根幹にわたる本質論に於て、再び現はれんことを願ふものである。

（『經濟往來』九月號）

朱鞘老人に物申す

「腰の朱鞘は伊達には差さぬ」といふから大方恐ろしき御老人と御見受けしました。

但し大變觀念的な御質問で先づ恐れ入つたのです。といふのは「永遠の法則はないから偶然論が正しい」――と小生の論文を解してゐられるが、それは曲解である。先づ第一に「總ての存在が偶然として現はれるが故に偶然論が正しい」とするのであつて單なる論理ではない。次ぎにハイゼンベルクの原理は「永遠の法則であるか、一時的法則であるか」といふ御質問ですが、永遠の法則などといふものは當分考へぬ方がよからうとお答へします。

不確定性原理は「現在の可能な觀測手段に於ては總てが偶然にしか現はれない」といふのであつて、これこそ現代的な認識方法と小生は考へて居ます。ただ如何なる必然論が起り得るとしても、それがこの偶然の中にゐなければならぬといふ意味では一つの永遠なものに違ひないと思ふのです。

次ぎに小生の考へを懷疑說の「分らぬといふことはわかる」といふ矛盾說に例へてゐられます

が、今日の偶然論は決して單なる自己矛盾や懷疑說ではない。それはエディントンがいふやうに「不確定性の法則が實際上の豫告に對する基礎として、嘗て決定性の法則がさうであつたと同樣に有用なことを見るであらう」

といふ言葉で充分にわかる筈です。それは偶然といふものを最も重大な要素として考へながら、その中に常に蓋然性を追求するものであつて、必然といふやうなもので總てを解決しようとする獨斷說と、そこが違ふ所以です。

最後に不確定性原理は四捨五入かどうかといふ御質問ですが、それは電子の狀態が不確定であることを「可能な觀測手段」に於て說明してゐるのであつて、御質問のやうな觀念的な論理遊戲ではないやうに聞いて居ります。どうもお腰の朱鞘が眼についてなりません。それに覆面と來てゐる。遊戲と見せかけて斬られると大變故この程度で失敬します。

確率概念の訂正を中心に

藤田の繪

美術院の改革といふやうなことが、專門的にみていいことであるか、惡いことであるかは知らない。又さういふことが一つの統制として可能であるかどうかも知らない。

だが時々入れ換るといふことは何れにしても結構なことにちがひない。異變の可能といふことは、恐怖であると同時に人間にとつての喜びである。偷安なこととする者にとつては靑天の霹靂は突如として起つた方がよいやうである。

それにしても私は今度の改革は、人選の適否といふことよりも、藤田嗣治氏を民間に殘したといふ一事に於て成功したと思つてゐる。といふのは、會期中二科會を徘徊し、今更らのやうにこの畫家の驚くべき力量に感心したからである。かくの如き畫家を民間に殘したといふことは、藝術の流行と偏向とを見事に破壞して、勢力の均等と流派の多樣性とを今日の畫壇に保存するからである。かくの如き畫家が一つの統制の中に蹋蹐せられなかつたといふことは寧ろ幸ひと言はな

ければならない。
私は數年前、藤田氏の歸朝第一の作品を朝日新聞社のギヤラリイで見た時、恐るべき群像の豐富さに驚歎したのを覺えてゐる。以來、氏の繪を見つづけてきて、或ひはマンネリズムを感じ、趣味のみを感じて、人と共にもの悲しくなつたことも一再ではなかつた。然し今度の「北平の力士」を見るに及んで、矢張り藤田氏が世界の畫家であることを痛切に感じた。かくの如き構造力と性格の描寫や、色彩の配合は、今日の畫家の誰れ一人としてなし得るものでないことは餘りにも明瞭である。私は如何なる反對にも斷然として、この感想を貫くものである。
あの大地の上に突つたつた大陸の男の面だましひと、肩と腰とはどうであるか。力を誇示してゐる尊大の眉宇はどうであるか。爪先きで立つてゐる左足のポーズにある性格描寫はどうであるか。アンリ・ルッソーのやうな少し間の拔けた顏をして坐つてゐるもう一人の男。知慧を湛へて口をとぢた更らにもう一人の男。その周圍に集つてゐる支那婦人と男の表情と肢體の組み合せは、一つの樂しい音樂の階調を以つて動いてゐる。あの大手をひろげて立つた中心の男は無言の中で叫んでゐる。
「さあ、何人でもやつて來い。」
私は多くの美術批評家が驚くことを知らず、畫壇の常識を出ようとしないことに大きい不滿を感ずる者である。かくの如き繪が讃歎せられずして、今日如何なる繪があり得るだらうか。

私は本當に驚き發見した。たしかにこのタブローは傳統に冠絶する一つの傑作である。この繪の中にある錯雜と熱意とは、纖細と勁烈とは、たやすく見のがせられるやうなものではない。誰れの繪がいい、彼の繪がいいと言つてみても、この繪の持つ廣大さには到底及ぶべくもない。

大體藤田氏の繪は繪の傳統といふものを不思議な技術で常に色彩と構圖に保存してゐるのであるが、それでも今年の「五人女」や去年の「三人群像」や「メキシコのマデレーヌ」や「眠れる女」などには、何か甘美さはあつても、その美しさに安心がありすぎた。だが今度の「北平の力士」には大きい冒險と性格とがあつて實に見事であつた。それは去年の「町藝人」のやうな厚さはないが、その代りに實に混沌とした北平の地方色と力強い階調が出てゐるのである。黃色を主潮として、時に人物の顏が背景と混濁するが、先づ人々はこの繪の前に佇立して率直な心の扉を開かなければならない。

私は眠つてゐる今日の美術批評に對して一種の義憤を感じてこの一文を書いた。何と小生意氣な、半可通の美術批評が今日の空氣を占領してゐることか、私は一つの嘲笑を以つて魂を失つた今日の批評家達に挑戰するものである。

確率概念の訂正

今年の初め、「偶然の毛毬」なる一文を發表して以來、諸說紛々として漸くこの問題は學者の

參加に於て新らしい追究にまで這入らうとしてゐる。私は今日の混沌をみて非常に愉快を感ずるところの一人である。

未だにこの問題を「末梢の問題」でしかないとして、「私小說論」などと一緒にしてゐる文章などを見かけるが、それほど氣魄の乏しい閑文學ではない。何よりも人間生活の根本に横たはるところの重大な問題であつて、單なる文壇內の噂話ではない。どんなに阻止しようとしても、どんなに馬耳東風を裝つても、益々增大するところの問題でしかない。この論爭が今日、科學論の究極にまで行きつかうとしてゐることは、誠に興味のあることである。この問題はここまで發展することによつて、最も確實な證明に於て、再び人々の胸に這入つてゆくにちがひない。

さて十月號の雜誌では、私も書いてゐるが、『日本評論』に「偶然論と自然科學」を石原純氏が、『セルパン』に「ハイゼンベルクの哲學說と偶然論」を三枝博音氏が、それぞれ書いてゐられる。又『思想』は「自然科學と哲學」の特輯號として、この問題に關連するものが多く論じられてゐた。

大體この問題は海をへだてて遠くドイツとアメリカに於て、ボア教授とアインシュタイン教授とが鎬をけずるところの問題であつて、石原純氏の文章はこの二人の論爭から說を起して、更らにハイゼンベルクを鮮明にせられ、最後に「偶然と必然との關係」といふ題目に至つて終つてゐる。私は今日まで見た石原氏の論文中、最も讀みごたへのある名論文と思つて再讀し、その巧妙

の所説に感心した。

石原氏は言はれる「吾々に重要であることは認識的に自然の本質を必然と見做さないといふことである。必然は却つてあらゆる偶然の交錯の中に生れるとするものである。これこそ寧ろ自然の機構として最も巧妙なる所以であると解せられないだらうか」と。

これは私が嘗て述べた「必然といふものはわづかに偶然の中にしか存在し得ない」といふ感想と符を一にし、吾々の直觀的表現といふものも決して徒爾でないことを思はせた。

尙ほアインシュタインの新説なるものが到底今日の量子力學を破壞するには遲々として前途の暗憺たることは石原氏の文章にも見え、恐らく量子論に於て今後の物理學が益々多くの發見と發見とを續けるものであることは想像に難くない。

さて三枝氏の論文であるが、これはその自ら奉ずるところの必然論の高揚には一言半句も及ばず、偶然論とハイゼンベルクを結びつけられるものかどうかを疑ふことによつて終始してゐるのである。然し私は哲學を專門するところの三枝氏から物理學者ハイゼンベルクの解說を聞きたいとは思はないのである。私は三枝氏が何故に哲學的にハイゼンベルクを解評せられないかに寧ろ最大の疑問を持つものである。三枝氏の志向するところは、察するに、ハイゼンベルクは蓋然論者であつて偶然論者ではないといふことらしい。

然し今日の確率概念といふものは、不確定を根本に持つものとしての確率であつて、必然への

途中にあるものとしての確率でないことを注意しなければならない。このことは小さい私の着想であるが、これ今日の問題を明快に處理するところの最も重大なる鍵である。即ち今日に於ては既に確率の概念さへが根本的な變化を遂げたのである。即ち三枝氏の指摘する蓋然論とは偶然論でしかあり得ないといふことを理解しなければならない。

私はハイゼンベルクが自ら「物狂ほしいほどに熱心に海の彼方に新しい國を見出す勇氣を持つコロンブス」と自ら比喩する氣魄に今日の革命的な出發をみるのである。

偶然論に於ける今日の世人の混迷は、寧ろこの問題が餘り從來の習慣を破壞しすぎてゐるからであつて、然しそれがわかると同時に、偶然論といふものが、やがて人々の心に新しい光を點ずる日の近いことを信じるものである。私は今日の偶然論が科學的な證明にまで行きついて、再び哲學說にもどり、更らに文學說に旺盛にもりあがつてくることを何よりも望んでゐる。

既に『中央公論』十一月號をみると、本多謙三氏が吾々の所說と三枝氏などの所說とを丹念に批評せられた後、

「今や偶然こそ勝れた意味で現實的でなければならない。それは「觀念」などといふ消極的規定ではなく、身體的行爲によつて客觀界の諸〻の系列を結びつけ、それらの機能に意味あらしめ、それらを生かし、現實的たらしめる契機であるからである。それは丁度アリストテレスの形相因にも比し得よう。現實は偶然である。偶然こそ現實的だとはこの意味に解さねばならぬ。身體的

行爲は創造的である。しかしこの創造は客觀の精確なる測定に基く技術的なものでなければならぬ。必然論を說くだけでは我々の實踐に入り込む餘地がない。本質偶然が許されてこそ我々は自發的に行ふことが出來るのだ。私が今こそ必然と共に偶然の說かるべき時期だといふのはそれである。單なる運動の論理としての辨證法に對し、偶然の論理は行爲の論理である。」

といはれてゐるのは、蓋し最も公平にして最も達識ある批評と云ふべきであらう。

更らに私は中村星湖氏や林房雄氏がその文學的關心に於て、例へばバルザックの「偶然は世の最も偉大なる小說家である。豐饒ならんとせば、その探究に耽れば足る」などを引用しながら、偶然論に文學的一支柱を與へようとしてゐられるのを見る。これらは明らかに今後の實踐的發展を豫感するところ、その一つの强力なる現はれである。

政治形態と文學

かつてマルクス主義者達は文學を政治に從屬するものとして取扱かはうとした。だがこれは明らかに間違ひである。それは政治に從屬するものではなく、政治に平行し、政治に働きかけ、働きかけられるところのものである。

ジイドやフェルナンデスがロシアに興味を持つたのはフランスとロシアとの交友關係以前からであるが、それとも後であるか、そんなことはどうでもいい。然し今日のフランス文學は政治形

態に於ても文學に於てもロシアと接近的な狀態にあるのである。

人はよく、フランスの文學者は進步的で、常に社會の反動に抗してゐるといふ。だが、いづくんぞ知らん、彼等は最も大きい今日のフランスの政治形態と平行して行動してゐるのであつて、格別に堪へられない壓迫の中にあつて堪へてゐるのではない。それはいろいろな傳統に抗してゐるところはある。然しこの政治形態との關係を理解せずして單純にフランスを讃美し、それをそのまゝ日本にあてはめようとするが如きは、政治形態と文學との關係を知らぬ輕率な錯誤でしかない。

日本に於ける左翼作家達の困難は彼等どころではないのである。然もジイドもフェルナンデスも、左翼に興味は持つても、マルキストにはならないのである。これは彼等を俗物とも高等とも區別するものではないが、ただ彼等とバルビュッスとの間に非常な相違のあつたことだけは知らなければならない。その點ジイドを見るよりも、フェルナンデスを見るよりも、私は日本の左翼作家の悲壯に胸を打たれるのである。

それは彼等の文學は、餘りにも今日の日本の政治形態に平行してゐないやうに見える。然も平行するのがいいか、惡いかはいへるものではないが、よくても惡くても吾々はさうするより仕方がないといふところにあつて生活し、文學してゐるといふのが實狀である、

私は論理的には彼等に多くの不滿を持つが、彼等の感情には肉身よりも痛切の思ひやりを以つ

て、その操持を讃美するのである。そして今日なまぬるい左翼めいた言説を易々として弄する男などは反つて輕蔑するのである。

さてドイツでは多くの文學者と科學者とが、ユダヤ人排斥の名のもとに海外に追放せられた。そしてその思想、文學はその政治形態であるところのナチス的でしか有り得なくなつてゐる。だが然らば彼等はそれを重壓としてのみ感じてゐるかと言へばさうではないに違ひない。

ハイデッガーのナチス入黨に、聰明な贊同と喜びがあつたことは想像に難くないのである。彼等の態度は勿論反ロシア的である。だが彼等はさうであるより生き方がないのであつて、人類の方向といふものは、簡單に評し去れるものではない。

但し吾々は、果して如何なる政治形態に於て文學が繁榮し得るか――といふことは考へ得る。又超國家的な文學、或ひは超時代的な文學といふものがあり得ることも考へ得る。

然し何者よりも早く、最も慧敏に、現實を常に直觀し、且つ憧憬するところに文學があるとすれば、政治と共に何れが後とも先とも見極めがたい影響力を以つて、その形態を決定してゐることとは爭ひがたい事實である。

私は今日の日本の政治形態がどこにあるかは知らない。だが刻々に變化する國際關係の動きを見てゐると、日本の接近すべきものは、今日ではフランスではなくドイツではないかと思はれるものがある。そしてそれらの報道よりも早く、既に今日の文學はドイツへ接近を示してゐたので

ある。

私はノヴァーリスの研究が突如として人々の心に用意せられ、ゲーテへの關心が澎湃として起り、知らぬ間に吾々を包んでゐることに驚くものである。

それは誠に間髪を入れぬ敏感さを以つて政治形態と平行し、豫感しあひ、常に不思議の狀態を以つて吾々の神經を刺戟するのである。

吾々は何も、政治形態に留意する必要などはないのである。然しそれらとの交通に於て吾々の生活と藝術とがあることを充分に覺悟しなければならない

今日の偶然論は格別、一般人の認識などは要求してゐない。

初めこの主題を提出した時、人々は多く迷論と罵り、虚妄の說となした。だが、私はそれらの巷說を讀みとつた時ほど實は嬉しかつたことはなかつた。文學上の新說が初め人々に虚妄とみえ、迷語と見られながら現はれるほど光榮なことがあるだらうか。

それほどに途說な躊躇し、狂氣してその主張を貫通してゐたとしたら、私は自ら顧みて多少の安堵を感ずるのである。

ただ悲しむべきことには、早くも今日では多少の理解を一般の人々が示さうとしてゐることである。然も彼等は仔細顏にいふのである。「人生觀としては困るが、技巧論としてなら認めてもいい。」

だが私はさういふ常識的な理解なら、迷語と許し去る一群に寧ろ好意を感ずるのである。人々よ。多少の理解よりは、罵り默殺する聰明をなぜとらないのであるか。

その意味で私は本誌『文藝』に於て、谷川徹三氏や六號子が偶然論を迷語として取扱つてゐることに無限の愛情と好意とを感じたのである。

私は諸批評に對していちいち解答などはしないでもよいと思つてゐる。だが本誌の讀者にも私の迷語を頒ちたい多少の欲望があるのである。

さて私は何よりも偶然論を今日への叛逆として人々に披露したい。今日の流行思想であるところの必然思想への否定として提出してみたい。

川端康成氏は先月號の本誌に於て「世の常習道徳への叛逆を外にしては、純文學などあらう道理はないのである」といひ、「今日の叛逆精神の衰亡」を嘆いてゐるのだが、それならば何よりも先づ吾々は偶然論の勉強から始めなければなるまい。(「偶然論とモラル」本書一一七頁參照)

だがもつと適切にいへば、偶然論は單なる時代への叛逆精神であるから面白いのでは決してない。もつと高度の論理に於て、今日の最も深遠なる眞實を披瀝してゐるからである。

「眞實であればあるほど叛逆である」が故に今日の偶然論は寧ろ不可避の問題として登場するのである。そこでは如何なる默殺も、默殺として役立たぬのである。既に眞實といふものは如何なる愚鈍さに於ても、隱密の間に、人々の心を貫通するからである。

さて誰れかのいひ草ではないが、實際、現代人は、カントのごとく――必然といふ言葉をきくや否や脱帽したのである。滑稽にも、これほど確かなことはないと信じ込んでゐたのである。然

も一體かくも現代人を、又現代文學を、恰もコーカサスの岩壁につながれたプロメシユウスのやうに、金輪際身うごきもならぬやうに人々を縛りあげてゐるところの必然とは何ものか。

私は嘗てこの必然といふものを今日の生活からと、科學からと、そして最後に文學から批評し、否定した。吾々は昨日のことも、明日のことも現象として以外には知らぬことをいつた。中田忠夫氏がいふやうに「歴史の重大なエレメントは悉く奇蹟によつてのみ行はれた」ことを説明した。又「必然思想といふものの中に決して自由や創造の有り得ない」ことを言つた。(田邊元氏、『翰林』八月號參照)

然るに森山氏は私の所説を誤謬であるとし、更にハイゼベンルクの「不確定性原理」といふものを獨斷であるとし、本誌先月號に於ても、又それを科學上の疎漏の一例として繰り返し論じてゐるのである。だがそれは果して森山氏の說の如くであらうか。

このことに就いては私自身、既に答へたが、幸ひ『新潮』九月號を見ると、更らに石原純氏が明瞭に森山氏達の科學に對する誤謬を詳細に指適し、裁斷し、更らに進んで今日の偶然論に熱意ある興味を示されてゐるのである。

自ら圖放もない獨斷を行ひながら、人が間違つてゐるやうに强ひるなど、愛嬌といふか大膽といふか、森山氏の無責任さには寧ろ喫驚するのである。

それにつけ、大島豊氏が最近の讀賣新聞紙に於て、その批判論的哲學の態度に於て、森山氏の

誤謬を厳格に批判せられた文章は、充分に意を盡したものとして注目すべきものであつた。
然るに森山氏は「ハイゼンベルクの問題に就いては是非他の處で答へる事を約束する」と倘ほ壯大の言を續けてゐるのである。私は今日の科學上の精確なる實驗に對して、又吾々の批判に對して、森山氏が果して如何なる解答をなし得るか、切に森山氏の約束を鶴首したいのである。
ところで森山氏は更らにいふ。「自分は偶然論者でも必然論者でもない」と。だが、必然論者でないマルキストがあるだらうか。マルクスからブハーリンに至るものは全部が全部、必然論以外のものではない。わけても日本を風靡した必然論に至つては誠に驚くべきものがあつたのである。ただわづかにミーチンに至つて偶然の影を認めるが、これ明らかに必然論の最初の崩壞でしかない。それにつけても、私は森山氏が、マルキストと自稱しながら、どうして自ら必然論者であることを揚々として言あげしないのであるか、私は寧ろそのことを歯痒く思ふ位である。私は森山氏の若々しい勇氣には何時も愛情を持ちながら、ただその歯痒ゆさを不滿に思ふのである。
だが、それよりも私は今日の浪曼心情といふものを吾々の立場に於て考へたい。即ち吾々はこの心情に於て長い間の必然的世界觀を破つて、飛びゆく現實として現實を見る。宇宙を變化し創造するものの連續として見る。薔薇の花が薔薇の花を開くのは必然の法則であるよりも、一つの驚きとして吾々の心の限に訴へると考へる。
それは最早技巧論ではなしに、吾々の生活を更新し、金縛りから解放するところの新らしい人

生の見方である。

淀野隆三氏は『文藝通信』九月號で日本浪曼派を說明して次ぎのやうにいつてゐられる。

「文學することと自體に政治を强ひられてゐることの意識から發足した僕らは憚るところなく藝術のための藝術をいひ、社會に氣兼ねした自待唯物主義作家の社會的文學から自らを區別する。また、僕らは生活の中に文學を解消してゐる自然主義作家の薄汚さをとらぬ。一滴の清酒なる作品を生むために生活の巨量を用ふるのである。生活の巨量から藝術作品を蒸溜するのだ。僕らは生活の中に文學を解消してゐる雜誌的商品文學を排斥する。何のためにせよ、社會とヂャーナリズムに氣兼ねした文學を僕らは敵と見なす。そして僕らの文學が世に容れられるか否か、などとは決して問はぬ。後代にまつとも云はぬ。ただ今日の切ない押しつめられた心情の鬱積のために歌ふのである。」

私はこの頃、これほどすつきりした言葉を見たことがなかつた。敢て社會を見よとはいはない。實生活を破壞せよとはいはない。然も「押しつけられた心情の鬱積のために歌ふ」とは、淀野氏にして初めていひ得る言葉にちがひない。これが回避であるか、叛逆であるか。それは決して單純な進步的といふやうな言葉だけでは解決しがたいところのものである。淀野氏は尙ほ續けて藝術といふものを「社會とも生活とも對立させては考へない」といつてゐられる。淀野氏のいつてゐる藝術とは深奧の世界に於て社會と生活とをくぐつて來た清冽さを指してゐるのであつて、言

ふやうに一滴の作品のために生活の巨量を用ひようとしてゐるのである。

私は嘗て、幾度となく偶然論といふものが、浪曼主義の「驚き」や「憧憬」といふものと甚を一つにするものであることをいつて來たが、今こそ人々は偶然論といふものによつて浪曼主義者の心情と、その中にある論理とを理解しなければならない。いくら「浪曼、浪曼」と繰り返していつてみたところで、それだけでは浪曼主義は生れて來ないのである。彼等は「押しつけられた眞實」を叫ばうとしてゐる。彼等の眞實とは匿されたものの發見であり、それは常識的な時代への眞實の叛逆であり、開放である。このことを最も適當に説明し、それに論理を與へるものが偶然論であることはいふまでもない。

さて十九世紀の文人の片言隻句をあげて鬼の首でも取つたやうに偶然論を攻撃してゐる一二の文章を見たが、大體十八世紀中葉から十九世紀へかけての時代は科學の勃興時代であつて、人々はその時代の畏怖すべき科學思想、卽ち必然的機械觀によつて支配せられてゐたのである。又カントの偶然思想の中に生きてゐたのである。

それ故ボードレールの如きも「美とは驚かすことである」といひながら、片方では「機械の如き必然」を讃美してゐる。然しこれは時代の潮流の中に彼等と雖も生きてゐたことを説明するだけであつて、それらの片言をもつて彼等の思想を理解したと考へたら、大變な間違ひである。

エッケルマンの『ゲーテとの對話』を讀んでも、又ゲーテの多少の評論を見ても「必然」とい

ふ言葉は澤山使用してゐるのである。然しゲーテに於ける根本思想が必然にあつたか、偶然にあつたか、それは成瀬無極氏の言葉を待つまでもなく「畏敬の心情（エールフールヒト）」にあつたことは確かで、それは『ヱルテルの悲しみ』を見ても、又『フアウスト』を見てもそれを理解するのである。彼に於ける最も重大な思想は精靈（デモーニッシュ）であり、不可知の深遠さであり、熱情への讃美であつた。彼は永遠を見て、倭小の法則や必然には安住出來なかつたのである。寧ろ必然思想の流行の中にあつて、彼の行動と作品とが、常にそれに反逆してゐるところに、今日の心情があるのである。彼の思想の中にある浪漫を吾々は身に近く感じるのである。

さて、偶然論の優位とその文學的表現については最早いふ必要はない。

眞率の驚きと、眞率の謙虚と、心みちた人間的自覺と、これらをのみ願ふ。私は敢て一般人の賛成を得ようとは思つてゐない。ただ眞摯の理解者の一人に私は文學者としての最も痛切の交通を感じれば足りるのである。今日の文壇の如きから默殺されることなら寧ろこの上ない誇りではないか。

爐邊書談

近頃、胃腸を害してゐるのと、氣候が寒いので外出できず、たとへ外出できても餘り面白いと思ふことはなく、食べ物については絕對の制限があるし、さうかと云つて趣味を滿たしてくれるほどの見るものもないし、爐邊にうづくまつて亂讀するのが、今の私にとつては唯一の樂しみになつてゐる。さて A. G. Jardiner といふ元ロンドンの The Daily News 紙の主筆だつた男の隨筆、「我々は本を購ふや」といふ一章によると、人口十萬以上の大工業市に於ても本屋は僅か一軒しかなく、しかもその大部分は敎科書の販賣によつて辛くも經營を續けてゐるといふやうな例は一切に止まらない、と歎いてゐる。してみれば印刷文化の普及してゐるやうにいはれてゐる英吉利なども、その讀書趣味に於て、我國とどつちが進んでゐるか、遲れてゐるか、一概にはきめられないといふことになる。

○

それにつけても限定版、豪華版などの出版であるが、ああいふものは、愛書家、藏書家の聲で

あらうか、それとも潔癖な出版業者の内からの聲であらうか。我國最近のこの種の出版は多く飜譯ものに限られてゐるらしく、ジードの『パリウド』やモーランの『三人女』などが記憶に殘つてゐる。その他では僅かに『成簣堂閑記』『百鬼園隨筆』『茱萸の酒』などの隨筆類を見るのみで、その他二三の詩集に見たが、吾々の小説集には餘り見かけない。恐らく小説は他の範疇の文學より比較的複雑であり、傑作に至るほどさういふ傾向にあるから、凝つては思案に能はずで、結局簡素な裝幀が無難だといふことになり、さういふ凝り甲斐のない仕事を、凝り性の出版業者は避けたいのかも知れない。從つて同じ小説でも小味な特異性のあるものほど、裝幀にも容易に傑作が生れるらしく、最近寫眞で見たのだが、一九二八年アァフロリコ出版所發行の T. L. Beddoes 作品集などその一例ではないかと思つた。

○

ベドォズといへば、彼の學生時代、最も愛讀したものは Marlow の "The Tragical History of Doctor Faustus" だつたさうであるが、私もこれを爐邊冊子の一としてゐる。さて『アラビヤン・ナイト』の第四百三十六夜に初まる「アブール・フースンと奴隷娘タワッヅードの話」は當時の學藝の一斑が想像せられて面白いが、『フォウスタス博士悲史』にも同じやうな興味が湧くのみならず、文藝復興期の「世界」といふものを小じんまりと手際よく表現してゐるのが遠近の强い古版畫を見るやうな喜びを與へてくれる。スローマ法皇に思ひ切りからかふところなどは、

後に無神論者の嫌疑を受けた作者を隱約の裡に語つてゐはしないかと思はれるほど大膽であるし、その大膽なフォウスタス博士が「肉體よ、空氣に化せ！　おお靈魂よ、水滴となつて大洋に落ちよ！」とか何とか絶叫しながら惡魔たちに連れ去られる最期もなかなか効果的と思つた。

○

しかし、かういふ戯曲などを好んで讀むのも、畢竟まだ私にも若々しい情熱が潜んでゐるからで「ソムは老境に入つて讀むべく、ハズリットは青年にのみ味ひ得る」といつた誰やらの言葉を思ひだす。讀書と年齢とには確かに一つの關係があり、例へばギリシヤ、ラテンの古書を貪り讀んだ Pater も、晩年には聖書と神曲とプラトンぐらゐしか繙かなかつたといふから、西洋人の老後の讀書範圍といふものもわかる氣がする。さて東洋人――日本人の場合には、どうも萬葉、源語、巣林子といふわけにもゆかず、方丈記、徒然草、雲萍雜志でもあるまい。結局、あれこれと若い時からの續きに從つて讀むのであらうが、それは日本人の多欲なためではなく、反つて執着心の弱いためであらう。

○

「佛の人ををしへ給ふおもむきはことにふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するも科とす。閑寂に着するも障なるべし。」

かういふ日本人に、偉大なる藏書家の發出しないのは不思議ではない。書癡、書狼、書豚など

といふ言葉は、シルヴェストル・ボナアルやヘンリ・ライクラフトの創造せられる西洋人にこそ適はしいのである。尤もフランスやギッシングは別として、一般に小説家よりエッセイストに藏書家、愛書家が多いらしいのは、小説家は概して清閑に乏しく、又自我が强くて趣味好尙の偏してゐるためであらうが、一つは目前の世態人情の實相を捉へることに對してあそびの精神が少いからでもあらう。それにしても偶然『阿片吸飮者の告白』を讀返してみると、デ・クィンシイも亦これを書いた頃、五千卷ほど藏してゐたことが分り、彼などは別に愛書家として有名でもないのにと、向ふの作家の精進ぶりが想はれる。だが、Augustine の "Eirrell Book Buying" を讀んだりすると、二千卷の藏書などは二著の外套をもつてゐるのと同じことで誇るに足りない、まあ一萬卷を所有するまでは藏書のことなどは口にしないほどよい、と書いてあるから輕率に感心はできない。

○

私は晝寢する癖があつて、それをスペイン風に「シエスタ」と名づけてゐる。だが、冒頭に記したやうに、胃腸を害してゐて食後の二三時間は常に不快であるが、この眠りから醒めた時だけはさすがに爽やかで、爲めに私は益々「シエスタ」を勵行するやうになつてゐる。

さて目覺めると白宵の迫つてゐることが多く、さういふ時には好んで夢幻的な短篇小説を讀む。等しく夢幻的といつても、サン・ピエールの『印度人の小舍』などはシェニエが「あらゆるロマ

ンスの中の一番短い一番道徳的なもの」と讃めただけあつて、含まれたモラルは單純であるが、それだけに直情的で、想像で書いたらしい印度、チャッガァナスの神殿やパリア（賤民）の生活が巧みに浮彫されてゐて誠に樂しい。また時にマルセル・シュウォッブの『モッフレエヌの魔宴』をひろげる。これは一人の騎士が、ある夜醉步蹣跚として墓地を通りかかり、辻君に化けた妖婆に誘惑されてサバトに列してしまつたことが分つて投獄される話に過ぎないが、サバトの光景を描くこと微細を極め、銅盤に入れた黑血や死人の指と呼ばれる實答利子（ジキタリス）の花や、白鑞でつくつた蟇や靑い猿や丹朱の顋を開いて月に吠える黑犬などの間に救ひ難い世紀末の匂を滲みわたらせてゐる。ポウとフランスの混血兒である。私はやや薄氣味わるくなると決つて次の小册子を取上る。

それにはゴオティエの『ヘルモンティス女王』が載つてゐる。骨董店から文鎭の代りに木乃伊のヘルモンティス女王の片足を貰つて來て、机の上に置いておくと、夜中に跛の女王がやつて來て足を返してくれといふ。望みを聞いてやると代りに彼女の首から小さな綠色の煉物の人形を外して机に置き、主人公を彼女の父の埃及王の塋窟へ連れて行く。但しその老王の握手が餘りに力強かつたので眼が覺めてしまふ。机の上には煉物の人形が載つてゐるといふ他愛のない話である。私は夢幻をさ迷つて漸く窓外を見る。外は旣にすつかり暗くなつて、風が出たのであらう、激しい松籟が聞えて來る。私は小册子を置いて、爐邊を離れ、又たまつてゐる原稿のことを思ふのである。

秋のアルルカン

ある實驗によると、吾々の神經の所在について一つの暗示が與へられる。合歡草に刺戟を與へると、その葉がしなへる。これは普通である。ところが合歡草の一部分を切斷して、切斷した部分と部分とをゴム管か何かでつないで、そのゴム管の中へ水を滿たしておく。それから一端に刺戟を與へる。

すると、このゴム管を通じて同じやうに他の一端へその刺戟が傳達する。

さうなると神經といふものが、必ずしも生理的な不思議な精神作用ではなく、一つの物理的な存在に變化して來ると思はれる。

これはつい二三日前、僕の知己である浦本政三郎博士からその實驗として聞いた話である。吾々は愛する者と向きあつてゐて、時々話さないで話してゐる。また遠く離れてゐて、互の話をしてゐる時がある。かういふことにもなほ物理的な計算が可能かも知れない。

かくの如き時代において、吾々は最早唯物論とか唯心論とかいふ必要はちつともない。恐らく

現代ではさういふ單純な分類は通用しないに違ひない。

そこで吾々の問題として登場するものは、科學的考察が如何に吾々の從來の思考力を改變させるかといふことである。吾々が嘗て形式主義の頃、最後に到着した問題は「光と時間」といふことであつた。これは最も抽象的に見えて最も民族的な問題に連關して來た。

私は生活と文學が常に氣候と風土とに制限せられ、その中の肉體によつて決定せられることをいよいよ痛切に感じてゐる。日本の文學は何よりも日本の「光と時間」である氣候と風土との性格によつて決定せられる。かくて科學といふものを單なる抽象概念と考へる時代は最早過ぎ去つたのではあるまいか。

○

先頃、「世界大思想全集」の一冊、ヴォルテールの『哲學辭典』を讀み、相當に面白かつた。これは、ヴォルテールが七百人の知人に送つた約二萬通の書翰を主とし、全著述から拔萃されて組織された二種の同名の書を底本とし、再び他の著述を參照して、增減、訂正を行ひつつ、安谷寛一氏の譯出、編輯したものである。百二十六篇の短いエッセイとヴォルテール語鈔とから成つてゐる。世上萬般の問題を論じてゐるが、誠に理解力が豐富で分析力が銳敏で、實に公平な懷疑精神に貫かれてゐる。

しかし、こんなことは普く知れ渡つてゐることだから多言するのを須ひないが、私は以前にア

ナトオル・フランスの『エピキュラスの園』を讀んだ時に、丁度この『哲學辭典』讀後のやうな感を受けたのを覺えてゐる。尤もフランスは趣味も文章もずつとエステティッシュであるが、あの懷疑精神の種本はこの『哲學辭典』かも知れない。しかしこの二人の懷疑精神には、非常に落着いた、時には遊び半分なところがある。悠々たる微笑を浮べてゐる。ところが現代人の持つ、或ひは持たざるを得ない懷疑精神といふものは、もつと業因とでも謂ふべき痛烈な苦悶の所産であるから、半獸神のやうな微笑なんか浮べたくつても浮べられなくなつてゐるやうに思はれる。

○

話はあらぬ方へ飛ぶが、コクトオに「『山師トオマ』に就いて」といふ文章があり、ヴアレリに「『海邊の墓地』に就いて」といふ文章がある。これらは何れも自作の註解であつて、ショウなどにも多いやうに、西洋人はよくかういふことをやるものらしい。尤も日本にも全然ないことはない。例へば、森鷗外の『玉篋兩浦嶼（たまくしげふたりうらしま）』の「自註」や『高瀬舟』の「緣起」などを擧げることが出來る。しかし、とにかくわれわれは餘りかういふことはやらない。自作を註釋するのは、大概の場合讀者に親切なためであつて、何も讀者を見くびつたためではないのだから、われわれもやつて惡いことはないのだが。——實際、何度もいはれて來たことながら、批評家乃至は讀者の評價と、作者自身の自作に對する評價とは一致する場合の方が少ないのである。又、評價、價値判斷といふこととは別に、作者には自作に對する好惡といふものがある。これが又不思議なも

ので、批評家乃至は讀者の批判とは食ひ違ふのは勿論としても、作者自身、傑作だと信じながら嫌ひな自作もあるし、愚作とは思ひながら愛着の深い自作もある。だから批評家乃至は讀者に正當に判斷して貰ひたいといふよりも、作者のさういふ複雜な氣持ちを聞いて貰ひたいといふために、時として自註めいたものを書きたいなどと思つても、自分の作品が未だ到底そんなところまで行つてゐないことを、誰よりもよく承知してゐるので出來ないのである。

何故、突然こんなことを記したかといふと、たまたま身邊にあつた昭和三年の十二月號の『新潮』をパラパラめくつて見て「私が本年發表した創作に就いて」といふ問に答へた諸家のうち、稻垣足穗の一文に「ついでに世間で僕の代表作のやうにいはれてゐる「黄漠異談」「星を賣る店」も今後僕にはすてられる。あの二つは僕の恥辱になるやうな愚劣なものだからだ」とあるのを讀んだからである。あれらの作は決して惡い作ではないが作者はさう宣言してゐる。かかることはお互ひに經驗することで作者の心理といふものはなかなか一筋ではあり得ない。恐らく幸福な作家とは、おほよそ自作に對する評價や好惡が、批評家乃至は讀者と常に一致する作家のことであるにちがひない。

○

何とか高名な國體論者が、日本の國體を必然論の立場から高揚してゐるのを見た。だが自分などはもつと本能的に「光と時間」の問題として、民族的にこれは論じるべきものと思つてゐる。

若し民族としての風土的な本能から出發するのでなければ、そこに何等の國家形態としての尊嚴と歸依といふものが現はれる筈がない。國土と人間とを結びつけるものは風土的な本能であつて理智や法則ではない。理知と法則には常に限界があるが本能こそは常に無限であるからである。然も本能はその批判として知性を持つのである。その場合に必然論が役立つだけである。

○

スチヴンスンの『驢馬と旅して』(Travels with a Donkey in the Cévennes) といふ旅行記は知つてゐる人も少なくあるまい。私はこれを藤田千代吉といふ人の譯書で最近讀み、大變興味を覺えた。終りに三十數頁の註まで附いてゐて、少し生硬ではあるけれども念の入つた飜譯であつた。これはスチヴンスンが一頭の驢馬に荷を負はせて、一八七八年の九月二十二日から十月三日に至る十一日の間に、フランスのセヴエンヌ地方を踏破した記錄である。旅行文學といふものが論じられてゐる折柄面白いものと思つた。機智に富んだ筆で、古戰場や修道院のある寒村の點在してゐる寂しい山越えを細密に描いてゐる所など、とりわけ優れてゐた。觀方が少し荒いやうに思はれるが、そのかはり雄健な風景はよく描かれてゐた。細かい味は餘りないが、これは西洋人の特徴かもしれない。もつともさういふ考へ方そのものが粗雜であるとも思はれるが。ともあれ、次に擧げる一節は特に優れてゐるとも思はれないが、一英人の眼に映つた南佛の山奥の秋の一風景として書き寫して見る。

ボン・ドウ・モヴエールからフロラまではタルン河の流域を經て新しい道路がついてゐる。斷崖の絕頂と谷間の底を流れるタルン河との中間どころに、棚のやうに突き出て懸つてゐる一條の滑かな砂地の崖路である。そして、私はこの道路づたひに行く道すがら、入江狀の山蔭から午後の太陽の照つてゐる海角へと出たり入つたりした。丁度キリクランキの山路のやうであつた。もとは、雨水が山腹に穿つた九十九折の深い溝であつて、遙か下の方では、タルン河が驚くべき程騷がしき噪音を立てて流れ、上の方では、峨々たる山道が日光を浴びて突つ立つてゐる。山々の頂上のあたりを、丁度廢墟の上を這ふ蔦かづらのやうに、トネリコの木が薄い綠を取つて走つてゐた。然し麓に近い山腹や、それぞれの峽谷のずつと上方では、栗樹が、天幕を張つたやうな簇葉を戴いて、天に向つてどれもこれも自若として立つてゐた。ほんの寢床位の大いさの、夫々のテレスの上に植つてゐるものもあつた。已が根に信賴して、谷間の急阪な傾斜の上に生育し、繁茂し、眞直ぐな大木となる力を得たものもあつた。また中には、河邊に餘地のあるところでは、一列に並んで、恰もレバノンの香柏の如く威容堂々と立つてゐるものもあつた。然し、いかほど濃く密生してゐたところでも、之を一個の森と考へることは不可能で、ただ頑丈な一本一本の集合體と見るべきであつた。そして各一本一本の天蓋は、周圍の天蓋からはつきり分離してゐて、大きく、恰も小山の如く獨立してゐた。これらの樹は、何れも微かな芳香を發し、それが午後の空氣にしみ渡つてゐた。秋は既に靑葉の所々を金色と朽葉色

とに染めなしてゐた。そして太陽が、一面に擴つてゐる簇葉の間をさし込んで、葉を總體に燃え立たせたので、栗の實の一つ一つが、樹蔭ではなく日光を浴びて、くつきりと際立つて見えた。

○

何やら雜然と感想を並べたが、これもヴォルテールが「法律宗敎はモスコーでは毛皮を着、デルウイでは紗の毛織物を着なければならない」といつたやうに、秋といふ季候に調味されて出來たアルルカンの一種かも知れない　支那にもアルルカンによく似た骨董羹といふ言葉があつて、この隨筆なんか至極陳套なことばかり並べたから、骨董羹の方がふさはしいかとも思ふが、まあせめて題だけでも片假名にして置かないと、我ながら老いこんだやうな氣がして秋風落寞の感も切實過ぎると思つたやうな次第である。最後にもう一つヴォルテールの言葉を擧げて置かう。平凡だが皮肉ではない。

「傑作を殘さうと思ふならば、文人は次の三つのことを愼むべきだ。——極めてつつましやかな方法でなくては、自分の名を擧げようとしないこと。贈呈の手紙を書かないこと。序文をつけないこと。——この三つだ。」

萬覺帳

『春琴抄』私見

この間ある座談會に出た時、誰れかが『春琴抄』のことを話しだし、それで私もつひどうしたはずみか、ずつと前讀んだもののことまで話したりしたが、私は大體『春琴抄』といふもののテーマを大變精神的に解釋してゐる。

恐らく多くの『春琴抄』の批評には、いろいろな面が論じられてゐて、私などが今更ら何も附け加へるところはないかと思ふが、私はそれらの批評は何一つよんでゐないし、昔よんだ物語のことを記しながら、自分の感想を少しばかり書いてみたい。

十年ほど前で、小說をやりだしたばかりの時であるが、私はその頃菊池氏の譯で、セルマ・ラゲルレーフの『ルーベン伯父』といふものを讀んだ。この小說は日本風の勘定の仕方でなら、恐らく三十枚程度の作品であつたが、素晴らしく立派なもので、何か質的なよさを感じさせて、以來私は忘れずにゐた。忘れずにゐたといふよりも、私は常にかういふテーマで一度小說をかいて

見たいと思ひ、その願ひは私の念頭から離れなかつた。ところが谷崎氏がそれを書いてしまつた。これは偶然のことに違ひないが、やはり私は谷崎といふ人は巨人であると思つた。

ところで『ルーベン伯父』の梗概を略述する必要があるが、話は作者の國であるノールウェイで、その小さい町に一人の子供があつてルーベンといふ名前であつた。彼は賢い子供で、よく町の通りで獨樂を廻はして遊んでゐたが、或る日疲れて石段に腰をかけたといふのである。然し彼は他家の石段にかけるよりも自分の家の石段の方が道德的だと思つて、そこで休んでゐた。然し彼の家は貧乏で日蔭にあつたので、それがもとで彼は風邪を引き間もなく死んだ。小說は死んだ子供に對する忘れられない母親の愛情から始まるのであるが、彼女は水を汲みに行かうとしては誰れかが自分の裾を引つぱるのを感じ、それがルーベンかと思つたり、又外からうちに歸ると、そこにルーベンがゐさうに思つたりして、何時までも忘れなかつた。

實際母親には子供が澤山あつて、彼女の心は、それらの子供のことで何時も一杯になつてゐるのであるが、どんな時でも彼女の心の隅にはルーベンのゐる場所だけはちやんとあつて、彼女は、幸福な時につけ不幸な時につけ「ルーベンがゐたらどんなにいいか」と考へた。すると澤山の子供達は次第にあんなに母親の心を囚へてゐたルーベンは必ず偉い子供であつたに違ひないと思ひ、どうにかしてルーベンのやうに自分達も賢い小供になり、母親を慰めようと思つた。子供達はそれであらゆる勇氣と善行にみちた行ひをし始める。然しどんな場合にも母親は

「お前のしたことはいい。だがルーベンとは違ふ」と答へてその喜びの中には何時も一つの悲しみが殘つてゐた。

こんな風に母親の益〻强くなつてゆく愛情が、次第に小さい死んだルーベンを神化し、子供達はルーベンを目標にして生長する。そして皆立派な人間になる。

そこでこの兄弟達が更らに小さい子供を又生むやうになるのであるが、そこで、この兄弟達が自分等の小さい子供達にいふのには「お前達にはルーベンといふ賢い伯父さんがあつたんだよ」といつて子供達を又戒めだした。

この時代にはルーベンは完全に神になつてかやうにして子々孫々まで傳へられる形になつてゐるといふ筋であるが、母親の愛情の强さがよく表現せられてゐて、これは女流作家であるが、かういふ世界は女でなければどうにもかけないと私は思つてゐた。それで私の考へるのは、この母親の愛情を、男が女を愛する愛情にしてこんな小說をかけぬものかと考へることが多かつたが、それが私には判斷がつかなかつた。ところが谷崎氏がこれを實に見事に書いてしまつた。

愛情の强さといふものが相手の女を神化してゆくさまが實によく描かれてゐる。とりわけ失明後の心理の高揚は心にくい許りである。世間にはあの作品がリアルでないと批評する人があるが、それは佐助の春琴に對する氣持をさしていつてゐるのかと思ふが、あれは劇中劇であつて、そんなことはどうだつていいのである。作者の周到さは、そんなことではなく、作者は全體を佐助の

心理を通して描くといふことを幾度となく作中でも斷つてゐるが、そこにリアルの焦點を置いてゐるのである。佐助を通して描く時、それは如何なることもあり得るのである。リアリズムなどといつて小天地だけしかわからぬ連中が、佐助の心理がどうしたの、外國のことを書くのがどうしたの、とよくいつてゐるのを見かけるが、谷崎氏がそれ位の用意をしてゐないと考へることからして彼等の安易さを暴露してゐるのである。私だつてロシアのことを書けば、普通の左翼作家なんかよりはずつとロシヤはしらべてゐるのである。私は私の書いたロシアもので不服があれば、いつでも明白に答へ、その連中の蒙位ゐは開いてやるのである。

さて話がよそにそれたが、『春琴抄』といふものはただ感覺的にみたり、異常な性狀としてみたり、從來のつづきとして單なる谷崎好みとしてみるべき作品ではない。私の見方は私の昔からの思想が裏うちになりすぎて偏したところがあるかも知れないが、私は谷崎氏の新らしく强烈な愛情の高揚が現はれ、それが精神的効果になつてゐると思ふのである。このことを見落してはこの作品は三分の一になつてしまふ。書きたいことはいくらでもあるが、長くなつたのでこれは又何かの機會に書きたい。

さてこれは附け足しであるが『ルーベン伯父』といふ題は『ルーベン伯父さん』と譯した方が可愛ゆくていいのではないかとも考へてゐる。私はその後ラゲルレーフの全集を取りよせて少しばかり讀んでみた。然し『ルーベン伯父』ほどすぐれたのはなく、他は大抵、女流作家特有の抽

惰性に陥いりそれほど面白くなかつた。
ところで『ルーベン伯父』と『春琴抄』の關係に就き一言斷つておきたいのは、私の文章は宛も『春琴抄』が『ルーベン伯父』から來てゐるといふ觀念を起させないとも限らない。然しそれは構造からいつても如何なる一點をとつても、類似の點は影だになく、私の文意は、私の長い間の『ルーベン伯父』讀後感が、谷崎氏によつて不思議に果されたといふにとどまる。その點では私はこの作家のこの一作に、限りない尊敬と羨望とを正直に感ずるのである。敢て日本文學に於ける最高峯といふに躊躇しないのである。

年齢

僕は自分の年齢といふものを、ついぞこの間まで知らないでゐた。だから齢を問はれるといつも女房に尋ねた。女房がゐないと出鱈目をいふより仕方がなかつた。僕は郊外に住居してゐるので、東京へ出る電車のパスを時々買ふのであるが、その度に年齢が一つか二つ老年になつたり、若くなつたり、その時の氣持ちでいろいろに變つた。それにつけても皆がよく覺えてゐて、正確にいつてゐるのを見ると、いつも不思議な氣がした。年齢などといふものは僕にとつて眼中になかつた。
それがこの頃になつて、漸く自分の年齢といふものを初めて知るやうになつた。三十而立とい

ふが、この頃になつてやつと親しらずの生えた僕は、今頃になつて、漸く世間並の仲間になれたのかも知れない。

僕は大體、時間といふものを好かなかつた。アインスタインは、時間が總ての物理的存在を決定するといつてゐるが、僕は時計を持つのが嫌で、つひぞ持たなかつたが、それがこの頃になつて、まるで反對になつてしまつた。時計を一寸でも忘れて外出すると大變不便を感ずるやうになつた。

一つにはこの春、少しばかりひどい病氣をして、死といふものを目のあたりに見たからかも知れない。それ以來、僕は自分の生命を計算するやうになつた。それともこれは、昔々、落ちあふ約束をしてゐた愛人などを、餘り待たせたりした過去の反省から來てゐるのかも知れない。それにしても實際中年といふものにはやつと、年齡を知りだした少年のやうに又不思議な若々しさがある。

何れにしても、人間といふものは、ふとしていろいろなことを初めるものだと思ふ。

さう思つて、時計を腕につけてゐる人を見てゐると、不思議に男よりも女の方が澤山つけてゐる。それも若い人達に於ては。

これはどういふ理由から來てゐるのか。それは女性には、とりわけ結婚適齡期といふものがあつて、早くから年齡に敏感になるせいかと思はれたり、それとも彼女達が、出來ろところには何

からでも裝飾したいと思ふせゐからか、それとも何事にもフロイド的に束縛せられることが好きで、つけるのかと思はれる。その何れであるか、一向に判斷はつかないが何れにしても彼女達が好んで時計を持つてゐるといふことは事實である。

自分の趣味からいへば、娘には時計を持たせ、青年には何もつけてやりたくない。

ところで老人を見ると、男は皆、時計を持つてゐるのに、老婆達は概して時計といふものを輕蔑してゐる。老婆達は自分の子供を所有して、時間を抹殺してゐるのか。それとも人生の用事を果して死の用意を始めだしてゐるのか。

それがもつと齡をとつてしまふと、今度は人は誰れも、男も女も時計を恐れてしまふ。そして喜壽とか米壽とかいつて、誠にのろい年齡の時計をたよりにしだす。

さて僕は年齡といふものには昔から不思議な感覺を持つてゐて、年長者に對しては、それがどんな種類の人間でも、手向ひが出來ない癖がある。齡が上だといふことに一種の恐怖を感じる。その人間が何か人生の甲羅を積んでゐるといふことに學問や技術を越えた尊敬をする。何といふ理由もないのに年長者には頭があがらない。

これは子供の時、染み込んだ習慣に違ひないが、顏の皺の數によつて、それだけでもう、こちらがへいりくだつてしまふ。

多少は誰れでも持つてゐる習慣に違ひないが、僕の場合はそれがひどく、時に悲しく思ふこと

がある。してみると僕は經驗主義者か、それとも時間絕對主義者のやうに思はれてくる。

人はいつでも年齢を忘れて生活したいに違ひない。その癖、年長といふことに對して、尊敬を拂ふのはどういふ心理であらうか。恐らくこの矛盾した作用を起さしめる年齢といふものの中にこそ、人の成長の希望と悲哀の感情とが同時に匿されてゐるのに違ひない。

僕は三十六になつて漸く自分の年齢といふものを知るやうになつた。これは悲しい事か喜ばしいことか自分にもわからない。

時計

時計はいつも鼓動のやうに時間を刻んでゐる。あの音をきいてゐると私は身ぶるひし、人生の忽然をいつも感じる。

過ぎゆく年齢を思ひ、新らしい出發を思ひ世界の始めと終りを想像し、鉛筆のシンを削りたくなる。

だが、昔、私は時計といふものを輕蔑してゐた。だからそのころは時計に恐怖も感じなければ、興味も感じなかつた。あんなものを腕に卷いたりしてゐる人間をみると、彼等の几帳面さが通俗に思はれて、あんなコセコセした人間に何が出來るかと考へてゐた。人間はもつと春風駘蕩として小時間など眼中から驅逐しなければ偉大なものは出來ないと考へてゐた。

ところが私は一昨年、病中生死の境を通過して以來といふもの、自分の生命といふものに須臾を感じだし、時々時計の面を見ては自分の流れゆく生命を見つめる癖がついた。恐らくぞんざいに考へてゐた生命といふものを刻々に意識したくなつたからに違ひない。

すると今まで最もつまらなかつたものが急に大切になり私は嘗て持つたことのない時計を腕に卷くやうになつた。いつ死んでも生きてもいいと思つてゐたものが、今でもさういふ覺悟に變りはないが、生きてゐる間をハキリと意識したいと思ひだしたらしい。

卷いてみると、それが珍らしく新鮮で、生きて動くので、私はふとして時計を忘れて外出したりすると大變淋しがるやうになつた。それに時計といふものは絕えず音をたてて、耳にあてると、一つの生き物が自分に同作してゐるといふ氣持を起さしめる。

だから今では私は家の中でも五つの時計を動かして、何時も彼等を監督してゐる。ちよつとでも一つが止つてゐると、それが氣になり、私は常に注意してゐる。時計が止ると、家の中の統制が破壞せられ、停止しさうな危險を感じる。

ところが家の中の時計といふものは、私がちよつと注意をゆるめると、どれかが止つたりして、時間が混亂してしまふ。ボウの小說に時計を大切にする村の話があるが、丁度あの小說の最後のやうに混亂してしまふ。

それで私は心配なので、毎朝のやうに時計の振子だけは自分で卷くやうにした。そして人をみ

な自分の時計に信頼さすやうにしむけた。だがそのうちに、私にはそれが心理的になかなか重荷になつて來た。ふと自分でも、ぼんやり忘れることがあるからである。

しかし去年の春、電氣時計をつけてからといふもの、私はその心理の苦痛から救はれ、何時も自分の生命の流れのやうに廻轉してゐる金の針を眺めて安心するやうになつた。

このごろではどうやらこの時計が生活の中心になり、私はそこに第四次元の世界を發見して、新らしい生涯を始めだした。

私は昔とは變つて時計の鼓舞を刻々として感じ、自分の餘命と事業とをそこから思ふやうになつた。時間の間からいろいろな生活の組み合せが不思議に現れ、私は時間が來ると、どんなことも中止し、それで非常に爽かになる。

かといつて、田舍などへ行つてどこの時計も皆が皆、ちがつてゐるのを見ると、腹が立つ前に、閑かになることもある。全部が全部、勝手な時間を示してゐるからである。そこで我々は一時間くらゐ、若くなつたり、老人になつたりする。そして自分の餘命といふことに一種ののんきさを感じる。

私は時計の面を見ては、時にそこから人生觀までを割りださうとする。

時計ほどたのしく、また時に生命それ自身のやうな錯覺でわれわれを驚かすものはない。

この頃萩原朔太郎氏の『氷島』といふ詩集を讀み、吾々が愛誦した時代の詩がここまで到達してゐるのを知つて驚いた。

新らしい詩といふものは、若い人達によつて理智的なスタイルにより、多くイマジズムの傾向に於て行はれてゐるらしい。これは吾々を新鮮にしたり、時に吾々をして輕蔑の感情を起さしめたりする。卽ちこれらの詩派は多く進歩主義といふ奴に立つてゐるやうである。然しこの『氷島』一卷にみられるものは詩の深化といふことを何よりも考へしめて、又別の世界を吾々に提出する。

例へば「乃木坂倶樂部」の中にある思想は、人生の荒涼を壁に寄せたベッドの中で何時までも眠つてゐる人間にことよせ、昏々とした眠りの中に吾々の失意の深さを象徴してゐる。

かういふ身を嚙む寂寞を唄つた詩は、恐らく今日までの詩壇では無かつたのではないかと思ふ。あつてもそれは比喩であつたり、詠歎でありすぎた。

然るにこの詩に於ては作者の天稟の上に刻まれた深刻さがひしひしと感じられ、作者の生活の沈溺が、吾々の生半可な生活といふものを引きはがす。

かくて讀みゆくに從つて、その荒涼とした世界がいよいよ吾々の心を淋しくし、絕望の哲學を以つて裝飾する、人生とはかくの如きものかと思はしめる。

ただ「遊園地にて」といふやうな詩に至ると、多少その感情が甘ずつぱく、時に感傷に流れて悲しみが冷却しきれないために、吾々は反つてそこから新生活の記錄だけを受取り、それが透明なものとなつて響いて來ないのを感じる。

作者は序文の中で「詩的情熱の最も純一の興奮だけを素朴直截に表出した」と書いてゐる。又つづけて「この詩集の正しい批判はおそらく藝術品であるよりも作者の新生活の記錄であり、切實に書かれた心の日記であるだらう」と云つてゐる。

それはそれでいい。然しかういふ詩を讀むと、作者はつひすると熱情と感傷とを一緒にする時があるのではないかと思はしめ、情熱と稱するものにも明らかに一つの限界があるのではないかといふことを考へさす。

波宜亭

少年の日は物に感ぜしや
われは波宜亭の二階によりて
かなしき情感の思ひにしづめり。
その亭の庭にも草木茂み
風ふき渡りてばうばうたれども
かのふるき待たれびとありやなしや。

いにしへの日には鉛筆もて
欄干にさへ記せし名なり。

誇りにみちた少年時代の心にくき表現である。かう云ふ詩を見ると、この詩人の中にある慧智とナイーヴが羨ましく、今更らにその素質的なものが感じられる。

家　庭

古き家の中に座りて
互に欺しつつ語り合へり
仇敵に非ず
貧鬼に非ず
「見よ！　われは汝の妻
死ぬるとも附離れざるべし。」
眼は意地悪しく復讐に燃え
憎々しげに刺し貫ぬく
古き家の中に座りて
脱るべき術もあらじかし。

極地の人生を象徴して動かざるものがある。多くの詩といふものは年少の時代を華やかに装飾し

て、かくの如き寂寥を訴へない。一讀胸をつかれるものがある。
その他「歸郷」「珈琲店醉月」「品川沖觀艦式」「火」「告別」「動物園にて」「廣瀨川」「無用の書物」「昨日にまさる戀しさの」。
何れも人生の忍苦に耐へ、自ら滅びようとするものを燃やして生きる人間の悲痛がある。どつちかと云ふと、私はかういふ悲痛は身にそぐはない。然し讀んでゆくと自然にその世界の中に引き入れられ、思ひに堪へぬものがある。尙ほ卷末に詩篇小解といふものがあつて、これは近來の名文章であると思つた。
さて若い人々は知らぬが、今日尙ほ吾々をして愛讀せしめる詩集といふものは甚だ少ない。然るに今一冊の好詩集を得たために、私はこの一文を草したのである。

（『時事新聞』昭和九年八月三十日）

指導性といふこと

この間、或る座談會に出たら、文學の指導性といふことが話題に出た。文學といふものが果して社會を指導するものか、どうか、といふことが第一問題である。そして指導するとすれば、どういふ風に指導するか、それは他の部門のものとどういふ風に異るかといふことが論じられなければならない。だがさういふことは一朝にして論じつくせるものではない。だいたい、文學それ自身の問題には社會を指導するといふやうなことは含まれてゐないと私は常に考へてゐる。

社會を社會的に指導するものが社會學であり、宗教的に指導するのが宗教であり、經濟に關して指導するのが經濟學であるといふことはいふまでもない。だからいつてみれば、文學は文學的感情を指導すると説明するのが最も妥當であつてそれ以外に色氣をだすには及ばないのである。

漫然と文學の指導性といふやうなことを論じても意味のないことは勿論である。だからその座談會は宛も愚問愚答錄のやうなものに終つたやうに思はれた。さうなるのがあたりまへである。

だが又別の考へ方をすればそれは過去に於て、又現在に於ても、文學といふものが、いろいろな役目を社會に對して果して來たといふことは事實である。

例へば一時代前、武者小路氏などの頃はトルストイの人道主義といふやうなものが社會の全面にひろがつて、人を信仰させたし、又自然主義にしても一つの文學上の思想として社會の見方に一つの哲學と刺戟とを與へた。然しこれは文學が何も社會を指導しようとしたのでも、また他所からの思想を拜借したからでもなく、文學それ自身の中に持つてゐる獨自の立場に於て社會を刺戟したのにすぎない。だいたい文學といふものは、社會なり個人なりを全體として寫しだすといふところに特長がある。それは最も鋭敏に、何よりも早く社會の事實を豫言し、或は映しだす鏡であつて、その文學的方法の中から一つの思想が抽象せられるのである。ジヤン・マリー・ギヨーはいつてゐる「それは現實に對して先驅けをなし、又それを超越するものである」と。だから文學に觸れてゐる者が、誰れよりも早く社會の最も新しい事實——思考と流行にふれてゐるといふことはいへるのであるが、ただそれらが常に全體性の上に於て寫しだされるといふことを、人々は注意しなければならない。

作家がマルキストであつても、自由主義者であつても一向さしつかへはないが、ただ作家に於ては、それらの思想が常に全體性に於て描かれ、彼獨特の方法に於て、人間的矛盾に於て表出せられるといふのが、その本能的な態度だと思ふ。

若しさうでなければ文學といふものがつまらなくなる。文學には文學の世界がある。吾々はそこに住むことに信念を持つてゐなければならない。

そもそも文學活動といふものは――生活と直接の感情、もつともなまなましい全體としての生活にふれ描くものでなければならない。さういふ風な人生に對する觸れ方、描き方を持つてゐるが故に文學といふものが大切になつてくるのである。

文學といふものはあらゆる概念を取り去つて、或ひは最も特殊な概念の發見に於て、生活に直接ふれるが故に人々を動かすのである。若し人を動かさなければそれは死んだ文學である。だから文學者としてのマルキストといふものは、時に却つて反マルキシズム的なものを書くかもしれない。それまででなくとも彼に於て多くの矛盾がそのままで表現せられるに違ひないといふことは眞實である。人間としての彼はもつと複雜であり、それだけに多くの惱みを持つてゐるに違ひない。

それが一つの思想の性質と相反してゐても、ゐなくても、彼が作家として正直であればあるほど彼が正直にそのことを書くといふことは當然なことである。寧ろそこに文學の誇りがあり、文學者としての信念がよこたはつてゐなければならない。

ひところのやうに指令によつて文學が制作せられるといふやうなことは、最も笑はれるべき文學の自殺でしかない。又彼がマルキシズムに屬したり、フアツシヨに屬したり或はアナーキズム

に屬したり、何かに屬さなければならぬと考へることも誤りである。文學といふものに於てのみ、吾々が最も赤裸々になれるといふことが、宗敎の懺悔のやうに文學といふものを最も光輝ある存在にするのである。

そこにこそ最も眞實の人間の叫びがあり、最も本能的な欲望があらはにせられる。多くの虛僞が取り去られ、最も眞實な怒りが現はれる。人間が何よりも太初に歸つて考へられる。かういふ屬性こそ、文學に於て、ふとして人の忘却する最も輝ける特質である。

吾々が文學の中から學ぶところのものは、恐ろしい身をもつてした體驗が常に文學の中にふくまれてゐるからである。文學以外で聞けない祕密がそこにあるからである。それは面白いだけのことでもなく、をかしいだけの報告でもない。たとへ面白くても、をかしくても常にそれ以上にもつと壯烈であり、悲痛なものがある。

概念で動かうとするものを最も人間感情に接近して、人間を動かさうとするもの――これが文學である。だから文學の場合は眞實といふことと同時に可能性といふことが最も尊ばれなければならない。

あらゆる本能に根ざしたものによつて、吾々の生活を最も近く可能的に解釋し批判する。

だからアランがいふやうに「文學を支配する感情はあらゆるもの――情熱も犯罪も、不幸さへも――進んで欲求し、さういふ人生を描かうとする。それ故に眞の文學といふものは宥恕と希望

と友情とを常に呼び起し、苦惱に打ちかつことになるのである。」

近代に至つて宗教は完全に小說に代へられたといふ。それほどの信仰が小說に集まつたといふことは、いふまでもなく、アランが指摘したやうにその性質の積極性に由來してゐるのである。

さて指導性といふことに再び歸るが、かくの如くにして文學といふものは人間生活に常に親切と警告とを發してゐるのである。そして彼がマルキストに屬することも自由主義に屬することも自由であるが、彼がさういふ何かに屬することによつて社會を指導しなければならぬと考へるやうな俗論は排さなければならない。さういふ借りものによつて文學が指導性を持つといふことは悲劇であり、自殺でさへある。吾々はこのことの適例を餘りにも痛々しい程に經驗した。

トルストイの人道主義は彼の生活感情から直接に來たものであつて、文學者としての彼の特殊な見方が人々を驚かした例の一つである。人道主義によつてトルストイが小說を書いたのではなく、彼が書いた小說から人々が人道主義といふものを割り出したのにすぎない。

ギヨーはいつてゐる。

「天才は常に多少自然を改造しこれを豐富にし、これを發展せしめる。而してこの發展たるや又屢々論理的意味に於て起るのである。蓋し人間の精神は自然そのものよりも更に意識的反省的である丈に又一層理論的組織的だからである。吾人は自己自身をば充分に悉知することが出來ない者でありながら藝術品の中に表現せられた行爲や思想はこれを統一的に理解せんと欲するもの

である。」

かくの如くにしてトルストイの人道主義は彼の作品の中に生れ、又人々によつて抽出せられた。だから云つて見れば作家は常に一つの叡智と本能にたよつて物の眞實に突入しようとしてゐると云つてもいい。本能の强さといふものを常に知つてゐながら、虚僞の力に組みふされず、これを通してあらゆる事實にふれる事を知つてゐるところのものが文學者である。

文學者が社會の木鐸にならねばならぬといふ事は、彼が最も虚僞を取り去つた社會の事實と人間の根本に接近して、これを知つてゐるからであつて、同時に彼が最後に表現の力を持つてゐるといふ事から來てゐる。文學者が木鐸である爲めには、彼は益々その事を自覺しなければならないのである。

外國の心理學や哲學書の中には文學書の中からの引用がことの他多いといふ事であるが、あれは文學書といふものがそれらのものに常に新奇な材料を提出してゐるからであつて、又同時に文學といふものが如何に人間生活にひろく深く觸れてゐるかといふ事の證據でもある。

『ユリシーズ』下卷に就いては、私は度々書いたが、あの中にある心理描寫の如きは現代に於ける最も大きい發見の一つにちがひない。吾々はあの中から多く敎へられるものを受取る。

何も文學者があらゆるものの指導者となる必要はない。又さういふ無用の考へを考へて、自己を甘やかす必要もない。又何かの社會改造說に賴らねば生きられぬといふやうなものでもない。

文學が指導するものは全部としての人間感情の問題であつて、それが眞實の聲であればあるほど社會に訴へ、又社會を動かしてゐる事はその性質からして當然すぎるほど當然の事である。然もこれが本能的であればあるほど力强いといふ事も。

映畫によつても詩によつても、接近出來ないもの。人間の心の中にある眞實を、全體性の中から描出する事が吾々の役目でなければならない。文學といふものを全能にしようとしたり、總てを指導するものだと考へようとしたり、又文學が何かの社會的な指導原理の中に屬しなければならぬと考へることは思ひもよらぬ間違ひである。

雄略天皇と後光明天皇

小學生のころ讀んだもので何が一等心に殘つてゐるかと尋ねられた時、私は何よりも後光明天皇の御事にまさつて心に殘つてゐるもののない事を言下に告白した。

それほどに私にはあの一頁の物語りがハッキリと頭に殘つてゐる。

たしか修身の本であつたかと思ふが、そこには雨におうたれになりながら、後光明天皇が御殿の椽にお坐りになつてゐる繪が書いてあつた。

私はいつでもあの斜線にひかれた雨の筋と、光つてゐる雷の放射光線が眼に見えるやうな氣がする。

何でも後光明天皇は御幼少の頃から雷をお嫌ひになつてをられたのであるが、ある大雷雨の日、すすんで椽に御出になると、龍顏に雷雨をお受けになつたといふのである。

それ以來、天皇は雷に對する恐怖心を全く無くせられたといふ話である。

如何にも嚴格で、剛毅で、沛然と來る雨の有樣と青い電光のまたたきが、その壯烈な御氣性を

私に羨望させた。

何時も何かに恐怖したり、逡巡したりする時は、畏れ多い事ながら、私はあの話を思ひだして自分を勵ます事が多かつた。勵ますといふよりも、私は大體があの話が大變好きで、小さい少年の時代から今まで思ひださぬ日とてはなかつた。恐らく私は人一倍臆病で、恐怖心の多い人間だからかもしれない。

あれはたしか「克己心」といふ題であつたかと思ふが、それだけでなく、なかなか多くの敎訓を含んだ立派な話と思ふ。

天皇にはなほ多くの逸話があり、幕府に對する優位が、あの時代から次第にハッキリした事も、もつとも至極と思はれた。私はあの話からして何時も天皇に對する尊崇の念を抱くのが常であつた。

雷の話では柳田國男氏に「若宮部と雷神」といふ研究があつて、そこには雄略天皇の御時の雷の傳說が一つの民族的な深さから說明してあるが、私はあそこに出てくる强烈な天皇の話も隨分好きである。

後光明天皇のことを思ひ、雷のことを思ふと、つづいて雄略天皇の御治世を思ふのが常である。雄略天皇の時代は、日本の最も隆盛した時代らしく、應神天皇の三韓征伐以來、發展した國威があの時代最も跳躍したと歷史家は報じてゐる。

日本書紀の第十四卷、廿三年、四月、夏のところには、雄略天皇が日本へ來た百濟の幼帝の頭を撫でさせられたことや、その百濟を助けるために、高麗征伐の兵を擧げさせられたことが出てゐるが、私は御氣性の壯烈さにおいて、後光明天皇の話と一緒に思ひだすことが多い。

私は、とりたてて天皇のことを記したいからではなく、われわれ日本人といふものの象徴を、そこに見るやうに思つてこれを書きたかつたのである。

私はこの頃、日本人といふことをよく考へる。それは私の國際的ないろいろな考へ方と少しも矛盾するものではなく、私の少年時代から最もしみ込み、且つ尊崇して來た物語りを、そのまま書いてみたのにすぎない。

弱い家族

茅ヶ崎

四月、退院以來といふもの、隨分と方々へ轉地した。健康で飛び廻つてゐるんだつたら、樂しくも思はれさうなところを、僕は苦蟲をつぶしたやうな顏をして歩き廻つた。

僕はひところ死んだ方がましだと考へて、もう何時死んでもかまはないと覺悟をきめてゐた。今でもその覺悟に變りはないが人生を樂しいものと考へてゐて――ふと人生の苦痛に行きあたつて、不平で不平でたまらなかつた感情が、今ではもう、どうやら平靜になつて、人生とはこんなものだと考へだした。

結局「憂多し」といふ古來からの說に征服せられて、僕は弱い身體の不平も、今は云はなくなつてしまつた。僕は年少客氣の時代、自分は健康な血族だと考へてゐた。實際僕の祖先は皆が皆代々長命と多産との歷史を持つてゐる。

自分は幾夜も幾夜も、徹夜の座に坐り、腹が減ると痛飲暴食し、ダンスを好むと一晩中身體の事など無考へに踊るやうなことをした。又どんなに忙しくても好きな所へは缺かさずに寄つて歸つた。

然し今は全部が夢になつて、自分は弱い家族に違ひないと考へだしてゐる。さう考へると、今度は家族の全部が全部、病身に變化してしまふのである。

僕の九歳の長女は、この間まで毎日毎日、氣違ひのやうにピアノを彈き通してゐた。

僕は何時もきまつてゐる食後の苦痛で寢臺の上に横になりながら彼女のピアノを聞いてゐる。

彼女の教師である井口愛子さんは彼女も病弱なのであるが、僕の長女に就いて、その素質を驚歎してくれる。

彼女の瘦せた身體が元氣に溢れながらピアノと爭鬪してゐる。

僕は聞いてゐて才能を誇つてゐる人種を二人、ピアノの前に何時も感じてゐた。

然し彼女も此頃は熱を出すことが多く、僕は彼女を茅ケ崎の林間學校といふものへ連れてゆかうかと考へたりするのである。すると彼女はもうそこへ行きたがつて、

「一人行くの、いいかい」

と念を押してみても

「九つにもなつて、一人でよう行かんやうな意氣地無しぢやねえよ」

と全く氣の强いことを云ふのである。
すると僕はその言ひ口が丁度自分と同じなのに驚いて、この子供を今は反つて氣の毒に思ふのである。
この子も、昔僕が、さうであつたやうに、自分を健康だと思ひ込んで、まるで元氣に滿ち滿ちてゐる。だがこの位危險なことは無い。健康だと思つてゐたのは、ただ意氣の旺盛さだけで、自分達は結局「弱い家族」のやうに思はれてならない。
それから數日して、僕は茅ヶ崎の林間學校へ子供を連れて行つた。
毛布を入れた寢椅子に寢そべつて、感じやすい子供達が敎師から何か話を聞いてゐた。皆氣儘にして、不幸さうには見えなかつた。
僕は海の風に吹かれながら、子供を一人置いて歸ることが何となく不安で、暫く立つてゐた。僕は氣を張つてゐる子供の顏を見ながら、ここを立ち去るきつかけがどうしても見つからなかつた。すると、子供の方ですぐ新らしい友達とあつちへ行つてくれた。

鵠沼

それから暫くして下の二人の子供が百日咳にかかつた。それはお隣からもらつたのであるが、全く迷惑で、こんな非文明なことはなかつた。百日咳は一寸隔離さへすればいいんだから、幾ら

でも注意のしやうはあるのに、到頭かかつてしまつた。
僕は自分自身の病氣や長女の病氣の上に、又しても「弱い家族」を感じながら、相變らず食後の寢臺にねてゐた。
すぐ豫防注射をしてみたが、もう間にあはないで、二人とも咳きだした。それも上の子供だけは割合に輕くすんだが、下の三つの子供は何とも咳が烈しくて注射のききめが一向なかつた。咳きだすと唇が紫色に變つて息が幾度も止りさうになる。
それで僕はどうにも心配でこの子供達を鵠沼に轉地させることにした。すると轉地先きで今度は母親が又熱を出すといふ始末で、これでは家族全部が病氣になつたやうな有樣で、僕は自分の病身だけにかかはつてもゐられず、スーツケースを提げて又鵠沼の東屋へ出かけて行つた。
病氣もこの位次ぎ次ぎにやつてこられると、これは何かの試煉といふやうな氣がしてくる。そこへ僕は長い小説に着手したりしてゐて、悲痛どころの騷ぎではない。
何しろ僕は、日に四度少量の食事を取つてゐるのであるが、食事のたびに胃が苦しく、二時間づつは横になつてゐなければならない。卽ち都合、一日に八時間は、どんな事があつても横になつてゐなければならない。だからあとの一二時間で小説を書き、別の一二時間で病人を見舞はなければならないといふ計算になる。
それでも僕は、妻の病氣が幾らかよくなると、海に出て見た。

もうビーチ・パラソルが澤山でて、海はキラキラとお祭りのやうに賑やかであつた。ロシア人の女達が四五人、海からあがつてくると、砂の上で上手に水着をぬいで、ピジヤマに着かへてゐる。公衆の前で身體を見せないで着換へをするのだから全く不思議である。

僕は久しぶりに海の風にあたりながら、だが何時も行く習慣から、東京近傍では何と云つても逗子の海岸が一等だと考へたりする。

鵠沼は何しろ波が大きいからに違ひないが、海に行くまでの砂濱が長くて、江の嶋は近いが、あれで土用波でも立ちだしたら危險に違ひないと思つた。

鎌倉もいいには違ひないが、あそこではスカールは漕げない。そこへゆくと、たとへ海の家があつたりしてゴタゴタしてゐても、總ての點から考へて先づ逗子が最もいいのではないかと思つたりする。總て健康な時代の思ひ出である。

景色はいいが葉山の方は少し水が冷たすぎる。房州になると、素朴さはあつても、夕凪が暑く、それに時間がかかりすぎる……

僕は妻の熱が下るまで鵠沼にゐたが、病氣の心配をしながら常に僕の心を往來するものは、自由勝手に分散させてゐる茅ケ崎や鵠沼に滯在する家族達の費用のことであつた。

それでも病氣の爲めには僕はどんなに苦勞しても、最上の手配をしたいと云ふのが、趣味で、どんなに犧牲を拂つても、第一流の醫者と最上の狀態とをどうかして用意したいといふのが性癖である。これがこの病氣に鋭い家族の慣はしである。

子供を茅ヶ崎にやる前、僕は、病院に一ケ月ゐたが、それから病氣がどうにもならず醫者に二三年は養生しなければならないと云はれて、湯治を試みようと考へて伊東へ行つたことがあつた。初めは暖香園に滯在してゐたが、長くと思つて、そのうちに湯のわく一軒の家を借りて、そこへ移つた。そこにゐる間は、正確に仰臥と散步と食事とを、時間で規則正しく行つて、僕は賑やかな土曜日曜にも決して規則を破らなかつた。

あそこは湯の湧出量は、關東第一で、勿論胃腸にいいといふので行つたのだが、土地は無風流で、源平時代の遺跡や何かがあつても土地に少しも匂ひのやうなものが無かつた。ただ盛んなのは、愛情を賣る女達で、あの狹い町にその連中が三百人もゐるといふのだから想像に餘りがある。

僕は遊びに行くところが無くなると、自然そんなところへも時間正しく散步に出て、少しづつ廻つては、しまひには町のどんな隅々も知るやうになつた。

料理屋と書いてあつたり、待合としてあつたり、藝者屋らしくしてあるところも全部が全部、同じで、休日などには、そんな所は全く淫蕩の氣に溢れてゐた。それでも僕は、一向景色を眺めるつもりで、そこここを時間正しく通つて歸つた來た。

伊東でいいのは何であらうか。川奈の素晴らしいゴルフ・リンクが近いといふこと以外に海に面してゐるから夏はなかなか賑やかだといふが、案内記によると、降雨量が少なくて、随分と暑さのひどい土地らしい。熱海よりは風景は開けてゐるが、何といふまとまりもない。だが、どんな年も雪が降らぬといふから寒い時に行くにはいい處であらう。それ以外には長くはゐられない。ただ熱海から伊東へ行くまでの海に沿つた道は、曲折して、風景が新らしく、それが刻々に變化して一時間の自動車がちつとも退屈しない。恐らく、あそこは幾度通つてもいいのに違ひない。

一ケ月餘り滯在してから柏峠を越えて修善寺に廻つたが、さすがにここは靜かで落ちついて、溫泉町らしい俗惡さが割合に少なく、夏目漱石が好んで行つたといふのも、もつともと思はれた。

僕は伊東にゐた間中、どうしても眠りが惡かつたが、あそこの菊屋別館では意外によく眠れて、川に臨んだ高い部屋が非常に爽やかであつた。青葉が病的なほど眞つ青に見えたが、胃腸にも伊東よりもつといいやうな氣がして、又幾度もあそこなら行つてみたいといふ氣がした。

日光

その後、僕の痼疾は、どう手をつくしてみても相變らずで、醫者は癌の徵候は無いと云つてくれるが、ふとすると、そんなものがあるのではないかと思はれたりして養生の棒が折れさうになつてしまふ。

暑さに堪へられないで、この間、家を借りる下檢分に日光へ行つたが、さすがに涼しく、丁度輕井澤などと同じで、東京よりは大體十度位溫度の低いのが何時もらしかつた。

その間僕は金谷ホテルにとまつてゐたが、蚊帳もいらないし、扇風機はあつても、ついぞ廻さなかつた。日に幾度となく霧の襲つてくるあの輕井澤の風情はなかつたが、ホテルにゐると、觀光客相手だけに外國人の喜びさうな設備が多く、先づ面白かつた。ベランダにはフーシヤの花が滿開で、丁度冬スケート・リンクになる池に水蓮が三四尺おきに植ゑてあつて、花と云へば薔薇や、牡丹や、あやめを季節季節の花として最も美しいと思つてゐたが、水に咲く夏の花としては、恐らく水蓮の右に出るものはあるまいとしみじみ感じた。

赤や、白や、桃色の可憐な花が無數に水に浮んで、文字通り恍惚として、僕は白木の欄干のある廊下に立ちどまつて、何時までも眺めてゐた。

遙かに男體、女體の間には雲がかかつて、人工と自然との調和が粗剛優美に感じられた。

日光は湯元の方まで登れば、自然の美しさがあるに違ひないが、あの廟堂なんかも、惡趣味だといふ人もあるが、何と云つても結構なのに違ひない。

僕は兎に角、茅ケ崎や鵠沼にゐる家族を再び集めて、今年は日光で一夏過さうと考へてゐる。近松秋江氏も好んで行かれるいふから、逢へるかも知れないと空想してゐる。

僕は當分むやみな仕事は到底出來ない。子供もピアノからは當分離れてゐなければならない。

そして散歩も氣をつけつけの旅行は、何時まですればいいのか。

僕は「弱い家族」といふことをしみじみ感じながら、この家族がこんなに大切にされなければならない理由がふとしてわからなくなつてしまふ。

僕は昔、旅行といふものを不潔に感じ、何時も嫌惡してゐた。だから今でも陰鬱なところへはどうしても行く氣がしない。それにしても病氣故に、どんなに貧乏しても何處かへ居を變へなければならなくなつて僕の生活はいよいよ膨れてしまつた。ふとして結局贅澤かと思ふと、これは何と矛盾に滿ちた生活かと考へられて、自分の血族といふものを幾度も幾度もふりかへつてみるのである。

（昭和八年七月二十三日）

ラウル・ジュッフイの繪

ギヨーム・アポリネールは、その詩の中で、ジュッフイの繪を歌つてゐる。

　ほめよ、たたへよ
　線の氣高さと、その力强さを、
　これこそはエルメエス・トリメジストが
　ピマンドルの中に歌つた
　光の聲でなくてまた何であらうか。（堀口大學譯）

私とても彼の繪を見るたびに心に讃歌を唄はぬこととてはなかつた。

私が彼の繪を知つたのは十年前で、以來私の彼の繪に對する傾倒は血液的なものによつて、いよいよ深く强く、私はその光の聲を今日まで聞き續けて來た。

しかし、私は夢にも彼の繪を手に入れようなどとは思ひもしなかつた。それがどうしたはずみか、まことに幾年かの長い年月の間に私の手にはいつて來た。

今年の二科會の水彩畫室に出品してあるのがそれで、自分ながらに考へてみると、不思議な氣がしてならない。

私は今日までそれを病床に掛けて眺めくらして來た。そして私は、更に彼の畫集を集め、傳記を讀み、いよいよ彼に親しむ事が一層ふかくなつた。XXe SIECLE 版の畫集や、又最近の Floury から出た大册などは私を幾度となくひき込んだ。

彼は一八八〇年、英佛海峽に面するアーヴルの町に生れてゐる。丁度今年五十三歲で、彼は始め、パリに出て美術學校に入學し、またギュスターヴ・モロオの敎室に通ひ、そこではじめてマチス、ルオー、マルケ等と遭遇してゐる。

その後モンマルトルの陋巷に起居しては、ピカソ、ドラン、ブラック、ユトリロ、モヂリアニ、カルニ、マックス・ジヤコブなどといふ素晴らしい友達にかこまれ、彼の色彩感覺は次第に地を拔いて人々を驚かし始めた。

レイナールは彼を批評していつてゐる。

「ラウル・ジュッフイの繪は鮮明で決して誇張しないやうに注意せられた旋律で描かれてゐる。彼の筆觸の正確な强さ、素描と構圖の嚴格さと大膽さ——これはまれに見るべきものである。」

しかし一見する時は、彼の繪は宛も奇矯にさへ思はれるほど奇想天外である。しかしそれが奇矯に思はれれば思はれる程、彼の背後にある正確さといふものが吾々をとらへるといふところに

彼の繪の特長がある。
レイナールは更にいつてゐる。
「彼の油繪や水繪を爽快なものによそほつてゐる雲とか水とか、葉むらなどは、あらゆるナチュラリスト達の官能的な過度發達に陷る事なしに、レアリテを強く畫面に表出さしてゐる。」
どこで見たのか忘れたが、十年前、私が最初に見た彼の繪は海の繪で、畫面の十分の七は海の底の靑で塗られてゐたやうに思つた。たしかその海の中には眞つ赤なヴアミリオンの人間が泳いでゐた。七分の三に小さい船が一隻浮かんでゐたと思つたが、それは氣が遠くなるほど小さかつたと思つた。
私が引きつけられたのはそれ以來で、恐らく、その頃極端に海を愛してゐた私の心に通ふものがあつたからに違ひない。
私はもともと船乘りを夢みて、はばまれ、繪かきを志して失敗した人間である。今彼の海の繪を眺めて慰められてゐるのは眞に偶然といはなければならない。
彼は彼の生れたアーヴルの海を描き、またニースの海を描き、またドウビイルの海を描き、海の氣候と航海の消息と、海底の不思議を描きつづけて飽きないところがある。
さて、私が彼の繪をほしいと思つたのは——格別思つたわけではないが、ついそんなになつてしまつたのは、私が昭和七年、最初の病を得て寢てゐた時で、その時、私は一秒ごとに、生の世

界と死の世界との間を出入し、私は幾度となく、悲しみと喜びとの間を往復した。恐らく私が彼の繪の事を思つたのは、衰弱の底から心が反撥して極端に高揚せられた時であつたに相違ない。

私は恢復期の氣分のさわやかな時、彼にあてて熱心に手紙を書いた。それは確かに病人の思想で、健康の狀態では決して思ひもつかぬ事であつたに違ひない。恐らく私の心は何よりも強くアポリネールのいふ何かの光りの聲を求めてゐたのに違ひない。

私は間もなくその手紙を秋田玄務氏に飜譯してもらひ、それから石井柏亭氏をわづらはし丁寧な紹介狀を書いてもらつた。

しかしそれから幾ケ月たつても何の返事もなかつた。私はもう斷念してゐた。むしろ私の氣持ちは手紙を書くことによつて果されてゐるやうに思ひ、そしてかへつて私のいつてやつた價格があまりに馬鹿げてゐたかしらと、そんなことを反省したりしてゐた。

だが一ケ年目にふと松尾邦之助氏に賴んでみる氣になり、そのことを書いた。そこで松尾氏がジュッフイに逢つてくれたのであるが、するとジュッフイはちやんと覺えてゐて、いろいろプランをたててゐるといふ返事をしてくれたといふのである。それから私はまた一年近く待つた。そして今年の五月頃、野村義太郎氏が歸朝の途次、私の爲めに携へ歸つてくれたのである。私は狂喜して心の交通といふものを感じ、長い間の彼への傾倒を思ひ、天に昇る思ひがした。

その繪が彼の繪としてどんなものか、それは知らない。しかしそんなことはどうだつていい。私は彼の好意に感謝し、彼の昔からの文學への親切を思へば、それで充分だと思つてゐる。

彼は今日までにアポリネールの『動物詩集』『惱める詩人』、フエルナン・フルーレの『古着』デュアメールの『挽歌』等の挿繪を書いてゐる。

私もあの三枚の繪を何かの私の本に使はうと思つてゐるのであるが、彼の名において、これらの數冊のかがやける本の中に、私の本が這入り得ることを喜ぶと同時に私はむしろ恥しく思つてゐる。

私は長い間怠けて來た。それは身體のためにどうにもならなかつたからである。私は自分の身體について手のつけられぬ幻覺を抱き、絕えず胃が鳴り、胸が苦しく、今では、いいのか惡いのか、わからなくなり、私の一日は氣味のわるい憂鬱な時間になつてしまつてゐる。しかし私はこの頃何としてもよくならうと思つてゐる。ひと頃のやうに考へないで、蘇生の希望を強く抱き出した。そして私がもともと彼の繪に求めたものは、健康ではなかつたかと考へ直してゐる。

彼の中にある體力的な豐富さ、明るさ、確實さ。

彼の描いてゐる裝飾せられた野蠻人の繪。ボート選手の繪。競馬場の繪。太つた女の素描。苺を盛つた箱。何よりも健康で一杯してゐる海の風景。

私はもつと熱心に彼の繪を見つづけねばならぬと思つてゐる。

その後、彼の繪や工藝品が、その新鮮さや、粋な點や、華麗さのためにパリの婦人達にまで流行を及ぼしてゐるといふことを聞いた。これは喜ぶべきことか、歎くべきことか。然し何れにしても、それが彼の最もなんでもない面、レアリテの表面に浮かんだ何物かが、それらの人々を捕らへたのに違ひないと、私は考へてゐた。レイナールがいふやうに、彼の本質的なものは寧ろそれと正反對なところに進んでゐることを信じてゐた。然しこんな感想こそ馬鹿げたものである。一面工藝家としての彼は何處へ行つても流行しなければならないのである。果せる哉、彼は彼の最近の畫業においてもまた新らしい位置を獲得したといふことを聞いた。

染色版畫を研究しては、ブルヴアール・ドウリシイの畫室において、化學者と一緒になる準備的な實驗を企てたり、それ等の光輝あるマチエールや、直ちに注目を引く色彩組織の技巧を完全に自分のものにしたりする彼は思つただけでも愉快である。

彼の繪にあるフランス人らしい嗜好は、全く聰明で粋で、然しそれはその邊のシヤレ者の繪などとは比較にならぬ、あらゆる思想の悟達によつて到着した强さと野蠻さとを通つた甘美な世界である。評者は日本人にはわからぬほど洗煉せられた繪だと云つてゐるが、僕はこんなに美しい繪をかく畫家は嘗て見た事がないと思ひ、その磨きのかつたところがよくわかる氣がする。

それに彼の線には日本的なものが多く、又畫面の切り方にも新らしい東洋風があり、眺めてゐると、少くとも私には益々發見するものが多い。

私は私が私の恢復期にふとして考へついたことを今思出し、彼の繪の中にある象徴を果さなければならないと思つてゐる。

その後、私は彼の繪を額ぶち屋によごされた。ちよつとしたあやまちから畫面一杯に紫の色素を散布せられた。私はそのために十日ほど不安な日を送つた。

然し今はそれらの汚點も漸く洗ひ去られ、私は彼への感謝の一文を書く時機に到達した。

一九三二年の帝展

僕は帝展の常連ではない。だから誰れの繪がいいか、悪いかに就いては、何等の概念を持つてゐない。だからと云つて批評の適任者だといふのではない。
多少の美術眼はあるつもりであるが、勿論素人に過ぎない。かと云つて、苔の生えた美術批評家が優れた事を云ふかといふと、僕は決して彼等から正しい事を聞いたためしがない。もともと繪を鑑賞し、よろこぶものは、萬人であつて、レンズを通して眺めたり、牽强附會の昔の繪を想起して、とんでもない事を呟きだすべき筋合のものではあるまい。

さて僕が敢て見たままの記をひきうける氣になつたのは、橋本關雪氏の「玄猿」を見たからで、これは恐らく古今に絶する名作といふ氣がした。人々は帝展の中心的作家が多く休息してゐることを告げて淋しがつてゐるが、僕はこの一作があれば他に何物が無くてもいいと思つた。それほどにこの作品は僕を喜ばした。僕はこの畫面の前に立つて、何よりもその氣韻生動の生々しさと、

構圖の豪快さに驚いた。

老木と葛の間にゐる二匹の猿——先づ枝と枝とが呼び、枝と枝とが反撥し、その交錯の美妙さだけでも見飽かぬのに、その上にゐる二匹の猿の姿態の不思議な動きは、——これは親子ではなしに、大きい雄と稚い雌猿と思ふが、全く僕を釘づけにさしてしまつた。

人々はこの繪を先づ微細に立ちどまつて眺めなければならない。暫く眺めてゐると、何處から何處までが相呼應して、しまひには大きい猿の擧げた二つの手と、彼等の眼とに集中して來るのを感ずるだらう。

一體この二匹の猿の面構への辛辣さは何であるか。眼と口との表情はジョコンダの顏よりも動物の不可解さを以つて、怪詭である。

恐らく二匹の猿は彼等の對岸に敵を發見したのに違ひない。一匹は威嚇し一匹はうづくまつて眺めてゐる。二匹の猿のポーズの對照さへが、それは最早や對照ではない自然の動きを以つて、寸分の誤算なく描きだされてゐる。

僕は對岸と云つた。これは見る人々の勝手であるが、この繪の下には空々漠々として谷があるやうに思はれる。畫面の半分以上の白さが、これを暗示し、彼等の下には霧が漂つてゐるやうに思はれる。

と、思つて見てゐると、松の葉は粗雨に打たれて、深山の悽愴な風に洗はれてゐることを思は

せる。
僕はこの猿の如きは、決して動物園の寫生などからは得られるものではないと、そんなことを考へて、この神品とも云ふべき繪を、もう一度あらためて全體的に眺めた。すると何よりも全部が生きて動いてゐるのである。僕は二三年來、こんな感動を以つて繪を眺めた覺えがない。それは技巧の末葉や、色彩の感覺や、心理の如何ではない。烈々とした氣魄である。然も裕々としてその筆觸はせまらない。

僕は帝展を眺め歩いて、正直なところ、死屍累々として剝製の人間や動物の中を通つた思ひをしたが、これは恐らく僕だけの告白には止まらないに違ひない。一言で批評しようとすれば全體が、さうなつてしまふ。ただ二三作によつて、それから救はれ、僕は何よりも、この作者に感謝し、この作者の存在を思つて、人間の至りつくすところのなかなか深遠であることを思つた。牧溪を云々しなくとも、恐らくこれは帝展を通して現はれた古今の傑作の一つに違ひない。自分は敢て自分の歡喜をそのままここに羅列した。

土田麥僊氏の「平牀」。これも「玄猿」に竝んで、心打たれた作品である。これは橋本氏の豪壯さに比較して、誠に靜かで淸楚で、端麗で、全く反對の境地にあるところのものである。

その構圖と氣分には甚だユニークなものがある。落ちついた新鮮さが感じられる。何かしら稀

薄ではあるが、それは全體が餘りに藝術的に取扱はれ、模樣化せられて、高雅である爲めであらう。これは感覺の最も洗煉せられた人でなければ決して出來る藝當ではない。

平牀の上に、一人の少女は坐り、一人の少女はその近くに立つて首傾けてゐる。彼女達の顏はさておき、着物の緻、平牀の黒い足、一足の靴、手のふくよかさ、とりわけ鏡の位置と、その上向いた硝子面の角度の適確さは、この作者が如何に澄み、磨かれ、センスのこまやかさと正確さとをもつてゐるかを立證するところのものである。恐らくその點では、この作者など現代獨歩に違ひない。

白い胡粉の地と、青い淡彩の見事さ。飽くまでも靜かで、飽くまでも美しい一枚の畫面。自分は立つてゐる少女よりも坐つてゐる少女をとりたい。

次には松岡映丘氏の「花のあした」。島田墨仙氏の「出山釋迦」。小室翠雲氏の「紫谿」。

「花のあした」は女のしどけない伊達卷姿と、花の美しさとを配して如何にもなまめかしく、その美しさの中には脈々として空氣が感じられる。この空氣の流れは凡手の及ぶところではなく、場中これを感ぜしめるものは他に見あたらなかつた。これは後朝の別れで、恐らく女の視線の向ふには、歸つてゆく男の後姿が見えるのに違ひない。

「出山釋迦」は層々累々とした顏の集りであるが、その墨と金との彩色が誠に見事で、その線

の豐富さか何よりも立派である。小品ではあるが出色の作であることは、その平和な感情と、尊崇の表情と、見事さの中に滿ち流れてゐる。

「梁塵」は當り前の作品ではあるが、幸福な世界、目出度き世界、曼荼羅の消息を現實の世界に示現するところのものである。こまかい丸い葉の滴り、枝の先き先きの花。鳥語の閑さ。下に落ちてゆく二匹の鳥は、現實地獄の世界への通信をもたらす使者でもあらうか。

次ぎには、中村大三郎氏の「髮」。秋野不矩氏の「朝露」。狩野光雅氏の「飛瀑」。三谷十糸子氏の「朝」。酒井延子氏の「ぬひとり」。野口謙次郎氏の「山の湯」などを若々しい一連の佳作として眼にとめた。

「髮」。これは華やかで落ちつき、誠に色彩が眼さむる許りである。明朗で、鷹揚で、冴え冴えとした技巧には好ましい獨特さがある。但しそのポーズには、餘りにもあたりまへといふ恨みが殘るが。

「朝露」にはみづみづしく、無欲で、畫趣汲むべきものが漂つてゐる。青い葉の一面と、女の後姿に癖のないよさが溢れてゐる。

「飛瀑」は、その着想の丹念さと構圖の豪壯さとを取つた。ただその着想の奇拔さにも拘はらず、その落下する水は、惜しい事には白壁になりかねない危險を示してゐる。但しその無頓着さがいいと云へば、これは何か素質的な問題になつてくるであらう。

「朝」。可憐掬すべき繪。感じやすい繪。抒情詩のやうなもの。取扱ひ方も描寫も共に巧みである。但し下駄が少しばかり空中に浮きあがつてはゐないだらうか。

「ぬひとり」。まめやかな畫面。案外線の太い構圖、動作と小道具とが實によくアレンヂされてなかなかいい味を持つてゐる。

「山の湯」。氣分の素直さと、作者の丹念さとをとる。ここには何とか打開されてゆくものが感じられる。

まだ書きたい作品が二三ある。然しそれらは書くと惡口にしかならない種類のものである。惡口を書いてゆくと、それは又無限の長さになる。それでは雜誌の方が閉口するだらう。

まだ佳作で見落してゐるものがあるかも知れないが、早々の印象で、殘念ながら僕の記憶には殘つてゐない。兎に角僕の眼にとまつた作品は以上の數種である。とりわけ「玄猿」と「平牀」を得たことは、何と云つても今年帝展の收穫であつて、それは例年と比較して決して淋しいものではない。寧ろこの二作によつて、今年の帝展は、或ひは今日までの歴史を貫く好展覽會であつたと云ふべきかも知れない。

僕はやや義務的に無駄の筆を弄したやうである。僕は唯この二作に就いてもつともつと言ふべきであつたかも知れない。

日光結構

神橋

山内から下りて來ると、よく早稻田の建築科の學生達が、神橋の形を寫生してゐた。私は外出する度に、あの平行してゐる——神橋を眺める爲めの橋——日光橋を渡らなければならぬのであるが、不思議に渡る度に、あの神橋といふものが新鮮に思はれ、何時までもあかずに眺めるやうになつてゐた。

あの朱塗りの橋は——下を流れてゐる川との距離が丁度いいのか。弓の角度が適當なのか。素朴さと華麗さとの不思議な調和のせゐか。それとも橋の向ふにたたなはる山々峰々のたたずまひが吾々の心を引きつけるのか。下を流れてゐる溪谷の白い飛沫と青い淵の湛へが見事なのか。あるひは毎日見るものの親しさが橋の良さを次第にわからせてくるのか。

何にしても、この橋ほど平凡なやうで、こんなにも吾々の心を捕へたものはなかつた。

私は二ケ月に近く日光に滯在しながら東照宮の豪華さよりも、この橋の美しさに最も感心した。

ふとすると、それは卑近な生活の近くに所在しながら、常に端然として赤く、人を渡らせずに掛かつてゐるせゐかも知れない。わざわざ眺めに行かないでも、生活の近くに何時もさらされてゐるいいもののよさといふことについて考へることがよくあつた。

そこではよく外國人が、自分の細君の、カーキー色の短いすねまでのズボンをはいた姿を、寫眞にとつてゐたり、大使館の自動車が坂をおりかかつて來て、そこで止つたりした。

私もよくそこでは立ちどまつた。

「いつたいどこがいいんだらう。」

山妻もよくそれに應じていつた。

「ほんとに美しいものはキットこんな風に云ひあてられないんですわ。」

私達は美しさといふことについて話する。若しかしたら、これは私達が、つまらない神橋といふものに惚れすぎてゐるせゐかも知れないと考へたりする。

私はここへ來る時、退屈しはしないかと、それを何よりも恐れてゐた。退屈すると自分の病氣にも子供の病氣にもいい筈はない。さうかといつて、何時も動いてゐなければならぬ海へは、とても行けるやうな身體ではない。

しかし來てみてから私は橋だけでも樂しいほど、そこの風景に親しんだ。そればかりでなしに、歌よみ町長、淸水比舟氏と近づきになつたり、町の骨董店の人々と昵懇になつたりして、私は先

つ身體のことを忘れてさへゐれば幸福この上もなかつた。

近松秋江氏は何時も、

「中禪寺へ行くんだつたら碧空白雲の時でなければいけませんよ。上はもつと曇りやすいからね。」

さういつて、何時も私の遊意を刺戟せられるのであるが、私は一ケ月といふもの神橋を見るばかりで何處へも出かけなかつた。白井喬二氏もなかなか外出せられぬ人らしいが、遊覧の地に來てゐて、こんなにもものぐさの客は、恐らくどこにもなかつたに違ひない。

だが、私の身體には、その程度より仕方がないんだから、どうにもならなかつた。

若しかすると、その爲めに私は一所懸命に神橋を愛してゐるのかも知れない。

しかし私は時々山々を見る。すると山から歌が湧いて來た。

大き山に向ひて居ればいにしへゆ人親しみし心わかり來

明智平

一ケ月といふもの何處へも出なかつた私も、八月の末になつて一日、方々見て廻ると、今度はまたそこここに素晴らしいものが現れ出して、身體にも格別こたへなかつたし、私はまた二度も三度もそこへ行きたいと思つた。

ある日、淸水比舟氏が見えて、一緒にもう一度中禪寺湖の方へ行かないかと誘はれた。すると、子供達は勿論、この頃親しくなつた柳田骨董店の娘や、それから妻の妹や、その友達なども參加したいといふ。

私達は例のやうに急なケーブル・カーに乘る。もうさすがに寒さが加はつて、元氣な妻なども身慄ひして肩をちぢめたりした。

明智平で下車する。一千二百七十三メートル。ここへ來ると妙に何か別の世界へ來たといふ氣がする。私は何時も寫眞などでよく見るスイスの風景を感じる。

この山頂を切りそいだやうな小さい平地の上からは、ぐるりの深い谷々が遠く見え、もう處々紅葉しさうになつてゐた。眼の下には去年出來たばかりのスケート・リンクが思つたよりも大きく陽に光りながら見え、もつと遠くには日光の町はづれや、更に毛野の平野が滄々茫々としてひろがり、更らに遠くには信州の山脈が累々と重つて、その景觀の壯大さは何とも云へない。どこからともなく霧が時々舞ひながら押しよせて來ては、足の下を流れ去つてゆく。

「こいつが面白いんですよ。なかなか。」

さういつて淸水町長が、般若の瀧や、方等の瀧を見おろす鐵柵の所へ行くと、五六枚のカハラケを私達に示した。

手に調子をつけて投げると、このカハラケは、水平に舞ひながら谷の方へおりてゆくが、急に

な氣の壓力で今度はスウーッと上へあがつてくる。あがりながらそれはS字形を描いて飛行機のやうに浮かびながらしばらく走つて、それから急に落下する。
それは見てゐると白い瀧の方へ閻きさうに思はれたりして風情があつた。
その時、一人の男が淸水氏のところへやつて來た。彼は今、この明智平から更に一つ上の峰に、空中ケーブルの工事をしてゐる技師であつたが、上の峰まで案內してくれるといふ。
皆はやつとの思ひで峰の上まで出たが、四邊は霧につつまれて、どうにも仕方がなかつた。
私達はぢつと互の顏を見ながら霧が晴れるのを待つてゐるより仕方がなかつた。
すると霧の奥に、小さく白いものが、突然見えだした。瀧の口かなと思つてゐると、意外にも更にその上に長く、白糸のやうな筋が一筋浮かび出して來た。
「華嚴ですよ。あれが。」
淸水氏が說明してくれた。糸屑のやうに見えたのは瀧口ではなしに瀧壺だつたのである。
さう思つてゐる間にも、刻々に動く霧がアブリダシのやうに白い水を次第にハツキリと浮きださした。やがて霧が晴れるに從つて糸のやうな瀧が次第に太く、しまひには水の落ちる樣までが遠くハツキリと見えだした。
「いいわね死にたくなるわ。」
妻がその邊に坐り込んだままそんなことをいつた。

瀧水は、かたまりになりながら、途中で砕けると、時々霞のやうになつて飛びおりてゐる。それは優美で淸楚で大きい自然の中にかかつてゐる女性のやうに思はれた。華嚴のすぐ近くに白雲の瀧が見えてゐる。
私達は息もつかずに見つめてゐる。と暫くして更に霧が動くと、思ひがけぬ空に華嚴の遙か上の空に、キラキラしながら中禪寺湖が見えだした。
「絕景ですね、ここは。」
到頭私が叫んだ。

華嚴の瀧

「もつといいですよ。紅葉すると。」
淸水氏が霧の中を白い日光下駄で步きながら云つた。
「ここの紅葉は黃色が基調になつてゐましてね、それがいいんです。」
吾々は岩猿が住んでゐるといふ斷崖を橫に見ながら、間もなく空中ケーブルの走る空の下を步いてゐた。
それからバスに乘つた。十五分ほど走つてから、吾々は華嚴におりる長いエレベーターに乘つてゐた。

「霧がまだ殘つてゐるといいんですがね。瀧の周圍に。」
淸水氏がしきりにそれを心配してくれてゐた。
「晴れたかと思ふと、かかり、かかつたかと思ふと一寸先きも見えなくなつたりするんです。その霧が瀧の周圍から起つたり消えたりするんですから何ともいへませんよ。」
然し霧はもう晴れてしまつてゐた。時々かかりさうになつてもすぐ何處かへ消えてしまふ。瀧は眞つしぐらに天から掛つて垂直に白い水煙になつて落ちてゐる。何時かの長谷川巳之吉氏の手紙にはあの濛々とした瀧のしぶきを見てゐると、不可解な死の誘惑を感ずるとあつたが、それは判斷することの出來ぬ壯麗さを持つてゐた。
華嚴はこの茶屋から見ても矢張り美しい女性である。何ともいへず姿がいい。だが接近すると、それは次第にもの凄い美しさを加へて吾々を恐怖せしめる。
やがて淸水氏や山妻は歌を作るといつてそこの椅子に坐つて一所懸命に瀧の方を見つめだし、子供達は繪葉書屋の前に立つて白樺細工を眺めてゐた。
私は若い者達を連れて冷たい山水の溢れ出てゐる道を通つて、瀧壺の方へ步いてゐた。道といつても決してそれは道ではない。山水の中を苦心しながら徒步で渡つてゆくのである。周圍から流れ落ちる水が時々靴の中にしぶき込んで來る。
一町ほど行つて漸く瀧壺に接近すると、上から落ちて來た瀧が、それは四五間の幅を持つて落

下するのであるが、下の水面に突きあたると、はげしい煙になつて、龍卷のやうに青い水の上を廻つてゐるのがわかつた。殊にこの一週間ほど水量の多い瀧は、全く壯絕の極みをつくして、立つてゐる者を畏怖せしめながら落ちて來た。

どこともない風が絕えず吹いてくると、その邊一杯にこめてゐる瀧しぶきが、立つてゐる吾々の息をとめてしまひさうにする。

呼吸が苦しい。もう着物も何もビショビショにぬれてしまつて、眼があけられないほどである。瀧の方を見てゐると眼がくらみさうな氣がする。

この間はすぐ眼の前の瀧壺の岩蔭で、浮かんでゐる死人を見たが、その時、初めにそれを發見した人間はものがいへないで、長い涎をだして、私の方へ向いて手をあげた。

私はその時のことを思ひだしながら。呼吸をこらへながら、ボツボツとその話を皆にして聞かせてゐた。皆は蝙蝠傘をひろげてしぶきを防いでゐた。

だが心も體も冷えてしまつてゐる吾々は、とても長い間そこに立つてゐることは出來なかつた。本當に美しいものは常に物すごいところがあるものだと、かねがね思つてゐたが、華嚴ほど優美で壯烈なものはないと思つた。

日かげりて霧さむさむし瀧をうしろに寫眞とりたる人も歸れり

吾々は再びエレベーターで上へあがると、肩が輕く、長い間瀧しぶきの底で壓へつけられてゐ

たやうな氣がした。

中禪寺湖

瀧壺から出てくると、吾々は急に明るく、とりわけ湖水が光つて何ともいへなかつた。この山上の湖水の明るさは特別であるが、それが瀧からあがつて來た眼には餘計心ひらけて樂しかつた。

やがて一行六人はモーター・ボートに乘つた。

靜かな湖面を白い水をたてて疾走する船——遠くの山の端に起重機のやうに見えて大きい枯れ木が並んで立つてゐたり、二荒神社の朱塗の鳥居が夕陽に光つて見えたり、ヨット倶樂部の棧橋の前へ出たり、大きい男體山が深い山ナギを持つて絶えず見えつづけてゐたりした。

「この邊の周圍も全體、紅葉するんですよ。」

清水氏がまたしても説明してくれた。

實際もう島の木蔭にはなかなかまどの實が眞つ赤にさがつて秋の豫告をしてゐた。

やがて船はドイツ、イタリア、フランス、イギリスと並んでゐる大使館別莊の前を走りすぎると、赤い立木觀音の鳥居の前に碇泊した。

この間室生犀星氏に逢つたら

「日光には綺麗な西洋人がゐますかね」と一番にそれを尋ねられた。室生氏の好みは輕井澤で

外國人を見る事になかなか、かかつてゐるらしかつた。
「さあ、どつちですかね。」
私はその事は格別氣にとめないでゐたのでさう答へたが、考へてみると、輕井澤の牧師風に比較して、この湖畔の外國人は總じて肉食的かも知れないと思つた。何時かの夕ぐれ止つてゐた自動車には、貴婦人かと思つたら眞つ白のボルゾイが乘つてゐて、しきりに湖水の方へ向いて吠えたててゐた。恐らくそこに彼女の主人がゐたのかも知れない。夕暮れの町を散歩する人も、それは輕井澤のやうに多人數ではないが、三々伍々として、湖水のほとりを歩いて、如何にも靜かな山上といふ氣持ちを起させた。
だが、淸水氏の話によると、湯瀧の近所に新らしい溫泉を發見して、今はそれをここへ引く事になつてゐるといふ話であつた。それは何時頃完成する事かは知らぬが、やがてここが俗惡になる事はハッキリとわかつてゐた。
「だが、さうなると、おしまひですね」
私がいつた。
「さあ、しかし別莊地帶なら湖水の深い周圍に幾らでもありますよ、結局そんなところへ移つて行つて、益々よくなるんぢやないかと思ふんです」
淸水氏はおだやかな超俗的な町長であるが、なかなか町の經綸についても新らしい時代といふ

事を心掛けてゐる人らしかつた。

娘達は手をつないで赤い欄干のある水際の方へおりて行つた。

私はこの靜かで明るい景色を氣質的に最も好む。

最早、湖水は夕暮れやうとして、どんなに遠くのもの音も聞えるほど靜かさが極まつてゐた。

ちつとしてゐると氣が遠くなりさうである。

「出來ましたよ。一首。」

さう聲をかけられてびつくりすると、淸水氏の手帳には次の歌が記されてゐた。

　　靑々と光りて暮るるみづうみの向ふの岸に灯がつきにけり

「靑々と、はうまいですね。」

私は感心しながら聲の大きくなるのをはばかるやうな氣持でさういつた。實際湖水の表面は、

もう暮色蒼然として、エナメルを張つたやうに光りながら寂々と暮れかかつてゐた。

川奈紀行

六月は風と雨との月である。眼に新らいものは、若葉ではなく着物である。女達が、急に眼が醒めるやうに、誰もかれも自動車の窓から美しく見えだす。そればかりではない。めいめい肌ざはりのいい薄着に着かへて、外に出ると、朝となく、晝となく、夜となく、ゆるやかに吹いてくる風が何ともいへない。

ある文人はプレインソーダの味を最も愛するといつたが、恐らく彼のごときは、季節でいへば、何よりもこの月の風を好むに違ひない。

そこはかとなき清新さ。味のない味。六月はわれわれの皮膚を最も愛撫して吹きすぎる。

だが、梅雨が初まるとわれわれは陰鬱になる。幸福さの後に、思ひの深刻なものが吾々を閉すのと同じである。

僕はこの間、親しい者達を携へて、川奈のゴルフ・リンクに出かけたが、氣持のいい行程であつた。

伊豆の伊東から自動車を雇つて四十分。阪をのぼり、山を廻り、林の中をくぐり、村を通過すると、吾々は道の頂上にあがつて、そこで近代風の門を見つける。

すると、道はそこから少し下り坂になる。それと同時に何やら清潔な海の匂ひのする風が車窓に來て、初夏のすがしさを一杯に溢れさす。道はゆるやかな勾配を下りながら、幾度となく山腹を曲折し、この廣い私道がすでに人寰を絶つ思ひを起させる。

「芝草が生えてゐますわ。」

道の端しに生えてゐる芝を見つけると、妻が大きい發見のやうに叫んだ。

「どれ、どれ」

といつて僕が外を見ようとすると、もう自動車はまたしても迂廻し始めてゐた。

だがこの妻の叫び聲は實際大發見かも知れなかつた。確かに、それがこれから始まらうとするゴルフ・リンクスの豫告だからである。種がこぼれて生えたのか。わざわざ植ゑたものか。兎に角、吾々はそこでやがて開ける青々とした芝生を眼の前に想像して、遊意を刺戟せられるのである。

間もなく自動車は、人里離れたこの山奥で、奥に行きつめて、海に近い平地に一軒のホテルを見つける。吾々は自動車からおりる。

僕は病氣になる前、少しばかりゴルフを練習したこともあるが、今はその芝生をただ踏むこと

と、珠をドライヴしながらゆく人の快適さを思つてみることと、ゴルフのルールについて、少しばかり同行者に說明するために步きだす。
吾々は第一のチー・ショットから步きだして、そのホールを終り、次ぎのチー・ショットへと次ぎ次ぎに步いてゆく。
暫くすると松林の間をすけて靑い海が見え、僕達は「大島コース」と稱するコースに完全に這入つてしまふ。
かすかに浮んでゐる島に、吹き折られたやうに三原山の煙が長く橫たはつて、それがいかにも靜かに、氣宇の大きさを感ぜしめる。
「いいな全く。」
「來てよかつたわ。」
吾々は單純にさう叫んでしまふ。ここでは人生の半面については誰れも考へなくなるのに違ひない。
大抵十萬坪か二十萬坪といふリンクスの中に、ここは五十萬坪といふからその規模の大きさからでも、まさに驚歎に堪へぬ。
僕等の前や後で、時々珠を打つては步いてゆくゴルフアーのクラブがキラキラと光つてゐる。
やがて第七番目か第八番目のコースあたりで、僕等は絕壁の上に出た。額の汗をふく。

下を見おろすと、奇岩が廣く海の中に横たはつて、海水が白く、その周圍にあたつては碎けてゐる。

立つてゐると氣が遠くなりさうな位で、ここで一週間も暮らせば、その清澄すぎる空氣と太平洋に向ふ自然の雄渾さのために、無心のやうな境涯から發狂しはしないかと考へたりする。涼しい風がしつきりなしに吹きつける。

更らに僕等は「東海道」と稱する松並木のコースに出たり、「S・O・S」と稱する二町に近い吊り橋の上に出たりする。

そのうちに日暮れが近くなるとゴルフアー達の影も見えず、どこから來たのか、四五人の少年達が現れて、カツプ切りでグリーンの穴を新らしく切りかへては、いたんだ穴を埋めて廻つてゐるのが眼についた。

「何かあるんですか。」

「ええ、あす、試合(コンペチシヨン)があるもんですから。」

彼等は禮儀正しく答へる。

「君達はしあはせですね、こんなところを毎日歩いて。」

しかしそれには微笑して、彼等は何も答へなかつた。彼等の中には女のキャデイが二三人も交つてゐて、彼女達も同じやうに、おしきせらしい、それでも天鵞絨のニッカーを着てゐた。

「この木は何んだらう。小さい松かさのやうなものがなつてゐるのは。」
しかし彼等もその野生の木については何の知識もない。僕達は默つて歩調を合せながら歩いてゐる。
それにしても僕はこのすばらしいリンクを見て、ただ人間が作り得る最も高度で、素朴で、美しいものとして、これを考へた。
吾々は少年達と一緒に歩いてホテルのはうへ歸つてゐた。富士山が時に見えるといふ「富士コース」を歩くのには、もう時間もなかつたし、病後の僕には少々過勞にも思はれた。
ホテルの廻廊の中では、まだ電燈をつけてはゐなかつたが、外國人らしい夫婦が、芝を見渡すテーブルで夕食を始めてゐるらしかつた。
僕等はそれから數日して、夏目漱石のよく行つた修善寺溫泉にゐた。そこは溪流の兩側の小さい町で、梅雨の雨が降り、淋しいといへば淋しかつたが、親しいといへば親しく、明るいリンクと思ひあはせて、陰に入るやうにしんみりとして、時には退屈した。
日ぐらし机に向ひて、と兼好法師は書きだしてゐるが、よしなしごとを書きつらねたくなるのはこんな日々に違ひない。
明るい風を取らうか、暗い雨を憎まうか。六月は、風と雨とがあるから餘計面白いと考へたい。

小岩井紀行

流産の流行

からだが惡いのに、少し調べたい用事もあつて、東北の方へ行つた。福島の競馬に寄り、それから盛岡に出、盛岡から輕便鐵道に乘つて何とかいふところへ出た。何しろ寢ながらの旅で、驛の名を記憶にとめる氣力さへなかつた。

しかしそこで下りて、小岩井牧場からさしむけてくれた鐵道馬車に乘ると、さすがにもの珍らしく元氣が出て、自分も起きあがつてぐるりを見廻した。

道の端にクローバーが、薊のやうに大きい紫色の花をつけてゐる。桔梗が咲いてゐる。茅が白く穗を出してゐる。遠く岩手富士が雪をかついで霧の中に見え落葉松の並木がつづき、私は遠くやつて來たかひをしみじみ感じだしてゐた。

馬は二十幾人の人間をトロッコに乘せると細い鐵道の上をゴトゴトと引つ張りだした。實に驚くべき力で恐らくハクニー種か何かでその頑丈さうな筋肉が逞ましく動きつづけてゐた。どこか

らか郭公の鳴き聲が聞えてゐる。

しきりに高原といふ氣がし、私はあの清澄な輕井澤の林の中を思ひだしてゐた。

やがて赤土のくづれたところに來て馬がとまると、私は東京競馬倶樂部の理事、田中啓一氏と一緒にそこでおり、すぐ前の事務所まで歩いた。

どこの事務所でもさうであるが、壁のぐるりに名馬の繪や寫眞が一杯にかけてある。何れも慧敏さうに耳をたてた姿で、それに騎手が乘つてゐたりすると、一層それが颯爽とみえた。

やがて所長が出て來た。

健康さうな五十恰好の人で、炯々とした眼光をしてゐた。

「實は少し馬を見せていただきたいと思ひまして。」

私がいふと、

「さうですか、そりやよく來て下さいました。然し丁度傳染性流產がありましてね。」

所長がいつた。

「さうですか、そりあ大變ですね。」

それからそれについて田中氏が暫く話してゐた。

「だから折角ですが牝馬のところへはなるべく接近しないやうにしていただきたいんですが。」

「といはれるのは。」

「いや、この病氣に傳染すると折角の懷姙がみな無駄になつてしまふんです。一昨年は青森邊から一體にこれが流行して來ましてね、馬産地は非常な恐慌を來たしたんです。」

やがて吾々は一應外界からの帶菌者として、ここの事務所にあるゴムの長靴にはきかへさされた。つまり外界との接觸を出來るだけ禁じようとしてゐるのである。何しろ一匹が三、四萬圓にもならうといふ子馬を、母馬が落してしまふんでは、これは大變な筈である。

「この病氣は病源菌がまだわからないんでしてね。」

田中氏が説明してくれる。

「然し面白いですね。若しさういふ病氣が人間にも移殖出來るものなら、さぞ喜ぶ連中が多いでせうね。」

私が笑ひながらいつた。

「さうですね、人工流産などといふ面倒がいりませんからね。」

「そりやこの病氣にかかると、たわいもなく流産するんですからね。」

われわれは重い長靴をはいて草の中を歩いてゐた。

「何の苦痛もないんですか。」

「ええ、そりやもう何でもないんで、その邊へ落して知らぬ顏をしてゐるんですからね。」

田中氏が説明してくれてゐた。

「それで、かかると一生駄目になるんですか、その方が。」
「いやかかつても、なほればそれでいいんで、あとは引かないんです。」
所長がいつた。
「そんなら全くあつらへ向きですね、人間に傳染せるもんなら。」
「ところが馬にとつては大禁物でして。」
所長は馬以外のことは何も考へてゐないらしかつた。

名馬シヤンモア

われわれは高いポプラの並木の下を通つてゐた。左側に池が見えて、鶯や郭公が遠くで鳴いてゐるのが聞えた。かと思ふと近くで「ヒキロ、ヒキロ」と行々子が鳴いたり、杜鵑が頭の上を鳴きながら過ぎたりした。
「羨しいですね、かういふところで……」
「のんきではありますがね、何しろ文明といふものと切り離されてゐるんですからね。」
全くそれは廣々として、素朴で健康で、こんなところがわれわれの世界にあるかと不思議な氣がするくらゐのどかであつた。
「どのくらゐありますかね、ここは。」

「三千八百町歩。そこへ馬、羊、牛、豚などが全部で五百幾頭ゐます。」
そんなことをいつてゐるところへ、後から蹄の音をドッドッとたてながら放牧してあつた馬が、たて髪を動かしながら一本道を走つてくるのが眼についた。
われわれが道の横によけてゐると、この大きい潑剌としたサラブレット種の母馬達は、小馬をつれながら自分達の廐舍の方へ、鼻を鳴らしながら歸つて行つた。
「あれで自分の部屋は決して間違へませんからね、賢いもんですよ。」
それからわれわれは靑い原の中を、長い間歩いて一つの廐舍に近づいた。原の眞ん中に林檎の木か何かがあつて、われわれはその下へ行つて腰をかけてゐた。
すると小さい馬丁が、有名なシャンモアを引きだしてきた。黑鹿毛の、眼の大きい、見るからに名馬らしい精悍なところがあつた。系圖をみると「產地、英國。父バッカン、母オルランス」と書いてある。バッカンといへば一度の交尾料四千圓といふ大變な馬である。
兎に角このシャンモアが、ダービーの三著馬で、廿萬圓といふ日本の種馬中での最上のものだといふことは前から知つてゐた。
「立派ですね、さすがに。」
「いや、この頃はとりわけ男油がのつて、もう張りきつてゐるんですよ、このとものよさと來たら比類がありません。」

主任の男が說明した。
やがて所長が、
「よし」
といふと次の馬が引きだされた。
馬はわれわれの前で止り、それからさらに向ふの方へゆき、それからまたひき返して、われわれの前で止り、それから厩舍の方へ歸つてゆく。これが馬を見せる時の方式であるらしい。

日本馬

「冬が來るとどうなりますかね。」
「雪が何時も二三尺積んでゐますからね。だからあれが、その時の飼料を置くところです。」
圍ひをした牧柵の眞ん中のところに一間四方くらゐで小高いところが板でこしらへてあつた。
「雪の中でも放牧するんですかね。やつぱし。」
「え、え、どんな日でも缺かしません。」
それからわれわれは夕暮れて、もう薄暗くなつた厩舍の中へはいつて行つた。すると脊の低い、たて髮の部厚い、顏のしやくれた一匹の馬が眼を光らしてじつとしてゐるのを見付けた。
「日本馬ですよ。これは今は少いんですが、忍耐づよくて、なかなか役にたつんです。ただし、

意地が惡いんで。」
主任がまた說明してくれた。
さういへば古い日本畫などによくある恰好の惡い、あれがこの馬の祖先に違ひなかつた。
「鹽原多助の馬もこれだつたんですね。」
冗談好きの田中氏がいつた。

朝の調教

夜は俱樂部にとめてもらつた。
白木造りのなかなかいい家で、撞球場があつたり、談話室があつたりした。恐らく馬を買ひにくる馬主や、岩崎家に關係のある人々が時々やつてくるのに違ひない。
われわれは疲れてしまつて横になるとすぐ眠つてしまつた。それに朝四時頃から、牝馬の發情試驗をしてゐるから見るなら見てくれといふことであるし、七時には三歲馬の調敎があるといふ。
確か夜なかに梟が鳴いてゐるのを一度聞いたが、それだけでもう前後不覺に眠つてしまつた。
不思議なもので、平生は身體のことばかりかこつてゐる自分が、四時半が來ると、ちやんと眼をさまして田中氏を起した。
「もう四時半ですよ。」

太い鼾をかいてゐた田中氏がすぐ眼をあけた。
「ぢや行きますか、今から。」
それからわれわれはまたゴムの長靴をはき、牝馬の廐舍の方へ行つた。明けきらぬ朝の空氣が何ともいへない。
主任の男が一匹のあて馬と稱するものの手綱を持つて、四尺くらゐの高さのある板境の向ふに立つてゐる。
そこへ一匹づつ牝馬を近づけてゆく、するとあて馬はいちいち牝馬に愛情を示して、首のあたりや腰の方を舌でなめだす。
然し發情してゐない牝馬はすぐ怒つて後足をあげると牡馬を蹴らうとする。幸ひに板境がそれを防いでゐる。
中に一匹か二匹か發情してゐる馬があつたが、かういふ馬は、すぐ親しさうに牡馬の首に自分の首を交して親しさうな態度を示す。
「確らしいね。これは。」
二三人立つてゐる牧夫達が口々にそんなことをいふ。牧場の中は實に早起きで、もうみんな朝の仕事に從事してゐるのである。
やがてわれわれは三四十分かかつてニューマーケット競馬場のコースに似せて作つたといふ直

線コースの調教馬場に出た。
そこには高い櫓が立つてゐて、その上で調教が見られるやうな裝置になつてゐた。
岩手富士の裾野にあるこの牧場の風景は實に茫々として見渡す限り青々として、われわれを蘇生さすに充分であつた。
田中氏と私は、そこのベンチにあふむけになりながら、馬の現れるのを待つてゐた。
「日本なんかは家系の正しい方ですがね。人間も馬のやうに改良したら、どうかと思ふんですがね。」
田中氏の說である。
「だが人間には智能的に遺傳がありますからね、いい智能も惡用すればひどいことになるし。」
「しかし馬のやうに幾代にもわたつて系統をとれば面白いと思ふんですがね。」
吾々はそこの椅子の上に横になりながら、アメリカのカリケック・ファミリイの話をしたり、日本の妾制度について話したりしてゐた。
と、遙か向ふから青草の間を騎乘の一隊が走つて來る音がした。例の三歲馬である。

馬丁から離れぬ馬

自分達はすぐ起きあがると馬名表をだして馬の脊中についてゐる番號と見くらべだした。

馬はわれわれの前をすぎて向ふの方へ行くと、そこで暫く囘轉運動をしてゐたが、やがて一直線になつて、現はれると、われわれの前を恐ろしい速度で走りすぎた。かういふ靜かな所では、鼻息の音が、蹄の音よりも、もつと烈しく、馬の逞しい生活力が生々として身にせまる思ひがした。

握り飯の朝飯が運んで來られた。所長が現はれた。われわれが食事をしてゐると、その前の直線コースを馬は幾度となく行つたり來たりする。

田中氏が時々櫓の上から下りて行つて馬の寫眞をとつてくる。

やがて所長が双眼鏡を私に貸してくれると、

「あそこを御覽なさい。馬丁と馬がゐるでせう。」

さういつて敎へてくれた。

見ると、牧柵に腰をかけてゐる馬丁の肩に馬が首をさし入れて如何にも親しさうにしてゐた。

「ここ出身の馬ですがね、少し疲れをだして保養に來てゐるんです。實に馬丁と仲のいい馬で、馬丁が歩くと歩き、走ると走るといふ有樣で、見てゐて氣持がいいですよ。」

なるほど双眼鏡の中に見える馬は、やがて馬丁が動きだすと、それに從つて動きだした。のどかで、平和で、愛情に溢れ、私は久しぶりに心が爽快になるのを覺えた。

「人間も時々かういふところへ放牧する必要がありますね。」

またしても田中氏の說である。田中氏においては、常に人間生活といふものが、むしろ馬から割出される傾向があつた。それほどに馬を愛してゐるといふことがわかり、聞いてゐると、そんなことも大變氣持がよかつた。

實際かういふところに二、三ケ月もゐれば、自分のやうなものも、もつと健康になれさうな氣がし、何か出來る仕事があれば、來たいと思つて、そんなことを尋ねたりした。實際ここへ來て以來、自分ながらに不思議なほど生き生きしてゐるのである。

「先年、菊池さんが見えましてね、馬を買つてもらひましたが、餘りいい成績でないんで、すまなく思つてゐます」

所長がそんな話をはじめた。

われわれは朝の調教を見終ると、青い丘を越えながら、再び事務所の方へ歩きだしてゐた。

漸く陽があがつて岩手富士が藍色に現はれ、またしても郭公の聲が聞え、杜鵑の聲が聞え、高原の牧場はますます私に去りがたい親しさを覺えさすのであつた。

海山のころ

夏がくると大抵の人は海か山かへ住居を移す。暑さをしのぐ許りでなく、一ケ月か二ケ月、全然變つた環境に自分をおくことのたのしさがそれには隨分ある。

かういふことも十年位前からの流行で、今はどんな人も試みない人はなくなつた。

關西の方ではどんなところがいいのか知らない。恐らく六甲などが最上で、それから芦屋あたりを中心とする海岸一帶がいいんだらうと想像してゐる。

東京附近では何といつても山では輕井澤、日光、山中湖畔。海では葉山あたりではないかと思ふ。

但し輕井澤と云つてもいいのは舊輕井澤だけで、あそこは落ちついて、さすが歴史のある避暑地だけに大變好ましい。贅澤だといふが、先づ至れりつくせりで、ああいふところで贅澤のないところはつまらない。從つてあの近くの千ケ瀧とか法政大學村といふあたりは、ちつともいいとは思はれない。ただ涼しいだけならもつと素朴なところへ行く方がずつとましである。さういふ

わけで、あの邊一帶を今は輕井澤と呼んでゐるが、輕井澤にもいろいろ通りがあるわけで、模造の輕井澤へだけは行く氣がしない。
日光は山内か、中禪寺湖畔か。中禪寺湖畔はいいにちがひないが、あそこにはどういふわけか、大使館や何かは大抵ある癖に、個人の別莊とか貸別莊といふものが割合に少い。貸別莊に至つては皆無といつていい。然し夕暮れ、少し寒い位の湖畔の道を三々伍々として歩いてゐる外國人を見かけたりするのは何となく違ふ世界へ來たやうで樂しい。
私の今行つてみたいと思つてゐるのは野尻湖畔で、まだそんなに一般化してゐないだけによささうに思はれる。
然し避暑といふものは、すればしていいが、しないでゐるのも又面白い。
行きつくなら早く行くのが自慢らしく、歸るのなら九月にならぬ間に歸つたり、又別のところへ變るのが通らしい。
この間ある友達に逢つたら、
「今年はやめた」といふ。
「どうしてだ」と尋ねたら
「好きな人が東京に殘つてゐるからだ」といふ。
そしてそのことを彼の父親にいつたら「行く家があつて、出かけないのは贅澤の限りだ」とい

つて叱られた、といつて自慢さうな顔をしてゐた。
かういふ人種の考へることは全く奇矯で、贅澤の喜びをどこに見つけるのかわからない。夏の銀座などを歩くのは、ひところ輕蔑せられてゐたが、このごろはさういふ連中が得々として歩いてゐる。
別莊があつて出かけないといふのを一つの趣味にするんだから、その頽廢にはなかなかの刻苦がある。
さて海へ行くには、肉體の美しさが無ければ肩身がせまからう。從つてそこには若い人達が多い。然し鎌倉や逗子などのやうに混雜してしまふところは、華やかでも決して樂しくはない。あの神經的な興奮した空氣は思つただけでも嫌ひである。
私は葉山邊のそれも一色か、山口か、あのあたりが一等いいと思つてゐる。それからもつと奥の秋谷などへゆく人も時にはあるが、秋谷になると少し淋しすぎる。總じてわざわざ居を移すぐらゐなら、退屈しないだけの賑やかさと、環境の珍らしいところを選ぶのが最もいいにちがひない。

『左手神聖』の序

「生き物をとりくらへよ」といふ黑住敎の敎理の中で、自分は年少の時代を過した。稍々長ずるに及んで、パウロの『ガラテヤ人に與へる書』を愛讀し、又ルーテルの熱烈なその『註釋書』を自分は身邊から離さなかつた。その頃の自分は、キリストに對する熱情によつて裝飾せられ、完全な精神主義者になつてゐた。だが何時の頃からか自分は又異端の徒に變り、放恣な空想に支配せられ、肉體の力に總てひきずり廻され、征服せられてゐることに氣付いた。然もこれこそ眞實であると思ひ、自分の心は悲しみから一躍して甚だ誇りに滿ちてゐた。だがそのうちに自分を自分にするものは、福音でも肉體の氾濫でもなく、社會の機構だと更らに考へだしてゐた。丁度マルクス說が擡頭して來た時代で、自分は自分の力を覺悟しながら、尙ほその思想と根氣よく對立し、これを刺戟し、調伏しようとした。その藝術と關聯して述べられたものが、自分の『形式主義藝術論』である。だが何れにしても漠然とした自由の思想に支配せられてゐたことは事實であつて、年少の時代から決してそのことに變りはなかつた。そしてこの形式主義の進行は、或る

一體に到達すると、規矩ある法則、嚴肅なる形式といふものに變化して現はれだした。自分の前にあるものは總て科學的な世界によつて、自分並びに周圍が全部決定せられてゐることに氣付きだした。自分を支配するものも又自分自身さへも、等しく時間と空間の組織でしかないことを思ふ時、自分といふのを漂々として世界の一片にしてしまつた。自分は今何の誇りもないし、又何の卑下もない。最後に文學者として到達すべき道がどこにあるのか、それは盲目のやうな手探りでは到底觸れられるものではないが、ただ、今の自分は、冷靜な心境に先づ徹することに自分の課題を持つてゐる。自分の文學に對する考へ方は、そんなに變化したわけではないが、今日までに文學論らしい書を前記の一冊と共にもう一冊出してゐる。だが實際の自分の姿は、そこに無つたかも知れない。反つてこの『左手神聖』の雜漠な自分の通過した世界を小說のひまひまに、思ひのままの冗談半分に書いた文章や、放言に近い言葉の中に赤裸の自分を出してゐるやうな氣がする。自分の心は自分で打ちたてた文學論にさへ絕えず煩惱し、爭鬪しつづけてゐる。これは自分の今日までの信仰を轉覆せしめて、仲間に告げるやうな種類のものでは決してないが、多少考へられてゐる自分を、最も自由な表現に於て訂正してゐないとも限らない。その意味でこれは自分にとつて最も親しい書である。

ドストイエフスキイ

ずつと前、『罪と罰』を讀まうと思つて、どうしても讀めないことがあつた。幾度も新しい氣持で讀み始めるのだが、三十頁位まで讀むと、いつもそこで止つた。どんなところで止つたのか、今繰りひろげてみると面白いと思ふが、手もとに本がない。兎に角、その時には十度位試みて、そして十度ともその邊でとまつてしまつた。それなら讀書に對して自分がその頃怠惰であつたかと云へば、必ずしもさうではない。國譯大藏經を第一卷から無暗みに讀みだして、あれを四卷頃まではとにかく讀んだ。同じやうな文章や、同じやうな事件が幾度でも出る。その上何よりも意味がわからぬ所が大部分なのに讀み通した。それなのに『罪と罰』は三四十頁より向ふは行けなかつた。そんなら小說に興味を求めてゐて、それが『罪と罰』の最初になかつたからか、といふと、さうでもないらしい。二十歲前後の私は小說を一度も興味では讀まなかつた。だいたいあの頃の小說は興味的にはみな面白くなかつた。とりわけ自然主義時代で面白いなどと思つて小說をよんだりすると叱られた。だから通俗小說などといふものは輕蔑してただの一つも讀まず、小說

に興味を求めたことなどは一度もなかつた。してみると『罪と罰』があんなに苦痛であつた理由がわからないのである。大藏經がよめたのは、そこに音樂めいたものがあつたからかと思ふが、さういへば音樂どころか、それがひどい惡譯だつたのではないか、とも考へてみるのだが、それだけでもなささうに思ふ。といふのは惡譯か何か、兎に角トルストイの方は讀めたのに、ドストイエフスキイは依然として讀めなかつたからである。それ以來私はドストイエフスキイといふものを讀まないのである。ところがこの頃『理想の良人』といふものをよみ、彼が常に惡魔によつて支配せられ、然もその裏がはに痛烈に神を見ようとしてゐることを感じ、このことは、世界の藝術家が唯一人彼ほどには試みなかつた事實だと思ひ、こんなに興奮し、痙攣し、氣違ひじみて、それを追究する作家はなかつたと思つた。彼の考へてゐることは、常に二つの兩極端を一つにすることであつたらしい。それは神と惡魔だけではなく、喜びと悲しみを、死と生とを、結婚と汚辱とを、まるつきり正反對なものを一つにしようとする努力が吾々の近代の藝術と非常に近いことを考へさせる。然も彼はそれら二つの間で絕えず矛盾し、撞着するのである。吾々の時代に彼が呼びかけるのは、彼が肉體よりも靈魂的であるためではない。又彼が神と惡魔との抽象を新しく提供するからでもない。ましてジイドがドストイエフスキイを論じたからなどであつてはたまらない。彼が如何に正反對なものを、複雜多端な心理の蔭で一つにしようとしたかといふところに、彼の不思議な天才の發見があつたのである。近代人はこれを技術によつて試みようとする。

然し彼はこれを生活から發足させてゐる。彼の生活自身が常に正反對な存在の矛盾の中にのみあつたと思はれるところに、彼の魂の深さと精神の強靱さとが感じられる。彼の藝術は何よりも常に彼の生活の深淵をのぞかせる。彼の生活が恐らく彼の作品よりももつと深刻であつたことを常に想像させるところに彼の强味がある。彼こそは近代藝術の特長を彼自身の生活から發足させた唯一の男である。その意味で彼の作品は常に藝術からはみだし、藝術にならなくともいいらしい。大體私は氣質的に藝術以上のものを藝術から感じることを好まない。だから彼をつまらないと思ふことが時々ある。だいたい彼には健全な寫實主義といふものが無い。その爲めに吾々は彼からは眼に見えるものよりは聞くものを多く受取る。然もそれが非常に非音樂的である。吾々は何でもいい、ただ心を打たれる。叩きのめされる。彼の悲痛なあがきと憎惡の中に卷き込まれて同じやうに苦しむ。彼のやうに、ふてくされた恐るべき男は無いと、そのたびに思ふ。恐らく私が幾度か讀まうとして昔、讀みすすめなかつたのは、恐らく藝術以上か、以外のものをそこで感じすぎたからにちがひない。さて『理想の良人』であるが、これは彼の作中、最も結構の整然とした、透明な作品であるらしい。讀みやすいことでも事件が最初から初まるから非常によく這入れる。ところで私はこの作では「ザフレービニンの別莊にて」のところが最も面白かつたのだが、ただああいふところはまだまだ彼の場合ではなまぬるいのではあるまいかと思つた。恐らく他の作品をよめば、ああいふことはもつともつと恐ろしく書かれてゐるに違ひない。それが破壞的であら

うと惡魔的であらうと、そこにこそドストイエフスキイがあるので、どんなに退屈してもそこをつきぬけて彼の最も慘酷なところへ行かなければならないのではないかと思つた。

その意味で『理想の良人』を彼の傑作とすることは、彼を小さく眺めることにしかすぎないのではないかと思つた。あゝいふ種類の作品なら彼よりももつと別の作家からも求められないことではない。彼はやはり藝術以上といふ點でいつも讀まれ、或ひは捨てられるのではなからうか。ただ彼はどこまでも暗い。彼の作品における救ひはただ神のみであるが、然も中世紀以來の神といふものは何時もきまつて甚だ陰鬱だからである。アラン・ポウに於てはその陰鬱さが、彼の求める新奇な世界によつていつも救はれる。だが彼にはそれが無い。私は何時か新らしく『罪と罰』を讀みなほして、自分が十六年前に讀みすすめなかつた理由をもつと審かに考へ、その感想を、もう一度書いてみたいと思つてゐる。私は何も讀んでゐない。本當は彼に就いて語る資格はないのである。

直木三十五の死

附・文壇醫學の危險について

新感覺派といはれた頃、吾々は直木三十五からは隨分とひやかされた。なかなかひどいことも云はれたのに不思議と、ちつとも腹がたたなかつた。それが匿名であつたせいもあるかも知れないが、あんなことも直木氏の德の然らしめるところで、どんな惡口にも棘がなく相手を微笑さすところがあつた。

それは署名してある後年の論爭でもさうで、あゝいふ人格といふものは決してざらにあるものではない。だが私は直木氏のことを書くのにこんなことから始めていいかしら。

直木氏の歷史小說に就いては『文藝春秋』に數ケ月に渡つて、谷崎潤一郎氏がいろいろな面から微細な解剖を試み、とりわけその合戰の描寫の卓拔さに就いては白石の『藩翰譜』を引用したりしていろいろ讃歎してあつた。あんなに直木氏を認め、あんなに直木氏を理解した長大の文章は嘗て見たことがない。谷崎氏にしてなほ新らしく發見するものが多かつたからに違ひない。あ

れが直木氏の仕事に就いて充分に說明してゐることはいふまでもない。
だからそれ以上に吾々のつけ加へることは何もない。とりわけ私のやうに新聞小說といふものは、もの心ついて以來一度も讀んだことのないといふやうな人間には齒のたてやうがないのである。もつとも先年病氣の恢復期に六七篇いろいろな作家の大衆小說を一わたり拜見したが、ああいふ時の讀み方で感想を述べるといふことは明らかに間違ひである。直木氏を論ずる積りならば直木氏を讀みなほさなければならない。それが禮義であり、評者の良心でもある。
それにしても芥川氏が自殺した頃は、丁度芥川氏は谷崎氏と應酬したりしてゐたが、今度は直木氏は谷崎氏に讃められて死んで行つた。どうも谷崎氏は變な人だと思つてゐる。
さて直木三十五の死に就いて何よりも殘念でならないことは、直木氏がひたすらに素人療法にたよつてゐたといふ一事である。あんなに科學といふことをむきになつて主張し、二三年前、僕等が、橫光や、川端や、池谷などと季刊の豪華版の雜誌を計畫してゐた頃、あの無口な直木氏が急に科學に對する熱情を示し、農業に於ける新らしい科學が農民問題を解決するなどといつて、實に不思議に雄辯になつたのを覺えてゐるが、それでゐて素人療法を强硬に續けてゐたのは何としても自分には解釋がつかない。だいたい解釋のつきにくひ人であつたが。
あの人のことだから何か直木流の精神療法といふやうなものでも發明するつもりだつたのか、それとも死といふものを谷崎氏のいふ大人振りから何となく達觀してゐたのか、だがさうすると

直木氏の身體に對するなほざりは、病死といふよりは、寧ろ自殺的行爲であつたといはなければなるまい。

そもそも私は現代の文學者達が、滔々として迷信に近い無智を行ひ、醫學的知識に缺如してゐるのを不思議に思ひ、日本の腦髓ともいふべき彼等にしてかくの如きは寧ろ赤面にすら價すると考へたことがあつた。

だからこそ、まして一般民衆にとつて得體のしれぬ賣藥が大切になつたりするのであるが、あいふのを見、とりわけ直木氏の死を思つたりすると、私は限りない殘念と一緒に一種の憤りをさへ感ずる。

ひと頃、まむしの注射といふものが文壇で流行し、私も病身ですすめられたが、その親切は母親の愛情のやうに身にしみるところはあつたが、あんな馬鹿馬鹿しいものは、どんなにすすめられても身體の中へ一滴でも入れるのは恐ろしい。どこにこの注射の實驗報告があり、學界に於ける誰れ誰れの説明があつたらうか。五人や六人が快癒したといふやうなことは吾々には何事でもないのである。まむしなどの異種の蛋白が吾々の身體を刺戟するといふことはわかつてゐるが、それ以外にそんな注射を頭から信用することは到底正氣では出來ない。少くとも科學的教養といふものを生活的に受けて來た吾々には、さういふことは一種の不可解でしかない。それを自らすんでするといふやうな心理は、溺れるものが藁をつかむやうな狀態でなら仕方がなく、又道樂

半分にあの藥この藥とやつてみるただ藥を愛することの好きな、廣津氏のやうな人にはいいが、僕等にはただ何となく不安で馬鹿馬鹿しいだけである。文壇第一の聰明者といはれる廣津氏があいふことをするのは健康すぎるためか、それとも廣津氏らしい常識の越え方かとも思ふのだが、少くとも吾々はこの機に於て自ら戒め、林春雄博士の藥物學や、南江堂版の醫典位は座右に備へて、その生活の一端からして科學的に整理しなほす必要があるやうに思ふ。

私は素人療法といふことを思ふと、日本人の科學的教養といふことが實に附け刄で、一般的に低く、身についてゐないことをしみじみと感ずる。

藥といふものの判斷も新聞廣告や噂による程度で、醫者に相談することを知らない。こんな野蠻なことはないと思ふ。守田勘彌のやうに金光教で鼻の病氣を癒さうとこそしないが、滔々たるこの風潮を、私は文壇醫學と呼んで、半ば輕蔑し、半ば悲しんでゐる一人である。直木氏の場合にも、さういふ風潮の多少とも感じられることは口惜しくてならない。これは病氣に對して神經質になれといふのではなく科學を生活全體に持てよといふのである。

吾々の周圍には正木不如丘氏とか宮田重雄氏とか相談すべき名醫は多いのである。敢て素人療法のみを樂しむ必要はあるまい。自分の空想で療養することが望ましければ、同時にまづ精密なる醫學にたより、平行して獨創を實驗すればよいのである。

つひ餘談に走りすぎたが、文藝春秋倶樂部で池谷信三郎のお通夜をしてゐた時、直木氏は腰を

おさへながら壁につかまつてやつと二階にあがつてくると、池谷の靈前で、その時は朝が近く、寒さのこたへる時刻であつたが、
「池谷も冥途で淋しからう。來年は俺が行つてやる。」
と呟くやうにいつた。
僕等は冗談とも眞劍ともつかないその言葉に胸うたれたが、あれから來年どころか三ケ月とたつてゐないうちに直木氏はなくなつてしまつた。
その時直木氏は僕が素人療法について注意すると、餘計なことはいはんでもいいといふやうな口調であつた。
だいたいカリエスで骨に故障があるといふのだから、ビタミンDの補給のために太陽の光線の必要なことは、吾々にもわかつてゐるのに矢張り朝寢坊をつづけ、それから柔道の先生に來てもらつて、脊柱の歪んでゐるのを直してもらふのだといつて、痛いのを我慢して押へてもらつてゐた。
大きい身體をした柔道家が、直木氏の細くなつた肌ぬぎの身體をストーブもつけぬ部屋に、うつぶせにして、まるで青竹か、しんこでも拈げるやうに歪めなほしたり、自由自在に扱つてゐるのを見ると、私は身慄ひがした。
「それでも僕等より肌の艶（つや）がいいぢやありませんか。」

と横光がいつた。
すると直木氏は痛いのをこらへながら毛布の下から
「いやこの頃は少しいいんだよ。」といつた。
それからこの療治がすむと、腰を押へながらでも坐りなほして菊池氏や川端と碁をしたりして、その成績を壁に張つたりしてゐた。人間といふものはあんなにも死を豫感したり、觀察したりすることが出來ないものかと、僕は直木氏を思ひ、又自分達自身を思ふのである。あれもほんのこの間で、入院する數日前までさうであつた。入院するのも人にすすめられてしたので自分からは默つてゐた。
恐ろしく頑張りの强い、氣力に滿ちた人であつたことは、それでもわかるが、あの醫學といふものに無關心な態度はどう考へてもわからず、殘念でならない。
「弘法大師を書いて御利益がありましたか。」
丁度、朝日新聞の夕刊に「弘法大師」を書いてゐた頃であつたが、さういふと、默つてうなづいた。
それにつけても文壇を横行する迷信的流行といふものは恐怖に價する。
この間福田淸人がフランス文壇と日本の文壇とを比較して、日本の文學者の短命を論じてゐたが、そしてわづかに德田秋聲氏や島崎藤村氏が、益〻その旺盛なことだけが一つの異例として書

かれてゐたが、あの短命といふことに就いてもいろいろ考へられるところがあるに違ひない。
それは、あの迷信的流行といふものにも、文學者の不可解なものに對する不斷の興味の精神があり、何かの新らしい刺戟を求めようとする奇怪な性格の作用のあることはわかるが、吾々が一度科學に洗はれると、さういふ興味の方向も自然ともつと別なものに變化する。
私が帝大の吳內科へ見舞に行つた時には、腦膜炎が決定してもう五日目で、あの割れるやうな頭の痛みも去り、直木氏は幻覺を起し、平常通りの會話も出來るのだが、ふとすると蜘蛛に對する恐怖を口走つたり、その蜘蛛をコップで押へる眞似をしたり、又仕事をする動作をしてみたりその痛ましさは靜かで恐しかつた。
梅干が欲しいといつたといつて、看護婦が梅干を買ひに走つて行つたり、大草君が時に呼ばれて行つたりしてゐた。
それでも皆マスクをかけ、別室に歸ると手を消毒してゐた。
「廣津氏がさつき來て英雄の末路といふ氣がするといつたが、私は直木氏の「大阪落城」の初めの方を思ひ出しました」
改造社の高平氏がそんなことをいつてゐた。
死を覺悟してゐるところは、「死までを語る」や多少の言說の中にあつたとしても、もう暫く仕事をしたかつたに違ひなく、矢張り生きたいと思ひ、恐ろしい力で死と戰つてゐたことが、病

院でも食べられぬものをなるべく澤山食べようとしたり、あの剛情な人が、醫者のいふことはすなほに聞いたりするところに痛ましいほど出てゐた。
たしかにあの爭鬪の光景は英雄の最後といふ言葉にふさはしかつたに違ひない。
それは毎日病床に來て面倒を見られた菊池氏の眞率な文章をよんでもわかり、自分は直木氏の死が餘りに早かつた事に面くらひ、呆然としてしまつてゐる。
直木氏の實に張りきつた仕事の連續に就いては又精讀する機會があつたらその時に書きたい。直木氏の執着に對する一風變つた恬淡たる性格は、直木一家の剛毅な遺傳らしく、そのお父さんの息子の死に對する感想にも出てゐて、私はよんで微笑した。
あんな強い性格は誠に珍らしく、直木氏の死は惜しんでもなほ餘りあり、吾々をして、何時までも、その人のあつた時の逸事を思はせる。
ただ私と直木氏との間は直木氏の好みのやうに恬淡として、文藝春秋でか、倶樂部でか、たまたまの座談會でか、その他では殆んど逢はず、あの人の別の面に就いては何も知るところがない。知る必要もない。直木氏は私に對して人よりは別な見方をし、好意を持つてくれてゐたといふことをこの頃きき、又作家印象記か何かで、それを云つてくれてゐるのを見たが、私は私の眼に記憶したままのことを率直に書いた。

偶然論と意志説

神秘主義に就いて

吾々を神秘主義者にするやうな事實は幾らでもある。又吾々を所謂精神家にする事件は幾らでも起る。

だが吾々はなるまいとして抵抗する。神秘主義者になるといふことは、生活からの多彩なる抽象を放棄するに等しいからである。だが、人はともすれば神秘主義者になる。神秘主義ほど吾々をたやすく捕へるものはないからである。

だが作品の場合だけは、自分は神秘的な事實を拒否するわけにはゆかない。吾々は現實の生活でいろいろな不思議、奇怪に遭遇する。これは強固なる現實の眞實である。だからそのままを書くより方法がない。これは眞實といふものが持つ力の流れである。どうにも仕方がない。作品といふものは決して抽象ではないからである。

だが評論の場合には、自分は極力神秘主義になることを警戒する。神秘主義などには何時だつ

てなれるからである。吾々は吾々の抵抗を出來るだけ長く持續させなければならない。そこに吾々の文學の振幅が發生する。

ヴアレリイの飜譯

この頃、堀口大學氏譯のヴアレリイの『文學』といふ本を讀んだ。彼が高等數學的な高度の正確さと緻密さを持つて「詩」に就いて、「新しさ」に就いて論じてゐるのを讀んで甚だ敎へられた。自分は數年前、形式主義に就いて考へてゐた時、ヴアレリイの中から長い引用文をしたことがあつた。今この書を讀みながら、更に「形式と內容とは對立しない」といふ言葉を發見して、これはどうしてたことかと、不思議な約束のやうにこの本を潜在する意識の中で幾度も開きなほしてゐる。

新らしい意志說

今日では旣に唯物論でも唯心論でもない。さういふ分類は通用しない。なぜならばさういふ考へ方で分類せられるほど何事も最早單純ではないからである。

エディントンは、總てが機械的に動かないで、偶然にしか動かないのは、總ての物體に意志があるからである。意志が運動を變化せしめる。意志が無ければ總ては機械的必然によつて進行す

るだらう。だが總ては偶然にしか動かない。そして彼は意志說を科學的歸結から引き出さうとする。又ブラッグ教授は量子力學に於ける偶然性を比喩して、「被實驗物が常に實驗される時に用意したり、これを感じたりする」ことをいつて、嚴密な實驗といふものが物理的な實驗に於ても不可知世界にまで這入ることをいつてゐる。

科學から特殊な宗教や哲學を引きださうと試みることは危險であるが、そこまで行かなくとも、吾々は意志の世界といふものを常に實生活に於て感ずるのである。たしかに意志がある故に偶然を起してゐる。そして意志と偶然とを同時的に考へることによつて、吾々は吾々の藝術を貫通しなければならぬものを感ずるのである。

偶然論といふものは決して意志を否定し、目的を否定するものではない。寧ろそれぞれの意志と理由によつて總てが動いてゐるが故に偶然が起ると考へるまでである。意志或ひは目的が、その通りに實現しないのは意志或ひは目的が無數の各存在の系列に於て衝突するからで、これ即ち四大暴流であつて、卽ちそこに計算以上の偶然が働いてゐるからである。卽ち吾々は小說の主人公を動かす時、そこには動く理由が常に必要なのである。彼は作中で動いてゐる。それは人間としての意志と理由とを以つて動いてゐる。然もそのことによつて彼は偶然の中にゐるといふのが眞實の描寫である。偶然とは意志や目的の否定ではなく、寧ろ意志以上の意志、目的以上の目的を知るところの一段と高度の世界である。

戀愛小說

愛慾の問題は誰にでもわかるといふ點で、小說の素材として最も有利な位置を持つてゐる。如何に多くの作家が古來戀愛問題に心を碎いてゐることか。然し一般の誰にでもわかりやすいといふ特點を持つてゐるだけに、それは最も困難な題目である。吾々は戀愛に關する何と多くの卑俗なモデル小說や又それを眞似たたわいもない戀愛小說を同人雜誌などで見せられることか。

歌人は相聞の歌は最もむづかしいと云つて最も警戒してゐるが、我々も愛慾に關する小說に就いては何よりも警戒を必要とする。

次に衣食の感情も甚だ普遍的であるが故に重大な位置を持つものである。そこでプロレタリア作家の如きは、もつと意識的に衣食に對する本質的な慾望感を鮮明にすれば、これはなかなか烈しい感染力を獲得するに違ひない。

然し誰にでも通じやすいといふ特點があるだけに、それだけそれ等の問題に安易に乘ることは、世の歌人達がいふやうに、何より注意しなければならない。

眞似

讀まないで批評するといふことは昔からある批評の一つであるらしい。然しそんな事の出來る

批評家の心理ほど氣の毒なものはない。少くとも或る作家に對して概念を持つ爲めには十や二十位の作品は讀んでからにすべきである。もつとも幾ら讀んでも、おのづから獨創のない批評家もある。日本の批評家など全部が全部、眞似の仕合ひをしてゐるやうに思はれることもある。これを稱して衆評の一致といふ。この衆愚の一致ほど天才を殺し、且つ殺すことによつて時に輝かすものはない。

小說の定義

小說に就いては吾々は旣に定義を必要としない。何を書いてもいい。何時か千葉龜雄氏も旅行文學に關連してさういふことをいつてゐられたが、あれは本當である。

「あれは小說であるとか、無い」とか、そんな煩瑣な批評は現代では無用である。「あれはうまい小說か、下手な小說か。」それで充分である。それから向ふは更にどんなに晦澁でもそれはよからう。吾々は今、どんな出鱈目を書いてもいい。ただそれは確固とした方向と信念とを持つてゐなければならない。現在の小說書きほど、自由でありながら、なほ不自由な小說を書いてゐるものはないやうにも思はれる。一つの不自由な狀態が吾々に自由な理論を持たしめてゐるのかも知れない。

嘗てエンゲルスは「何よりも偶然を認めてゐた」さうである。然るに今日までの日本のマルクス主義者達は全く偶然を顧ず、小說までを必然によつて縛らうとしたのである。このことは明らかな事實であつて、彼等の陣營の一論者である森山啓氏さへが明白に認めてゐるのである。

「プロレタリア文學の方面でも（プロレタリア文學に限つたことでもないが）過去においては必然性や法則といふものを機械的にしか理解してゐなかつた時もあつた」（『若草』十一月號）

かくの如き事態がどうして存在したか。何故に起つたか。このことをハッキリとその思想體系に關連させて反省しなければならない。且つ現在でもそのやうでありはしないか。

吾々の所說がオミクヂであつたか、なかつたかは、彼等の陣營の者さへが次第に發見しだすにちがひないのである。現に彼等は、嘗て論じなかつた偶然をしきりに口にし、大切にして今日しきりに論じてゐるではないか。

科學の係戰

文學の本質が變るか、變らぬかに就いて論ずる。

だがそんなものは變つたつて、變らなくたつて心配を要しないことである。信ずるところをや

つてゆくより仕方がない。だが文學といふものが、短歌の時代には短歌であり、源氏物語の時代には源氏物語であり、連歌の時代には連歌であり、芭蕉の時代には芭蕉であり、西鶴の時代には西鶴であり、近松の時代には近松であるといふことは眞實である。即ち文學の本質はともあれ「明日の文學」が無いなどといふことは、ただ大人ぶつた口吻にすぎないのである。

かといつて、自分にだつて、明日の文學に就いて豫想することなどは到底出來ないのである。

ところで先日、ロータリー倶樂部の一會員に逢つたら

——歐洲大戰を境にして、科學が餘りにも烈しく發達しすぎたために、然も吾々の習慣や思想はなほ多くの過去の尾を引いてゐるために、常に生活に混亂が來る。吾々の生活に於ける種々なるギャップは科學の餘りにも眼ざましい發達から來てゐる——

と、いつてゐた。これは決して新らしい批判ではない。だから明らかに、何人をも首肯さするに足る所說である。現代に於ける科學の發達は寧ろ吾々が想像する以上に發達してゐるのである。

そこで國際聯盟の一人の委員は「科學の休戰」を議題として提出しようとした。科學を恐怖しだしたのである。だが、それは勿論マルキストがいふ十九世紀の科學では毛頭ない！　一人の國際聯盟委員が、科學の支配に對して恐怖を示しだしたといふことには別の理由もある。

即ち生活の上の古い統制を取り返したいからである。生活の上の混亂を救ひたいからである。今、暫く科學を休戰することによつて、遲れてゐる思想と習慣とを科學に接近させなければなら

ないからである。またそれにはも一つの理由がある。即ち現在の資本主義を崩壞せしめるものがマルキシズムではなくて、反つて科學の怖るべき發達にあると考へられるからである。

だが科學を休戰せしめることは到底不可能である。吾々は吾々の習慣と思想とを、烈しく科學にまで進行させなければならない。これは至極あたりまへのことである。勿論吾々の文學をも。然しこと文學にまで關してくると、人は常にこだはりだす。「文學と科學とは違ふ」といふ。至極あたりまへのことである。

文學と科學との區別を說明しなければならぬといふことは寧ろ悲劇である。藝術的價値と科學的價値とは別である。藝術に科學的價値を要求するのは男に女を要求するやうに滑稽である。だが吾々は「明日の文學」を信じてゐる。西鶴の時代に西鶴がゐることを知つてゐる。吾々の生活が最も烈しい科學との交流を持ちだした時、吾々の文學が生活の反映として科學的な要素を次第に持ちだすのは餘りにも明白な流れである。

つれづれ形態學

山に就いて

ずつと前、長谷川傳次郎氏の『ヒマラヤの旅』といふ大册をくりひろげて、あの素晴らしい印度の山嶽風景の雄大さに驚いたことがある。ああいふ大味な景觀といふものは、日本などでは到底のぞめるどころではない。

それは寒暑の極端の間にあり、忍苦と健康とを要求し、人生の厖大、無邊際な思想といふものと連關してゐるらしく思はれる。

一ケ月も二ケ月もかかつて麓から次第に目的の山に接近し、その途中の山々で修道院を訪問したり、蓮華の形をしてゐるといふマナサローワ湖のほとりへ出たり、そこへ出ても尙ほカイラースの山が四十哩へだててやつと見えるだけだといふやうなことは、この微々たる山水の間を徘徊してゐる吾々には想像もつかぬ旅程である。

宗教心のない登山家と雖も、これらの山を登つてゐれば、その心が忍耐で裝飾せられ、悲喜と

希望の絶えざる與ゆきの爲めに、又自然の計り難い力の爲めに、宗教的になるのはもつとも至極である。

二萬二千廿八呎あるといふあのカイラースの聖山が、勿論年中雪をいただいてゐることは云はずともわかつてゐることであるが、それが高々と聳えて、然かも××の形によつて印度宗教に一つの根本的な感情を集めてゐるといふのだから、考へただけでも壯觀以上である。

それにつけても、人間の感情といふものが、かういふ最も偉大な自然の風景によつて支配せられ、ひきづられてゆくといふところに、私は昔から格別の興味を覺えてゐる。それは丁度日本人が富士山を尊敬し、これによつて自己の氣持ちを表白してゐるのと同じで、吾々は東海道を汽車で走りながら、あの端麗な山の姿を前に見、後に見、しまひには少々うるさくならぬこともないが、何といふことなしに心に歡喜を感じ尊敬してゐるのを知つてゐる。

藤田東湖は『正氣歌』で、秀爲不二嶽と云ひ、又高山樗牛は何よりもあそこに自分の墳墓を持ちたいと願つたといふ。

印度人が「カイラースの國」と云はぬまでも、あの雄大壯麗の山を尊崇してゐる氣持ちは想像に難くない。印度に於けるその宗教組織の深遠さ、文化の遠さは云はぬとしても、その最も卑近な證據は、印度建築にあるおびただしいあの尖塔の形でも判るやうな氣がする。あれは明らかにカイラースの形である。その方面の學者は何といつてゐるか知らぬが、確かにカイラースに對す

る無言の禮拜である。吾々が印度の寫眞の中で見るものは、無數のあのカイラースの象徵である。これは私の獨斷かも知れぬが、同樣のことは何處の國にもあるやうに思はれ、私は一人でさうきめてゐる。ピラミッドは山のない民族が平地に山を創造しようとした現れか、それともあゝいふ山が實際あの邊にあつたものか。

私は日本の藁屋根の形にしても、あれが富士山の形から來てゐるやうに思はれて、それが男性であらうと、女性であらうと、私には面白くてならない。そしてこの事實は、吾々が原始生活に於て自然に支配せられ、如何に自然の中に調和してゐたかといふことがわかるやうな氣がする。吾々は今祖先を忘れて西洋建築の中に住むやうになつてゐるが、あの西洋建築といふものにも何かの大きい自然の形の支配があるのに違ひない。

今、吾々は白い石の中に住んで屢々富士山を忘れてゐる。印度人もまたあの壯大なカイラースを忘れる時があるかどうか。

然し吾々の母の山、吾々の生れた昔からの家の形態といふものは時として思ひだされなければならない。

腰に就いて

私は春の終りからかけてひと夏を海で暮した。

そこにはかなり西洋人が澤山ゐて、暑くなると、彼等も晝から夕方にかけてよく海水浴に出かけて來た。

私は自分の健康のために海に這入れないので、ただ太陽の光線にあたる爲めに、そこの祭のやうな光景の中に坐つてゐるのであるが、つひ日本人の肉體と西洋人の肉體とを比較することが多かつた。

私の見るところでは、小さくはあるが均齊のとれたといふ點では、又水のそばでみると、とりわけ何時も日本人の方が立派だと思つた。

マチスやドランの繪に出てくる裸體などには實に見事な身體があつて、恐らくああいふ度はづれて立派な肉體も向ふにはあるのに違ひないと思つたが、どつちかと云ふと、西歐人は不細工に胸が厚かつたり、腰が大きかつたり、無暗に足が長くて蜘蛛類のやうに思はれる人間の方が多いやうに思はれた。

だがただ一つ、腰に就いてだけは、とりわけその特長の最もハツキリする女に於て、彼等西歐人の方が進化してゐるのではないかといふことを考へた。進化してゐるのがいいのか、惡いのかは知らない。又それを進化と呼ぶべきか、退化と呼ぶべきか、それとも全然別の種類と呼ぶべきか、これはわからない。

併し彼女達に於て、常に腰が後に突出するよりも、それが次第に横に張つて、後に出る部分が

次第に少なくなつてゐるといふ點だけは悉くが同じであつた。

横に張つてゐることのおびただしさは、正に喫驚すべきで、あれは一體何から來たものか。椅子からか、靴からか。兎に角、私はこのことは日本人以上だといふことを結論した。

ところであのフォビズムの連中が狂喜したホッテントットの彫刻などを見てゐると、悉くの臀部が後に突出してゐるのである。それよりも彼等の寫眞をみると、或る土人の如きは、わざわざ後に出してゐるやうに思はれるほど自慢げに突き出してゐるのである。聞くところによると、ジヨセフイン・ベーカーの姿態の中で最も愛嬌のあるものはあれであると何かにあつた。

そこで私は、そこに一つの進化的な系列を感じ、土人――日本人――西歐人――と一つの順序に並べてみた。すると或る日、阪本越郎がやつて來て云ふのである。

「さう云へば、土人どころか、動物をみれば、悉くそのお尻が最も後部に殘つてゐやしませんか。」

これほど明快な暗示はない。私は阪本式の滑稽な口調に感心しながら、且つ、思へらく、あのホッテントットの土人達の骨格の形態には、未だに四本の足で歩いてゐた時代の骨格がまだ少しばかり殘つてゐるのに違ひない。

ところが阪本越郎は更らに奇怪な質問をするのである。

「ぢや男の方が女よりももつと進化してゐるといふことになりはしませんか。」

「それは比較出來ん。それこそ種類の相違ぢやないだらうか。それよりも中世紀の西洋婦人が腰をひろげたスカートをつけて氣取つてゐたのは、何としても祖先の動物を誇示してゐたものと考へられないだらうか。」

兎に角、それ以後といふもの、失禮な話ではあるが、私は腰の形態に從つて、その人間の文明を計算するやうな癖がついた。

昔から楚腰といふ美人の形容詞があるが、あれは一體どういふ腰であらうか。

私はジャンツンの水着を着て、その邊を走り廻つてゐる若い男や女達を見るたびに、何時もそこに一つの形態學を感じた。

これは恐らく海のほとりの、愚かな狂想にすぎまい。併し時として、人間はこんな馬鹿なことを得々として考へることがあるのである。

小說に就いて

長篇小說と短篇小說に就いて、何時であつたか生田長江氏が親切な解說をしてゐられた。

私は千枚以上の長篇小說といふものをまだ書いたことがないし、これからも何時書くやらわからないから、手ごころの程はわからぬが、恐らく最ものどかな時代にあの小說の形態といふものは現はれたのではないかと思ふ。ゆつくりと、何時までも時間のある、何ものにもせきたてられ

ない時代。
私はさういふ世界を反省する爲めに、當分何も書かないでゐる。何時まで書かないでゐられるかと思つて、自分の健康と怠惰とを試驗してゐる。怠けるのは今のうちだと思つて怠けてゐる。そして偶然論などといふものを提出したりしてゐる。
閑話休題。ところで漸く吾々の時代が速度を感じるやうになつてから——今日の短篇小說が現はれた、と解釋するのは、最もあたりまへの考へ方であらう。ボウ、メリメ、モウパッサン、チエホフ——
彼等の短篇にある技巧、人生の捉へ方、構造の鮮やかさ、解釋の心にくさ——それは殆ど完璧に近い見事さを以つて吾々を幾度でも驚かす。
それにつけても思ふのは、吾々の時代の短篇小說といふものが、實に焦慮にみちてゐることである。
それは深まらうとして、その形式にしばられ、まとまらうとして思想にはみだされ、そのあがきは誠に氣の毒千萬でさへある。恐らく吾々の時代は、既にモウパッサン、チエホフの時代よりも、もつと深遠な文化に到達してゐるからに違ひあるまい。
と、いふと、如何にもいひわけめくが、何れにしても、吾々は時代の速度に重壓せられて、實話に逃げたり、反つてスローモーションによつて小說を組み立てようとする。實話はいはないが、

ジョイスの小説を讀み、プルーストの小説を讀めば、さうではないかと思はれる節がある。然もそれらは恐く短篇を書かうとして、恐らく長篇になつてしまつたといふやうな、前代未聞の奇觀を呈してゐる。筋もなければ山もない。明らかに從來の長篇小說でも短篇小說でもないのである。

私は前に、『ユリシーズ』の下卷を讀んで、近來にない小說の發見をしたやうに思つたことがあつたが、但しあゝいふ小說といふものが、時代の自然な流れに必ずしも沿つてゐるかどうかといふことは、尙ほ依然として疑問である。

恐らく現代の時世を最も適當に寫し得るものは映畵ではあるまいかと考へさせる點がある。ただ現在の映畵から多くを期待出來ないといふのは、映畵といふものが時代の波の上にあつて、まだ落ちつくところまでゆかず、製作が如何にも輕薄に流れてゐるといふことである。然もそれは歷史的にさうなるより仕方がない。吾々が時代の形態と作品の形態とを組み合せて、そこに不可解な原因と結果とを受取るのはその點にある。

それにしても、吾々の時代の連載小說といふものの存在であるが、あれを長篇小說と呼んでいいかどうか、といふことに、私は甚だ疑問を抱いてゐる。あれは昔の長篇小說とならず非常に畸形的な變化を遂げてしまつた。なぜならば、每日をたのしく讀ませなければならぬといふことの爲めに、恐らくそれは長篇小說といふものの持つてゐた在來の習慣を破壞するところまで行つてゐるからである。それは同時に短篇のやうでもあり又、長篇のやうでもある。

あれは當然、長篇小說といふよりは別に新聞小說と呼ぶべきが至當であらう。そこであれを一冊にして讀む時の馬鹿馬鹿しさ、空疎さ、あんなものは本にする必要はないのである。

かくて現代では確かに長篇小說も短篇小說も時代の形態によつて見事に攪亂せられてゐるのである。これは何といつても動かし難い事實である。然し吾々は恐れることはない。これが現代であり、現代の小說である。そして現代の小說といふものも、かやうにしてどうやら何かの方向を死もの狂ひで、或ひは一服つけながら探しあてようとしてゐるのである。

ニイチエは「峰から峰を渡る者」と云つてゐる。又してもカイラースや富士山の話に歸りさうであるが、何も高さ許りを求めなくともいい。吾々は峰を渡る者の態度をもつて、この時代の深淵から最も新らしい小說の形態を探りだせばいい。

ヒマラヤならば、エベレストを、アルプスならばユング・フラウを。海ならばさしづめ印度洋の眞ん中を。

但し三萬幾呎を願つて、常に麓であへぎ、小さい波の表面で漂つてゐるのが、これ今日の吾々の姿である。

美哉好少男、美哉好少女

偶然論について二三の射撃がありました。それ故應射いたします。

今日の物理的世界像と文學觀とを結婚さすことは、祿でなしの結婚だと誰れかが書いてゐました。然し、これほど、世にも美しく、願つてもなき良縁は無ささうに考へます。大體藝術といふ操作が――それは詩にしても、繪にしても、モンテエニユがいふやうに偶然の參加なくしては決してなし遂げられるものではありません。然も藝術を理解するために、今日まで偶然論を忘れてゐたことほど、あはれなことはなかつたのです。ところが、それに今日の物理學が科學的な暗示を與へようとしてゐるのです。石原純氏が「偶然文學論」に興味を持たれ、また田邊元氏が「劃期的文學觀」と義理にでも洩らされたことには意味がある筈です。今日の科學と文學とは偶然論を廻つて「美哉（アナニヤシ）、好少男（エラトコ）、美哉（アナニヤシ）、好少女（エラトメ）」といつてゐるのです。これが良縁でなくて何であらうか。

ところが次ぎの射撃手は性急にいふのです。「理論はそれでわかつたが、ちや、その作品を示せ」。だがかういふ幼稚な連中がゐるから、日本では理論も作品ものびないのです。こんな阿呆

なことをすぐ悧巧さうに口走る連中ぐらゐ弱者はない。作品は作品として、理論は理論として、百里離れたつていいのである。そんなものの調和は何時か「時」が行つてくれる。吾々は吾々の所信を追究してゐればいいのです。

次ぎに二、三日前、「文學は可視圏内にとどまるものだから偶然論の必要などない」と誰れかが誠しやかに書いてゐました。だが、これだから映畫などに馬鹿にせられるのではないでせうか。文學ほど不可視の世界に這入れる藝術形式が他にあるだらうか。手近の例がプルーストの心理小說などを見てもわかる筈です。そんな單純な必然論にひつかかつてゐる故、今日の小說は面白くない等と人にいはれたりするのです。如何に、如何に。

韻律論その他

歌に對しては今は門外漢の一人になつてしまつた。それでも人の歌をよむことはこの上なく、私はどんな雜誌でも、大抵の歌誌なら、毎日眼を通さないことはない。

『立像』も親しみ讀む一冊で、頁をひろげる時は、どんな歌があるかと、何か樂しみのやうなものを持つのが常である。失望に終つたり、もう讀まないぞと、思ふこともあるが、新らしい月がくると、又ひろげて讀んでゐる。六月號では最初に石原純氏の韻律論があり、先づそれに惹かれた。石原氏が韻律といふことに對して、一應手きびしい批判を與へた後、尙ほ口語歌に於ても、それの必要なことを主張してゐられるのは誠にもつとも至極と同感した。

七五調の長詩が流行したのは何時頃の事であらうか。あれはリズムといふことから云へば最も單純で、西洋詩にも恐らくあんなものはあるまい。日本の長歌の呼吸の如きも、又短歌にしても、それは決して簡單な七五調ではない。

今日の自由詩の發達は、恐らく七五調に對する反撥と、內容律といふ事に對する憧憬から來て

ゐるのだと思ふが、然しそれが一度そこを通過して、自由な詩形の上に更らに韻律を求めようとしてゐるのが石原氏の言はれる今日の態度であるにちがひない。その意味で氏の理論は口語歌に於ける今日の最も重大な問題に觸れてゐるものと思はれる。

私も日本語が韻律に乏しいといふ考へ方を長い間持つてゐた。然し、考へてみると、それは西洋詩的解釋であつて、日本語の中にある不可見の韻律といふものを常に感じるのである。吾々が文學の操作をする時、常にこれを感じてゐない事はない。吾々は吾々の文學にある韻律といふものに對しては、また別の日本的研究が是非とも必要である。何時か五十嵐力氏の『國歌の胎生』や九鬼周造氏の『日本詩の押韻』をよみ、得るところが多かつたが、日本詩の韻は、必ずしも字句の最後に來ず、中途に來たり、初めに來たり、實に微妙な隱約の中にあるやうな氣がする。然もその隱約によつて世にも美しく立派な音樂を見事に漂出さしてゐるのである。

大體韻律といふものは、現代では非常に複雜化して考へられ、表現せられるから、古風な考へ方では決して到達出來ないものと思ふが、古代語脈と現代語脈と、どちらに韻律的なものが多いか。これもにはかに斷じがたい。現代語でも私は「ええ」と答へるよりは「うん」と答へる方に卑近な韻律を感じ、又例へば谷崎潤一郎氏の或る小說の中の會話に「それよりかうちのこと、いつそ子供のやうに思うてるねんわ。そやよつてうち氣に入らんねんけど」といふのがあるが、あれなんかにも實に綺麗な韻律が這入つてゐると思つてゐる。

吾々の文學が韻律を必要とすることは言ふまでもなく、その韻律の强さ、弱さ、長さをどういふ風に表現するかといふことには、なかなか困難な問題が横たはつてゐる。

さて歌の方へうつる。最初に月原橙一郎氏の一連を讀む。最初の第一首はうまいと思つた。但しこれらの歌では表題が非常に重大な役目をしてゐる。表題を取つてしまふと、又別のものが來る。かういふことも新らしい試みかも知れない。

六條篤氏の「主役の牝鷄」はモダニズムである。第三首をとる。

中野嘉一氏の「つつじの花」に來ると、おちついたものがあり一種の澁味が感じられる。三首目「村落位の大きさの雲」などといふ表現には一寸した深味さへ感じられる。

村上氏では四首目。華氏のは七首目。稻村氏の「分列式」には單純ではあるが通つたものがあり眼をひいた。但し「皇國の護」とか「意志の巨大さ」といふやうな言葉はもう一段と沈潛させて表現する必要があらう。次に石原純氏では次の二首をとる。

線條は　面を　幾何學的に割し、風は　常に　新鮮である。さすがに

畫布の上で　女は永遠に微笑する。

ギリシヤ風の鼻が妙に尖つてゐましたけれどでも思想の輪廓には矢張り日本風なまろみが見られたのでした。

第一首目、殊に上句は幾何學的な線の上を渡る風が何とも偶然の發見によつて美しい。第二首目は上句の最後か下句の最後の言葉を、もつと荒々しい言葉にした方が一首の力がしまつて來はしなかつたらうか。尚ほ次ぎの三首を九月號から引用する。

神は偶然を愛する。ふと蠟燭の裸火がゆれて、翌晩餐は美しく終つた。
でも、永遠に運命は謎である。

自然はかくも偶然を包藏する。一つの惑星のうへの温床の誘惑、有機
物質のふしぎな釀成、かくて意外にも生物の歴史がはじまつた。

社會は偶然に動かされる。敬虔な老憲法學者の　いたましい國法抵觸
虚言が眞實に轉化する公判廷の一奇蹟、流行性腦炎の蔓延する夏。

誠に走りがき的な感想になつてしまつたが、私は『立像』といふ雜誌が今後益々盛大になることを祈つてゐる。總じて皆の出詠者が、常識を破壞して新らしい偶然に嚮かうとしてゐることは充分にわかる。これにつけてもモダニズムと一緒に古典的自由詩とも云ふべきものを同居させたらどうであらうか。さうすると一般にもつと幅が出て來はしないだらうか。この意味で津輕てる氏の「お精靈さま」といふ隨筆も充分に一つの役目を果し、私などにはとりわけ面白く、優れて感じられた。かういふ隨筆は決して他では見られず、是非つづけてもらひたいと思つた。

本に就いて

長い間、僕は愛するものを大切にするといふことを知らなかつた。だいたいは、愛しも何もしてゐないのだと思ひ込んでゐた。僕は書籍といふものを輕蔑するたちで、そんなものは、ただ讀んで捨てればいいものだと思つてゐた。

僕は本を持つてゐると、何時もいためた。無暗に傍線を引いたり、折つたり、皺にしたり、破つたり、表紙にシミをこしらへたり、又ちぎつたり、してしまつた。時によると、それを消毒藥に漬けたり、陽に乾したりした。本の箱の如きは無用の長物として買つて來るとすぐ捨てた。出來るだけ本をいためるのが僕の性質で、僕は綺麗な本などは嘗て持つてゐなかつた。何時もそれは折りまげてあつた。然も讀んでしまふと、それを手許に置くことをしないで、捨てたり、人にやつたり、古本屋におろしたりした。

その頃、僕はひたすらに僕の頭といふものを信用してゐたからである。信用すると云つても、讀んだものを記憶してゐるといふのでは毛頭なかつた。常にそれを忘れてしまつて、それがもの

を書く時など、ふつと出てくると甚だ得意であつた。
もともと物を大切にしないのは、僕の習慣らしく、僕は帽子は何時も森田屋でノックスかステツトソンを買ふのを習慣にしてゐた。だから割合にいいものを冠つてゐるのであるが、それさへも引つぱり廻したり、鷲づかみにしたりしてすぐいためてしまふ。だからあそこの人が何時も、「貴方はものを大切にしない。貴方にかかつちや、どんなものでもたまらない」と言つてゐた。
だからと言つて僕は粗末なものでは氣がすまない。恐らく意識的にいためるのだとは思つたこともないが、大抵ものを勞るだけの落ちつきが無かつたのか、少し位はいためることに嗜好があつたのかも知れない。
それが近來、いい本をみると、戸棚に入れておきたいと思つたり、いい裝幀の本が出ると、自分の本でも人の本でもうれしくなつたりした。內容に就いては云はない。考へてみると本位いいものはない。どこへでも持つてゆけるといふことも、好むところまで讀んでやめ、又讀めるといふことも、如何にも自由主義的な文化をよく象徵してゐる。大體、僕とても本を好かないで傷めたのではなく、好みにかなつたものを求めることは、帽子と同じで、僕は本に對しても常に深い選擇の心は持つてゐたのである。ただそれを執着なしに、どしどし變へて行つた。愛してゐなかつたのではない。愛してゐたのである。ただそれは少々マゾヒズム風であつたのに違ひない。近年になつて僕は漸く愛するものは大切にしなければならないと思ひだした。

思ふに近來になつて、思想の中にある不動の滋味といふものを散見し、何かものの底にあるアプリオリといふやうなものを感じだすに至つて、本も亦帽子も少しづつ大切にするやうになつたのかと思ふ。今日までは、とかく流行といふものが餘りにも烈しく僕の心を驅りたててゐたのに、近頃は不易の世界が見えだして來て、靜かにものを大切がることを知りだしたのかと思ふ。昔いためた本を見ると、虐げた女のやうにいとしく、僕は再びこんなことはすまいと思つて、漸く藏書といふものの趣味を解しさうになつて來た。

僕などは、ほんの昨日まで本をいためることをもつて誇りとしてゐた人間だけに、そしてふとすると、つひ今でも傷めつけてゐたりする自分を發見するのであるから、書痴の氣持ちなどは、わかるべくもないが、それでも第一書房の豪華版『パリウド』や、展望社から出た酒袋をつかつた魯庵の隨筆集などを見ると、何か馬鹿げた趣味といふものを感じて、何やら馬鹿馬鹿しい恐らしさが後年待つてゐるやうに思はれて、マゾヒズムならぬ色情めいたものが又しても感じられてくるのである。

危いのは自分か。年齢か。本か。それにしても、人間といふものの不思議さに思ひ至ることがある。

野鳥の聲

この頃は鳥の聲を聞くことが流行してゐる。鳥語の樂しさ愛しさは、例へば花の美しさ、あはれさにも比較できようか。

時が來て、心こめて唱ふ鳥の聲位、考へてみれば美しいものはあるまい。春さき鳥がひたすらな抑揚をつけて唱つてゐる聲。ひと聲鳴いて夜空を渡る不如歸、一筆啓上と早口にいふ頰白、又朝の眼ざめに聞く雀の聲だつて、考へてみれば、來る朝に對する彼等の喜びと希望とに溢れてゐるやうに思はれる。總じて鳴いてゐる鳥は、その聲の樂しさ悲しさに拘はらず、みな心みち、心張つてゐるのが感じられる。鴉の聲とその不思議な風態を最もよく寫したのはアラン・ポウであらうか。

ただ野の鳥は花のやうに一つの場所にぢつとしてゐない。枝から枝へ飛び移り、空を鳴いてわたる。だからなかなか聞かうとしても聞けないことがある。去年は信州あたりから佛法僧の聲を放送しようとして放送局が骨折つたさうだが、一聲も聞くことが出來なかつたといふ。六月初旬今年は夜十時頃から三河の蓬來寺山から全國に中繼したが、これはなかなかよく聞えた。

佛法僧はまだ嘗てその姿を見た人が無いので、その正體がわからず、鳥類學者と云はず、野鳥に親しむ人と云はず、このごろの人氣の中心になつてゐるらしい。一千一百年前、弘法大師が名づけたといふのであるが、その聲は「ブッ、ポッポッ」とも聞え、「ブッ、トートー」とも聞える。勿論「ブッ、ポーソー」とも聞えないことはない。あの聲を佛法僧とききき、佛法僧と名づけたのが弘法大師の偉さで、もつと凡下の人間なら別の名前をつけたかもしれない。然もその聲の張りのある微妙さは三十分の放送が惜まれる位であつた。

清少納言は鳥のことを述べて最後に「夜鳴くもの、總ていづれもいづれもめでたし」と云つてゐるが、たしかにああいふ聲を聞けるのは、急な用事で仕方なく山路を歩いてゐる人か、逢ひたい人に逢はうとして萬難の中を歩いてゐる愛人か、心の解脱を願つて淋しさに身をおいてゐる苦行者の他には多くあるまい。だからその聲が一層心にしみ、あはれなのに違ひない。

夜鶯(ナイチンゲール)と云へば外國では愛人達(こころいたあるひと)だけが聞く鳥の聲らしく、そのあはれさを唱つた詩人は無數にある。シエィクスピア以來、幾度この鳥は、夜をさまよひ歩く人々の心を慰さめ、樂しませ、又かなしくしたことであらうか。

私はこの間、日光町から案内をうけて、慈悲心鳥を聞きに中禪寺湖畔に出かけて行つた。夜おそくモーターボートに乘つて出て、その聲を聞かうとして山の深い岸で機關の音を止め、夜をこめて待つたが、たうとう聞くことが出來なかつた。

それが翌日、ふと森の中で「ジヒシン、ジヒシン」と低い聲で唱つてゐるのをきいた。これは「チビツチヨ、チビツチヨ」とも聞え、矢張りかういふ名前も、宗教の盛んなころ、深山にゐた僧が名づけたのに違ひあるまいと思つた。

關東では富士山麓、關西では高野山などが最も鳥の多いところで、三百種近くの鳥の聲が聞けるといふ。鳥の聲を聞くたのしみは自然の中に浸り、自然の本態と一緒になることである。鳥語を解したのは、古今、公冶長一人であらうか、恐らく、その聲がわかれば同じやうに、そこに現實の苦しみがあることを悟るであらうか。それとも依然としてその美しさのみを見るであらうか。

それは人語の美しさを今更らに氣付かしめるか、人語の穢れを今更らに反省さすか、どつちかである。何れにしてもそれが人語を洗ふことは事實であらう。

文藝時評（一）

新人の二佳作

装飾がすぎると、時に小うるさいと思つて腹のたつことがある。それにしても技巧を主とした性質の作品なら、極端に技巧的な冴えを示さなければならない。又眞實をねらふ種類の作品なら眞實に突入し、作者は常に泥を吐くだけの氣魄を持つてゐなければならない。藝術において臆病ほど輕蔑すべきものはない。僕は四月號の諸雜誌を散見して、技巧に對する怯懦、眞實に對する怯懦を感ずると、それらの作品が如何に丁寧でも、もう讀むに値しないと思つた。

さういふ種類の作品についても遠慮なく次第に觸れたいが、先づ『文藝』所載の優れた二新人の作から解說したい。

「砂の上」（荒木巍）。この作者の作品は初めてであるが、なかなかよく眞實を追つかけてゐると思つた。大體作者といふものは抒情にたよらずに、出來るだけ眞實を追究して、眞實といふものの持つてゐる最後の不思議に到達しなければならない。これが本當のリアリズムの道で、若し

リアリズムといふものがあるとすれば、これ以外に無いと僕は信じてゐる。
ところでこの作品であるが、知識のない一人の女性の動物的な、或は本能的な强さがよく出てゐる――文華やかで、智力にみち、寛大な愛情に溢れながら、然も敗北してゆく男性が少しも誤魔化さずに描かれてゐる。作者の物に對する見方は相當に緻密で、要點をよく押へてゐる。例へば心で尊敬出來ぬ母親の厚化粧を、子供が「お母さん頰つぺたが赤いね。」と批評したり、齡とつた父親と一緒に息子が百日紅の木を撫でて、
「この木はさすられると擽つたいんだつて。」
といつたりして、父親の心を慰めてゐるところなど、なかなかセンスの卓拔さを感じさせる。男がずるいのか、女がずるいのか、わからぬところなども自然で、その觀察にも無理がない。ただこの作品では有田勘造と息子とが最も書けてゐない。むしろ息子の幼い思想的背景や、有田勘造などは、全然抹殺してしまつた方が、この作品としての主題を明瞭にさせはしなかつたか。ついでながら荒木氏の題のつけ方は殆ど無意味だと思ふが如何。
「俗境」（兵本善矩）。これはまた作者の心情の美しさが文章のリズムに出、ハッキリと心の通つた端麗さが目についた。
それは姉を語る作中人物の感情からくるのであるが、「揚卷の髮に白鼈甲のピン一つ」といふやうな描寫などは、如何にもキリッとした姉の美貌を讀者の眼前に髣髴させ、また作品を古風な

意氣に溢れた私塾からはじめるところなども、なかなか隅におけぬ用意の周到さを思はせた。

ただ前半に比較して後半は主人公の氣持の高揚が次第に冷靜になつてくるに從つて、作品も力を落し、强さを失つてゐる。あそこをこの作者は突きぬけなければならない。それにしてもこんなに美しい作品は少ない。

「ボン助先生の片ヒゲ」（中村正常）。この作者の作品を讀むのは實に久しぶりである。だが久しぶりに讀んでこの作者は矢張りタダモノではないと思つた。不滿をいへば、これ等の諷刺が人生に對する恐ろしい冷淡からも、あるひは强い愛情からも出てゐないといふことであるが、若しさういふ裏づけがあつたとしたら、かういふ作品は決して笑つてすませるものではない。

「踊子」（川端康成）。短いスケッチであるが、十七、八の子供の舞臺裏の會話、接吻ごつこが實に官能的で巧に描かれてゐる。だが、それはただざういつただけでは足りないほど巧な會話にみちてゐる。

秋聲氏の傑作「一つの好み」

先づ「蜜柑の皮」（尾崎士郎）から始める。尾崎氏が常に矜持を高く保たうとし、熱烈な氣魄を愛してゐることを知つてゐる。だがこの作品は正直にいつて僕を悲しくした。

吾々小說書きが、それは死刑囚であらうと、病人であらうと——人間の死といふものを、こん

な程度にしか見ることが出來ないものとしたら、吾々は舌を嚙んで死んでもなほ自己に對する憤懣を消すことが出來ないだらう。

然も作者は書きだしで——今までまもり通した秘密を——云々といふのである。然しそこには何の祕密らしいものも何も出て來はしないではないか。通り一遍の觀念的な死刑囚が書かれてゐるだけで、何一つ眞實に觸れた死刑囚などは出て來ないではないか。又何故に主人公は自分の「業苦のほろびゆく」ことなどを祈らねばならぬのか。抽象的な業苦などといふものを人間は何故に背負ふ必要があるだらうか。

吾々は死といふものを揶揄してもいい。嘲笑してもいい。又深刻に考へてもいい。又時には嘘で塗つても差支へない。何れにしてももつと深く追究し、そこからすべてが出て來なければならない。この「蜜柑の皮」の場合では最も大切なものが失はれて、思想力の缺乏と文章の琢磨だけが眼についた。

「私の黎明期」(德永直)。發電所の描寫などにはなかなか正確なものがあつて、かういふ世界だけを書けば一つの問題が初まりさうだと思つた。

だがこの作品の基調をなすものは、少しばかり虛無的で、然もサニン風の槪念化せられた愛欲でしかなかつた。

文中「お玉後家親子——不幸と罪惡と淫蕩と。これらの源や結末は一體どこにあるのか。すべ

ては宿命で、誰でもが背負つてゐるものだらうか。」といふ感想があるが單なる不幸や淫蕩などが宿命であつてたまるものか。そんなものを宿命だなどといつてゐるやうでは仕方がない。

不幸も淫蕩もそれでいいのである。宿命であつても宿命でなく、裏づけのない宿命などは踏みちらして人間の醜惡さの中から美しさを見つけるところまで行かなければ、吾々は吾々の追究を止めるべきではない。

「容貌」（林芙美子）『文藝』に出てゐる「鹽溜」も併せ讀んだが、作者は抒情の世界を愛しすぎてゐる。「自動車はまるで野鴨のやうに腰を振つて、小石をぽんぽん自分の胴中に礫のやうに浴びながら」といふやうな名描寫はあるが、然し作者は物に這入ることをいつも途中でやめてしまふ。一通り成功してゐるにも拘はらず、またたとへ、いい感じのものであつても、藝術といふものは決してかういふものではないといふ感想を起させる。

「一つの好み」（徳田秋聲）（『中央公論』）この作品に至つて評者は初めて救はれた。救はれただけではなくこれは今月の傑作に違ひないと思つた。

こんなにもみづみづしく物を自由に囚はれずに見ることが出來るものかと私は驚歎した。實に明瞭とした自然主義以來の掴み方でありながら、その筆觸が少しも硬化せず、一分のマンネリズムにさへ陷つてゐない。これは恐らく作者の眼が常に現實の眞實といふものを追究してゐるからで、眞實といふものこそ、常に最も新鮮な證據である。また眞實といふものが本當に見る者には

次ぎ次ぎと不思議を提供する證據である。このことこそ、われわれが文學の世界において何よりもすがり得る一事で、眞實の不思議ほどわれわれにとつて有難いものはない。

さてこの四方八方から眺められた女。又長い間の人生の歴史を背負つた肩三といふ主人公――そのよく描かれてゐることは勿論であるが、金が何よりも口をきく世界に、餘り金を出さない男がゐて、然しその氣安さを好む女が存在するといふことが、そして二人の次第に接近してゆくことが、この作品では人生に一つのほの明りを與へて、われわれを幸福にする。別していろいろなものをくぐりぬけた幸福がわれわれを安心さすのである。今月の最大作品であることはいふまでもない。

リアリズムを破壞せよ

リアリズムといふものが、フローベールやゾラのやうな浪曼的性格の作者に取りあげられる時、初めて有効に活動しだすものだといふことは眞實である。また如何なる藝術でもそれが常に生活から出發しながら、常に人間の夢想に對して追跡を行つてゐるといふことも眞實である。

ところが現在のリアリズムといふものには、浪曼的性格もなく、また夢想もなく、それは明らかに一つの瑣末主義に陷つてゐる。人は自然主義以來、瑣末なことを連ねれば、それがリアリズムだといふ觀念を持つてゐる。從つて現代では小說位書きやすいものはない、といふことになつ

てゐるのではないかと思はれる。

新進作家號の觀ある『新潮』の數作を一讀して、私はこのことを痛切に感じ、退屈し、しまひには苦痛を感じた。

シエストフは「正確の怪奇」といふことをいつてゐるが、私は「正確の不可思議」に到達しなければ、藝術上の眞實といふものは止むべきではないと考へてゐる。ここにこそ本當のリアリズムが横たはつてゐる。

さて二三作をよむと、從來のリアリズムとはこんなにも退屈なものかと、今更のやうに驚歎し私は恐怖した。だがそれらの人達は多く若い人々である。私は痛罵の代りに今後を待つこととして、ここでは新らしい芽、新人の氣慨といふものの感じられる一二作について觸れておきたい。

「選手」（田村泰次郎）。劍道部の選手達の試合前の興奮した空氣――そこへ罪になる筈の一人の學生が罪から許されたために――選手達はその興奮の度がすぎて緊張がゆるみ、頭が冴える代りにかへつて眠くなるといふ小説である。少年達が次ぎ次ぎに痲醉劑を飲まされたやうにコンコンと眠つてゆく姿にかへつて若さと元氣が溢れ、私は非常に樂しかつた。題のつけ方もねらひも先づ新人らしい作品と云へる。

「老父二人」（芹澤光治良）。芹澤氏は新人といふよりも、もつと老熟した世界に這入つてゐる。老父二人の性格と動作が實に愉快でよく見てあると思つた。缺點は私といふ人間が書き足りない

ために、作品のしまりが不足しはしなかつたか。

「さんだいめといふ話」（柳原利次）。老人の世界を通して一つの家系の性格を描いたもので、讀みながら微笑し、同時に運命的なものを感じ、かういふ作風は今の流行とは違ふが、それだけに面白いとも思つた。

「龍のひげ」（福田淸人）。これは實に微細な描寫で終始せられてゐる。だがそのことが些末主義に陷る代りに、一貫した粘著力になつて現はれてゐた。老夫婦と、娘と、それから亭主を失つた嫁の生活が、短い文章の中でそれぞれ性格が書き分けられ、所々に生彩ある描寫があつた。固定觀念を破壞せられる時に、常に狼狽する老人——「お乳、ちつちやい、お乳」といつて、子供に乳を摑まれさうになる娘——「急いで來たから胸がドキドキするわ」といつて胸に手をふれさす嫁——

さういふところが實に生き生きと描寫せられ、消極的な一家の空氣がよく出てゐた。十四篇中の佳作と思つた。ただ「龍のひげ」といふ題で家族全體を象徴しようとして、それがしきれないところに缺點があつた。

「夜路」（那須辰造）。放浪癖のある子供の本能の姿がよく書かれてゐた。とりわけ夜路のシーンは一つの世界を見せてゐた。

『改造』は十五年週紀念號である。先づロマン・ローランとアインシュタインの特別寄稿がある。二人ともが「夢」といふことを主張してゐるのは不思議な一致である。

さてロマン・ローランの「藝術と行動」であるが、そこには文章に響くものはあつたが、云つてゐることは實につまらず、こんなことを何時まで云つてゐても仕方がないといふ氣がした。

そこへゆくとアインシュタインの短文は、かれ自身も付け加へてゐるやうに、なかなか複雜で容積のあるものであつた。率直にいへば、實に確然とした世界があり、私は感心した。「平和」といふものに彼は性急な考へを抱かず、軍事的準備の撤廢によつて平和的目的が達せられると考へることとの危險を述べ、武器の發達が平和をもたらすだらうと說明してゐる。これは私も同じやうな意見で、唯だ科學のみが遠い將來に平和を持ち來すといふ觀察は、實に聰明で齒ぎれがよく、一つの悟達を持つてゐた。

さて小說であるが、最初に「お山」(石坂洋次郎)を讀んだ。壯麗な山の偉容に對して、又民間傳承の追究において、山に對する人間の小ささについて——實に丹念に、心臟強く、飽くまでも呼吸長く、描寫をつづけてゐる。

私はこの作者のかういふ態度には小說的と同時に民俗學的匂ひを感じ、この作者はどんな危險

に陷つても、又失敗をしても、われわれに與へる一つのものだけは常に持つてゐるといふ氣がした。この作品も、私は一つの民俗的な土着文學として、これほど鄕土を愛し鄕土を生かした作品は少ないといふ意味で面白く感じた。

この作者には野生の力があるといふ。然しこれは作者の持つてゐる野生よりは鄕土風俗といふものが常に持つてゐる强さである。かういふ作家といふものは、今まで無かつたといふ點でも、なほ大いに稱讃せられなければならない。

「餓鬼」（藤森成吉）。朝鮮における朝鮮の小さい勞働者の次第に首が廻らなくなつて、人の畑から大根を盜んで食べるやうになるといふ話である。

なかなか丁寧な作品である。朝鮮の風景も萬遍なく取り入れられてゐる。それでゐて、その悲慘がちつとも悲慘として感じられない。恐らく少年の性格にある反省が丸彫りにせられてゐないからで、作者は一方から眺め、しかもその眺め方が公式的だからに違ひない。

これはいい少年であるが悲慘になつたといふだけである。どんなにいい少年にも惡い面があり、それが描かれなければ、結局いい少年といふものも描かれないことになる。つまりはこの少年に對する愛情が足りないのである。これは立ち入りすぎるかも知れないが、作者はもつと微細な眞實といふものに謙虛でなければ、大きい眞實――例へば××××××な眞實にも到達出來ないのではあるまいか。痛烈な眞實を突きぬけて一つの××に到達する道でなければ、それはどんなに不

正をののしつてみても不合理を痛罵してみても人の心には訴へない。またこの作品には當然、民俗的な競爭といふものがもつと哀感を以つて裏づけられなければならなかつた。缺點ばかりを拾つた。決して惡作ではなく、美點を擧げれば充分にその餘地がある。然しこれだけのことはいつておかなければならない。

「春」(平林たい子)。眞實に觸れてゐるといふ點ではこの作品の方が數等ふれてゐた。よく對象を見てゐる。殘酷にさへ解剖してゐる。半襟を縫ひつけずにかけるカフエーの女や、十錢以下の註文に頭を惱ます貧しい醉ひどれや、食ひあましのコロッケをあげなほして出す店の主人公や、翌日訪ねてくる醉ひどれの細君の氣の毒な姿や、なかなか逞しい。しかし露惡に冷靜さがなく、少し桃色じみた嫌な興奮の感じられるところがないでもない。

「象形文字」(丹羽文雄)。カフエー小說が實に多い。これもその一つであるがその中では最もすぐれてゐた。カフエーのマダムとその娘との生活。わけても母親のヒステリックな戀愛生活がよく書けてゐる。長い小說だが丹念で全篇弛緩するところがなかつた。娘にもつとエスプリが出ると作品に氣品が出、もつと作品の背後に思想的なものがあれば、作品に深みが出たかと思ふ。しかし逸作たるを失はぬ。

志賀氏の名作「日記帖」

志賀直哉氏の「日記帖」(『改造』)を讀み終つて私は微笑した。何といふことなしに明るい氣持になつた。然しそれは普通の明るいといふ氣持ちではなく、又朗らかといつても、普通いふ意味とは違ふが、何といふことなしに腹からあがつてくる喜びで微笑した。

「萬暦赤繪」が出た時にも讀んでいいと思つたが、材料のせいか心理に食ひ入るところが無かつたが、今度の作品は實に緻密で、無駄を極端に削つて、大切なところだけが深い意味を持たせて生かしてあつた。

私は昔の志賀氏を思ひ出し、それが一層年齢を加へたといふ感じで、あの私の浮べた微笑は、何か人生に對する救ひやうのないものが、その作品の背後から感じられたからであるのに氣付いた。

私は最後の一節、「加納和弘」といふ名前を讀むと、をかしくつてたまらなかつた。不愉快な事件で衛生的に弱らされ、猪や犬を見ても惡い人間よりはましだと思つたり、葉卷の炭を見て火葬した死骸を思つたりしながら、旅行から歸り、急に助かるのが實にうらやましかつた。私は敢てこの作品を近來の名作といひたい。

ここで私は『中央公論』の「朝・晝・夜」といふのを更によんだ。この方はもつとをかしく、至るところで私は笑はされ、志賀流の正當さが確然と感じられ、人間が雄鶏になつたり、雌鶏になつたり、子供が頭を縱に振ると、「鹿のやうな奴だな」といつたり、帽子を投げつけて、それが鼠になつたりするところなど、動物的なフモールが長閑で、素晴らしくて、藝術の圓光といふや

うなものを感じさせられた。但し作品としては「日記帖」の方が深味がある。何れにしても私は「萬曆赤繪」を讀んだ時よりも、この二作を讀んで志賀氏に一層呼び返され、しつかりした心の世界の存在を思つて、非常にたのしい氣がした。志賀氏に關しては、どうしても外國の作家と比較して論じなければならないと思ふが、それはここでは出來ない。

「背水」(長與善郎)。これは病床にある老人の哀れな戀愛のやうなものを書いたものだが、力作であつた。勝手のいい戀愛を考へて、それも出來ない人物が半分眞卒に、ユーモラスに、讀後感として浮んでくる。細君が一等よく書けてゐて、したしい作品である。

「小鳥籠」(久米正雄)。直木三十五のやうな人物が主人公になつてゐる。恐らくさうかと思ふが、直木氏にどんな非難を加へる人があつたとしても、この作品が最もよく直木氏を辯護してゐる。これが恐らく今日までの觀察の中で、直木氏を最もよく見、解釋してゐるのではないかといふ氣がした。

「紋章」(横光利一)。あらゆるものから醬油を製造しようとするところが、私に最も興味を感じさせた。腐つた魚以外に、なほ別のものから雁金は醬油を製造しはしないかと思つてゐる。萬物還銀說のやうに何もかにも萬物が醬油になつたらさぞ愉快だらうと思ふ。長篇だから何ともいへないが、横光氏の考へてゐることがわかり、そのねらつてゐる世界は誰が何といつても、私はいいと思ひ、矢張り期待してゐる。

「月あかり」など

「月あかり」（牧野信一）。愉快といへば、これほど愉快で人を食つた作品はない。僕は讀みながら、ポウの X-ing A Paragrab を思ひだした。これほど日本語を自由に驅使した作品は、ポウの右の作品が、どうしても日本語に譯せないやうに、これもまた他國語にはどうしても譯せないに違ひないと思つた。

これは志賀氏の作品にあるやうな悟達から來る微笑ではなしに、人を食つた空想の馬鹿馬鹿しさと、作者の偏奇な性格とから來るのである。何があるかといへば何もない。それでゐて吾々を愉快にしてしまふ。私は牧野氏のギリシヤ好みや、醉つ拂ひ小說は餘り好まないが、この作品には汲めどもつきぬ藝術といふものの面白さが出てゐると思つた。

「母と子」（深田久彌）。この作品も素朴で大變いい。

「木の枝に櫛をあづけ、山を見て髮を結ふ」といふやうな實に味のある手紙の一節があつたりして、かういふ句は歌や俳句を通つて、然もそれが大人にならなければ出來ない文句で、深田氏のねらつてゐる世界は相當に大人びてゐると思つた。

「影法師の長い夕方」といふ文句もあつたが田舍の詩情を一節でよく抑へてゐた。母性愛小說といふ通俗小說の型があるが、これは子供の母親を思ふ小說で、哀切で綺麗な感情が全體に流れ

てゐた。
その他武田麟太郎、井伏鱒二氏等の小説があつたが、格別二人の從來の作品に加へ算をするやうなものでも、また引き算をするやうものでもなかつた。
『行動』は新人の作品十一篇を集めて、賑やかである。
「地圖」（阿部知二）。新らしい世界といふものに鍬を入れてゐると思つた。地圖についてこんなにくりかへし、ちつとも退屈しないのは私自身また地圖を愛してゐるせゐか。それとも一つ奥の眞實にふれてゐるせいか。
退屈しさうなものが退屈しないといふやうな世界は、なかなか困難な道であつて、最もやりがひのある道であるに違ひない。
「斑點」（伊藤整）。これは成功した作品とはいへない。だがそのために却つていいと思つた。多くの新人が危げない日常茶飯の些末に埋もれてゐる時、この作品の如きは新らしい方向を誠實に目指してゐる唯一のものと思つた。人間の善行といふものとそれを如何に人間が装飾するかといふ問題について一つの比喩をあげながら、次第に二人の友人が不思議な爭闘にはいつてゆくところなど、なかなか鮮かであつた。
「流轉門」（今日出海）はみじめな老人の心理がよく出てゐて、挨拶の練習をするところや、最後にやつと立ちあがる機會を見つけるところなどよく書けてゐた。又同じ作者の『新潮』の「鸚

鵜男」には、去勢せられた貴族の一面を諷刺して痛快なものがあつた。
「年賀狀」（德田一穗）。四月の創作數十篇中、ユーモア小說といふものの皆無な中に、ただこの一篇だけが、それであつた。狂ひ咲きのやうな愛情を求めて放浪する一老人の姿が、實によく描け、愛情といふ不思議なものを眞劍に硏究しながら、遂にそれがわからず、ダンサーを歷訪してみたり、ダンサーに憤慨してみたりするうちに病氣になつて死ぬといふ小說であるが、作者はそんな老醫師を決して冷淡視せず、どつちかといふと親しい氣持ちで、この主人公を愛してゐる。恐らくこの作品の成功はそこから來てゐるに違ひない。

（『東京日日新聞』昭和九年三月二十三日）

文藝時評（二）

日常性と歴史性

先づ三木清氏の「行動的人間に就いて」（『改造』）を一讀した。

今日の能動主義者が、日常性と歴史性との中間にひつかかつてゐるといふ指摘に於て、それは結論せられてゐた。

確かにこの指摘は現在の能動主義者の中にある二つの傾向といふか、矛盾といふか、これを的確に捕へた評語としてこの上なく面白かつた。だが私にとつては、それ以上にこの二つの分類法が、ドイツとフランスの文化を特徴づける言葉として、この上なく面白く思はれた。

考へてみると、我國の文學は、今日だけではなく、この二つの傾向の中で、迷ひつづけて來たのである。昨日はドイツの歴史哲學風になつたかと思ふと、今日は又ベルグソンの日常性を蒸し返し、併し結局は何時もどつちにもならなかつたのである。

例へばフランス文學にある日常性には、その卑近の日常描寫の中にさへ、丹念な飛躍したもの

がひきだされてくるのが常である。ルナールの「日記」のよさはいはずとも、それはクレールの小さい映畫の中からさへも感じられる特長である。然るに吾々の文學は――日常性といふことになると、常にそれがタッチのない實に困つたものになり勝ちなのである。

三木氏はこの二つの面を今日は統一ずべきであるといつてゐられる。統一することによつていい結果が來るか、それとも眞のフランス文學をもう一度見なほすか、それともドイツ文學に學ぶべきか。それとも、それらの何れをも破棄して、萩原朔太郎氏のいふやうに日本の傳統に限ざめるか――

私はそれに結論を與へることは差しひかへる。ただこの分類法から二三の作にふれてみたい。

室生犀星「女の圖」(『改造』)を讀んだ。

これは愛情といふものが正義に變化する場合を適切に表現し、最も卑近なドロドロした生活のどん底を描きながら、見事に一つの飛躍に到達してゐた。筋は金にすることの出來る養女を、その養父が愛情のためにどこかへ逃がしてやるといふのである。

ゴミゴミした生活と、主題の飛躍とが、この作品に日常性と歷史性とを統一させ、今月での佳作であることを躊躇なく感ぜしめた。何よりも作者の意氣込みの壯烈さがよかつた。然し不服をいふならば、この作者は日常といふもののよさを十分に知らぬのである。

先づ最初に「作宗八は一種不思議な人物ではあるが、作の妻のハナも變つてゐるといへば尋々

に變つてゐる女であつた」といふ力みかへつた表現から始まるのである。
然しこの作品が最後の飛躍に到達するためには、もつと靜かな何でもない日常の表現から始まるべきである。さうでない爲めに次ぎ次ぎに說明せられる作中人物の性格が反つて死に、作者がいふほどに不思議でも何でもなくなつてしまふのである。私はこの作品は主題の立派さに較べると、實は文章のアヤが眼につきすぎてゐるといふことを何よりも殘念に思つた。
酒井龍輔「淵」（『改造』）。戰爭の悲劇を取扱つた作品である。實に克明である。戰線で發狂した男を描いて、狂人とも常人ともつかぬ人間を丹念に描きあげてゐる。そこにこの作品の誇張のないよさがある。然しそれだけである。これでは何とも感想の述べやうがない。
藤澤桓夫「ポーシア」（『改造』）。作者のねらつてゐる世界は人間の善良な意思である。然しこんなことに何時までも安住してゐては仕方がないと思つた。グッド・ウイルはよろしい。然しこのグッド・ウイルは物を中途で見た時に起る美觀で、その美觀を表現するためには、素朴な手法によつてのみからういふ主題は生かすことが出來る。然るにこの作品は通俗小說にもなりかねない手法によつてゐる。これでは歷史性も日常性もあつたものではない。

子供を描いた二佳作

宇野千代「私と子供」（『改造』）。坪田讓治「お化けの世界」（同）。

二つとも子供の世界を描いて佳作だと思つた。宇野氏の小説では繼母と一緒にゐる子供の悲劇的な感情と、成長とがありありと描かれてゐて面白かつた。とりわけ子供が實母と逢つた日のはしやぎ方や、自動車を買つてもらつた時の嬉しさうな顔つきなどは、眼に見えるやうに描かれてゐた。

描寫の正確さと鮮かさといふ點では、恐らく今月中での壓卷にちがひない。唯だ最後の感想などは無くもがなと思つた。

坪田氏の小說は子供の世界といふものに作者が這入りきつて書いたもので、かういふ作家は今日まで餘り見かけなかつた。さういふ點でもこの作品は充分に珍重するに價するものと思つた。子供の想像力と、おほげさな誇張癖と、子供だけが持つてゐる勇猛心——。こんなものがよく捕へられてゐた。

だが父親の絕望的な狀態はさておき、この作品が一つの諷刺に到達するまでには、尙ほ遙かなもののあることを作者は覺悟しなければならない。

『行動』には十三人の新人が顔を並べてゐる。名前さへ見たこともない人が多く、今更のやうに年少の文學者の多いことに吃驚した。一應通讀したが、現代流行の能動精神もなければ、不安の哲學もない。文學が描くものであることは事實であつても、日本の文學者が、人間と宇宙に對する一つの解釋をすら持つてゐないといふことは、かういふ若い人達の文學の萠芽を見ても、わ

かるやうな氣がした。新文學が勃興する爲めには、彼等は何よりももつと思考力を旺盛にしなければならない。

山内せい子「ひとで」(『行動』)。作者の素質の中には觀念の芽がある。それは恐らく十三人の中でこの作者だけと思つた。衣匠を愛して人間を愛しない男といふやうな考へ方には短篇小說といふ形式の持ち得る獨特なコンデイションがある。僕はこの作者の二三作を以前に讀んだことがあるので、實は期待してゐたのであるが、さういふ特色はあつても、この作品は完全に抒情に流れて失敗してゐた。小說といふものはかういふデイテイルのない詠歎であつては絕對にならない。

德田一穗「花粉」(『行動』)。題材的な不服だが、作者は餘りにも父親の愛人ばかりを追つかけすぎる。願はくば新らしい君自身の愛人について報じ給へ。然しこれは餘りに偉大な父親を持つた人の悲劇であるかもしれない。

野口富士男「喜吉の昇天」(『行動』)。壓縮した才氣を感ずる。文體に特長があるがそれらがまだ吹ききれてゐない。

新田潤「突つかい棒」(『行動』)。たどたどしい表現であるが、素質的なよさを感じさせる。突つかい棒ばかりした問題の家がユーモラスで底に一つの社會的な批判を藏してゐる。

近藤一郎「箭」(『行動』)。作者の飛躍する感想と大膽な風格に面白味がある。深刻なものと飄々としたものが常にこの作者の中では爭鬪してゐるやうであるが、かういふ作者は決してユーモ

ラスの中で眠つてはならない。この作品にもその片鱗があるが、父親を狼と考へるやうな日常生活の切りつめた面を作者はねらはなければならない。

平田小六「雨がへし」（『行動』）。左翼作家らしいが、その割に文章も題材の捕へ方も新らしい。幾度でも一人の男に騙される女の愛情とみじめさとが、寒い港の風景と一緒によく出てゐた。

田村泰次郎「冬」（『行動』）。話はつまらない。ただ作者が常に何かを野心してゐるといふ點で、これほど元氣で氣ほひ込んだ作者も少いと思つた。

阪本越郎「鋼の巣」（『行動』）。集中最も完備した作品である。一種の旅行文學であるが、旅の描寫の中に世態人情の機微を寫して作者の落ちついた巧みさが感じられた。

その他の作品にもいちいちの感想はあるが、何れも似たりよつたりで、とりたてて論ずるほどのことはない。

氣魂といひ、苦悶といひ、技巧といつてみたところで、ものを見ることが正確でなければ仕方がない。これは吾々お互に警戒しなければならないことである。かういふ新人の作品を集めることは奬勵にもなつて面白いが、願はくば一層嚴重な選擇を得たいものと思ふ。

『コナン大尉』の梗概

ここまで來て、ふと『セルパン』で『コナン大尉』といふ今度のゴンクール賞の梗概を讀んだ。

そしてこれは面白い小説に違ひないと思つた。大戰直後の兵士の心理を描いたものであるが、見方がフレッシュで恐らく戰爭文學としては稀に見るべきものではないかと思つた。ゴンクール賞などといつても大した小説の餘りない中で、これは確に優れたものらしく思はれた。但しこれは梗概を讀んでの感想であるから確なことはいへない。

戰爭當時の勇士であるコナン大尉が戰爭によつて性格變換を起して、粗暴になりながら、然も自分が國に盡した忠誠に比較すれば、自分の粗暴位は何んでもないと考へたりするところや、身體の弱い貴族出の兵士が愛國心に燃えて出征して、反つてその性格の弱さから軍法會議にかかつて銃殺されたりするところが實によかつた。芹澤光治良氏の梗概であるが、なかなかよくゆき渡つてゐた。誰でもいい。一日も早くこの飜譯をしてくれぬものかと願つた。これは僕の想像が多分に手傳つてゐるかも知れないが、戰爭の悲劇といふものをこんなに性格的に取扱つた作品は恐らく少ないやうな氣がした。私はこの梗概を讀んでから二三日興奮してゐた。

さてこの時評は四回といふ約束だが、それではもう何も書けない、まだ無數の作品が殘つてゐるからである。

德田秋聲「部屋解消」（『中央公論』）。部屋の性格と、そこに現はれる女達とを描いて自若たるものがある。主人公の表面に表はれぬ强さが常に次ぎ次ぎに登場する女達を敗北せしめる。まるで網にかかる小鳥達のやうなものである。だが主人公はその女達に、常に眞實以外を見せない。女

達はやがて去つてゆく。主人公はそれを追つかけないやうな、それをひかへるやうな氣持ちで見送つてゐる。暗鬱な部屋の空氣が無數の小事件で說明せられながら渾然とした空氣をつくりあげてゐる。ただこの作品の特長は空氣である。だからその中にある不動の主人公を見失へばこの作品はつまらなくなるに違ひない。

丹羽文雄「岐路」（『中央公論』）。前に同じ作者の「象形文字」といふ作品を讀んで、僕は作者に常識を飛び越えてもらひたいといつたことがある。この作品はあきらかにそれをなし遂げようとする作者の氣構へに溢れてゐる。これは大まかな言葉であるが、作品の中にあるエスプリも里見弴から谷崎潤一郎に接近しようとしてゐるやうに思はれる。それは一つの萠芽としてであるが、一つの觀念をたしなまうとする所が見えて、私はこの作者の成長と方向とが誠に自然に動いてゐるのをうれしく思つた。

最後の骰子筒をころがすところも、その心理の取扱ひ方も、緻密でいいと思つた。それにしても題のつけ方が如何にも古い。これは寧ろ「黑白」とつけたつて、まだその方がいい位ではないかと思つた。

武田麟太郎「淨穢の觀念」（『中央公論』）。武田君らしい才氣と落ちつきとが方々にひらめき、二三讀んだ市井ものよりは寧ろこの方が面白いと思つた。但し何となく安易な氣持ちがして、何よりも大切な自殺問題が讀者に食ひ込んで來ない。あれがもつと響いてくれれば、この作品は一寸

素晴らしい効果を持つて來たのではないかと思つた。

「脱出」推稱

福田清人「脱出」（『新潮』）。感化院の少年共を描いた作品であるが、素材的にも又取扱ひ方にもユニイクなところがある。

この題材の取りあげ方は瑣末主義と思はれるほどに微細であつて、然もそれが煩瑣に響いて來ない。何よりもこの作品のいい點は作者が對照を「惡い」少年として描いてゐないことである。人間の一つの種類として描いてゐることである。少年共の敏捷な異常發達にしてもそれが少しも誇張せられずに描かれて、然も異常である。今月の新人の作中、僕は第一等に推す。新鮮な筆致といふ點から云へば、恐らく文壇を通じての佳作であるに違ひない。

とりわけ最後の結末は、性格といふものの強烈さを表現して、人間力の支配しきれない世界の存在を指摘してゐる。性格といふか、本能といふか、さういふものに比較すれば、善良さといふものや、道徳といふものが如何に弱く小さいかといふことを考へさす點でも一つの暗示的作品だと思つた。

寺崎浩「長姉の手紙」（『新潮』）。この作品は文章の疊みかけてゆく調子に大人びた練達さがみえる。何か新らしい技法を持つてゐる。それは福田君とも違ふ獨特なもので、もつとぬらりくら

りとした世界であるが、大體に於て主題が非常に混亂してゐる。

姉の妹に對する愛情はわかるが、姉が何故に妹が結婚前に男に身體を許したことを責めてゐるのか、意味がない。あぶな繪を描きながら而も心の高潔を保つてゐる姉を描かうとしたのでもなければ、さういふ妹の行爲が、何も悲劇の原因になつたといふのでもないし、例へ男に早く身をまかしてもそれを非難する理由はない。妹はそれで結婚しても間違ひではないのである。それを責めてゐる手紙が全體であるから、二人の姉妹を說明するといふ以外には何の役目もしてゐないことになる。僕は寺崎君の作品は今日まで割合に愛讀して來た方であるが、例へば最後の姉の「設計」云々といふ言葉にしても、作者はこれを肯定してゐるが、僕はそんなことは明らかに間違ひだと思つてゐる。人間といふものは常にもつと大きく、解釋を越えたものを持つてゐる。

榊山潤「春」(『新潮』)。この作者を中心にして考へると、一つの客觀小說に這入つて來たといふ點で、作者は新らしい試みをしてゐるのである。ただ、これには臺などが澤山出てくるが、話は春であつても、秋であつても、冬であつても一向かまはぬのである。「春」といふ表題に作者が脊のびをして、反つて主張を一面的な感傷に陷入れてゐることは見逃せない缺點である。

林芙美子「朝夕」(『文藝春秋』)。別れようとして別れきれない中年の男と女とを描いて好個の短篇をなしてゐる。敗北した人間同士の中にある素朴ないたはりが、氣持ちよく書かれてゐる。それは時にこの作者の作品に現はれるわざとらしい抒情詩的目つぶしでもなく、自然に實に好ま

しい表現を以つて描かれてゐる。フイリップを讀むやうな可憐な逸作たるを失はない。

片岡鐵兵「苦痛」(『文藝春秋』)。轉向した一人物の複雜な心の苦痛を描かうとしたものである。かういふ作品を見ると、その出來榮えの如何は別として吾々はそこに良心といふものを發見して、藝術小說といふもののよさを改めて考へる。何も作者はかういふものを描かなくても「花嫁學校」のやうなのんきな作品を書いてゐればいいのである。だがさうばかりではゐられない。かういふ精神的なよさこそ、藝術小說といふものを怠惰から常に驅りたてるところのものである。

(『讀賣新聞』昭和十年二月廿六日)

寫眞リアリズム

「日蘭會商」といふ作品を僕は正月に發表した。

これは現代流行の不安の文學に對する諷刺として書いた。何も吾々は吾々の運命を甘やかす必要もないが、それかと言つて不安趣味で塗りつぶす必要もないからである。然し現代の小說といふものは、何か不安といふ言葉が一つ落ちてゐると、毛が三本足らぬやうに、眼の色を變へるのである。然しこれほど滑稽な現象はないのである。

人間の性、もともと未來の空想に賴つて哀切なものがある。どんな人間にも等しくこの性質があるのである。僕はこの性質を大膽に觸發させてみようと思つて、自殺を決心した男がふと冒險旅行によつて一夜七十萬圓の財產を作ることを書いた。

すると批評家の多くは「ウソか本當か先づ迷つた」と告白したり、「鬼面人を嚇かすものである」と言つたり、「不眞面目である」と憤慨したり、「安閑として不安がない」と呟いたり、或ひは「日常茶飯小說を破壞するのはいいが、藝術的リアリズムといふ問題をどうするか」といふや

うな疑問を提出した。

これらの批評を必ずしも惡いといふのではない。それぞれに意味を持つてゐることは事實である。だがなるほど寫眞リアリズムにとりつかれてゐる人間にはかうも感じられるものかと僕は先づ驚いた。あの堅くるしい必然論にひつかかつてゐる人間にはさうも見えるに違ひあるまいと思つた。

僕はあの作品など、ちつともいいとは思つてゐない。然し精神の高揚した世界、題材に對する作者の勝手自在な料理、といふ點では少々自惚れてゐないこともない。

あの話などは本當でも嘘でもいいのである。本當のやうでもあり、ウソのやうでもあるところに、あの作品の諷刺があるのである。あれが寫眞リアリズムになつたら諷刺になる氣づかひはない。ゴーゴリの鼻が散歩する小說を、誰が「本當か嘘か」と言つて迷ふだらう。それは嘘でも本當でもいいのである。

又「鬼面人を嚇かす」といふが、これは『早稻田文學』の逸見廣君の批評であるが、恐れ入つた。僕は寧ろ今日の不安の文學にこそ、そんなところがあると思つてゐるもので、僕の小說などには眞面目な冗談があるばかりで諷刺にこそあれ、人を驚かさうなどといふ了見は夢にもないのである。不安の文學のやうな見せびらかしの深刻面もなければ、飜譯哲學もないのである。

然し小說といふものは、飛躍した眞實を取扱ふものだから平板な材料や日常生活では困るので

ある。この僕の考へ方が「鬼面人を嚇かす」とでもいふのなら、承知するが、然し飜つて思へば、そんな寫眞リアリズムを遵奉してゐるから今日のリアリズムが行きつまるのである。

僕は先づ今日は何よりも藝術的リアリズムなどといふものを破壞して肩をかるくして、勝手なことを書くべきことから練習しなほす必要があると思つてゐる。

『紀元』二月號だつたか、丹羽文雄君がジユール・ロメーンの『新らしき町』か何かをリアリズムといふことをさしおいて愉快であると言つて批評してゐるのを見たが、ああいふ氣持がもつと起らなければならないと思ふ。丹羽君などもさう言ひながらリアリズムが矢張り氣になるらしかつたが、それでは『新しき町』は作れない。

ひところの武者小路實篤氏の戲曲なども今日の寫眞リアリズムにはいい苦言を提してゐるかと思ふが、ああいふものを讀みかへしてみることもいい勉强ではないかと思ふ。哲學的に言へば、僕は偶然論といふものをもつと大切にする必要が起つてゐるのだと思つてゐる。さうすると陳腐なリアリズムの觀念も自然變つてくるのである。

「人間萬事塞翁馬」といふ言葉があるが、あの小說にはそんなところもある。あの言葉は悟達の比喩であつて、怠惰の比喩ではない。偶然論といふものも、私の小說も、又さういふ一面に參與したいと思つてゐる。

さて小林秀雄君はこの作品には何とも言はなかつたが、だいたい小林君は何時も僕の仕事を見

ると、やつつけにかかるのが常で、それは何かしきたりのやうでもある。この頃ふと昔の手紙などを片附けてゐると、その中から小林君が小生に×はした「發明家と何とか」といふ童話の原稿が出て來た。

これは小林君が小生の近所に住んでゐて、しきりに僕のうちに來たりしてゐた頃のものであるが、よんで見ると矢張り何を書いてあるのかわからなかつた。今も昔も同じで三木淸氏が何時か小林君を批評して「ものを歪めてより見ることが出來ない人だ」とあつたのを覺えてゐるが、歪めるどころか、何も無い爲めにわからぬのではないかといふ氣がした。この頃はそのわからぬところを生かす分別をわきまへたらしく、それが小林君の發展であるが、僕の作品に對してもわからぬ場合は、今度のやうに何も言はぬのが一等賢いのである。たいてい惡口にきまつてゐる批評などといふものは、あまりきまりきつてゐて、批評されても一向つまらないものである。

小說に於ける發想

小說に於ける發想法を書けよ、といふことであるが、そんなことは本當の小說を書くことより、もつと難しい。もつとも、いつであつたか、私は「藝術とは天啓によつて製作せられるものではない」と書いたことがある。「吾々がいろいろなことを考へたり、發想したりするのは、技術といふものを持つてゐるからだ」と書いたことがある。

これは變に藝術家面する人間の態度が胸糞わるく、技術といふものの大切さを自ら認識しようとして爲したところの說である。だから決してかういふ考へ方が全部的に正しいとはいへないが、先づそんな氣持からここでも書いてみたい。

私のいふ意味は、吾々人間が文章を書きたいと思ふのは文章を書き得るといふ技術を持つてゐるからである。技術を持つてゐないものは、さういふことを考へない。即ち泳ぎたいと考へるのは泳ぎといふ技術を知つてゐる者にとつてのみ可能であるといふことを意味してゐるのである。即ち藝術上何かの發想なり着想なりをするといふことは、その人が藝術を製作し得る技術を持つ

てゐるからであるといふたのである。
それは泳げないものも泳ぎたいと考へ、文章の書けない者も美文を書きたいと思ふことがある。然しそれらは純粋の意味で泳ぎたいと思ひ、文章を書きたいと思つてゐるのではない筈である。このことは次第にこの文章を讀んでゆくうちにわかつてくることと思ふが、吾々が何かの發想なり、着想なりをするとすれば、それはその人が、多少の技術を持つてゐる場合に於てのみ可能であるといふことを、吾々は先づ自覺しなければならない。
だからいい發想なり、着想なりを得たいと思へば、藝術家を氣取つて靈感を待つ前に、その人はよき技術を先づ習得しなければならない。從つて逆によき技術を持つてゐる者のみ、常によき發想をし、着想をし得るといふことがいへるのである。それの近い例は、名工にしてのみ、初めていい獨創を示すのであつて、下手な大工は下手なことより思ひつかぬものである。但し名工が何時までも名工たり得ず、下手な大工が何時までも下手であるとはきまらない。
してみると、何よりもいい發想と着想を得たい人は、先づ文章の技術を常に習得し錬磨しなければならぬといふことになる。
技術のないものは、どんないい發想をしようと思つてもそれは不可能である。ではその技術は如何やうにして習得し得るか。これはなかなか困難な道であつて一朝一夕には語りつくせない。
よく人によると、「私は實に素晴らしいことを考へてゐるが、筆がたたぬから駄目だ」などと

いふのを聞くが、だがそんな人に限つて、ではどんなことを思ひついてゐるのかと聞いてみると、多くつまらぬことが多い。自分では素晴らしいと思つてゐるが、技術といふ濾過器を通過しない考へといふものは凡そ粗雑な場合が多いのである。

本當に素晴らしいことを考へてゐれば、それが話せないわけも文章に書けないわけもない。その人が話術なり文章なりを知つてゐれば、それが自然に現はれてくるものである。現はれないといふことは結局その人が何も持つてゐないといふことに他ならぬのである。

だから吾々は發想とか着想とかいふことを漠然と考へずに、先づ文章の技術は如何にして習得すべきかを考へる必要がある。

さてこの方法については、古來いろいろな書物と說とがあるやうである。だが最も代表的で最も要を得た一例は「三多の法」に盡きるだらう。

佐藤春夫氏の說によると、谷崎潤一郎氏の『文章讀本』の如きも、この「三多の法」を出てゐないといふことであるが――即ち、看多――おほくよみ。做多――多くこころみ。商量多――多く工夫する。――といふことが、何よりも大切だといふのである。

いつてみればあたりまへ至極のことであるが、決してたやすいことではない。さてこれを字義通りに云つたのではつまらないから少しばかり解說するが、私は看多――といふことは單に多く本をみるといふのではなく、本と同時に自然や社會萬般のことをよく見ること――といふ風に解

釋したい。卽ち作家の心に滋養になるものは、（一）讀書によつて知識經驗を得ることと（二）社會の生活に直接にふれて知識經驗を得ること。この二つしかないのであるから何よりもこの二つを大切にして、なるべく人のものを讀んでは、初めのうちはそれの眞似をして、その技術を習得し、又經驗を深刻に生活し、それを正直に記錄して、その實景が出てゐるかどうかを考へて、その技術を確かにする。この二つが何よりも文章學の第一步であつて、而も最も大切なことかと思ふ。

そこで做多——右のやうな讀書と生活の經驗をなるべく多く書き試みることが大切になつてくるのである。次に商量多——工夫するといふこと。これはこの文章の初めにもいつたやうに、初めからやれるものではない。看多、做多、の出來た人にして初めて出來るものである。

この工夫といふことは古今の傑作を見れば、誰れしも心に思ひあたることで、その技巧の壯大さや纎細さにそれぞれ感歎するものが少くない。

手近の例で云へば、谷崎氏の『春琴抄』なども、その構造が物語として、一つの聞き書きの形式を持つてゐるが、あれなども作者のなみなみならぬ工夫から出てゐるといふことがいへるのである。何時であつたか、あそこに出てくる佐助といふ熱情的な男が、自分の眼をつぶすところがあるが——あんなところなども、その他いろいろ眞實を壞してゐるといつて一部の人が非難したりしてゐたが、作者の用意は、つまり、さういふ風に噓に見えたりするほど主人公の性格が浪曼

的であるから、小說の構造を佐助の主觀を通した聞き書の形式にしたので、ここに作者の用意工夫があつたのである。あの構造があるからこそ、どんなに嘘のやうなことが出て來ても、佐助が熱情的であればあるほど、それが嘘でも何でもちつともかまはなくなるのである。これはこの作の構造についての作者の發想着想にふれたのであるが、尙ほ次に細部の分析をしてゆけば、どういふ研究も出來るのである。然しかういふことは臆測になりやすい。

そこで私自身の二、三作について參考までにその發想や着想に多少の辯說をしてみたい。

私はひところ人間の信じあつてゐるさまの美しさといふものが書いてみたくてたまらなかつたことがあつた。その時、ある男が來て、ふと話すには——夕方海を見てゐると、男か女か、沖の方へ幾らでも步いてゆくのが眼に見え、どうしてゐるのか不思議に思つた——といふ話をしてくれた。

それで私は、ふと、それを二人の人間にして心中の話にしたらどうかと考へて「或る心中の話」といふ作品を書いた。それはたまたま人の話を聞いてゐて發想したのであるが、割合に面白く出來た。

卽ち或る淋しい女が、海の沖を見てゐると、一人沖に向つて步いてゆく人間がある。よく見てゐるうちに、それが急に二人になつた。はてなと思つて望遠鏡で見ようとすると、二人の影は抱きあつたまま益〻沖へ步いてゆき、やがて海に沈んだ。これは心中に違ひない。然しかういふ冷

靜な信賴の極地を示した心中があるだらうか。私は未だにその事件を現實とのみは考へられないが、時々思ひだす——といふ話である。

この發想はたまたま人と話をしてゐて、それが人の談話から引きだされた場合であるが、かういふことも吾々作家といふものはなかなか經驗するのである。

次ぎに『ゴルフ』といふ空中の曲藝師の話を書いたことがあるが、あれは靜かな海を鏡と人はよくいふが、若し鏡の好きな女が大きい海に自分の影を投げたら、どんなものかと、何時か中禪寺湖畔に寫つてゐる雲を見て、その壯麗を思つたことがある。それでその空想を一つの小說にした。それには男女を空中曲藝師にしなければならず、その女が男に空の中で振り落され、海に墜落しながら、海を鏡と思つて幸福に死ぬといふ風にした。

これは初め一つの大きい鏡といふ空想から出來た作品であるが、全然空想から出發したためにそれを肉づけするのになかなか苦勞した。

『氷る舞踏場』といふ作品は、或る日、『科學畫報』か何か、もう十數年も前のことであるが、子供の雜誌を見てゐて、家の中でも、部屋に水蒸氣が充滿してゐて、それに寒氣があたれば、天井から雪が降る筈だと書いてあつたので、その美しい幻想が、私を馳りたてて『氷る舞踏場』を書かせた。

即ち、淫蕩な舞踏に疲れて多數の男女が折れ重なつて倒れてゐる時、餘り空氣が悪くなつたの

で一人の士官が外氣を入れようとして窓を破ると、寒冷の風が突進して來て、そのために部屋の中は雪にうづもれ、醉ひ痴れてゐる男女は雪の中に包まれてしまつた。

これは一雜誌をよんで、ふと思ひついた例である。

かういふことを書いて行けば際限もなく、尙ほそれをことこまかに分析し研究すれば、それもきりがなく、又その技巧用意のほどについて考へれば無限の枚數が必要になつてくるのである。然し何れにしても作者の發想、着想といふものが、常に何かの事實の機緣から起つてくるものであるといふことを、これらの例によつて理解し、勉學の人は、常に事實といふことに忠實になることを忘れてはならない。

ピカソのやうな壯烈擘拔な繪を描く人間さへ次ぎのやうにいつてゐる。

「自分の仕事は、常に自然から感じ、自然から發見したものばかりによつて出來てゐる。」

即ち吾々は常に自然の眞實といふものを、よく見ることによつて、自分の理想や空想と、それを一致させ、解釋するなり、構造するなり、變形するなりして、一篇の小說、文章を作るのである。吾々は日記を大切にし、寫生を大切にし、然もこれを構造する時には、常に先人の糟粕を嘗めぬやうに、新らしい意匠と新らしい工夫とを必要とするのである。

偶然とリアリズム

この頃はリアリズムといふことが問題になつてゐる。だがリアリズムとは一體何か。最近で最もリアリズムをとりあげて論じたものは、プロレタリア文學であつて、彼等はそれをプロレクリア・リアリズムと呼んでゐる。

彼等の研究題目はバルザックやゾラで、丁度バルザックやゾラの時代の社會的不安と現代の狀態とが似かよつてゐるといふところからそれは來てゐた。だがバルザックの時代と今日とが同じである筈はないし、たとへ似てゐたとしても、もう旣に彼等がそれを論じた時と今日とは旣に社會の狀態が激しい變化をとげてしまつた。

バルザック的といひ、ゾラ的といつてみても、今日では最早、その精神や態度を論じるより仕方がなく、リアリズムとして彼等をとりあげることは餘りに素朴になつてしまつた。

それならば新らしいリアリズムを誰れかが論じてゐるかといへば、これも見あたらない。何時か『新潮』か何かで、谷川徹三氏他二三の人がそれに觸れてゐられたやうであるが、さして從來

の說を訂正するやうなリアルの根柢にふれた所說は無いやうであつた。

私はこの間から度々この問題にゆきあたるのであるが、リアリズムといふより先づリアルとは一體何であるか、といふことに就いて吾々は一考する必要がある。

リアルといふものを人はありのままの眞實と長い間考へて來てゐる。眞實といふものには不思議がないと考へて來てゐる。不思議とは吾々の理解が到達し得ないからであつて、到達すれば不思議などはなくなると考へて來てゐる。だから從來のリアリズム小說といふものは、さういふ眞實に觸れようと努力して眞實といふものの持つてゐる不可解を常に剝脫しがちであつた。實際さういふ理論からはさうなるより仕方がない。

飛躍のない眞實。無味な生活。さういふものが、だから好んでその題材に選ばれた。とりわけ、その最も墮落した例は、日本の日常茶飯小說で、リアリズムとはかくの如く退屈なものかと屡々吾々をして思はしめるほど無味な生活のみがとりあげられて來た。だが、あれほど眞實らしい噓はなかつた。

眞實とはそんなに單純なものではあるまい。吾々は見れば見るほど、眞實といふものの常に複雜で深く、無限で、見れば見るほど、追究しきれない面を次ぎ次ぎに現はすのに氣付く。そして從來の固定的な概念の噓に氣付くのである。

ところで、吾々は長い間、哲學的に、又科學的に眞實といふものを固定的なもの、一つの必然

性としてのみ考へてゐたのであるが、新らしい思想はこれ等の所說を根柢から破壞しつつある。即ち眞實とは最も「飛躍」にみち「偶然性」によつて發展してゆくものだといふ思考であつて、これは最近の波動力學、量子論において益〻顯著な傾向をとりつつある。これをいふと、又かと思つて妄執觀念のやうに、人には滑稽に聞えるかも知れないが、私は敢てその妄執の中で、それを呟きつづけるのである。

だが考へてみると、かくの如く眞實といふものの性質を解釋することは、なかなか大膽なことであつて、ここでは眞實に對する觀念が過去とは正反對になつてしまふのである。彼等は觀測者の被觀測物への作用を計算し、そこに計り知れぬ眞實の展望を見つけるのである。この人間的にみられた物質の究極、人間との連關に於てみられる眞實の究極こそ面白いのである。ここにこそ吾々が生命を賭し得るものの相貌がある。無限と不可知、それが故に吾々はそれを追究することに喜びを感ずるのである。

即ち文學といふもののよさはこの不思議を追究してゐるからであつて、眞實の中に不思議があるのではなく、眞實それ自身の性質が不思議だといふことにあるのである。若し眞實といふものが從來のやうに無味乾燥で飛躍のないものなら文學などやつたつて無意味なのである。

ここに新らしいリアルの問題が文學の中に生かされる理由があるのではあるまいか。この點以外に藝術上のリアルといふものがあり得る筈がない。

この間『世界文學』といふ小冊子を開いてゐると、メリー・コーラムといふ男が、リアリズムはフローベルの『ボヴァリー夫人』に始まつてシンクレア・ルイスの『アレ・ヴィッカース』で最後の息を引取らんとしてゐると書いてゐたが、いつまでも同じことを繰り返してゐる日本の文藝評論家よりは遙かに大膽で面白かつた。

大體リアリズム小説といふものはフローベルやゾラのやうな浪曼的性情の作家が書いた時にのみ讀めるのであつて、浪曼的でも詩的でもない凡庸な作家が日常平板な生活を書いても仕方がないといふことは、餘りにハッキリしてゐる。だいたい自然主義といふものも、これを自然科學的に見ないでルッソオ的に考へれば、明らかに一つの浪曼主義であつて、日本ではさういふ風に解釋せられなかつたやうであるが、これを反省すると、文學の主流といふものは、常にルッソオ以來、浪曼主義以外にはなかつたといふことがいへるのである。

文學運動としての日本の自然主義運動といふ物は、澎湃としてこれほど大きい運動は今日までなかつたやうに見えるが、實は歪曲と誤解とにみちてゐた。彼等は「選擇」のない無味乾燥の小説の一つの型を作つてしまつた。然もなほ今日でもその茶飯事の記錄のやうな小説が生きつづけてゐるのは誠に殘念といはなければならない。

何の飛躍もない、死んだやうな、コソコソした、噂話のやうな……といつてみたところで、それならお手本になるやうな別の小説があるかといへば、それも直ぐとは思ひ出せない。

だがいづれにしても、吾々はリアリズムといふものの根柢を全然逆にしなければ、最早文學といふものを生き生きと考へられなくなつてゐるといふことは事實である。

然しひるがへつて考へると、歴史を通じて吾々の持つてゐる優れた傳統、眞實の藝術家といふものの到達した世界といふものが、それがリアリズムから這入らうと、ロマンチシズムから這入らうと、皆が皆、かやうな世界であつたことには誰れしも氣付くのである。物に對する絶えざる追究によつて、彼等は最後には皆が皆、神韻渺々たる眞實の世界に到達してゐるのである。

吾々はもの凄いゴヤの繪をみても、美しいボッチェリの繪をみても、又端麗なホルバインの繪を見ても、重厚なレンブラントの繪を見ても、常にそこに何か説明のつかぬ不思議を見出さぬことではない。それは雪舟に於ても、宗達に於ても、大雅堂に於ても、乃至は竹田に於ても、寧ろ東洋に於てこそ、その精神の現はれのいよいよ激しいことに氣付くのである。

然しそれは、これらの繪が自然科學の洗禮を受けぬ前の時代のものだからではない。例へば自然科學の勃興時代と共にあつた印象派の繪に於ても、更らに現在に至る繪畫に於ても、いよいよ同じやうにその感じを深くするのである。色彩を分解しようとしたマネーやセザンヌに於てすら、常にそれらの繪の中に不可知の深遠さを見つけるのが常である。それは繪畫といふ技法と、思想の中に常に人間といふものが這入つてゐるからである。

それは不可知と云つてもよい。近代の神話と云つてもいい。眞實の深さと云つてもいい。これ

ら總てのものは古來哲學の上で、偶然と呼ばれて來た性質の上にあるのである。そこには常に計算しきれぬ眞實といふものの深さが見事に捕へられてゐる。

引例が繪にのみ走つたが、尙ほゴツホやゴーギヤンや、近來のマチスや、ルオーや、ピカソに至つては、その不可解の大きさは、更らに彼等の追究する眞實と等價であるほどに不可解それ自身にすらなつてゐる。然もそれは神祕といふモツタイブツタ、陰鬱なゴマカシではない。太陽の光の中で、とりわけ近代に近づくに從つて、透明な外光の中で見る不思議を方向してゐるのである。それは眞實を創造し、同時にそれを超越してゐるのである。

吾々は今、かくの如くにして文學の根柢を新らしいリアルの上にうちたてなければならない。これこそ眞實のリアリズムと呼ばれるべきものに違ひない。然し舊來の習慣を破壞する爲めに吾吾は一應リアリズムといふものを否定する、そして否定しつくしたところから吾々は新らしく出發しなければならない。だがコラームのいふやうに最も怠惰な作家の多數によつてリアリズムが今日支持せられてゐるといふことは最も恐るべきことである。

（昭和九年十二月十日）

『二十世紀英文學の新運動』

ポウは作品の眞の價値は「新奇と適正との結合にある」といつてゐる。また「外界に存在するものを單に模倣しただけなら、それがどんなに正確であつても、その作家に藝術家といふ尊い名は與へられない」といつてゐる。

「新奇と適正」――これまさに吾々のいふ「正確にみることの不思議」をいひあてた言葉ではないか。正確さを追究してゆくことによつて不思議に到達出來るとしたら、これほど希望にみちたことはない。

それにしても、ジョイスの文學をみ、プルーストの文學をみれば、今更らにポウの言葉の意味を理解し、彼等が從來の文學に對する考へ方を明らかに改革しつつあるのに驚くのである。ジョイスのやうな怪物は、とりわけ深い傳統を探りながら、しかも完全に過去の文學から一つの新世紀を開かうとしてゐるのである。

徒らに過去にのみ驚いて、現代の文學と過去の文學とを、同じ指標で比較しようとするやうな粗忽者のゐる時、彼等を見ることは何よりも樂しい。

武者小路實篤氏はかつて最も傳統を尊重した。しかし彼は同時に自分の時代の文學に革命を志したのである。又ジイドの『ドストイエフスキイ論』といふやうなものにしても、その氣魄の壯烈さにおいて、彼はドストイエフスキイの中に惑溺しても、然もその中に同時に彼自身の文學の新奇を明らかに示してゐるのである。

どんなに過去に驚歎することに巧みでも、建設的意志を缺如した文學者などは、無意味だといはなければならない。

吾々の周圍では先づ横光が、その作品において、感想において、舊來のリアリズムのたわいなさを述べ、川端もまた「現代のやうなリアリズムには反對だ」と、この間も『行動』の座談會でもらしてゐた。

だが、それよりも、もつと活潑にこの仕事について、明らかな方向を取つてゐるのは、春山行夫ではあるまいか。

彼の文章が時に狷介であつても、それは先づ許さなければならない。といふのは彼はあまりにも改革の熱情に燃えてゐるからである。それだけに私は彼の中から常に何者かを發見する。

彼の新著『二十世紀英文學の新運動』を見ても、彼はスタイルを中心にして、文學の新方向を

常に論じ、然もそのスタイル論の背後では、ジョイスをリアリストとして、またロマンチストとして兩方から眺め、その衝突の火花の中で、リアリズムといふものを宙に浮きあがらせてゐるのである。これは明らかに彼がリアリズムといふものに新奇の觀念を持たうとしてゐるからであつて、恐らく彼の評論位、この新方向について最も敏感なものはなささうに思はれる。この一冊の丹念さと、新精神にはなかなか學ぶべきものが溢れてゐるやうに思はれる。

今の多くの若い作家や評論家は、多く酒を飲んで通人ぶることは知つてゐても、プロレタリア文學以來、思想に恐怖して、何等の哲學的根據を持つてゐない者が多い。その中にあつて、この新著などは充分に新時代の氣を吐くものとして推稱すべきであらう。

文學者の交遊

この間、池谷信三郎の全集の打合せか何かの歸りがけに、友達と一緒に、ふと『文學界』の同人會に出席した。出席してもいいかといつたら、いいといふので同人ではないが寄つてみた。だがそこには林房雄と武田麟太郎と、それから一二の人しか見あたらず、林房雄は少しばかり酒氣を帶びてゐたが、私を見ると、「君は文學界では評判が惡いぞ。君を辯護するものは川端位なものだぞ」といつた。

文學界にはどんな赫々たる同人がゐるか、皆が皆、よくは記憶してゐない。しかしそれが何で

あるかと私は思つた。

文學の仕事は一人でよいのである。私は同人のどれだけがどんなに僕をあしざまにののしつてゐるとしても、そんなことは平氣なのである。またコソコソといつてゐる人間があつても、それはそれでよいのである。面と向つていへば私はどんなことにも敢然として自分の所信は述べるのである。どんな惡評もまたよいのである。どんな人間がどんなことをいつてゐるとしても、そんなことは糞くらへである。自分はそれだけの自信と氣力とは持つてゐる。

林房雄は彼がまだ文學をやつてゐない頃から僕は知つてゐて、彼の正直な恬淡とした性格を自分は好むのであるが、彼の隻句をわざわざ拾つて、今更いふほどのことはないかも知れない。だが、自分は若し彼等の中の誰かが、自分を痛罵してゐるとしたら、そして若しそれが眞實に觸れた言葉としたら、自分は謙虚にそれを聞かなければならない。これは文學者として、自分の平生旨とするところだからである。

だいたい自分は惡評などといふものに、それほど怯懦でも臆病でもない。ただそれらの言葉が誠實を失つた風評でないやうに、また眞實に對する恐怖から來てゐないやうに願ふのである。

自分は何もさういふ言葉に風馬牛をよそほふ必要はない。もつともその夜の林房雄のいふところは、何かにあたりちらして、それは彼の不滿の安全瓣かと思はれるほど、時に憤慨し、時に悲憤し、時に諧謔にみち、僕にも何かをすすめ何かを戒めてゐた。いちいちこれに答へ應じてゐた

ら、尚ほ多くの人がそれに對して何かを云はなければならなくなるかも知れない。
しかしそれはそれでもよい。自分は文學者の交遊といふものを思ふのである。吾等が常に仕事の上において、時に身命を賭して競ひ、爭ひ、しかも同じ眞實といふものに對して追擊を怠らぬ人種だといふ誇りの上において、いみじくも親しいことを思ふのである。
かういふ交はりこそ君子の交はりに違ひない。逢ふ時に逢ひ、別れる時に別れたがよいのである。僕はかういふ交はりを何よりも好む。何も婦女に親しむやうに親しみ、馴れ、他を排し、黨派の風評をことゝする必要はないのである。
きびしく、しかも眞實につながつてゐるといふことほど、壯烈で親しいことがあるだらうか。
これこそ男子の交はりである。
自分の一文は少々感想に流れて横道に走りすぎたやうである。しかしこれが自分の平生から願ひ考へてゐるところである。風聲何するものぞである。自分はなほ身體のことを懸念して生活してゐる。しかし精神まで弱つてはゐないのである。

年齡の不思議

自分は病氣をしてゐる間、幾度か死を思ひ、死を願つた。決して死を恐れなかつた。
それは夢魔に襲はれて昏々としてゐる時も平和であつた。平和といふよりもそれを興奮的に考

へてそれを樂しんでゐることさへあつた。

あの時のことをあとから考へて、人間は死が近くなると、死の用意をし、死をさへ希望して自己を裝飾するものかと考へた。丁度老婆達が「早く阿彌陀さんのお迎へに逢ひたい」といつて自らの餘命をさへ欺瞞してゐるやうに。

ところでその死に對する願ひは病氣が癒りだしてからも、すぐにはその感情から引返さなかつた。自分は死のことをよく考へた。今でも考へないことはない。

しかし今は死に對する考へ方が變つてしまつた。そして年齡の不思議といふことを考へ、今は長生きがしたいと思ひ、年長者といふものに心からの尊敬を拂ふやうになつた。

この間、一舊友に逢つたら彼も長生きがしたいといつてゐたが、あれはお互の病身のせゐか、それとも年齡のせゐか。とにかくこの間までなほざりに考へてゐた生命といふものに妙に未練を感じだした。どうしてこんなに一變するものかとつくづく自分を動物的に考へてしまふ。

一體人は生れて來た上からは、生命をむさぼり、醜惡をさらけだしても長生きすべきか、それともあの生命に戀々とする動物のなさけなさを輕蔑して自ら自分の生命を絕つべきであるか。

恐らく以前の自分は後者を選んだに違ひない。しかし今は冷靜に考へて、どつちがいいのかわからなくなつてしまつた。

ただ年長者を見ると、何といふことなく頭のさがる氣がする。それは道端にゐる老車夫を見て

も、また骨董などをいぢつてゐる老人を見ても同じである。

自分は年齢といふものに不思議と敬意を拂ふやうになつた。これは疑へば、恐らくこれも自分が老年になることの用意をしてゐるのか、それとも自分の病身を思つて、この幾度となくおどかされる生命の不安を堪へて、あそこまで生きてゐるといふことに尊敬を拂ふ氣持ちか。兎に角自分は年齢といふものを不思議に考へだした。

パスカルがいつたやうにこれほど「破れやすい葦はない。」またモウパッサンが絶望したやうに、確かに不安極はまる機械に違ひない。

私は一寸食事の注意を怠つては弱り、少し外出しすぎては疲勞してしまふ。そしてさういふ感情の中から見ると、あの老人達の顔の皺でさへが綺麗に見え、どんなに醉生夢死のやうな生涯でも、生きてゐるといふ事だけで、彼等が尊敬出來るやうに思はれてくる。

昔の哲人は病氣を不德の一つにかぞへたといふが、確かに長生してゐる人が、何かの聰明さと德とをそなへてゐたといふことは事實に違ひない。

また自分は德富氏や德田氏のものを讀むと、どんな斷片にも、何か不思議なもの、深く遠いものを感じて驚かされることが多い。

吾々の知識の世界といふものは勉强すればある點までは常に獲得出來る。しかし年齢の感情といふものだけは、どんなにしても、そこへ行かなければわからず、すべて知識慾に退屈した人さ

へが、なほ禪宗の老僧などに何かの興味を持つたりするのも、それが人間の最後の興味であるからではあるまいか。自分は生きた方が本當か、死んだ方が本當か、わからない。しかし出來るだけ生きて仕事をしたいといふ氣持ちに今は溢れてゐる。

新らしい世界

病氣によると十年も二十年も三十年も潛伏するさうである。吾々の天才にしてもまた同じやうに十年も二十年も三十年も潛在しないとは限らない。

そこで或る男が云つた。

「吾々の生命がもう三十年長かつたらどうだらう。」

で、その友達が答へた。

「隱れた病氣と天才とが、更らに現はれるに違ひない……さういふ世界を考へる時、そこに別な座標系を人間は發見するかもしれない。」

「新らしい世界が始まるだらうか。そして新らしい文學が。」

そこで二人は非常に明るい顏をした。

「潛在してゐた澤山のものが人生の表面に姿を現はすだらうか。モウパッサンは、吾々に五官以外の感官があつたら、素敵もなく目新らしいものを吾々は發見するだらう、と云つて、人生の

平凡を歎じてゐる。だが、僕達が、今考へてゐることは、彼が考へたよりも、もつと現實的で確かで、可能性があることぢやないだらうか。」
「してみると、吾々は現在とはまるつきり違ふ世の中を見ることが出來るだらうか。」
不思議な明りが二人の心を興奮さした。そして彼等は新らしい病氣と、新らしい世界と、新らしい文學とを空想し、且つそれを發見する爲めには、第一段として、吾々の生命を先づ三十年だけ延ばさなければならないといふことに想到した。
「だが實際的に命を長くするといふことは」先づ一人が暫く考へた後に云つた。「科學的な發見でもない以上、吾々には一寸不可能ではなからうか。で考へるんだがね、あらゆる人間を早熟にさしたらどうだらう。二年間を一年間に生活するといふ風に、つまり六十まで生きれば百二十まで生きたことになるといふやうに。」
「だが僕は大器晩成が好きだね。」
片方が云つた。そこで二人の友達は暫く默りあつてゐたが、
「だがさういへば世の中は太古以來、次第に早熟になつて來てゐるんぢやないだらうか。」
晩成說の男がいつた。
「さうだね、さういふこともいへるね。だが、そんなら何も新らしい世界を探す必要はないことになる。」

「さうだよ、何時も新らしい世界に圍まれてゐるといふことになるんだ。」
他の方は何か面くらつたやうな顔付きをした。そしていつた。
「ぢやそれでお終ひぢやないか。ただ廻り道をして平凡な現實の事實に歸つたのに過ぎない。」
「さうだよ。だが常に新らしい世界が何時も來てゐるのに、吾々自身、不敏の爲めに氣付かないでゐる場合が如何に多いかといふことを、吾々は自覺しなければならん。」
彼はさういつてから暫く默つてゐたが、
「だが早熟の新世界は困るね。」
晩成說は怒つたやうな顔をして付け加へた。
「困つてもそんな風になつてゐる。」
一人の青年はさういふ問題を提出した理由で、他の青年はその理論をさういふ風に發展した理由で、共に思ひがけない結果を發見して、不氣嫌らしい哄笑を吐きだした。

「アジアの嵐」後日譚

出口王仁三郎さんに逢ひたいと思つてゐて偶然逢へたのは愉快でした。
僕が「アジアの嵐」を見た、といつたら、
「あれは俺が滿洲で獨立戰爭を起した時のことを、仕組んどんのぢや。」
と答へました。
王仁三郎さんと話してゐると、セミヨノフ將軍がやつて來ました。頭の禿げあがつた大變血色のいい若々しい人でした。
王仁さんは「セミ、セミ」といつてゐました。どつちが赤か、白か、危險なのか、安全なのか、兎に角、二人の組合はせは面白くありました。
セミヨノフさんは王仁さんの手をひどく握つて痛くするし、王仁三郎さんは平易なだけそれだけ難かしい京都辯をまくし立てるし、二人でなかなかやつてゐました。
「アジアの嵐」の主人公といへば、王仁さんはなるほど、あのチムールのやうな素晴らしい顏

をしてゐるのです。さうすると、セミさんは一體何にあたるのかしら。——あの盛裝する將軍かな、と僕は考へたりして、それにしても映畫の中で相對立してゐた二人が、今日本で親しく相會してゐるのが奇妙でたまりませんでした。

そして、ついすると僕までが、プドフキンになつてしまひさうになりました。

どうもあの光景は「アジアの嵐」の後篇のやうに思はれて、僕はつくづく感心しながら眺めてゐました。

時代の風景

○

現在の如く總てを社會的現象として考へようとする時代に、明かに數學者の如きは、みづから「象牙の塔」に立籠つて、その先驗的存在の組合せに心を傾けてゐる。然も彼等は安心してその「塔」から出ようとは欲しない。そしていふ。

There is no doubt that mathematics are difficult. All other forms of intellectual effort are mere child's play in comparison.

吾々もまた彼等がこの忍土へ出て來てくれることをそれほど欲するものではない。彼等は彼等の誇りに生くべきである。自分は今の世に不思議なるこの貴族主義者を甚だ愛する。

○

大きいものを大きく書くといふ正直さに退屈した。
力作的なものを力作的に書くといふ正直さに退屈した。
小さいものを小さく書くといふ正直さに退屈した。

深刻なものを深刻らしく書くといふ正直さに退屈した。
暗いものを暗く書くといふ正直さに退屈した。
かくの如く時代は退屈してゐる。然しながらこの逆說は明かに退屈してゐない。價値の評價が複雜になりかけてゐるのである。一種の價値の顚倒が行はれようとしてゐるのである。作者がさうであるやうに、讀者もまた單純な氣持ちで、ものをみたり讀んだりすることには不滿を抱くやうになるであらう。銳敏に動く氣持の尖端がどのやうに人々の心をくぐり這ひ廻るか、これは見ものである。普通みえる常凡相を常凡にのみ視、或ひは書くといふ——その單純な正直さには、吾々は最早退屈して來た。

○

いろいろな書をかけて眺めくらしてゐるうちに、初めたまらなく心をひかれ後面白くもなくなり、初めさほどでもなく次第に深く心の動かされるもの、初め面白く後面白きもの、いろいろなものに出逢ふだらう。ところで自分はこの頃、いくら見ても見あきない一幅に向ひながら「力があまつて書いてある」と誰れかが評した言葉を思ひだし、これはよい評言であらうか、どうであらうかと考へる。自分は力の注ぎ方で作品が出來るものとは考へてゐない故、この說には割合に贊成出來さうである。吾々は先づ力を持ちたいと思ふ。そしてそれを樂に使へるやうになりたいと思ふ。およそ力の注ぎ方に心を勞する時は、作品が暴力的になり外面的になりがちである。さ

ういふ風になることは、決して好ましいことではない。

○

プロレタリア小説とは第四階級の中の幸福を見まいとするものではない。見まいとすることは踏みにじることである。第四階級の幸福を踏みにじることは勿論プロレタリア小説として決して上乘のものではあるまい。この階級の美は吾々にのみわかる美だ。吾々貧しきものにのみわかる美は、今迄の美學からは特殊で異端であらうと考へられる。吾々が古き常識によつてくさされることは吾々の名譽であらねばならない。先づ新しきものは何時の世に於てもこの名譽ある惡罵を以て迎されるであらう。

○

沈滯と空虚とを破るものは、それがどんな形式であつても、吾々はそれを拒否する權利を持つてゐない。吾々はとはうもない慘虐にも破倫にも、何かしら心のわななきと一種の興味を感じる。ベルグソンはその悲劇論に於て、このやうな狀態を吾々が本質的な人間性、元始的な姿に於てあからさまの眞理にふれ得るからだといつてゐる。藝術運動は一種の元始的な色彩的な生活への復歸である。總ての因習的な見方を捨ててぢかにものの内部にふれる爲めの祈りである。

○

「人間に於ては一時間以上緊張した興味を持ち續けることは到底不可能であらう。」とボウは彼

の作詩哲學でいつてゐる。

最も近代的である活動寫眞は、一つの物語を多くの場合一時間以內でみせる。自分の經驗からいへば、すぐれた映畫は多くその位かと思はれる。このやうに時間的考慮をも含めて映畫を見ることは、人間の神經の持ち方の密度と交錯させて甚だ興味のあることである。

近代の映畫がこのやうであるといふことは、近代人がどのやうなものに嗜好をもち、且つどのやうなものを求めてゐるか、その證左とも見ることが出來ると思はれる。

だが流行などから離れることは、一つの趣味としてもいいことだ。自分は當分長いものを書かうと思ふ。

○

雜誌『文藝時代』が出た。『文藝時代』には嘗て『文藝春秋』の編輯同人だつた者がかなりにある。余も亦その一人であつた。それ故ここにその一人として誤れる巷說に答へておく。

世間では吾々が菊池氏の恩義を裏切つて別に對抗的に『文藝時代』をつくつたやうに、或ひは菊池氏が吾々を例へば破門したといふやうな說をなす人がある。

これらが臆說の甚だしきものであることは勿論、このやうな言說は何れにしても菊池氏並に吾吾を侮辱するものと自分には考へられる。吾々の立場はもつと眞率である。そのやうな評價を下されるほど不自由でも單純でもない。

この世間一部の誤解者は今、自分がしてゐるやうな陳辯を見ても、或ひは見ればみるほど誤解を複雜に深くするかも知れない。だが自分は吾々の名譽の爲めに、以上の如く、ハッキリと世間の誤りであることをここにことわつておく。

又『文藝時代』創刊の意義にしても、しかく四五の個人に對する爲めや、所謂文壇的なことにとどまるほど庸弱卑賤な心がまへで始められたものではない。吾々は足もとで起る、このやうな種類の事には、今後全然無關心であらうと考へてゐる。

〇

仕事が出來ることは幸福だ、どのやうな非難者があつても反つて勵ましになる。仕事が出來ることは幸福だ、どのやうな壓迫者が出ても平氣でゐられる。仕事が出來ることは幸福だ、どのやうに辯舌が下手で社交上の落伍者になつてもさういふことを輕蔑してゐられる。仕事が出來ることは幸福だ、どのやうな事件によつても自分を成長させてゐると信じることが出來る。仕事が出來ることは幸福だ、どのやうにまづいものが出來ても又いいものが出來ると思ふことが出來る。仕事が出來ることは幸福だ、どのやうな稱讚にも有頂天になつてしまふといふことがない。

然し仕事が出來なくても又不幸ばかりではない。書きたくて書けない時、さういふ時の氣持は苦しいが又たのしみでもある。

偶然論に關する文獻目錄（一九三五年）

偶然の毛毬（中河與一『東京朝日新聞』二月二十八日）
偶然論と文學（石原純『東京朝日新聞』三月二十一日）
作家の教養としての科學（岡邦雄『大阪朝日新聞』三月二十七日）
純粹小說論（横光利一『改造』四月號）
毛毬の偶然（三波利夫『作家群』五月號）
神は偶然を愛する（石原純『セルパン』六月號）
文學に於ける偶然性と必然性（戸坂潤『文學評論』六月號）
誤謬・偶然・運命（本多謙三『帝國大學新聞』六月三日、十日）
人間的牽引力（中河與一『大阪每日新聞』六月二十七日）
偶然論と短歌（石原純『短歌研究』七月號）
偶然文學論（中河與一『新潮』七月號）
偶然論の苗床　森山啓『新潮』八月號）

小説に於ける偶然の分析（三枝博音『經濟往來』八月號）
ロマンティシズムと短歌（中田忠夫『日本歌人』八月號）
偶然論への反擊（中河與一『讀賣新聞』八月一日）
偶　然（稲原勝治『讀賣新聞』八月五日）
桃と桃の實（森山啓『讀賣新聞』八月六日）
偶然論の論爭批判（大島豐『讀賣新聞』八月十三日）
偶然論に關聯して（中河與一『東京日日新聞』八月十五日）
偶然論批判特輯（田邊元・九鬼周造・成瀬無極・西村眞琴・中島健藏・伊藤整・田中公明・吉村貞司・正木雅二郎・石原純『翰林』八月號）
偶然の問題（石原純『新潮』九月號）
分裂としての偶然（三上秀吉『あらくれ』九月號）
偶然文學論の深化（中河與一『經濟往來』九月號）
偶然と文學特輯（大島豐・保田與重郎・森本忠・横山正美『藝術科』九月號）
非合理主義的傾向に就いて（三木清『改造』九月號）
迷へるノート（林房雄『報知新聞』九月九日）
偶然論と自然科學（石原純『日本評論』十月號）
ハイゼンベルクの哲學說と偶然論（三枝博音『セルパン』十月號）

偶然文學論爭（長谷川巳之吉『セルパン』十月號）
再論偶然文學論（中河與一『文藝』十月號）
偶然文學論の檢討（本間唯一『唯物論研究』十月號）
作家の世界觀に於ける問題としての「必然と偶然」（森山啓『文學評論』十月號）
偶然文學論への應酬（萩原中『文學評論』十月號）
量子論に於ける客觀と因果律（仁科芳雄『思想』十月號）
偶然に就いて（今野武雄『思想』十月號）
偶然論と物理學（岡邦雄『帝國大學新聞』十月七日）
確率概念の革命（中河與一『東京日日新聞』十一月一日）
偶然論摘要（中河與一『教育國語教育』十一月號）
偶然文學論爭後語（森山啓『若草』十一月號）
文學と偶然論（中村星湖『メッカ』十一月號）
偶然論と觀念論（岡邦雄『日本評論』十一月號）
偶然論の必要と其濫用（本多謙三『中央公論』十一月號）

偶然と文學

初刷二千部

昭和十年十一月十日印刷
昭和十年十一月十五日發行

定價一圓二十錢

著者　中河與一

東京市麴町區三番町一
刊行者　長谷川巳之吉

東京市麴町區三番町一
刊行所　第一書房
電話九段三三四四
振替東京六四二二三

東京市神田區西神田一ノ四
印刷者　松村保
製本者　橋本久吉

中河與一著　**海路歷程**（短篇集）

四六判三一二頁
定價二圓五十錢

その透徹せる精神において、その明快なる表現において、中河與一氏の文學は、最も近代的光彩を放つてゐる。しかしそれは單一な色彩に燃える焔ではなくして、あらゆる苦惱をくぐりぬけてたどりついた近代的な健康性であり、明朗性であり、躍動性である。試みに、その渾然たる作品にプリズムをあてよ。分析さるるさまざまの光と翳に氏の作品を構成する要素の複雜なる屈折を知るであらう。斷然と氏を輕薄なるモダニズムの作家と區別する一線である

氏は最も近代的なる作家である。現實の本質に徹する希求は、他方尖銳なる科學に對する關心となり、氏は常に新鮮である。不斷の自由への憧憬は汪洋たる海路を走り、心の旅は異國邊土にさまようては豪華な夢を築き、港々の風儀をも、單なる旅行者以上の迫眞性を以て描き盡した。かぐはしき髮の感觸も滑らかな皮膚の色も、まざまざとここにある。

ここに收めた十八の短篇は、ジョン・バンヤンの高き精神の書なる『天路歷程』に對して、いまの世の肉體の書たらしめんとしてその實を果せるのみならず、新らしき文學探險を要する航路を祕めた、豐富なる文學的海圖といふべきである。

中河與一著　**左手神聖**（隨筆）

菊半截判二五二頁
定價五十錢

趣味か、生活か、生活の内に、ふとしてさき出づる性癖。時に人をして秋天の如く高からしむ。用なき事を談じ、題して左手神聖といふ。されど、ゆめ左翼をひやかさうといふ了見にはあらざるなり。――といふ「左手神聖」他五十數篇の感想、隨筆、紀行集。

中河與一著　**﨟たき花**（長篇小説）

菊判一九二頁　定價一圓五十錢

本書は、さきに東西兩朝日新聞に連載されて好評を博した中河氏の唯一の長篇に、その後加筆改削を施して成つたものである。その舞臺は、先づ銀座の鋪道に始まり、アイス・スケート場、樂器店の試聽室、鬼怒川溫泉、葉山海岸のキヤンプ生活、近郊砧村の隱家、夜の留置場と、次々に、今日の都會人士の生活環境が、映畫的構成を以て展開されるのであるが、それらを貫いて主導調を奏で出すものは、その世界に躍動する。現代の青年男女の胸底に巣喰へる妖しい戀愛心理の描寫である。一人のマキなる近代的女性を周つて、その戀人嶺男、街の王者サカイ、亞米利加歸りの不良學生島田、彼の乾分水兵の吉、梨沙公、紀伊公の二人のダンサア、青年科學者村上、失業キヤメラマン野中、ボクサー下津と山崎、街の子達、女流詩人中山、村上の老父等々が、夫々の性格と風貌とを以て作中に流躍し、彼等の間に激しい戀愛爭鬪がくりひろげられてゐる。然し、ここで特に注目すべきは、作者によつて創造された。このマキなる一女性の特異な性格である。彼女は日頃『源氏物語』を愛讀し、折に觸れてその一節を口誦み、尙ほこの源氏の精神を現代に生かさうとするやうな、傳統的教養に富んだ典雅な日本的女性であるがそれと同時に彼女は又、近代的理智の洗禮を受けた、今日の最も聰明な女人群を代表してゐる。そしてここに表現された彼女の精神の神秘性と行動性とは、文學上に一つのタイプを築き上げたものだと云つて決して過言ではあるまい。

從來短篇作家として、その獨自の境地と鋭角的な表現とを以て、新興文壇の雄と數へられて來た氏がここに初めて長篇創作の試みに入り、而もその第一作から見事に我が國の文學界に新しい領野を開拓されたことは痛快でもあり、日本文學にとつて喜ぶべきことだ。

國際作家會議報告

文化の擁護

小松清編

四六判三二〇頁
定價一圓

本年六月二十一日パリに於て國際作家會議が開催され、世界二十四ケ國の代表二百三十人により五日間に亙つて文化擁護の手段とフシズムの暴戻に對する防衛の對策が討議せられた。然も日本からは一名の代表者をも參加せず、行動主義の排擊と文學賞の爭奪と身邊小說の謳歌に耽つてゐた。本書は日本文壇のかかる瑣末主義に對する嚴重なる抗議であり文學全般の重要問題としてあらゆる流派と黨派とを超越して、今日の思想界文學界に眞摯なる反響を求めんとするものである。

全譯

一粒の麥もし死なずば

アンドレ・ジイド
堀口大學譯

四六判六六七頁
普及版一圓五十錢

この書は、人及び藝術家としてのアンドレ・ジイドの生ひ立ちの記である。約翰傳のキリストの言葉「一粒の麥もし地に落ちて死なずば、唯一つにてあらん、もし死なば多くの實を結ぶべし。」に由來する表題に、既に作者ジイドの悲壯な決心のうかがはれる怖るべき眞劍の書だ。「このやうな自分の缺點や惡癖を語ることによつて、自分がどんな損失を被るか、もとより僕も承知してゐるし、僕に對して人々が投げかける非難の聲も僕にはあらかじめ判つてゐる。然しこの物語の存在理由は、眞實以外にはあり得ないのだ。いはば僕は贖罪の爲めにこれを書いてゐるやうなものだ」とジイドは云ふ。作家ジイドの大をなさしむるものは、この眞實への熾烈な希求と、廣く人類に根ざす良心であり、これこそジイドの歩みを決定させるものだ。現在のジイドを知らんとするものは、この書に含まれた人間ジイドの本然の姿を把握すべきである。

パアル・バック著
新居格譯

長篇小説 大地

四六判三六五頁
定價一圓五十錢

アメリカ最大の文學賞を得た作品。作者は生後四ケ月目に支那に伴はれ支那で生長した閨秀作家。眞の支那大陸に生活する農民の生活を描いた世界最初の藝術作品であつて、アメリカではこれを舞臺に上場したり、また目下映畫製作中である。『夜間飛行』の行動主義につづき、これは現文壇に新地方主義の本質を啓蒙し、革命の第二彈を投ずるものだ。

モラエス著
花野富藏譯

徳島の盆踊

四六判三五〇頁
定價一圓五十錢

凡ゆる官職を拋つたモラエスは、古い傳統の傳はる徳島に閑寂の生活を送つて、日本の自然と風物の中に沒入し、我が文學の精髓たる隨筆文學に心醉した。亡き人々への追慕と眼前の明け暮れに對する澄明な觀照との日々は、モラエスをして幽明の境に遊ばしめ、彼の隨筆『徳島の盆踊』は、かの詩聖アミエルのそれにも似た「心の遺書」となつてゐる。

モラエス著
花野富藏譯

日本精神

四六判三一六頁
定價一圓五十錢

モラエスが、愛と誠意とを以てなした日本研究である。日本の言語、宗教、歴史、藝術の本質に對する眞摯な探求と、それらを貫く日本精神とは如何なるものか、またその將來は如何に、といふ問題の眞劍な考察である。

萩原朔太郎著

絶望の逃走

四六判二八五頁　定價一圓五十錢

抒情詩が朔太郎氏の生活に於ける「夜」であれば、アフォリズムは氏の「晝」である。而してこのアフォリズムは氏の生活する詩情の表現の一面であり、思想詩である。この一卷は最近六年間の收穫で、大部分のトピックは、戸外生活の截斷面である。

田部重治著

山への思慕

四六判二六一頁　定價一圓

山を愛すること氏の如く深きはない。秋の高原を語り、雪山を描き、春の溪谷を敍する氏の清冽な筆致は、つねに幽玄な思索によつて裏附けられてゐる。氏にとつて「山への道」は、また內面洞察への道であり、眞實へのたゆみない思慕でもある。

戸川秋骨著

自畫像

四六判三七六頁　定價一圓五十錢

東京は築地に育つた氏の眺めて來た銀座と現代銀座の人間風景、一葉の生きてゐた頃の文學界、海へ山への紀行、現代の世相と昔、謠曲の體驗、外國文學、果ては武藏野の春夏秋冬、すべて秋骨氏のいはゆる自畫像に深い陰影を刻んでゐる。

松岡讓著

無限を想ふ

四六判五六〇頁　定價一圓五十錢

從來宗教を語るものの多くは、宗教に名を藉りて個人の洞窟に入り徒らなる自己辯護をなすに過ぎない。松岡氏のこの隨筆集に語られる宗教は、廣く一般人間の胸奧にひそむ宗教的感情、人間教養としての宗教である。